

きぶかわ
貴生川遺跡発掘調査報告書

平成29年（2017年）

甲賀市教育委員会
公益財団法人滋賀県文化財保護協会



T3 遠景 (東より)



T 3 遠景 (北東より)



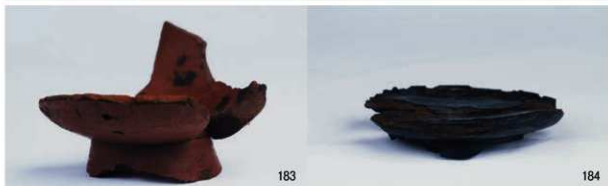
T 4・5 遠景 (南東より)



竪穴建物出土遺物(貴生川遺跡Ⅱ期)



溝・土塁囲い屋敷地出土遺物(貴生川遺跡Ⅲ期-iv段階)



出土漆器



T2 土坑S214出土遺物



T 3 土坑S72出土遺物 (298)



T 3 井戸S70出土遺物 (348)



T 5 溝S645出土遺物 (1323)

序

滋賀県の南東部に位置する甲賀市は豊かな自然に恵まれ、国指定史跡「紫香楽宮跡」・「垂水斎王頓宮跡」・「甲賀郡中惣遺跡群」・「水口岡山城跡」をはじめとした歴史資産も豊富です。甲賀市には現在、約530箇所の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、その数は県内でも有数で、特に甲賀市の特徴として280余りの城跡が市域のいたるところに濃密に分布しています。

また、甲賀市は関西圏と中部圏の中間に位置しており、新名神高速道路が市内を横断して両地域をつないでいます。このような立地によって今後、市のさらなる発展も期待されています。

埋蔵文化財は地中に埋もれている性格上、目にする機会が少ないものです。しかし、地中に埋もれているからこそ、郷土の歴史を知るもっとも身近な歴史資料であり、先人が残した貴重な文化資産です。このような埋蔵文化財を様々な開発から保護し、さらに記録に留めることも教育行政の大きな責務です。

本書で報告する貴生川遺跡は土地区画整理事業に伴う試掘調査で発見され、その後の発掘調査で古代・中世の集落跡および中世の平地城館を確認しました。甲賀市域において、城館を含む中世の集落遺跡を大規模な面積で調査した初の事例となり、多くの重要な知見を得ることができました。それらの調査成果をまとめた本報告書が甲賀市の歴史を解明する一助となり、市民の皆様をはじめ、広く活用されることを願っています。

最後になりましたが、貴生川地区の皆さまはじめ、調査にご協力をいただいた方々、調査に参加していただいた方々、関係機関に心より感謝申し上げます。

平成29年（2017年）3月

甲賀市教育委員会
教育長 山下 由行

例 言

1. 本書は、甲賀市水口町（仮称）中川原・森立地区区画整理事業に伴う、甲賀市水口町貴生川所在の貴生川遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、甲賀市長からの依頼により、甲賀市教育委員会を調査主体、公益財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。現地の試掘調査は平成20・21年度（2008・2009）に甲賀市教育委員会が行い、発掘調査を平成25・26年度（2013・2014年度）に、整理調査を平成27・28年度（2015・2016）に公益財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。
3. 発掘調査の実施にあたっては、地元自治会および貴生川地区土地改良組合をはじめ、関連諸機関に協力を得るとともに、以下の方々からご指導とご教示を得た。記して謝意を表す次第である。（敬称略・五十音順）
木戸雅寿（滋賀県教育委員会）・國下多美樹（龍谷大学）・杉本宏（宇治市教育委員会）・樫木規秀（草津市教育委員会）
4. 本事業における発掘調査は当協会内田保之・瀬口眞司・小島孝修（平成26年度）・堀真人（平成25・26年度）が、整理調査は堀が担当した。
5. 本書の執筆・編集は堀が行った。なお、樹種同定はバリノ・サーヴェイ株式会社に、遺物写真は寿福写真房（寿福滋）に委託した。
6. 本書で使用した高さは東京湾平均海面高度を基準とし、座標および方位は平面直角座標系Ⅶ系（世界測地系）に基づく。
7. 本調査において出土した遺物や写真・図面類については、甲賀市教育委員会が保管・管理している。

本文目次

第1章	はじめに	1
第2章	遺跡の位置と環境	1
第1節	遺跡の位置	1
第2節	周辺の遺跡	3
第3章	調査の経緯と経過	11
第1節	試掘調査	11
第2節	発掘調査	11
第3節	整理調査	15
第4節	遺構・遺物の報告方法について	17
第4章	発掘調査の成果	20
第1節	T1の調査成果	20
第2節	T2の調査成果	30
第3節	T3の調査成果	47
第4節	T4の調査成果	97
第5節	T5の調査成果	154
第5章	理化学的分析結果	212
第6章	まとめ	223
第1節	貴生川遺跡の変遷	223
第2節	貴生川遺跡の木製品利用の特色	232
第3節	中世集落から城館へ	236
第4節	おわりに	239

挿 図 目 次

第1図	調査地位位置図	2	第34図	T3 堀S1出土遺物2	57
第2図	調査地周辺遺跡	6	第35図	T3 堀S1出土遺物3	58
第3図	調査対象地	12	第36図	T3 曲輪S2土層断面図・出土遺物1	60
第4図	調査区配置図	14	第37図	T3 曲輪S2出土遺物2	61
第5図	調査区グリッド配置図	16	第38図	T3 曲輪北西地区	63
第6図	調査区全体図	18-19	第39図	T3 溝出土遺物	64
第7図	T1全体図	21	第40図	T3 土坑S5	66
第8図	T1 南東壁土層断面図	22	第41図	T3 土坑S5出土遺物	67
第9図	T1 掘立柱建物SB1	23	第42図	T3 土坑S4・8・32断面図・出土遺物	69
第10図	T1 掘立柱建物SB2	25	第43図	T3 曲輪内ピット断面図・出土遺物	70
第11図	T1 掘立柱建物SB3・土坑S1・214	27	第44図	T3 曲輪東地区	72
第12図	T1 土坑S15・43・69・154・178・187 ピット	28	第45図	T3 土坑S72出土遺物	73
第13図	T1 ピットS59	29	第46図	T3 土坑出土遺物・ピット断面図	74
第14図	T2全体図	31	第47図	T3 曲輪南西地区	76
第15図	T2 南東壁土層断面図	32	第48図	T3 整地土層S69出土遺物	77
第16図	T2 落ち込み1・2土層断面図	33	第49図	T3 S67内石組み土坑・土坑S71	79
第17図	T2 落ち込み1出土遺物	34	第50図	T3 土坑S186	80
第18図	T2 竪穴建物S385	36	第51図	T3 土坑S187・189	82
第19図	T2 竪穴建物S385出土遺物1	37	第52図	T3 土坑S188	83
第20図	T2 竪穴建物S385出土遺物2	38	第53図	T3 井戸S70	84
第21図	T2 竪穴建物S474	40	第54図	T3 井戸S70出土状況図・出土遺物1	85
第22図	T2 竪穴建物S502	41	第55図	T3 井戸S70出土遺物2	86
第23図	T2 竪穴建物S502内土坑S554・555 遺物出土状況	42	第56図	T3 井戸S70出土銅木	87
第24図	T2 竪穴建物S502出土遺物	43	第57図	T3 ピット列	89
第25図	T2 土坑S19・39・40・44・350・541	45	第58図	T3全体図(下層)	90
第26図	T2 ピットS305・その他ピット出土遺物	47	第59図	T3 出土遺物	91
第27図	T3全体図	48	第60図	T3 土坑S197・328・342・452	92
第28図	T3 南壁土層断面図	49	第61図	T3 竪穴建物S369	94
第29図	T3 東壁土層断面図	50	第62図	T3 竪穴建物S369出土遺物1	95
第30図	T3全体図(上層)	51	第63図	T3 竪穴建物S369出土遺物2	96
第31図	T3 堀S1土層断面図1	53	第64図	T4全体図	98
第32図	T3 堀S1土層断面図2	54	第65図	T4 出土遺物	99
第33図	T3 堀S1出土遺物1	55	第66図	T4 南壁土層断面図	100
			第67図	T4・5 建物11	101
			第68図	T4・5 建物12	103

第69図	T 4	建物13・14	104	第106図	T 5	建物7・8	165
第70図	T 4	建物15	106	第107図	T 5	建物9	166
第71図	T 4	建物16・17	107	第108図	T 5	建物10	168
第72図	T 4	建物17出土遺物	108	第109図	T 5	建物9・10出土遺物	169
第73図	T 4	建物18・19	110	第110図	T 5	構1	171
第74図	T 4・5	構5	112	第111図	T 5	構2・構3	172
第75図	T 4	構6	113	第112図	T 5	構4	173
第76図	T 4	構7	114	第113図	T 5	北東地区	175
第77図	T 4	井戸S2	115	第114図	T 5	溝S80・81・98出土遺物	176
第78図	T 4	井戸S2出土遺物1	117	第115図	T 5	溝S473、土坑接続溝S500、 土坑S513・551	177
第79図	T 4	井戸S2出土遺物2	118	第116図	T 5	土坑S95・179、その他ピット、 落ち込み	180
第80図	T 4	井戸S2出土遺物3	119	第117図	T 5	中央地区	182
第81図	T 4	井戸S2出土遺物4	120	第118図	T 5	土坑接続溝S112	184
第82図	T 4	南西地区	122	第119図	T 5	土坑接続溝S158	185
第83図	T 4	溝・落ち込みS251	124	第120図	T 5	土坑接続溝S159	187
第84図	T 4・5	溝S1 (S365) 出土遺物1	125	第121図	T 5	土坑接続溝S159出土遺物	188
第85図	T 4・5	溝S1 (S365) 出土遺物2	126	第122図	T 5	土坑S109・162	189
第86図	T 4・5	溝S1 (S365) 出土遺物3	127	第123図	T 5	土坑S96・194・249・458	191
第87図	T 4・5	溝S1 (S365) 出土遺物4	128	第124図	T 5	土坑S247・248、その他土坑	192
第88図	T 4・5	溝S1 (S365) 出土遺物5	129	第125図	T 5	その他ピット、落ち込み	197
第89図	T 4・5	溝S1 (S365) 出土遺物6	130	第126図	T 5	南西地区	201
第90図	T 4・5	溝S1 (S365) 出土遺物7	131	第127図	T 5	溝S645、土坑S592、その他土坑 出土遺物	203
第91図	T 4・5	溝S1 (S365) 出土遺物8	132	第128図	T 5	その他ピット	207
第92図	T 4・5	溝S3 (S410) 出土遺物	133	第129図		同定木材(1)	218
第93図	T 4	溝S19・23・81・106・107出土遺物	135	第130図		同定木材(2)	219
第94図	T 4	溝S108・143・148・215・250・312 出土遺物	137	第131図		同定木材(3)	220
第95図	T 4	土坑S24・87・104	140	第132図		同定木材(4)	221
第96図	T 4	土坑S366、その他の土坑出土遺物	141	第133図		同定木材(5)	222
第97図	T 4	その他ピット出土遺物1	147	第134図		黄生川遺跡遺構変遷図1	224
第98図	T 4	その他ピット出土遺物2	150	第135図		黄生川遺跡遺構変遷図2	226
第99図	T 5	全体図	155	第136図		黄生川遺跡遺構変遷図3	228
第100図	T 5	東壁土層断面図	156	第137図		黄生川遺跡周辺の条里復元	230
第101図	T 5	南壁土層断面図・出土遺物	157	第138図		第Ⅲ期-i～iii段階の主な出土遺物	233
第102図	T 5	建物1	159	第139図		第Ⅲ期-iv段階の主な出土遺物	234
第103図	T 5	建物2	160				
第104図	T 5	建物3・4	162				
第105図	T 5	建物5・6	163				

表 目 次

表1 周辺遺跡一覧表	7	表20 出土石器観察表	258
表2 木器樹種同定結果一覧表	214	表21 出土金属器観察表	258
表3 器種別種類構成表	217	表22 出土木器観察表	259
表4～19 出土土器観察表	242-257		

図 版 目 次

巻頭図版1 T3透景(東より)		図版8 (遺構) 上:T1 掘立柱建物SB3(北より)	
巻頭図版2 上:T3透景(北東より)		下:T1 ビットS72遺物(2)出土状況	
下:T4・5透景(南東より)		図版9 (遺構) 上:T1 ビットS59遺物(16)出土状況	
巻頭図版3 竪穴建物出土遺物(貴生川遺跡Ⅱ期)		下:T1 土坑S178・187周辺(北より)	
巻頭図版4 溝・土塁囲い屋敷地出土遺物		図版10 (遺構) 上:T1 土坑S1土層断面	
(貴生川遺跡Ⅲ期-iv段階)		中:T1 土坑S15検出状況	
巻頭図版5 上:出土漆器		下:T1 土坑S15土層断面	
下:T2土坑214出土遺物		図版11 (遺構) 上:T1 土坑S43土層断面	
巻頭図版6 出土遺物(瀬戸)		中:T1 土坑S69土層断面	
図版1 (遺構) 上:T1・2 全景(東より)		下:T1 土坑S154土層断面	
下:T1・2 全景(北西より)		図版12 (遺構) 上:T1 土坑S178土層断面	
図版2 (遺構) 上:T1・2 全景(北より)		中:T1 土坑S187検出状況	
下:T1・2 全景		下:T1 土坑S187土層断面	
図版3 (遺構) 上:T1 全景(南西より)		図版13 (遺構) 上:T1 土坑S214遺物出土状況	
下:T1 全景(南より)		(南東より)	
図版4 (遺構) 上:T1 掘立柱建物SB1検出状況		下:T1 土坑S214遺物出土状況	
(南東より)		(北東より)	
下:T1 掘立柱建物SB1検出状況		図版14 (遺構) 上:T1 土坑S214遺物(14)出土状況	
(北東より)		下:T1 土坑S214遺物(10~12)	
図版5 (遺構) 上:T1 掘立柱建物SB1(南東より)		出土状況	
下:T1 掘立柱建物SB1(北東より)		図版15 (遺構) 上:T1 土坑S214遺物出土状況	
図版6 (遺構) 上:T1 掘立柱建物SB2(北西より)		下:T1 土坑S214白磁碗(14)出土状況	
下:T1 掘立柱建物SB2(南西より)		図版16 (遺構) 上:T1 土坑S214完掘状況(南東より)	
図版7 (遺構) 上:T1 ビットS97土層断面		下:T1 土坑S214完掘状況(北東より)	
下:T1 ビットS98土層断面		図版17 (遺構) 上:T1 土坑S214	

	中：T1 土坑S214土層断面	図版31（遺構）上：T2 竪穴建物S502（北東より）
	下：T1 土坑S214土層断面	下：T2 竪穴建物S502（北西より）
図版18（遺構）上：T2 全景（西より）		図版32（遺構）上：T2 竪穴建物S502土層断面
	下：T2 全景（南より）	中：T2 竪穴建物S502土層断面
図版19（遺構）上：T2 全景（北東より）		下：T2 竪穴建物S502土層断面
	下：T2 全景（北より）	図版33（遺構）上：T2 竪穴建物S502内
図版20（遺構）上：T2 土坑S350土層断面		土坑S554・555遺物出土状況
	下：T2 土坑S350焼土	下：T2 竪穴建物S502内
	中：T2 土坑S541土層断面	土坑S554・555遺物出土状況
図版21（遺構）上：T2 土坑S306		図版34（遺構）上：T2 竪穴建物S502内
	下：T2 土坑S306遺物（100）出土状況	土坑S554遺物出土状況
図版22（遺構）上：T2 土坑S350完掘状況（北東より）		下：T2 竪穴建物S502内
	下：T2 土坑S350完掘状況（南東より）	土坑S555遺物出土状況
図版23（遺構）上：T2 竪穴建物S385・502周辺		図版35（遺構）上：T2 竪穴建物S502内
	下：T2 竪穴建物S385・502周辺	土坑S554遺物出土状況
図版24（遺構）上：T2 竪穴建物S385（南より）		中：T2 竪穴建物S502内
	下：T2 竪穴建物S385（東より）	土坑S554遺物出土状況
図版25（遺構）上：T2 竪穴建物S385土層断面		下：T2 竪穴建物S502内
	中：T2 竪穴建物S385土層断面	土坑S554・555遺物出土状況
	下：T2 竪穴建物S385土層断面	図版36（遺構）上：T2 竪穴建物S502内
図版26（遺構）上：T2 竪穴建物S385土層断面		土坑S555遺物出土状況
	中：T2 竪穴建物S385	中：T2 竪穴建物S502内土坑S555
	遺物（49・53・61・65）出土状況	土層断面
	下：T2 竪穴建物S385遺物（49・53・65）	下：T2 竪穴建物S502内土坑S555
	出土状況	完掘状況
図版27（遺構）上：T2 竪穴建物S385遺物（51・57）		図版37（遺構）上：T3 全景（北東より）
	出土状況	下：T3 全景（北西より）
	中：T2 竪穴建物S385遺物（69）	図版38（遺構）上：T3 全景（南東より）
	出土状況	下：T3 全景（東より）
	下：T2 竪穴建物S385遺物（59）	図版39（遺構）上：T3 全景（北より）
	出土状況	下：T3 全景（南より）
図版28（遺構）上：T2 竪穴建物S474（北西より）		図版40（遺構）上：T3 全景
	下：T2 竪穴建物S474（北東より）	下：T3 全景
図版29（遺構）上：T2 竪穴建物S474土層断面		図版41（遺構）上：T3 堀S1土層断面（E-E'）
	中：T2 竪穴建物S474土層断面	下：T3 堀S1土層断面（D-D'）
	下：T2 竪穴建物S474土層断面	図版42（遺構）上：T3 堀S1土層断面（E-E'）
図版30（遺構）上：T2 竪穴建物S502（南東より）		中：T3 堀S1土層断面（D-D'）
	下：T2 竪穴建物S502（南東より）	下：T3 堀S1土層断面（G-G'）

- 図版43 (遺構) 上: T3 堀S1土層断面 (F-F) 下: T3 井戸S70掘削状況 (北東より)
- 中: T3 堀S1土層断面 (G-G・H-H) 図版58 (遺構) 上: T3 井戸S70内出土火輪 (337)
- 下: T3 堀S1土層断面 (H-H) 下: T3 井戸S70碎石材
- 図版44 (遺構) 上: T3 堀S1漆器 (182) 出土状況 図版59 (遺構) 上: T3 井戸S70
- 中: T3 堀S1漆器 (182) 出土状況 下: T3 井戸S70桐木検出状況
- 下: T3 堀S1漆器 (183) 出土状況 図版60 (遺構) 上: T3 井戸S70桐木検出状況
- 図版45 (遺構) 上: T3 堀S1遺物 (130) 出土状況 下: T3 井戸S70桐木組合せ状況
- 中: T3 堀S1漆器出土状況 図版61 (遺構) 上: T3 井戸S70桐木組合せ状況
- 下: T3 堀S1遺物 (147) 出土状況 下: T3 井戸S70完掘状況
- 図版46 (遺構) 上: T3 堀S1完掘状況 (北西より) 図版62 (遺構) 上: T3 土坑S71完掘状況 (南東より)
- 下: T3 堀S1完掘状況 下: T3 土坑S71完掘状況 (北東より)
- 図版47 (遺構) 上: T3 堀S1完掘状況 図版63 (遺構) 上: T3 土坑S72遺物 (285) 出土状況
- 下: T3 調査区南西側土層断面 下: T3 土坑S72遺物 (285) 出土状況
- (曲輪と土塁の境界) 図版64 (遺構) 上: T3 土坑S72遺物 (298) 出土状況
- 図版48 (遺構) 上: T3 調査区南西側土層断面 下: T3 土坑S72遺物 (298) 出土状況
- (曲輪と土塁の境界) 図版65 (遺構) 上: T3 土坑S72完掘状況 (北東より)
- 下: T3 調査区南西側土層断面 下: T3 土坑S72土層断面
- (土塁と堀の境界) 図版66 (遺構) 上: T3 土坑S113・114土層断面
- 図版49 (遺構) 上: T3 調査区南西側土層断面 下: T3 土坑S114土層断面
- 土塁部分 (曲輪側より) 図版67 (遺構) 上: T3 土坑S185完掘状況
- 下: T3 調査区南西側土層断面 下: T3 土坑S185遺物 (305) 出土状況
- 土塁部分 図版68 (遺構) 上: T3 土坑S186~189完掘状況
- 図版50 (遺構) 上: T3 調査区南西側土層断面 (堀側より) 下: T3 土坑S186土層断面
- 下: T3 曲輪S2 (北西より) 図版69 (遺構) 上: T3 土坑S186 (東より)
- 図版51 (遺構) 上: T3 曲輪S2・土塁 (南西より) 下: T3 土坑S186 (北東より)
- 下: T3 土坑S5完掘状況 (北西より) 図版70 (遺構) 上: T3 土坑S186 (北東より)
- 図版52 (遺構) 上: T3 土坑S5完掘状況 (北東より) 下: T3 土坑S186 (南東より)
- 下: T3 土坑S5土層断面 図版71 (遺構) 上: T3 土坑S186完掘状況 (南東より)
- 図版53 (遺構) 上: T3 土坑S8炭検出状況 下: T3 土坑S187木材出土状況 (北東より)
- 下: T3 土坑S8炭検出状況 図版72 (遺構) 上: T3 土坑S187完掘状況 (北東より)
- 図版54 (遺構) 上: T3 溝S6土層断面 下: T3 土坑S187土層断面
- 下: T3 土坑S32土層断面 図版73 (遺構) 上: T3 土坑S187漆器 (334) 出土状況
- 図版55 (遺構) 上: T3 石組土坑S67 (北西より) 下: T3 土坑S187漆器 (334) 出土状況
- 下: T3 石組土坑S67 (南東より) 図版74 (遺構) 上: T3 土坑S188 (南西より)
- 図版56 (遺構) 上: T3 井戸S70上層埋土除去状況 下: T3 土坑S188 (北西より)
- (北東より) 図版75 (遺構) 上: T3 土坑S188完掘状況 (北東より)
- 下: T3 井戸S70上層土層断面 下: T3 土坑S189完掘状況 (南西より)
- 図版57 (遺構) 上: T3 井戸S70碎石検出状況 (南東より) 図版76 (遺構) 上: T3 整地土S67下層 (南東より)

	下：T3 整地土S67下層（南西より）		下：T4 南半部
図版77（遺構）	上：T3 ビットS190	図版90（遺構）	上：T5 南半部
	中：T3 ビットS192		下：T4 南半部（北より）
	下：T3 枕S271	図版91（遺構）	上：T4 南半部（東より）
図版78（遺構）	上：T3 ビットS22		下：T4 全景（北より）
	中：T3 ビットS117	図版92（遺構）	上：T4 全景（西より）
	下：T3 ビットS148土層断面		下：T5 溝S365（T4S1：南西より）
図版79（遺構）	上：T3 全景（下層：南東より）	図版93（遺構）	上：T5 溝S365（T4S1：南西より）
	下：T3 全景（下層：北より）		下：T5 溝S365（T4S1）遺物出土状況
図版80（遺構）	上：T3 全景（下層：北東より）	図版94（遺構）	上：T5 溝S365（T4S1）遺物（678） 出土状況
	下：T3（下層）土坑S342遺物（380） 出土状況		下：T5 溝S365（T4S1）遺物出土状況
図版81（遺構）	上：T3（下層）土坑S342遺物（380） 出土状況	図版95（遺構）	上：T4 溝S1（T5S365）土層断面
	下：T3（下層）竪穴建物S369（東より）		下：T5 溝S365（T4S1）土層断面
図版82（遺構）	上：T3（下層）竪穴建物S369 遺物（390・391）出土状況	図版96（遺構）	上：T4 井戸S2掘り方検出状況
	中：T3（下層）竪穴建物S369 遺物（382）出土状況		下：T4 井戸S2枠板検出状況（北東より）
	下：T3（下層）竪穴建物S369 遺物（392）出土状況	図版97（遺構）	上：T4 井戸S2枠検出状況
図版83（遺構）	上：T3（下層）竪穴建物S369 遺物（381・388・389）出土状況		下：T4 井戸S2（北東より）
	中：T3（下層）竪穴建物S369土層断面	図版98（遺構）	上：T4 井戸S2（南東より）
	下：T3（下層）竪穴建物S369 床面焼土検出状況		下：T4 井戸S2完掘状況
図版84（遺構）	上：T3（下層）土坑S328土層断面	図版99（遺構）	上：T4 井戸S2土層断面
	中：T3（下層）土坑S452土層断面		中：T4 井戸S2土層断面
	下：T3（下層）溝S578土層断面		下：T4 井戸S2掘削作業
図版85（遺構）	上：T4・5 遠景（北西より）	図版100（遺構）	上：T4 井戸S2完掘状況
	下：T4・5 全景（北西より）		下：T4 井戸S2掘り方土層断面
図版86（遺構）	上：T4・5 遠景（北東より）	図版101（遺構）	上：T4 土坑S366焼土塊出土状況
	下：T4・5 全景（北東より）		下：T4 土坑S366焼土塊出土状況
図版87（遺構）	上：T4・5 遠景（南東より）	図版102（遺構）	上：T4 溝S3・S107土層断面
	下：T4・5 全景（南東より）		中：T4 溝S19土層断面
図版88（遺構）	上：T4・5 遠景（南西より）		下：T4 溝S19・S107遺物出土状況
	下：T4・5 全景（南西より）	図版103（遺構）	上：T4 溝S19遺物出土状況
図版89（遺構）	上：T4・5 全景		中：T4 溝S107遺物出土状況
			下：T4 土坑S24土層断面
		図版104（遺構）	上：T4 土坑S24遺物（897）出土状況
			中：T4 土坑S104土層断面
			下：T4 溝S105・S108土層断面
		図版105（遺構）	上：T4 ビットS399柱根
			中：T4 ビットS409（建物12）柱根

	下：T4	ピットS457（建物11）柱根	中：T5	溝S98土層断面（B-B'）	
図版106（遺構）	上：T5	南半部全景（北東より）	下：T5	溝S98遺物出土状況	
	下：T5	南半部全景（南東より）	図版121（遺構）	上：T5	溝S410（T4 S3）土層断面
図版107（遺構）	上：T5	北半部全景（南より）	中：T5	溝S645遺物（1323）出土状況	
	下：T5	南半部全景（南西より）	下：T5	溝S645遺物（1323）出土状況	
図版108（遺構）	上：T5	北半部全景（北より）	図版122（遺構）	上：T5	溝S645遺物（1323）出土状況
	下：T5	北半部全景（東より）	下：T5	溝S645（北西より）	
図版109（遺構）	上：T5	建物1（南東より）	図版123（遺構）	上：T5	土坑S96遺物（1162）出土状況
	下：T5	建物2（南東より）	中：T5	土坑S96遺物（1162）出土状況	
図版110（遺構）	上：T5	S130（建物2）柱根	下：T5	土坑S96土層断面	
	中：T5	S520（建物4）柱根	図版124（遺構）	上：T5	土坑S96検出状況
	下：T5	S210（建物5）柱根	下：T5	土坑S96完掘状況	
図版111（遺構）	上：T5	建物3（北東より）	図版125（遺構）	上：T5	土坑S109土層断面
	下：T5	建物7（南東より）	中：T5	土坑S109遺物（1239）出土状況	
図版112（遺構）	上：T5	S691（建物7）柱根	下：T5	土坑S109遺物（1239）出土状況	
	中：T5	S693（建物7）柱根	図版126（遺構）	上：T5	土坑S162（南東より）
	下：T5	S256（建物9）柱根	下：T5	土坑S162（北東より）	
図版113（遺構）	上：T5	建物10（南西より）	図版127（遺構）	上：T5	土坑S162土層断面
	下：T5	建物7・10	中：T5	土坑S162遺物（1243・1244） 出土状況	
図版114（遺構）	上：T5	S268柱根	下：T5	土坑S162遺物（1241・1242） 出土状況	
	中：T5	S439（建物9）柱根	図版128（遺構）	上：T5	土坑S194遺物出土状況
	下：T5	S558（建物10）柱根	中：T5	土坑S248土層断面	
図版115（遺構）	上：T5	S616（建物10）礎板石	下：T5	土坑S248遺物（1266）出土状況	
	中：T5	S761（建物10）柱根	図版129（遺構）	上：T5	土坑S248（南西より）
	下：T5	S780（建物10）柱根	下：T5	土坑S248（北西より）	
図版116（遺構）	上：T5	S792（建物10）柱根	図版130（遺構）	上：T5	土坑S458土層断面
	中：T5	S811（建物10）柱根	中：T5	土坑S500土層断面	
	下：T5	S814（建物10）柱根	下：T5	土坑S513遺物（1154）出土状況	
図版117（遺構）	上：T5	S347（欄2）柱根	図版131（遺構）	上：T5	土坑接続溝S112（南東より）
	中：T5	S657（欄2）柱根	下：T5	土坑接続溝S158（南東より）	
	下：T5	S231（欄3）遺物（1101） 出土状況	図版132（遺構）	上：T5	土坑接続溝S112土坑部土層断面
図版118（遺構）	上：T5	溝S81・S98（南東より）	中：T5	土坑接続溝S112溝部土層断面 （D-D'）	
	下：T5	溝S81遺物出土状況	下：T5	土坑接続溝S112遺物出土状況	
図版119（遺構）	上：T5	溝S81土層断面（C-C'）	図版133（遺構）	上：T5	土坑接続溝S158溝部土層断面 （A-A'）
	中：T5	溝S81土層断面（D-D'）			
	下：T5	溝S81遺物（1124）出土状況			
図版120（遺構）	上：T5	溝S98土層断面（A-A'）			

	中：T5	土坑接続溝S159土坑部土層断面	図版151 (遺物)	T4・5	溝S1出土遺物
	下：T5	土坑接続溝S159溝部土層断面 (B-B')	図版152 (遺物)	T4・5	溝S1出土遺物
図版134 (遺構)	上：T5	土坑接続溝S159溝部土層断面 (A-A')	図版153 (遺物)	T4・5	溝S1、T4 溝S19・107・312 出土遺物
	中：T5	土坑接続溝S159溝部遺物出土状況	図版154 (遺物)	T4・5	溝S1・3、T4 溝S107・ 土坑S24
	下：T5	土坑接続溝S159溝部遺物出土状況	T5	ピットS439出土遺物	
図版135 (遺構)	上：T5	土坑接続溝S159 (南東より)	図版155 (遺物)	T5	ピットS286・溝S81・土坑S513・ 土坑接続溝S159・土坑109・162・ 194出土遺物
	下：T5	土坑接続溝S159土坑部漆器 出土状況	図版156 (遺物)	T5	土坑S162・248・249、溝S645、 ピットS575
図版136 (遺構)	上：T5	ピットS308柱根	T3	整地土S69・井戸S70出土遺物	
	中：T5	ピットS309柱根?	図版157 (遺物)	上：T2	落ち込み1出土遺物
	下：T5	ピットS433柱根	下：T2	ピットS1・57・137、竪穴建物 S474、土坑 S350出土遺物	
図版137 (遺構)	上：T5	ピットS434(建物9)遺物(1082) 出土状況	図版158 (遺物)	上：T3	堀S1出土遺物
	下：T5	ピットS554柱根	下：T3	堀S1出土遺物	
図版138 (遺構)	上：T5	ピットS564柱根	図版159 (遺物)	上：T3	堀S1出土遺物
	下：T5	ピットS569柱根	下：T3	曲輪S2出土遺物	
図版139 (遺構)	上：T5	ピットS575遺物(1338) 出土状況	図版160 (遺物)	上：T3	堀S1・曲輪S2・整地土S69 出土遺物
	下：T5	ピットS575柱根	下：T3	堀S1・曲輪S2・整地土S69 出土遺物	
図版140 (遺構)	上：T5	ピットS578柱根	図版161 (遺物)	上：T3	曲輪S2出土遺物
	中：T5	ピットS584柱根	下：T3	曲輪S2出土遺物	
	下：T5	ピットS615柱根	図版162 (遺物)	上：T3	曲輪S2出土遺物
図版141 (遺構)	上：T5	ピットS764柱根	下：T3	溝S6・53出土遺物	
	中：T5	ピットS804柱根	図版163 (遺物)	上：T3	土坑S5出土遺物
	下：T5	ピットS808柱根	下：T3	土坑S5出土遺物	
図版142 (遺物)	T1・2	出土遺物	図版164 (遺物)	上：土坑S5・32出土遺物	
図版143 (遺物)	T2	竪穴建物S385出土遺物	下：土坑S72出土遺物		
図版144 (遺物)	T2	竪穴建物S474・502・その他出土遺物	図版165 (遺物)	上：土坑S72・113・187出土遺物	
図版145 (遺物)	T2	竪穴建物S502・その他出土遺物	下：石組み土坑S67、整地土S69出土遺物		
図版146 (遺物)	T3	堀S1・その他出土遺物	図版166 (遺物)	上：T3	井戸S70出土遺物
図版147 (遺物)	T3	井戸S70・土坑S72出土遺物	下：T4・5	溝S1出土遺物	
図版148 (遺物)	T3	土坑S71・185・342、井戸S70、 竪穴建物S369	図版167 (遺物)	上：T3	溝S1出土遺物
	T4・5	溝S1出土遺物	下：T4・5	溝S1出土遺物	
図版149 (遺物)	T3	竪穴建物S369出土遺物			
図版150 (遺物)	T4・5	溝S1出土遺物			

- 図版168 (遺物) 上: T4・5 溝S1出土遺物
下: T4・5 溝S1出土遺物
- 図版169 (遺物) 上: T4・5 溝S3出土遺物
下: T4 溝S105・312出土遺物
- 図版170 (遺物) 上: T4 井戸S2、T5 ビットS337・
土坑接続溝S159・土坑S248・
溝S645出土遺物
下: T4 井戸S2、T5 ビットS337・
土坑接続溝S159・土坑S248・
溝S645出土遺物
- 図版171 (遺物) 上: T4・5 溝S1、T5 ビットS192・250、
土坑接続溝S159出土遺物
下: T3 溝S3、T4 包含層、ビット
S80・3L、井戸S2、T5 ビット
S371・土坑接続溝
S159出土遺物
- 図版172 (遺物) T3 堀S1・溝S6・土坑S24、T4
溝S81・108、重機掘削中、T5
ビットS331・433・724出土遺物
- 図版173 (遺物) 上: T4・5 堀S1、T5 土坑S162
出土遺物
下: T3 溝S6、土塁上包含層、T4・5
溝S1、T4 S660、T5
土坑接続溝S159、ビットS278
出土遺物
- 図版174 (遺物) 上: T4 ビットS449、T5 ビットS630・
土坑接続溝S112・土坑S247・248
出土遺物
下: T3 井戸S70出土遺物
- 図版175 (遺物) 上: T3 井戸S70出土遺物
下: T3 土坑S186出土遺物
- 図版176 (遺物) T3 堀S1・井戸S70・土坑S187、T4
井戸S2出土遺物
- 図版177 (遺物) T3 堀S1出土遺物
- 図版178 (遺物) T3 井戸S70、T4 井戸S20出土遺物
- 図版179 (遺物) T3 土坑S186出土遺物
- 図版180 (遺物) T3 井戸S70、T4 井戸S2出土遺物
- 図版181 (遺物) T4 井戸S2 出土遺物

第1章 はじめに

本報告書は、平成25年度（2013年度）・平成26年度（2014年度）に実施した（仮称）中川原・森立地区区画整理事業に伴う貴生川遺跡の発掘調査成果をまとめたものである。

本遺跡は滋賀県甲賀市水口町貴生川小字森立に所在する。調査の契機は、（仮称）中川原・森立地区区画整理事業（対象面積約47,000㎡）に先立ち、平成20年度に試掘調査（甲賀市教育委員会2010）を行い、遺構・遺物が検出され、新たに「貴生川遺跡」として遺跡登録されたことである。その後、遺跡の範囲・内容を確認する目的で平成21年度に周辺地域（甲賀市教育委員会2012）、平成23年度に平成20年度地点の補足（甲賀市教育委員会2014）の計3次にわたって試掘調査を実施した。試掘調査結果をうけて、本遺跡の発掘調査の対象面積が広大で現地調査2ヶ年、整理調査1～2ヶ年の長期におよぶことから甲賀市教育委員会（以下「市教委」という）だけで調査が困難と判断し、公益財団法人滋賀県文化財保護協会（以下「協会」という）に委託することとなった（事業名：貴生川遺跡第3次発掘調査業務委託）。調査面積は平成25年度が3,000㎡、平成26年度が5,567㎡の計8,567㎡である。整理調査は平成27・28年度に実施した。

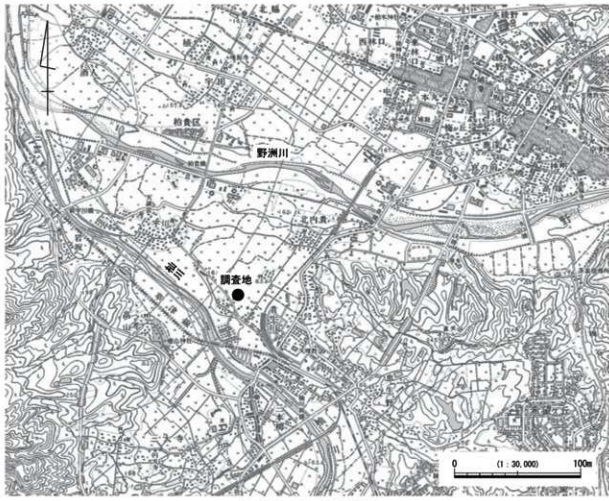
なお、現地調査にあたっては関係諸機関をはじめ、地元甲賀市水口町貴生川地区の方々には多大なご協力をいただいた。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置（第1図）

貴生川遺跡の所在する甲賀市は滋賀県の東南部に位置し、日本列島のほぼ中央部にあたる。市域は481.69km²で、県内では高島市、長浜市に次ぐ面積を有する。北側を湖南市、野洲市、蒲生郡竜王町、東側を蒲生郡日野町、東近江市、南側は三重県、西側は栗東市、大津市、京都府と接している。甲賀市は平成16年（2004年）10月に旧水口町・土山町・甲賀町・甲南町・信楽町の滋賀県甲賀郡のうち5町が合併して市が成立した。人口は90,927人（2015年現在）で、大津市、草津市、長浜市、彦根市、東近江市に続く規模である。

市内の地形は大きく山地、丘陵、段丘および沖積低地に大別できる。山地は市の東側に鈴鹿山脈南部が北から南西に走り、南西側は、田上山に続く信楽山地が南に突き出ている。そして、この両山地の間には古琵琶湖層群の地層がつくる県内最大の丘陵地が広がっている。ここでは、地形・水系を異にする信楽地域を除いた甲賀市域について述べていくこととする。市の東側から南西方向に延びる鈴鹿山脈は、御在所山（標高1,212m）から南に武平峠（標高877m）を経て、鎌ヶ岳（標高1,161m）、宮越山（1,029m）、仙ヶ岳（標高961m）が連なり、三子山（標高568m）あ



第1図 調査地位置図

たりで南西向きを変え、鈴鹿峠（標高357m）を挟み高畑山（標高773m）、溝干山（標高770m）、那須ヶ原山（標高800m）、油日岳（標高693m）と並んでいる。この鈴鹿山脈が三重県との県境を成している。西側には信楽山地が広がっている。信楽山地は大きく金勝山山塊・太神山山塊・猪背山山塊・岩尾山塊・多羅尾山塊に分けることができるが、甲賀市域の杣川・野洲川の河谷に接しているのは金勝山山塊と岩尾山塊である。金勝山山塊は信楽山地の北東縁に位置し、最高峰は阿星山（標高693m）でここから東に大納言（標高596m）、飯道山（標高664m）のピークが並び、西に金勝山（標高610m）、竜王山（標高604m）が連なっている。岩尾山塊は三重県境に位置する岩尾山（標高471m）をピークとして金勝山塊の南側に位置している。

丘陵は、旧土山町の西部から竜王町西部まで東西24km、最大幅8kmにわたってのび、標高220～250mの近江盆地最大の丘陵である水口丘陵、野洲川と杣川の河谷に南北を挟まれて楔形の平面形をなし、旧甲賀町深山口から旧水口町の北内貴までの東西約13km、旧甲賀町岩室から長野まで南北約8kmの規模、標高は220～240mである甲賀丘陵、杣川河谷の南側から三重県旧阿山郡阿山町まで東西約8km、南北約5kmの規模、標高は240～260mで広がる甲南丘陵がある。

そして、水系に目を向けると、御在所山の西側に連なる雨乞岳（標高1,238m）、綿向山（標高1,110m）、能戸ヶ峰（760m）の山間に広がる渓谷に水源を求めることができる野洲川と那須ヶ岳、油日岳を水源とする杣川の両河川に集約される。野洲川は水口丘陵と甲賀丘陵、杣川は甲賀丘陵と甲南丘陵の間を北流し、市北部の湖南市境で合流している。この両河川の両岸には、河岸段丘が発達しており、合流部周辺で沖積低地が広がっている。この沖積低地は水口丘陵と信楽山地が最も接する狭隘部から甲賀丘陵の北端部付近まで広がっており、甲賀市域の中で最も大きな平坦地を形成している。

貴生川遺跡の所在する水口町貴生川は、甲賀市の中央北部、周囲を大きく見れば西側から南側にかけて信楽山地、南から東にかけて鈴鹿山脈、小さな視点では北側に水口丘陵、南側に甲賀・甲南丘陵、そして野洲川・杣川に南北を挟まれた河岸段丘上に位置しているといえる。具体的には杣川の形成した河岸段丘先端部にあり、遺跡の南側は2mを越える高低差と旧流路の痕跡を読み取ることができる。また、北西側には、ほ場整備後の現在は読み取ることができない小さな谷が北東から南西にかけて形成され、その北側は沖積低地が広がっている。現在の遺跡西側に位置する西内貴の集落は段丘崖付近に形成されていることから比較的新しいものと判断できる。つまり、貴生川遺跡の立地は、南西から北西側に眺望がひらけ、杣川を見下ろすような立地であったと考えられる。

第2節 周辺の遺跡（第2図・表1）

甲賀市域を概観するとき、野洲川流域、その支流である杣川流域、そして水系が全く異なる大戸川流域に分けてみるとその特徴が明瞭となる。ここでは、野洲川・杣川流域である甲賀市の東部を中心に見ていく。この甲賀市域の東部は近江国と伊賀・伊勢両国の国境を形成している地域で、古代律令制下では東海道と東山道の境に位置付けられ、畿内に準じる扱いを受けていた。これは当地域の文化形成を考えるうえで非常に重要な視点である。つまり、国境を形成する鈴鹿の

山々を境に東西で異なる文化圏を形成する一方で、東西の交流の窓口的な役割も果たしてきた。この役割は倉屋道や阿須波道と呼ばれた東海道の前身となるルートが開拓された時期までさかのぼる。

縄文時代 甲賀市域で最も古い時期の痕跡は、縄文時代草創期の遺物である。この時期の明確な遺構は検出されていないが、有舌尖頭器が見つまっている。野上野遺跡（土山町）、甲南町新治の両地点で表面採取されている。これに続くのは縄文時代早期の遺跡である。油日縄文遺跡（甲賀町）、寺山遺跡（甲南町）である。油日縄文遺跡は、鈴鹿山脈をなす油日岳から杣川に向かって伸びる丘陵上に位置し、押型文土器とともに土坑や小穴がみつまっている。寺山遺跡は農業用溜池である大谷池の底で確認された遺跡である。もともとは、池が作られた谷の斜面に遺跡が広がっていた可能性が高く、調査では小穴や土坑が検出されている。出土した遺物は早期から中期にかけての土器、茅山下層式、羽鳥Ⅱ式、船元式、北白川C式、石鎌や削器、磨石、叩石などである。また、土器、明確な遺構が検出されていないが、スクレイパーや石鎌、磨石、叩石などが出土している矢川寺遺跡（甲南町）がある。

弥生時代 甲賀市域では遺物の散布は確認されているものの明確な集落遺跡はみつからない。

古墳時代 甲賀市域には前期の古墳およびそれに伴う集落は確認できない。古墳が最初に確認されるのは水口町泉に所在する泉古墳群である。水口丘陵の裾部に位置する。この丘陵は早い段階で工業団地等がつくられたため、すでに消滅したのもも含めて6基の古墳で構成されていたと伝えられているが、現在は西纏子塚古墳と東纏子塚古墳の2基（県指定史跡）が確認されるのみである。西纏子塚古墳は、直径50m、高さ5.2mの二段築成の円丘部に幅20m、長さ10m、高さ2.5mの作り出しが付属している。採取された埴輪から5世紀前半代に築造されたものと考えられている。西纏子塚古墳の東側100mの地点に東纏子塚がある。東纏子塚は直径42m、高さ5.5mの円墳である。埴輪等も採取されておらず時期は不明である。この泉古墳群から500m南東に塚越古墳が築かれている。一辺52mの方墳で、三方向に周濠を巡らせており、周濠を含めると一辺62mの規模となる。埴輪は家形・楯形などの形象埴輪も樹立されていた。この塚越古墳は、昭和36年に土取のために墳丘が削平されており、その時に副葬品と考えられる遺物が多数出土している。その内容は内行花文鏡1面、碧玉製勾玉1個、四方白金銅装肩庇付冑1領、三角板革紐短甲1領以上、三角板鉾留短甲1領、頸甲1領、肩甲1領、鉄刀および鉄剣10振以上、鉄鍔30本以上である。これは中期、5世紀中頃の時期を示しており、中央王権との関係の深さがうかがえる品々である。

塚越古墳が築かれた時期の集落が、埴輪跡で見つまっている。埴輪跡は野洲川東岸に広がる沖積低地の中央に位置する。堅穴建物が119棟、掘立柱建物17棟等の遺構が検出されている。甲賀市域の古墳時代の集落で最も規模が大きく、その中でも5世紀中頃につくられた大型倉庫群は遺跡の性格を知るうえで重要な発見といえる。倉庫群は東西方向に軸を揃えて4間×4間、床面積68㎡が2棟、やや小型である4間×4間の床面積49㎡が1棟の3棟である。通常の集落で見られる倉庫は20㎡未満であり、その2～3倍以上の大きさは、まさに「見せるための倉庫建物」という評価も納得がいく。この点は、塚越古墳の築造契機と連動しているとみるべきであろう。こ

の大型倉庫群がつけられた後、5世紀後半には朝鮮半島系の土器や赤色顔料（ベンガラ）、製塩土器をもつ堅穴建物が輸出されている。6世紀後半になると一辺20mの方形に柵で囲まれた区画が確認でき、その内部には棟持柱をもつ高床建物と床面積が約60㎡ある大型建物がみつまっている。

飛鳥～平安時代 鈴鹿山地を越えるルートはいくつか文献に登場するが、最も古いものは、672年の壬申の乱の際に吉野から東国へ向かった大海人皇子一行が、積殖（柘植）で鹿深（甲賀）から来た高市皇子と落ち合う記述である。この一文から読み取れるのは、鹿深（甲賀）を抜けて積殖（柘植）に至るルートが存在したことである。具体的にどのルートを想定するかは様々な説が存在するが、柚川沿いに東南行して柘植に至る現在のJR草津線をトレースするルートが有力視されている。このルートが「倉歴道」であると考えられる。つまり、このルートは甲賀から鈴鹿山地を越えて、平城京から伊勢に至るルート（東海道）に交わるルートである。そして、886年に三雲で野洲川を渡河して野洲川沿いに鈴鹿峠を越える「阿須波道」が整備された。このルートは官道として整備されたのがこの段階であるが、古墳時代以降の遺跡の分布を読み解けば、下地となるルートは存在していたことが間違いない。ちょうど「倉歴道」「阿須波道」の分岐点にあたる野洲川渡河地点、近世東海道の横田の渡し（県指定史跡）に近接する地点に位置するのが下川原遺跡・北脇遺跡である。旧水口町の中心部に広がる沖積低地の北西端部に位置する。

下川原遺跡は発掘調査の結果、6世紀末から8世紀にかけての堅穴建物が50棟検出された。この集落のピークは7世紀段階で、8世紀に入ると急速に衰退していくことが分かっている。北脇遺跡は9～10世紀を中心に1間×5間の掘立柱建物6棟や長さ50mにおよぶ長大な柵、「徳西庶家」の銅印が出土している。下川原遺跡は柘植跡に連なる集落に位置付けられ、北脇遺跡は「阿須波道」に隣接する位置関係と官衛的な要素を垣間見ることができるが、今後、調査が進むとより具体的な姿が明らかになるだろう。

甲賀市内では、須恵器と灰釉陶器・緑釉陶器窯が分布している。須恵器窯は5世紀末から6世紀初頭の泉窯跡以降、9世紀代の大田和窯跡、今郷シゲ道窯跡、末田窯跡が操業している。10世紀に入ると須恵器生産は低調となり、代わりに10世紀になると水口丘陵で緑釉陶器・灰釉陶器の生産が行われるようになる。緑釉陶器は平安京に出荷されたと考えられ、当時、都で消費された緑釉陶器の大半が近江産であったと推定されている。この近江産の緑釉陶器生産の拠点の一つが水口町春日に位置する窯跡群である。水口丘陵内の谷部に張り付くように窯跡が築造されており、10世紀を通して操業されていたことが分かっている。近年発掘調査された春日北窯跡では、狭い範囲で6基の窯がみつかり、2→6→5→1・3・4号窯と10世紀初頭から後葉にかけて操業されていたことが分かっている。中でも2号窯では黒笹90号窯式段階から折戸53号窯式段階過渡期の灰釉陶器と緑釉陶器の素地が出土している。緑釉陶器は従来いわれていた近江産の特徴である高台端部の段がなく、内外面ともに丁寧にミガキを施し、高台内面の糸切り痕もナデ消してしあげており、近江産緑釉陶器の最古段階に位置付けることができる。この段階では灰釉陶器と緑釉陶器を併焼していた可能性があり、窯であることや窯道具などからも東海地方の影響が読み取れる。6号窯では有林式小型三角窯、1・3～5号窯は下部宮窯状有林式平窯である。この調査成果から、現在、窯跡として認識されている遺跡も近接地点で同時期に複数の窯が操業し



第2図 調査地周辺道路

表1 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	種別	時代	山麓	立地
362 - 033	圓光寺遺跡	廣南市 三雲	寺院跡	中世	山麓	寺地
362 - 034	三雲寺遺跡	廣南市 三雲	寺院跡	中世	山麓	寺地
363 - 004	下山城遺跡	甲賀市 水口町下山	城跡	室町	山麓	山林
363 - 005	伴屋敷遺跡	甲賀市 水口町下山	城跡	室町	平地	水田・宅地
363 - 008	西庭山城遺跡	甲賀市 水口町下山	城跡	室町	山麓	山林
363 - 009	東庭山城遺跡	甲賀市 水口町下山	城跡	室町	山麓	山林
363 - 020	奥古墳群 東藤子塚古墳	甲賀市 水口町奥	古墳	古墳	山頂	山林
363 - 023	城跡遺跡	甲賀市 水口町奥	古墳・集落跡	古墳・中世	山麓	寺地
363 - 025	城跡遺跡	甲賀市 水口町奥	城跡	古墳・室町	平地	山林・宅地・寺地
363 - 027	山中氏居敷遺跡	甲賀市 水口町宇川	城跡	室町～江戸	平地	山林・畑地・宅地
363 - 028	船木神社遺跡	甲賀市 水口町北畠	城跡	室町	平地	社地
363 - 031	北畠城遺跡	甲賀市 水口町北畠	城跡	鎌倉	山麓	山林
363 - 035	北志守野城遺跡	甲賀市 水口町北志守	城跡	室町	山麓	山林
363 - 036	内黄川田山城遺跡	甲賀市 水口町北内黄	城跡	室町	山麓	山林
363 - 037	川田山古墳群	甲賀市 水口町北内黄	古墳群	古墳	山麓	山林
363 - 038	北内黄城遺跡	甲賀市 水口町北内黄	城跡	室町	山頂	山林
363 - 042	百合寺古墳群	甲賀市 水口町宇川	古墳群	古墳	山麓	山林
363 - 044	源太郎居敷遺跡	甲賀市 水口町岩城	城跡	中世	山麓	山林
363 - 047	高山居敷跡	甲賀市 水口町高山	城跡	中世	山麓	その他
363 - 048	御能原居敷遺跡	甲賀市 水口町高山	城跡	室町	山麓	山林
363 - 049	高山氏城遺跡	甲賀市 水口町高山	城跡	室町	山麓	山林
363 - 050	高山古墳群	甲賀市 水口町高山	古墳群	古墳	山麓	山林
363 - 055	牛飼城遺跡	甲賀市 水口町牛飼	城跡	室町	山麓	山林
363 - 063	山上宮城遺跡	甲賀市 水口町山上 - 棚原敷	城跡	中世	丘陵	林
363 - 083	高塚古墳	甲賀市 水口町山口	古墳	古墳	平地	林
363 - 084	水口城	甲賀市 水口町山口	城跡	江戸	平地	校地
363 - 087	水口岡山城遺跡	甲賀市 水口町山口	城跡	室町	山頂・山麓・山麓	山林・宅地・寺地・畑地
363 - 090	城跡遺跡	甲賀市 水口町奥	集落跡	古墳～中世	平地	水田
366 - 004	津川城遺跡	甲賀市 甲由町津川	城跡	中世	山頂	山林
366 - 005	森尻古墳	甲賀市 甲由町森尻	古墳	古墳	山麓	山林
366 - 006	丸川寺遺跡	甲賀市 甲由町森尻	寺院跡	その他	平地	社地
366 - 027	金蔵寺遺跡	甲賀市 甲由町杉谷	寺院跡	中世～近世	山麓	水田
366 - 050	堀野城遺跡	甲賀市 甲由町堀野	城跡	中世	山麓	畑地
366 - 051	山屋城遺跡	甲賀市 甲由町原	城跡	中世	平地	畑地
366 - 052	市原宮城遺跡	甲賀市 甲由町市原	城跡	中世	その他	宅地・畑地
366 - 053	市原寺	甲賀市 甲由町市原	寺院跡	その他	平地	竹林
366 - 054	古原敷居敷遺跡	甲賀市 甲由町市原	城跡	中世	平地	水田
366 - 055	桶詰遺跡	甲賀市 甲由町市原	集落跡・館敷地	平安～中世	平地	水田
366 - 057	望月村跡城遺跡	甲賀市 甲由町榎子	城跡	室町	山頂	山林
366 - 058	望月寺城遺跡	甲賀市 甲由町榎子	城跡	中世	山頂	山林
366 - 060	上野川城山2号城遺跡	甲賀市 甲由町野川	城跡	中世	山麓	山林
366 - 061	上野川城山3号城遺跡	甲賀市 甲由町野川	城跡	中世	山麓	山林
366 - 063	上野川城山1号城遺跡	甲賀市 甲由町野川	城跡	中世	山麓	山林
366 - 075	オウノ木遺跡	甲賀市 甲由町森尻	館敷地	中世	平地	水田
366 - 081	八雲寺遺跡	甲賀市 甲由町森尻	寺院跡	中世	山麓	水田・荒地
366 - 092	堀野遺跡	甲賀市 甲由町堀野	集落跡	中世	山麓	水田
366 - 093	平城古墳	甲賀市 甲由町堀野	古墳	古墳	山麓	山林
366 - 094	藤吉寺遺跡	甲賀市 甲由町堀野	館敷地	中世	平地	水田
363 - 091	賣生川遺跡	甲賀市 水口町賣生川	集落跡	中世	平地	水田・畑地
363 - 092	富川居敷遺跡	甲賀市 水口町梅ヶ丘	城跡	中世	平地	その他
363 - 093	前野遺跡	甲賀市 甲由町杉谷	集落跡	古代	山麓	水田
363 - 098	城山古墳群	甲賀市 水口町三ノ木・三ノ木寺	古墳群	古墳	山麓	水田
363 - 101	西川古墳群	甲賀市 水口町西川	集落跡	平安	平地	水田・宅地・畑地
363 - 102	大蔵寺遺跡	甲賀市 水口町石尾	寺院跡	中世～近世	丘陵	寺地
363 - 103	北畠遺跡	甲賀市 水口町北畠	集落跡	古代	平地	水田
363 - 104	北畠遺跡	甲賀市 水口町奥・北畠	集落跡	古代	平地	宅地・水田
363 - 105	古御殿遺跡	甲賀市 水口町能楽	城跡	近世	平地	病院
363 - 110	花池遺跡	甲賀市 水口町北畠	集落跡	古代～中世	平地	水田・宅地
363 - 111	城南遺跡	甲賀市 水口町中郷	館敷地	中世～近世	平地	水田・駐車場
363 - 112	赤瀬部出居敷遺跡	甲賀市 水口町梅ヶ丘	城跡	近世	平地	宅地
363 - 115	落ヶ谷遺跡	甲賀市 水口町虎生野	館敷地	古代～中世	平地	水田
363 - 116	下川原遺跡	甲賀市 水口町奥	集落跡	古墳～古代	平地	店鋪・駐車場・造成地
363 - 120	小山城遺跡	甲賀市 水口町三ノ木	城跡	中世	山麓	山林
363 - 121	奥谷城遺跡	甲賀市 水口町三ノ木	城跡	中世	丘陵	山林
363 - 122	山上城遺跡	甲賀市 水口町山上	城跡	中世	丘陵	山林
363 - 127	竹石遺跡	甲賀市 水口町三ノ木	集落跡	古墳～中世	平地	水田
363 - 129	内黄尾山城遺跡	甲賀市 水口町賣生川	城跡	中世	山麓	畑地
363 - 130	内黄尾居敷遺跡	甲賀市 水口町賣生川	城跡	中世	平地	畑地
363 - 131	三ノ木寺中城遺跡	甲賀市 水口町三ノ木	城跡	中世	山麓	山麓
363 - 132	北畠遺跡	甲賀市 水口町北畠	城跡	中世	平地	竹林
363 - 133	山上居敷遺跡	甲賀市 水口町山上	城跡	中世	平地	その他
363 - 134	一谷居敷遺跡	甲賀市 水口町高山	城跡	中世	平地	寺院
363 - 135	西山居敷遺跡	甲賀市 水口町宇川	城跡	中世	平地	畑地
363 - 136	伴屋敷遺跡	甲賀市 水口町下山	城跡	中世	丘陵	工場

ていた可能性が高く、そう考えれば、消費地（平安京）で確認されている近江産緑釉陶器の多量の需要を賄う能力を有する一大産地の姿にふさわしいだろう。

鎌倉～安土桃山時代 甲賀市域では180に及ぶ中世城館が確認されている。この城館がつくられた時代に甲賀郡を運営していたのが「甲賀郡中惣」である。この「甲賀郡中惣」は、同族結合を基礎とした「同名中」や「三方中」が広域で連携した一揆的結合である。この「甲賀郡中惣」の存在が突出した勢力を生み出さなかったともいえる。その結果、野洲川・杣川流域全域に城館が集中して作られるのである。しかし、その下地ともなる時期の集落に関してはほとんどわかっていない。そのような状況の中で、杣川流域の沢尻遺跡、文殊院遺跡を取り上げておきたい。沢尻遺跡は13世紀代の掘立柱建物で確認されており、それ以降の開発の痕跡が読み取れる。文殊院遺跡では試掘調査であるが溝から12～13世紀代の瓦器がまとまって出土しており、集落が展開していたことが分かる。このようなことから当然、城館を築造する素地があったことを垣間見ることができる。そして、室町時代後期を中心に城館が累々と築かれようになる。

甲賀市域の中世の城郭の特徴を示すと「一辺半町の土塁で四角く囲み、その周囲に空堀を設けた「単郭方形四方土塁」と形容される小規模な城館」である。甲賀の城郭研究の基礎は、1982年に開始された滋賀県教育委員会による県内の中世城郭分布調査である。この分布調査では、対象地域（旧郡）ごとに城郭の縄張り図、分布図、現状写真、分家調査の成果を中心にまとめられており、甲賀郡域は「滋賀県中世城郭分布調査」2で報告されている。この段階で、甲賀郡内の城郭の特徴を以下のように指摘している。

- ①郡内の多くの城郭は、同名中を組織した一族が地域を守るために築かれた
- ②甲賀郡中惣の勢力圏では、単郭方形・土塁囲み・外周外堀という共通の特徴を備えている
- ③甲賀と伊賀で城郭に共通点があるものの分布状況や規模、選地において違いもある
- ④甲賀郡域でも信楽町域は他の地域と分布や構造が異なっている

現在においてもこの指摘の大枠はかわらない。

このように甲賀地域に展開している城館は、「単郭方形」タイプという共通した形態であることから、在地の有力者（甲賀五十三家・二十一家とよばれる家）の屋敷、城と理解されてきた。しかし、有力者（家）の数に比して城館の数が多いことから「支城」の名をあてて、つじつま合わせをしてきた経緯がある。それが、近年の研究成果では、地域＝有力家＝城館群という概念で整理し、城館一つ一つが単体で機能するものではなく、複数の城館で城の機能を担っていたという考えが提出されている。これは、甲賀の城は、同名中（有力家の惣領家・庶子家等）、複数の同名中（三方中など）、郡中惣の要請などのさまざまな経営主体によって重層的につくられたという指摘である。つまり、甲賀の城の今のみえる姿は、同名中によってつくられた城を中心に、複数の同名中の要請によって築城・運営された城、さらには郡中惣の要請によって築城・運営されたものが折り重なった結果であると理解することにより、有力家と城の数の違いを解消しようとする試みである。

城館においても調査がされ、実態が分かっている城館は意外と多くない。実態のわかっている事例をみていくこととする。新名神高速道路・県道建設に伴い調査された竜法師城は、杣川左岸、旧甲南町に位置する城館である。16世紀後半の短期間に機能していたこと、甲賀の典型的な城館

である「単郭方形四方土塁」を呈していないこと、眺望のきく立地であることから見張り台的な役割を担った城館である可能性が指摘されている。袖川左岸、旧甲賀町に位置する補陀楽寺城は半町四方の典型的な「単郭方形四方土塁」の城館で、土塁の一部とその周辺が調査されている。16世紀後半に土塁が築かれたと考えられ、土塁の外側には堀が認められなかった。野洲川右岸の河岸段丘上、旧水口町に位置する植城は甲賀の城館としては破格の東西約350m、南北約255mの長方形に区画された内部を土塁と空堀で12か所に区画する形態をとっている。集落内の道路の拡張工事で堀の部分の調査がされている。調査で15～16世紀前半の遺物が出土しており、堀の掘削、機能停止のおおまかな年代が分かり、隣接する曲輪面では石列や溝等が検出されている。

江戸時代 甲賀における中世と近世を区切る出来事はいわゆる「甲賀ゆれ」である。甲賀郡中惣に名を連ねる甲賀衆は、信長の近江侵攻での甲賀郡の制圧以降、伊賀侵攻等に信長軍として参加している。天正10年（1582）の本能寺の変の後は、羽柴秀吉に従い北伊勢侵攻、小牧・長久手の戦いにも従軍していたようである。天正13年（1585）に秀吉は根来寺・雑賀一揆に対する紀州征伐を開始する。この紀州攻めの際、紀伊太田城で水攻めを行った。甲賀衆はこの太田城攻めの際に築堤で落ち度あり、「廿人計」が所領を没収され、追放されたと伝えられている。これにより室町時代後期以降甲賀の地を運営してきた「甲賀郡中惣」が解体することとなる。この出来事のちに「甲賀ゆれ」、「甲賀崩れ」、「甲賀破儀」呼ばれることとなる。この出来事を契機に甲賀の地、水口岡山城に入るのが中村一氏である。つまり、甲賀の中世社会を支えていた甲賀郡中惣が崩壊したことで中世が終わりをつげ、豊臣政権の先鋒たる中村一氏の水口岡山城入城で近世が幕開けしたといえる。水口岡山城には中村一氏以降、増田長盛、長東正家と豊臣系の有力大名が入城していくこととなる。そして、関ヶ原の合戦後、徳川家康が水口を直轄支配することとなる。これは甲賀の地が江戸と京都を結ぶ東海道、近江と伊賀を結ぶ袖街道、土山と愛知川を結ぶ御代参街道などかかえる交通の要衝であったことが大きいと考えられる。その後、三代将軍家光の上洛に伴い水口城（県指定史跡）がつくられ、そして1682年に水口藩が置かれ、宿駅と城下町として整備されていくこととなる。甲賀の近世の幕開けを象徴する水口岡山城は、近年、甲賀市教育委員会によって確認調査が実施され、平成28年に国史跡に指定された。

＜参考文献＞

- ・甲賀市（2007）『古代の甲賀 甲賀市史第1巻』甲賀市史編さん委員会編
- ・甲賀市（2010）『甲賀の城 甲賀市史第7巻』甲賀市史編さん委員会編
- ・甲賀市（2012）『甲賀衆の中世 甲賀市史第2巻』甲賀市史編さん委員会編
- ・甲賀市（2013）『信楽焼・考古・美術工芸 甲賀市史第5巻』甲賀市史編さん委員会編
- ・甲賀市（2014）『道・町・村の江戸時代 甲賀市史第3巻』甲賀市史編さん委員会編
- ・甲賀市教育委員会（2005）『平成15・16年度甲賀市内遺跡発掘調査報告書』甲賀市文化財報告書第1集
- ・甲賀市教育委員会・積水化学工業株式会社（2006）『下川原遺跡発掘調査報告書』甲賀市文化財報告書第7集
- ・甲賀市教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2008）『北脇遺跡発掘調査報告書』甲賀市文化財報告書第9集
- ・甲賀市教育委員会（2010）『甲賀市埋蔵文化財調査年報 平成20年度分』甲賀市文化財報告書第16集
- ・甲賀市教育委員会（2011）『下川原遺跡第11次・竹石遺跡第1次発掘調査報告書』甲賀市文化財報告書第17集

- ・甲賀市教育委員会（2011）『甲賀市埋蔵文化財調査年報 平成21年度試掘調査・宮町遺跡第38次・第39次調査』甲賀市文化財調査報告書第18集
- ・甲賀市教育委員会（2012）『甲賀市埋蔵文化財調査年報 平成22年度試掘調査』甲賀市文化財報告書第19集
- ・甲賀市教育委員会（2013）『平成24年度 市内遺跡発掘調査報告書』甲賀市文化財報告書第20集
- ・甲賀市教育委員会（2016）『水口岡山城総合調査報告』甲賀市文化財報告書第26集
- ・甲賀町教育委員会（1996）『補陀楽寺城遺跡』甲賀町埋蔵文化財調査報告書（1）
- ・甲南町教育委員会（2003）『寺山遺跡発掘調査報告書』甲南町文化財調査報告書第6集
- ・甲南町教育委員会（2004）『平成11～14年度甲南町内遺跡発掘調査報告書』甲南町文化財調査報告書第7集
- ・甲南町教育委員会（1996）『甲南町内遺跡発掘調査報告書』甲南町文化財調査報告書第2集
- ・甲南町教育委員会（1994）『矢川寺遺跡発掘調査報告書』甲南町文化財調査報告書第1集
- ・滋賀県企画部土地対策課編（1985）『土地分類基本調査 水口・上野』
- ・滋賀県教育委員会・財団法人滋賀総合研究所編（1984）『滋賀県中世城郭分布調査』2
- ・滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2005）『植遺跡』
- ・滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2006）『植城遺跡』
- ・滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2006）『竜法師城遺跡』
- ・滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2006）『竜法師城遺跡・池ノ尻遺跡』
- ・滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2012）『春日北遺跡』
- ・滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会（2016）『沢尻遺跡』
- ・土山町（1996）『阿須波道と垂水頓宮』国史跡垂水肅王頓宮及び周辺地域の総合調査報告書

第3章 調査の経緯と経過

第1節 試掘調査

本遺跡は（仮称）中川原・森立地区区画整理事業（対象面積約47,000㎡）に先立ち、平成20年度に実施した試掘調査（甲賀市教育委員会2010）で遺構・遺物が検出され、新たに「貴生川遺跡」として遺跡登録された。その後、平成21年度に周辺地域の試掘調査（甲賀市教育委員会2012）、平成23年度に平成20年度の補足の試掘調査（甲賀市教育委員会2014）の計3次にわたって行った。

これらの試掘調査から現地表から0.3～0.5mに遺構面が存在し、その内容は13～15世紀を中心とした集落遺跡と想定された。検出された遺構は、掘立柱建物、土坑やピット、河川と考えられる流路である。また、平成21年度の試掘調査は、貴生川遺跡の南側の河岸段丘下の事業対象地を中心に行われ、柚川の氾濫原であることが判明し、遺跡が南には広がらないことが明らかとなった。これらの調査結果をもとに、河岸段丘上の事業対象地、約7,056㎡を発掘調査対象地とすることとなった。

第2節 発掘調査（第3図）

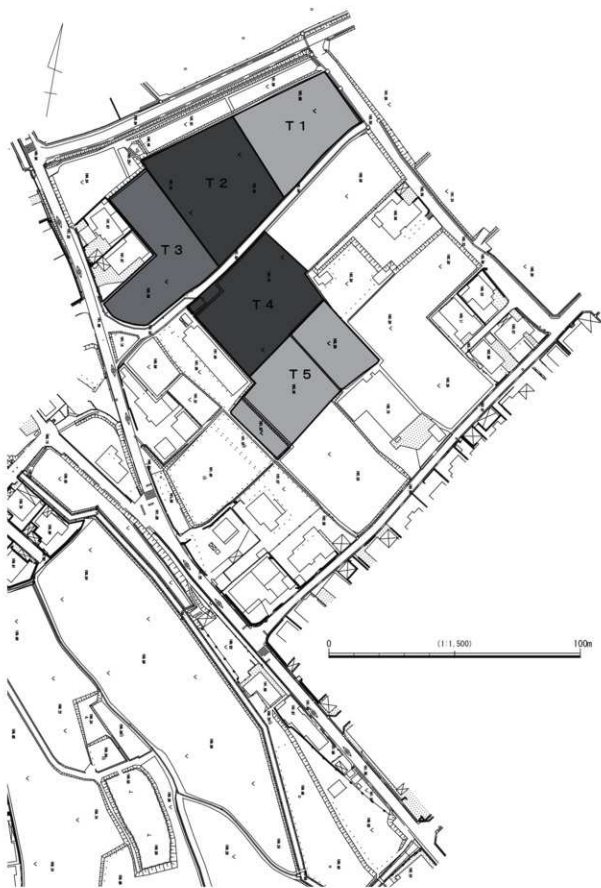
試掘調査結果をうけて、市教委は、本遺跡の発掘調査の対象面積が広大で、現地調査2ヶ年、整理調査1～2ヶ年におよぶことから市教委だけの発掘調査の実施が難しいと判断し、滋賀県教育委員会事務局文化財保護課（以下「県教委」という）に事業の実施の可否を照会することとなった（平成24年12月11日付甲歴文第599号『発掘調査等の実施について（照会）』）。これをうけ、県教委から協会に照会（平成24年12月13日付滋教委文保第1902号『発掘調査等の実施について（照会）』）があり、協会は発掘調査が可能との回答をおこなった（平成25年1月22日付滋文保協局第20号『発掘調査等の実施について（回答）』）。以後、県教委から市教委に本発掘調査に関する回答（平成25年1月24日付滋教委文保第87号『発掘調査等の実施について（回答）』）を行い、（仮称）中川原・森立地区区画整理事業に伴う発掘調査事業を甲賀市建設部都市計画課、市教委との協議を経て、協会が実施することとなった（平成25年8月5日付甲歴文第276号『発掘調査等の実施について（依頼）』）。

平成25年度発掘調査 そして、委託業務の見積もり徴取（平成25年9月18日付甲都計第554号「工事（委託）の見積徴取について（通知）」）、提出（平成25年9月20日付滋文保協局第932号「埋蔵文化財（貴生川遺跡）の調査に係る見積書の提出について」）、採用（平成25年9月24日付甲都計第596号『採用決定通知』）、契約（平成25年9月24日付平成24年度第380号貴生川遺跡第3 滋発掘調査業務委託契約書）を締結し、現地調査には平成25年9月下旬に着手した（平成25年9月25日付平成24年度第380号貴生川遺跡第3 滋発掘調査業務委託着手届・平成25年10月7日付滋文保協局第732号「埋蔵文化財（貴生川遺跡）の発掘調査について（報告）」）。平成25年度の調査面積は

2,000㎡で開始された。また、調査を実施していく過程で、試掘調査をもとに想定されていた遺構の分布が、調査対象地外にも広がっていることが判明し、甲賀市建設部都市計画課・市教委との協議を経て、調査対象地1,000㎡を広げることとなった（平成25年12月27日付甲歴文第604号『貴生川遺跡発掘調査に伴う追加調査の実施について（依頼）』）。その結果調査面積は3,000㎡となった。そして、調査の進展により平成25年度調査対象地の遺構の全体像が明らかになってきたことで、地元を対象とした現地説明会を平成26年3月9日に実施し（平成26年1月31日付滋文保協局第732号『埋蔵文化財（貴生川遺跡）の現地説明会の開催について（協議）』・平成26年3月4日付滋文保協第732号『埋蔵文化財（貴生川遺跡）にかかる現地説明会の開催について（報告）』）、130名の参加があった（平成26年3月11日付滋文保協局第732号『埋蔵文化財（貴生川遺跡）にかかる現地説明会の開催結果について（報告）』）。平成25年度の現地調査は平成26年3月24日に終了した（平成26年3月24日付滋文保協局第732号『埋蔵文化財（貴生川遺跡）の発掘調査の完了について（報告）』・『埋蔵文化財（貴生川遺跡）の発掘調査結果について』・『埋蔵物発見報告』）。

平成25年度の調査は、調査面積3,000㎡、遺物は収納用コンテナで土器15箱、石製品1箱が出土した。

平成26年度発掘調査 平成26年度の現地調査は、委託業務の見積徴取（平成26年3月17日付甲都計第1156号『委託の見積徴取について（通知）』）、見積書提出（平成26年3月20日付滋文保協局第803号『埋蔵文化財（貴生川遺跡）の調査にかかる見積書の提出について』）、採用決定（平成26年3月24日付甲都計第1214号『採用通知決定』）、契約の締結（平成26年4月1日付委託番号平成26年度第144号貴生川遺跡第3次発掘調査業務委託契約書）を経て、現地調査に着手した（平成26年4月1日付『委託番号平成26年度第144号貴生川遺跡第3次発掘調査業務委託者手届』・『埋蔵文化財（貴生川遺跡）の発掘調査について（報告）』）。調査では、当初、想定されていなかった半町四方土塁囲みの城館が非常に良好な状態で検出されたことから、市教委と協議を経て、記者発表・現地説明会を開催することとなった（平成26年7月14日付滋文保協局第803号『埋蔵文化財（貴生川遺跡）にかかる記者発表資料の送付について』・平成26年7月31日付滋文保協局第803号『埋蔵文化財（貴生川遺跡）にかかる現地説明会の開催について（報告）』）。記者発表は平成26年7月28日、現地説明会は平成26年8月3日に実施した。現地説明会は、地元をはじめ一般の方311名の参加があった（平成26年8月11日付滋文保協第803号『埋蔵文化財（貴生川遺跡）にかかる現地説明会の開催結果について（報告）』）。現地説明会后、調査を進めていく中で、試掘調査結果から遺構が広がらないと判断された地点において、遺構（掘立柱建物・溝）の広がりが確認できたことから、甲賀市建設部都市計画課・市教委と協議を行い、510㎡の追加調査を行うこととなった（平成26年12月2日付滋文保協局第803号『貴生川遺跡の発掘調査について（中間報告）』・平成27年1月14日付甲歴文第565号『貴生川遺跡発掘調査に伴う追加調査の実施について（依頼）』）。あわせて、当初、2月末までの調査期間を3月下旬に延長した。そして、調査対象地の遺構の全体像が明らかになってきたことで、地元を対象とした現地説明会を平成27年1月24日に開催した（平成27年1月13日付滋文保協局第803号『埋蔵文化財（貴生川遺跡）の現地説明会の開催について（協議）』・平成27年1月21日付滋文保協局第803号『埋蔵文化財（貴生川遺跡）にかかる現地説明会の開催について（報告）』）。現地説明会に69名の参加があった（平成27年1



第4図 調査区配置図

月26日付滋文保協局第803号『埋蔵文化財（貴生川遺跡）にかかる現地説明会の開催結果について（報告）』。現地調査は平成27年3月23日に終了し、現地を引き渡した（平成27年3月23日付滋文保協局第803号『埋蔵文化財（貴生川遺跡）の発掘調査の完了について（報告）』・『委託番号平成26年度第144号貴生川遺跡第3次発掘業務委託業務完了報告書』・平成27年3月30日付滋文保協局第803号『埋蔵文化財（貴生川遺跡）の発掘調査結果について』・『埋蔵物発見報告』）。

平成26年度の調査面積は5,567㎡、出土遺物は収納用コンテナで土器56箱、石製品1箱、木製品9箱、金属製品1箱であった。

第3節 整理調査

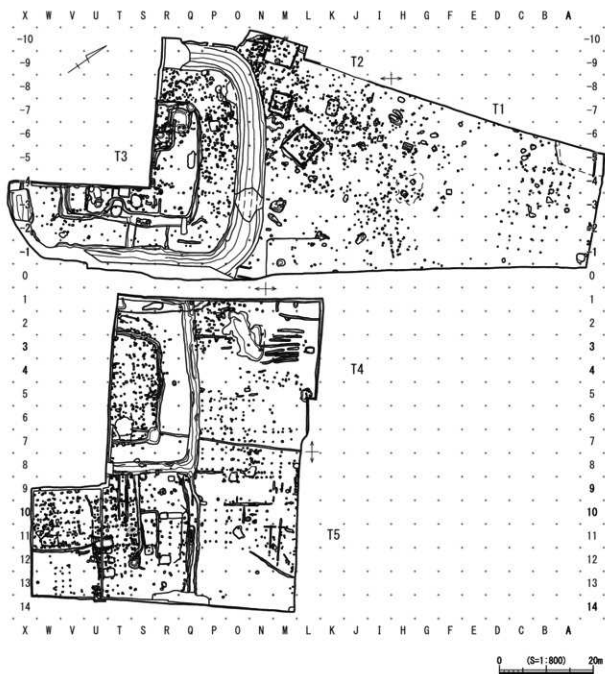
整理調査は、2ヶ年の発掘調査の成果物（土器71箱・木製品9箱・石製品2箱・金属製品1箱・遺構実測図264枚）を対象として実施した。各年度の対象および工程は下記のとおりである。

平成27年度整理調査 平成27年度から整理調査を開始した。整理調査にかかる見積徴取（平成27年4月10日付甲都計第8号『委託の見積徴取について（通知）』）、見積書提出（平成27年4月14日付滋文保協局第719号『埋蔵文化財（貴生川遺跡）の調査にかかる見積書の提出について』）、採用決定（平成27年4月20日付甲都計第30号『採用決定通知』）、契約の締結（平成27年4月23日付委託番号平成27年度第169号貴生川遺跡第3次発掘調査業務委託契約書・平成27年4月20日付滋文保協局第719号『埋蔵文化財（貴生川遺跡）の発掘調査について（報告）』）を経て、整理調査に着手した（『平成27年4月24日付『委託番号平成27年度第169号貴生川遺跡第3次発掘調査業務委託着手届』）。

平成27年度の整理調査は、出土した遺物を対象として、台帳の作成・選別、注記、実測・拓本、実測図の製図を実施した。なお、年度途中で、整理調査期間の変更を行った（平成27年12月25日付甲歴文第466号『貴生川遺跡発掘調査の遺物整理調査実施に伴う契約変更について（依頼）』・平成28年1月5日付滋文保協局第719号『埋蔵文化財（貴生川遺跡）の遺物整理調査の実施に伴う契約変更について』）。そして、3月に調査を終了した（平成28年3月23日『業務完了報告書』）。

平成28年度整理調査 平成28年度の整理調査は、見積徴取（平成28年3月3日付甲都計第421号『委託の見積徴取について（通知）』）、見積書提出（平成28年3月17日付滋文保協局第601号『平成28年度第47号貴生川遺跡第3次発掘調査業務委託にかかる見積書の提出について』）、採用決定（平成28年3月25日付甲都計第471号『採用決定通知』）、契約の締結（平成28年4月1日付委託番号平成28年度第47号貴生川遺跡第3次発掘調査業務委託契約書・平成28年3月25日付滋文保協局第601号『埋蔵文化財（貴生川遺跡）の整理調査について』）を経て、整理調査に着手した（平成28年4月1日付滋文保協局第601号『委託番号平成28年度第47号貴生川遺跡第3次発掘調査業務委託着手届』）。そして3月に調査を終了した（平成29年3月21日付滋文保協局第601号『業務完了報告』）。

平成28年度の整理調査は、出土した遺物の写真撮影、理化学的分析、保存処理、実測図版編集、写真図版編集、遺構を対象とした原因作成、実測図製図、実測図版編集、写真図版編集を行ったのち、報告書の執筆・校正・刊行、成果物の収納・登録作業を実施した。



第5図 調査区グリッド配置図

第4節 遺構・遺物の報告方法について

遺構の報告について 遺構は、遺物が出土していることや、構造物・掘立柱建物の付属する区画溝・土坑などその他特殊なものを対象として記載を行うこととした。また、時期認定については、遺物が出土していないものや出土遺物が小片であるため時期の絞り込みができないものは本文中に記載しない場合がある。

抽出方法について 遺物は、口縁部・底部・高台部が1/3以上残存するものを基準として抽出を行っている。ただし、遺構の性格（建物を構成するピット等）、希少器種などは必要に応じて小片も抽出している。

年代観について 出土している遺物の年代観は主に下記の文献を参照した。

- ・田辺昭三（1983）『須恵器大成』角川書店
- ・小森俊寛（1995）『京から出土する土器の編年の研究』真陽社
- ・中島和彦・佐藤重聖（2014）『南都出土中近世土器資料集』奈良市教育委員会
- ・尾上実・森島康雄・近江俊秀（1995）『瓦器碗』『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- ・近江俊秀（1991）『大和型瓦器碗の編年と実年代の再検討』『古代文化』43号 古代学協會
- ・川越俊一（1983）『大和地方出土瓦器をめぐる二、三の問題』『文化財論叢』
- ・土岐市教育委員会・財団法人土岐市埋蔵文化財センター（2002）『元屋敷陶器窯跡発掘調査報告書』
- ・中野晴久（1995）『中世陶器（常滑・渥美）』『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- ・畑中英二（2003）『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版
- ・福田典明（2006）『伊賀地域における瓦器に関する覚書』『中近世土器の基礎的研究』XX 日本中世土器研究会
- ・藤澤良祐（2008）『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- ・山田猛（1986）『伊賀の瓦器に関する若干の考察』『中近世土器の基礎的研究』II 日本中世土器研究会
- ・山本信夫（1995）『中世前期の貿易陶磁』『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- ・横田賢次郎・森田勉（1978）『大宰府出土の輸入陶磁器について』『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館

【参考文献】

- ・甲賀市教育委員会（2010）『甲賀市埋蔵文化財調査年報 平成20年度分』甲賀市文化財報告書第16集
- ・甲賀市教育委員会（2011）『甲賀市埋蔵文化財調査年報 平成21年度試掘調査 宮町遺跡第38次・第39次調査』甲賀市文化財報告書18集
- ・甲賀市教育委員会（2012）『甲賀市埋蔵文化財調査年報 平成22年度試掘調査』甲賀市文化財報告書第19集
- ・甲賀市教育委員会（2014）『平成24年度 市内遺跡発掘調査報告書』甲賀市文化財報告書第20集



第6図 調査区全体図

第4章 発掘調査の成果

発掘調査対象地は、市教委の試掘調査結果に基づいて決定されている。調査地点は柚川右岸の河岸段丘面に位置し、調査前の現状は田畑地であった。調査区設定は、旧の田畑の区画を基準に設定している（第3・4図）。最も北側がT1、その南西側をT2・3とし、その南東側をT4・5とした。それぞれの調査対象面積はT1が1,470㎡、T2が1,530㎡、T3が1,850㎡、T4が1,620㎡、T5が2,096㎡で、合計8,566㎡となる。

なお、調査区全体に北東—南西をA～X、北西—南東を-10～14の624グリッドを設定し（第5図）、遺物包含層、溝等の遺物出土地点を限定するのに使用した（表2～18：遺物観察表）。

第1節 T1の調査成果（第7～13図）

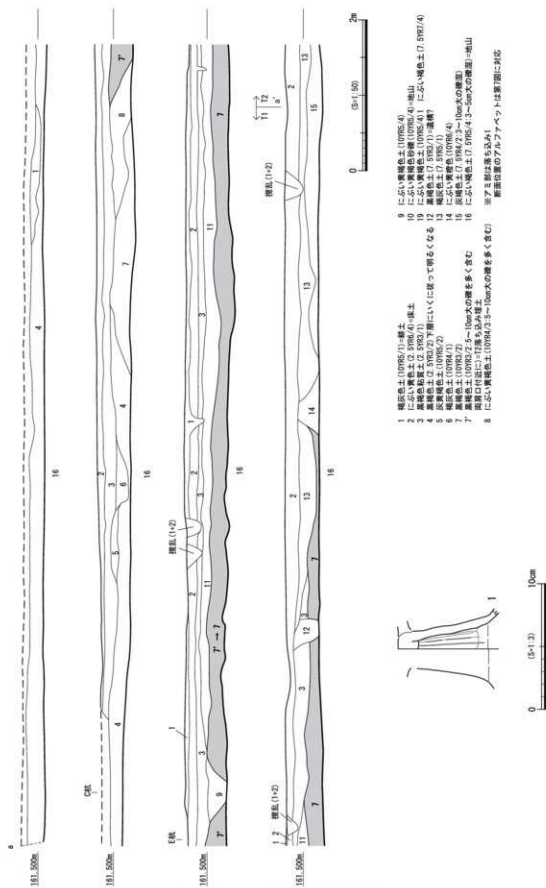
T1は調査対象地の中で最も北側に位置する調査区である。北東—南西約43m、北西—南東24.5～39mで面積は1,470㎡である。当初は調査区の北西側幅約5mは調査対象地外であったが、調査過程で遺構が調査区外に伸びていることが判明したため、市教委と協議を行い拡張して調査を行った。

基本層序（第8図）は耕土、床土以下、黒褐色粘質土、黒褐色土もしくは灰褐色土（3～10cm大の礫混じり）、にぶい褐色土（3～5cm大の礫混じり：地山）である。遺構は地山面で検出している。調査区の南側隅付近で東西方向に黒褐色土の落ち込みを検出している。この落ち込みは包含している遺物から中世以降に形成されたものと判断される。なお、落ち込みの詳細は、遺構の大部分が検出されているT2で詳述することとする。遺構検出面は標高161.1m～161.4mで調査区の南西側に向かって緩やかに高くなっている。遺構の分布状況はまばらであるが、調査区の北東側、南西側にやや集中している様子がうかがわれる。主な遺構は掘立柱建物、土坑、ピット等である。遺構の主な埋土は黒褐色～灰褐色土である。

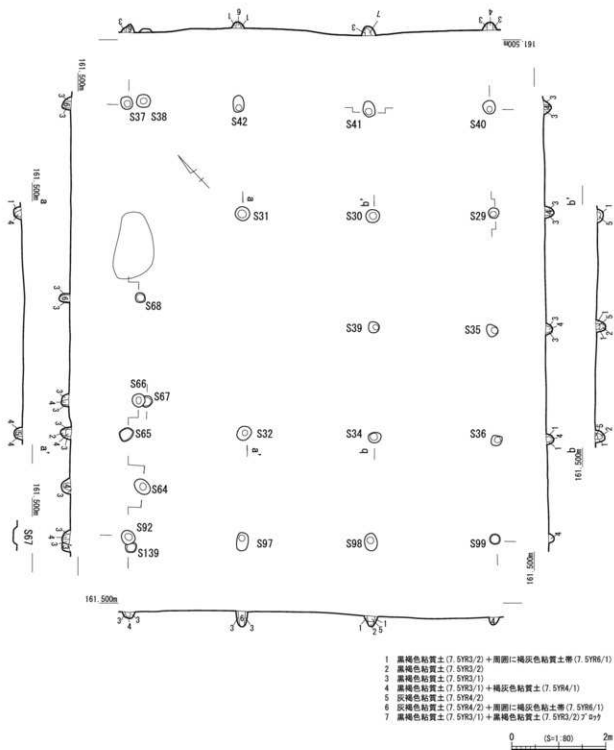
重機掘削時に表土中から1が出土している。古式土師器の高杯の脚部である。器表面の摩滅が著しいため調整は確認できない。

1. 掘立柱建物

掘立柱建物SB1（第9図・図版4～6・7） 調査区の東側で掘立柱建物SB2の南西側で検出された北西—南東3間（約7.8m）、北東—南西4間（約9.2m）の総柱の掘立柱建物である。平面積は71.76㎡である。掘立柱建物SB2と柱筋をおおむね揃えている。建物の主軸はN43°E方向で、柱間は北西—南東が2.4m、2.8m、2.6m、北東—南西が2.2m、2.4m、2.4m、2.2mである。建物内で柱筋は通っているが、柱間にはばらつきがみられる。柱穴は直径20～25cmの円形で、深さにややばらつきが認められるが、遺構検出面から15～25cmを測る。柱痕が確認される柱穴が多く、柱痕は直径15cm前後である。埋土は掘方、柱痕ともに黒褐色粘質土で、柱痕の周囲に褐灰色粘土の帯が確認できた。



第8図 T1 南東壁土層断面図



第9図 T1 掘立柱建物SB1

遺物はS32・34・38・40～42・64・92・97から土師器片、S66から瓦器片と図化できない細片が出土している。

時期は出土している遺物が少量・小片であるため限定することができないが、12～13世紀であると考えられる。

掘立柱建物SB 2（第10図・図版6・8） 調査区の北東付近、掘立柱建物SB 1の北東側で検出された北西—南東2間（約4.4m）、北東—南西4間（約8.2m）の総柱の掘立柱建物である。平面積は36.08㎡である。掘立柱建物SB 1と柱筋をおおむね揃えている。建物の主軸はN42° E方向で、柱間は北西—南東が2.2m、2.2m、北東—南西が2.0m、2.2m、2.0m、2.0mである。建物内でおおむね柱筋が通っているが、柱間はばらつきがみられる。また、建物を構成すると考えられる柱穴の周辺に集中して小穴が検出されていることから、建て替えを行っている可能性がある。柱穴は直径20～25cmの円形で、深さにややばらつきが認められるが遺構検出面から10cm前後と浅い。柱痕はほとんど確認できなかった。埋土は黒褐色粘質土である。

遺物はS21・71・73から土師器片、S25から図化できない土師器の皿の細片が、S24から5の瓦器の椀、S223から4の土師器の皿が出土している。5は内外面ともミガキを確認できる。また、直接建物を構成していないS72からは瓦器2・3が出土している。2は皿である。口縁部を強くナデ、端部を摘み上げている。底部内面には平行線状の暗文が施されている。3は椀で全体の摩滅が著しい。高台部は低い断面逆三角形である。

時期は建物から直接出土している遺物や建て直しに伴う可能性のある小穴S72から出土している遺物から12世紀後半と考えられる。

掘立柱建物SB 3（第11図・図版8） 調査区の南側で検出された北東—南西2間以上（約3.8m以上）、北西—南東1間以上（約1.8m以上）の掘立柱建物である。調査区外に延びている。落ち込み1との平面的な切りあい関係があるが、落ち込み1の埋土と建物を構成する柱穴の埋土が非常に類似していることから、上面で確認できなかった可能性があり、前後関係は明らかにできない。建物の主軸はN54° E方向で、柱間は北東—南西が1.9m、1.9m、北東—南西が1.8mである。建物内でおおむね柱筋がとおり、柱間は1.8～1.9mとまとまりがみられる。柱穴は直径、長軸20～25cmの円形もしくは楕円形で、深さは遺構検出面から15cm前後と浅い。柱痕はほとんど確認できなかった。埋土は黒褐色粘質土である。

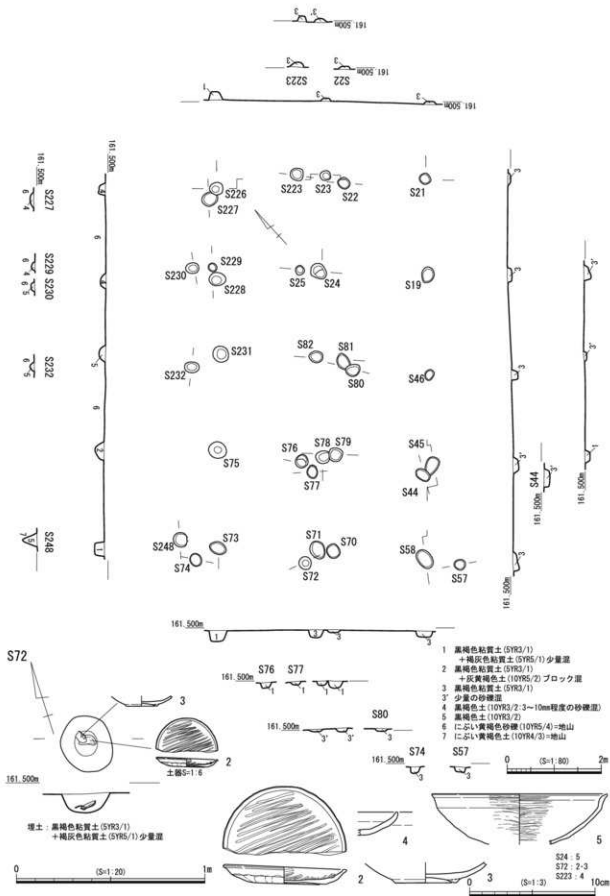
遺物は出土していない。そのため時期は不明である。

2. 土坑

S 1（第7・11図・図版10） 調査区の東側隅で検出された土坑である。一辺約1.4mのやや不整な隅丸方形で、深さは最深部の中央付近で遺構検出面から21cmを測る。断面形は逆台形で、埋土は上層から褐灰色粘土（黒褐色土ブロック混）、褐灰色土、黒褐色土である。堆積状況からすると、長期間開口していた可能性がある。

遺物は6～9の瓦器の椀である。すべて摩滅が著しく、内外面の暗文、ミガキが確認できない。5の高台は逆台形を呈しており、比較的高さがある。

時期は出土している遺物から12世紀後半代と考えられる。



第10図 T1 掘立柱建物SB 2

S15 (第7・12図・図版10) S15は調査区の東側、掘立柱建物SB1の北側、掘立柱建物SB2の東側で検出された土坑である。一辺約1mのやや不整な隅丸方形で、深さは最深部で遺構検出面から22cmを測り、断面形が逆台形を呈している。埋土は上層から黒褐色粘質土、黒色炭層、橙色土=焼土、褐灰色土である。地山面に被熱や焼け締まった状況は確認できない。

遺物は出土していない。そのため時期は不明である。

S43 (第7・12図・図版11) 調査区の東側、掘立柱建物SB2と平面プランで切りあい関係のある位置で検出された土坑である。掘立柱建物SB2を構成する柱穴と直接的な切りあい関係がないため、前後関係は不明である。直径約1mのやや不整な円形を呈し、深さは最深部で遺構検出面から11cmを測る。断面形は浅い皿状を呈している。埋土は、上層から黒褐色粘質土(炭を多く含む)、暗赤褐色土(明黄褐色土を少量含む)である。地山面に被熱や焼け締まった状況は確認できない。

遺物は出土していない。そのため時期は不明である。

S69 (第7・12図・図版11) 調査区の中央からやや北東、掘立柱建物SB2と平面プランで切りあい関係のある位置で検出された土坑である。長軸78cm、短軸55cmのやや不整な長方形で、深さは最深部で遺構検出面から10cmと非常に浅い。埋土は黒褐色粘質土(炭を多く含む)の単層である。地山面に被熱して焼け締まった状況は確認できない。

S154 (第7・12図・図版11) 調査区の中央からやや西側、土坑S214の北側で検出された土坑である。長軸1.15m、短軸0.7mのやや不整な長方形を呈している。深さは最深部で10cm程度と非常に浅い。埋土は上下二層で上層が黒褐色土(炭を多く含む)、下層が暗褐色土である。地山面に被熱や焼け締まった状況は確認できない。

遺物は出土していない。そのため時期は不明である。

S178 (第7・12図・図版9・12) 調査区の中央からやや南西側のT2に隣接する地点で検出された土坑である。落ち込み1に切られている。この土坑の周辺は、広い範囲で地山が硬化していることが確認された。長軸約1.4m、短軸約1.2mのやや不整な長方形を呈し、周囲が溝状に凹凸が検出され、中央やや東寄りでピット状の掘り込みが確認できた。土坑全体の掘り込みは非常に浅く、ピットのみが大きく深く掘りこまれている。埋土は上層から褐灰色粘質土、灰黄褐色粘質土である。床等の可能性がある硬化面の存在からも土坑S187と共に堅穴建物の一部を構成していた可能性がある。

遺物は図化できない土師器片が出土している。時期は不明である。

S187 (第7・12図・図版9・12) 調査区の中央からやや南西側、土坑S178の北側で検出された土坑である。落ち込み1に切られている。この土坑の周辺は、広い範囲で地山が硬化していることが確認された。一辺約1mのやや不整形な方形で、深さは最深部で4cm程度しかない。埋土は黒色炭の単層である。地山面が焼け締まっている。床等の可能性がある硬化面の存在からも土坑S178と共に堅穴建物の一部を構成していた可能性がある。

遺物は出土していない。そのため時期は不明である。

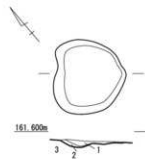
S214 (第7・11図・図版13~17) 調査区の西側のT2に近い地点で検出された木棺墓である。長辺が約2.1m、短辺が約1.4mの長方形の掘方で、底面は逆凸型を呈している。一段下がって

土坑S15



- 1 黒褐色粘質土 (7. SYR3/1) 少量の炭泥
- 2 黒色皮層 (7. SYR2/1)
- 3 緑灰色土 (7. SYR4/1)
- 4 褐色土 (7. SYR5/6) = 粘土
- 5 緑灰色土 (7. SYR4/1) 1cm ~ 拳大の砂礫混入 = 地山

土坑S43



- 1 黒褐色粘質土 (SYR3/1) 炭を多く含む
- 2 暗赤褐色土 (SYR3/2) + 明黄褐色土 (10YR7/6) 少量含む
- 3 灰褐色土 (7. SYR5/2) 拳大の礫を含む = 地山

土坑S69



- 1 黒褐色粘質土 (SYR3/1) 炭を多く含む
- 2 灰褐色土 (7. SYR5/2) 拳大の礫を含む = 地山

土坑S178



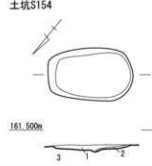
- 1 緑灰色粘質土 (10YR4/1)
- 2 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2)
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
- 4 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) + 黒褐色土 (10YR3/1) ブロック混で汚い 非常に硬くしまっている = 地山

土坑S187



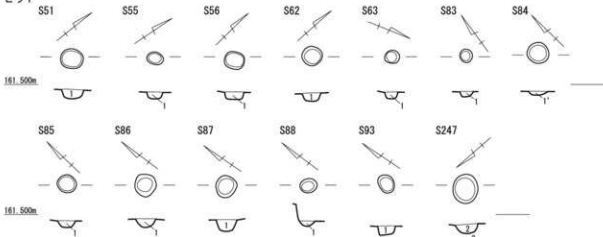
- 1 黒色土 (10YR2/1) = 炭層 + 明褐色土 (7. SYR5/6) ブロック混
- 2 明赤褐色土 (SYR5/6) 使われている しまっている = 地山

土坑S154



- 1 黒褐色土 (2. SYR3/1) 炭を多量に含む
- 2 暗褐色土 (7. SYR3/4) やや粘質
- 3 褐色砂礫 (7. SYR4/3) = 地山

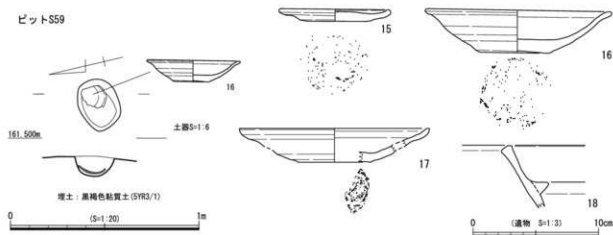
ピット



- 1 黒褐色粘質土 (SYR3/1)
- 1' 少量の砂礫混
- 2 黒褐色土 (10YR3/2)
- 3 にぶい黄褐色砂礫 (10YR5/4) = 地山

0 (S=1:50) 2m

第12図 T1 土坑S15・43・69・154・178・187、ピット



第13図 T1 ビットS59

る部分に木棺を設置していたと考えられる。ただし、断面観察では木棺の痕跡は確認できなかった。底部までの深さは、遺構検出面から36cmを測る。埋土は上層から黒褐色土、黒褐色土(にぶい黄褐色土ブロック混)、にぶい黄褐色砂混じり土である。主軸はN57°E方向である。

遺物は10～13の土師器の皿と14の白磁の碗が出土している。10～13の土師器の皿は土坑の西側隅に完形でまとまって出土しており、なおかつ墓墳の斜面に折り重なっている。また、14の白磁碗は土坑の北東側に横位で口縁部の一部が欠けた状態で出土している。なお、欠損部は取り上げたときに下面で出土した。これらの遺物出土状況は、木棺の上に置かれていた副葬品が、木棺が朽ちて崩壊した状況と推定される。10～12は口縁端部をヨコナデにより外反させている。13は口縁端部のヨコナデがあまり顕著ではなく、丸く収めている。10～13は総じて器壁が厚く、重量感がある。14は軸が非常にくすんでおり、全く光沢感がない。高台付近は露胎している。胎土はやや黄味がかかった色調で、やや軟質の印象をうける。

時期は出土した遺物から12世紀後半代と考えられる。

3. ビット

調査区の東側、特に掘立柱建物SB1・2周辺では建物を構成していないビットが多数検出されている(第7・12図)。それらは直径10～35cm程度の円形を呈しており、深さは遺構検出面から15cm前後のものが多く、埋土は黒褐色土もしくは黒褐色粘質土で、一部砂礫が混じる。

遺物はS51からは図化するることのできない土師器の細片が、S20から18の土師器の羽釜が出土している。口縁部片で、内外面ともに剥離が著しい。外面にスガが付着している。

S59(第7・13図・図版9) 調査区の中央からやや北東寄り、掘立柱建物SB1の北西側、掘立柱建物SB2の南西側で検出されたビットである。長軸27cm、短軸20cmのやや不整な楕円形で、深さは遺構検出面から12cmを測る。断面形は半円形を呈し、埋土は黒褐色粘質土である。

遺物は15～17の土師器の皿が出土している。16は平面東側の底面に近い位置で、正位で出土している。15は非常に浅い形状を呈し、底部中央に糸切り痕を確認できる。同様に16・17はやや深手で杯に近い形状をしている。ともに底部に糸切り痕が残る。

時期は出土した遺物から11世紀後半から12世紀前半代と考えられる。

第2節 T2の調査成果(第14~26図・図版18・19)

T2は調査対象地の中で北西側に位置する調査区である。北東—南西約33m、北西—南東39~51mで面積は1,530㎡である。T1同様、当初は調査区の北西側幅約5mは調査対象地外であったが、調査過程で遺構が調査区外に延びていることが判明したため、市教委と協議を行い、拡張して調査を行った。

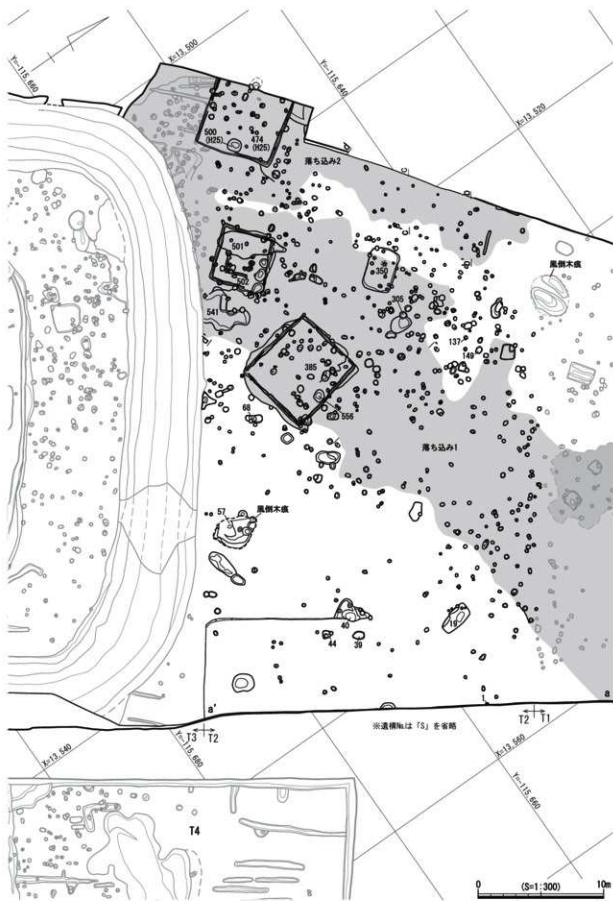
基本層序(第15図)は耕土、床土以下、黒褐色粘質土、黒褐色土もしくは灰褐色土(3~10cm大の礫混じり)、にぶい褐色土(3~5cm大の礫混じり:地山)である。遺構は地山面で検出している。調査区の中央で東西方向に落ち込み1(埋土:黒褐色土)、調査区の北西端で落ち込み2(埋土:灰黄褐色土)を検出している。遺構検出面は標高161.2m前後である。遺構の分布状況は調査区の北西側にやや集中している様子がうかがわれる。主な遺構は、落ち込み、堅穴建物、土坑、ピット等である。遺構の主な埋土は黒褐色~灰褐色土である。

重機掘削時に表土中から19~21が出土している。19は山茶碗の底部である。高台端部は引き剥がし痕が認められ、高台内面には糸切り痕が残る。見込み部分には重ね焼き痕を確認できる。20は土師器の皿で完形に近い遺存状況であるが、全体に摩滅が著しい。21は瓦器の碗で全体に摩滅が著しく、ミガキ等は確認できない。高台は逆三角形を呈し、比較的しっかりしている。

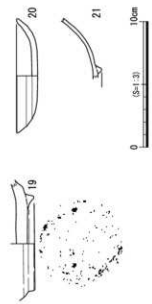
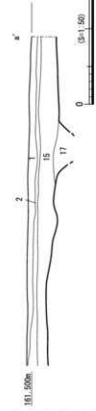
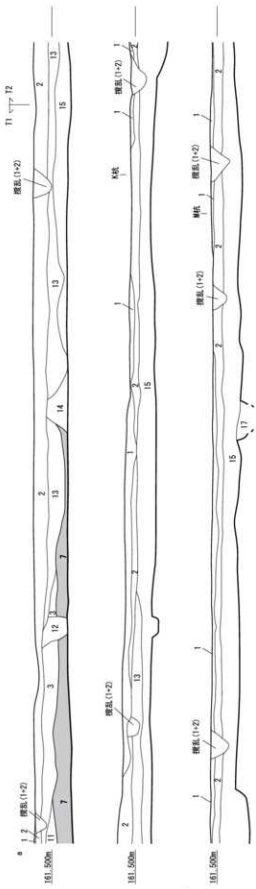
1. 落ち込み

落ち込み1(第14・16・17図) 調査区の東端から西端で検出された落ち込みである。埋土は黒褐色土で、平面検出では肩口があまり明瞭ではなく出入りが激しい。幅は10~15mを測る。深さはT1-2の南東壁では遺構検出面から10~15cm、調査区中央付近で遺構検出面から約10cmを測る。堅穴建物S502付近では建物埋没後の窪みが確認でき、その窪み周辺から遺物は多く出土している。

遺物は22~47が出土している。下層で堅穴建物S502が検出された地点を中心に出土している。窪地状であったのだろう。22~29は弥生土器である。22・23は受口状口縁の甕の口縁部で外面にハケ状工具による連続刺突文が施文されている。24は壺の口縁部で、外面には縦方向のミガキを確認できる。25は壺の口縁部である。摩滅が著しく、調整が確認できない。26・28は底部片である。ともに器面の摩滅が著しい。26は非常に胎土が粗い。27は壺の口縁から頸部である。やや表面が摩滅気味であるが、端部と頸部下外部面にハケ状工具による連続刺突文の施文を確認できる。器表面の調整は確認できない。29は甕の体~底部片である。非常に粗いハケ調整で、外面にススが附着している。31~43は瓦器の碗である。全体に深手のプロポジションで、高台は逆三角形を呈した比較的しっかりしたものである。比較的遺存状態の良い37・39は、内外面とも丁寧なミガキ、見込みには連結輪状の暗文を施している。44・45は白磁の碗である。44は口縁部が玉縁状を呈する。胎土はややくすんだ白色で軸は薄い。45は高台部で、44と同一個体の可能性がある。46は信楽焼の播鉢で6条1単位の播目が比較的密に確認できる。47は土師器の羽釜で外面の一部にススを確認できる。



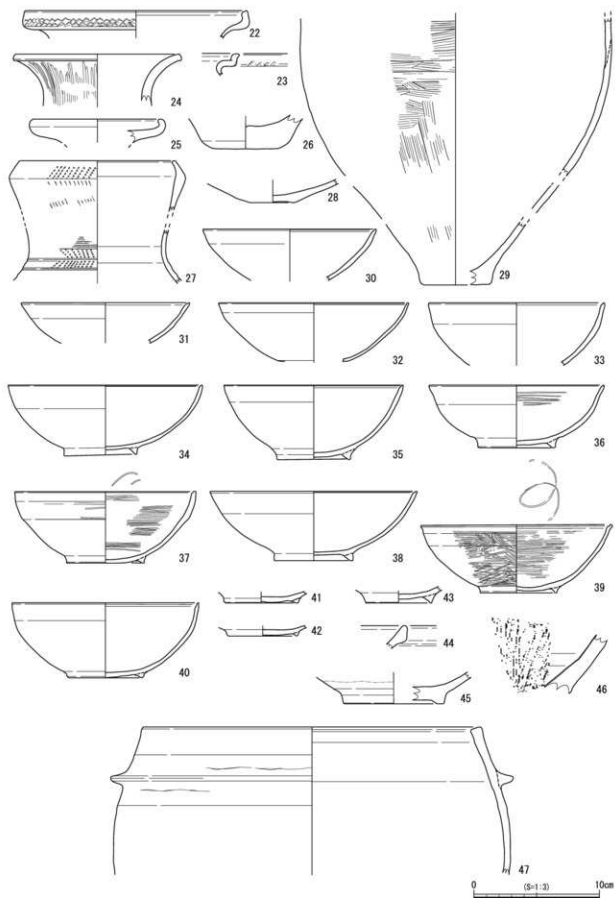
第14図 T2全体図



- 1 埋戻し土 (1095C/1)→静土
- 2 埋戻し土 (1095C/2)→静土
- 3 埋戻し土 (1095C/3)→静土
- 4 埋戻し土 (1095C/4)→静土
- 5 埋戻し土 (1095C/5)→静土
- 6 埋戻し土 (1095C/6)→静土
- 7 埋戻し土 (1095C/7)→静土
- 8 埋戻し土 (1095C/8)→静土
- 9 埋戻し土 (1095C/9)→静土
- 10 埋戻し土 (1095C/10)→静土
- 11 埋戻し土 (1095C/11)→静土
- 12 埋戻し土 (1095C/12)→静土
- 13 埋戻し土 (1095C/13)→静土
- 14 埋戻し土 (1095C/14)→静土
- 15 埋戻し土 (1095C/15)→静土
- 16 埋戻し土 (1095C/16)→静土
- 17 埋戻し土 (1095C/17)→静土

※数字は層番号のみ
断面位置を示すアルファベットは第14図に対応

第15図 T2 南東壁土層断面図



第17図 T2 落ち込み1出土遺物

時期は、出土遺物から大きく弥生時代中期と12世紀代の2時期にまとまる。遺構の性格上、最終埋没段階は12世紀末頃と考えておきたい。46は混入の可能性が高い。

落ち込み2（第14・16図） 調査区の北西端で検出された落ち込みである。調査区の西側で落ち込み1に切られている。埋土は灰黄褐色土で調査区内の検出した部分は肩口で、北西方向に深くなっている。

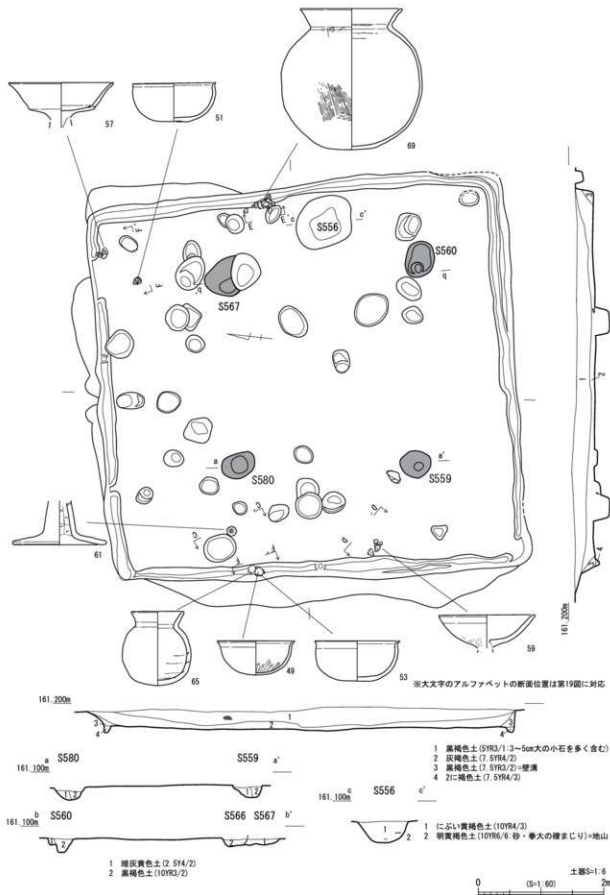
遺物は図化できるものはないが、土師器、瓦器片が出土している。落ち込み1との切りあい関係等から落ち込み1に先行するが、包含している遺物の内容が類似していることから時期差はあまり無い可能性が高い。

2. 竪穴建物

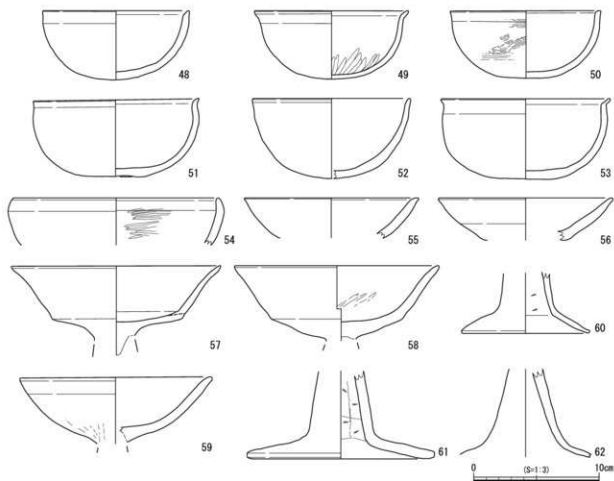
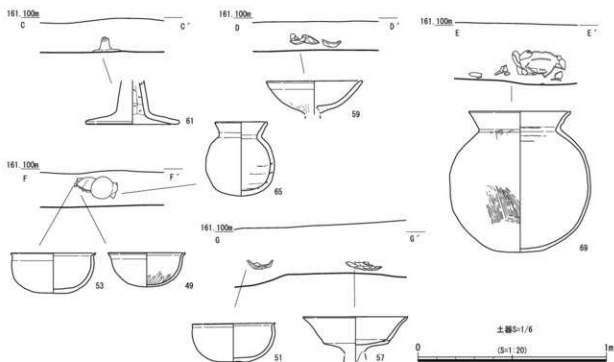
S385（第18～20図・図版23～27） 調査区の南西側中央、竪穴建物S502の東側で検出された竪穴建物である。落ち込み1に切られている。

東西約6m×南北6.5mの長方形を呈し、深さは遺構検出面から約40cmを測る。主軸はN11°Wである。埋土は上層から黒褐色土、灰褐色土である。西側から北側にかけての肩部は緩やかに落ち込みながら途中で垂直の掘り込みを確認できることから、埋没段階で肩部が崩れたことが分かる。また、埋土最上層の黒褐色土は、外側から中央に向かってレンズ状に堆積していることから、竪穴建物埋没後、その窪地に堆積した落ち込み1の埋土である可能性が高い。それは、ある程度原位置を保っている遺物が壁面付近に集中している状況から裏付けられる。壁際には幅10～15cm、床面からの深さ8cm程度の壁溝が巡っている。埋土は黒褐色土である。なお、北側に壁溝が切れている部分があることから、この付近に入口があったと考えられる。床面はほぼ平坦で、貼り床は確認できなかった。床面ではピットが複数検出されているが、上層から切り込んでいる遺構か否かは判断できなかった。その中でS580・559・560・567を主柱穴と判断した。長軸40cm前後の不整な楕円形で埋土は暗灰黄色土が基本である。深さは床面から10～20cmである。また、東側中央で検出されたS556は、貯蔵穴と判断される。長軸約1m、短軸約0.7mの不整な楕円形で、深さ約30cm、断面形が半円形を呈する。埋土はにぶい黄褐色土の単層である。

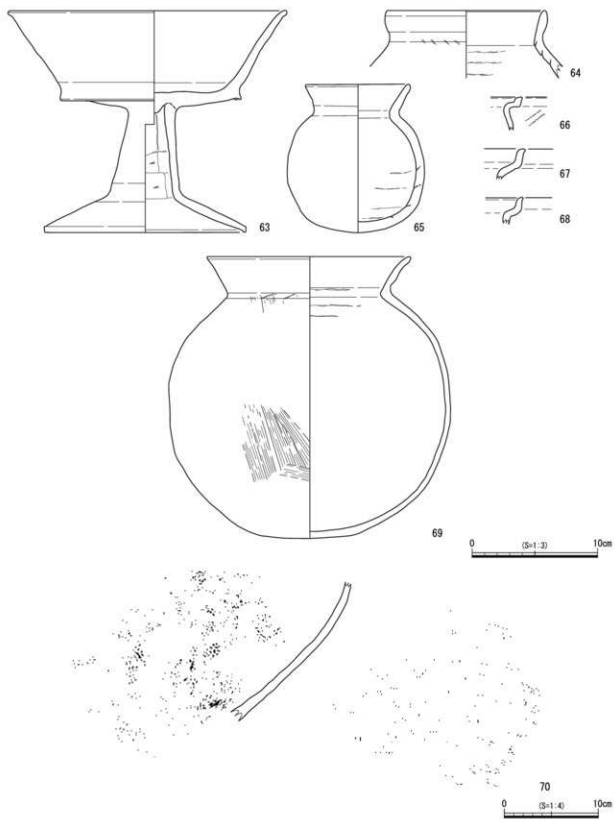
遺物は壁際から原位置を保った状況で出土し、出土レベルも床面直上のものが多い。48～70が出土している。48～54は土師器の鉢である。端部を摘み出して外反させる個体があるなど、個体差が一定認められるが、サイズはおおむねそろっている。器表面が荒れている個体が多いため調整法が不明瞭であるが、49は内面に放射状のミガキ、50は外面にハケ目を確認できる。53と49は重なって出土している。54は他と胎土、器形、サイズが異なる鉢である。外面は摩滅、剥離しているため調整が不明瞭であるが、内面にミガキが認められる。55～63は土師器の高杯である。杯部下半に稜を持つ57・58・63、持たない59がある。全体に器表面が荒れているため調整法を確認し難いが、58は杯部内面に、59は外面の脚接合部にミガキを確認できる。64・65は壺である。共に内面に粘土紐痕が明瞭に確認できる。65は49・53の脇で出土している。66～68は受口状口縁の壺の口縁部である。出土した層位が上層の黒褐色土であることから落ち込み1に包含していた遺物である可能性が高い。69は土師器の甕である。細かなハケ調整を確認できる。70は須恵器の甕の体部である。建物の中央付近の黒褐色土層から出土していることから66～68同様、落ち込み1



第18図 T2 竪穴建物S385



第19図 T2 竪穴建物S385出土遺物1



第20図 T2 竪穴建物S385出土遺物2

に包含されていた遺物であると判断した。

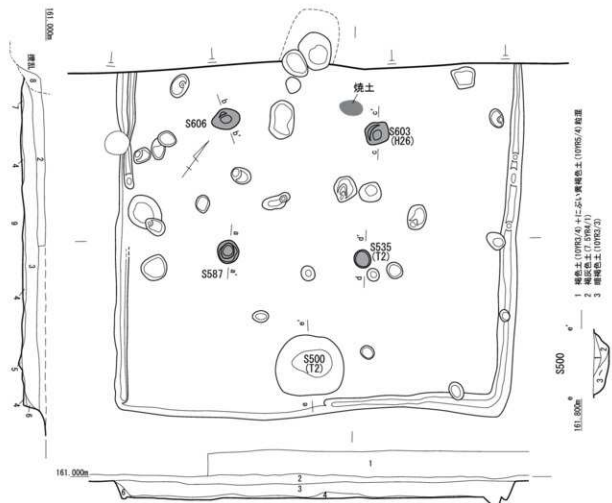
時期は出土している遺物から5世紀後半代と考えられる。

S474 (第21図・図版28・29) 調査区の西側端、竪穴建物S502の北西で検出された竪穴建物である。落ち込み2の下層で検出されている。また、T2とT3に跨るような形で検出されているが、T2で詳述することとする。東西約6.4m×南北5.6m以上で、北西側は後世の道路工事に伴う土取りで削平されている。深さは遺構検出面から約25cmを測る。主軸はN35°Wである。埋土は上層から黒褐色土(マンガン混)、黒褐色土、暗灰褐色土である。埋土最上層の黒褐色土(マンガン混)は、南東から北西に向かって緩やかに落ちていくラインを確認できることから、竪穴建物埋没後、その窪地に堆積した落ち込み2に伴う堆積層である可能性が高い。壁際には幅10~15cm、床面からの深さ5cm程度の浅い壁溝が巡っている。埋土は黒褐色土(灰黄褐色土ブロック混)である。なお、南西側に壁溝が切れている部分があることから、この付近に入口があったと考えられる。床面はほぼ平坦で、貼り床は確認できなかったが、最下層の暗灰褐色土が非常に薄い堆積であることから貼り床である可能性が考えられるが、硬化していたり、締まっている状況は確認できなかった。北西側で長軸約40cm、短軸約20cmの範囲で焼土が確認されている。ただし、床面が固く焼けしまった状態ではなかった。炉等の可能性がある。床面ではピットが複数検出されているが、上層から切り込んでいる遺構か否かは判断できなかった。その中でS537・587・603・606が、他のピットと比較すると深さもより主柱穴と判断した。直径35cm前後の不整な円形で、埋土はにぶい黄色土が基本である。深さは床面から35~40cmを測る。また、南東側中央で検出されたS500(T2)は、貯蔵穴と判断される。長軸約1.1m、短軸約1mの不整な楕円形で、深さ約25cm、断面形が逆台形を呈する。埋土は上層から褐色土(にぶい黄褐色土粒混)、褐色土、暗褐色土である。

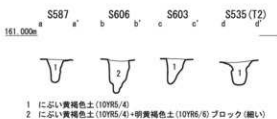
遺物は71・75~85が出土している。遺物の遺存状態は総じて悪い。71・75~77は土師器の高杯である。すべて器表面が摩擦気味で調整法が確認できない。78~80は弥生土器の受口状口縁甕の口縁部である。78は外面頸部に、79は受け部外面にそれぞれハケ状工具による刺突文が施されている。80は受け部外面に楕円形の浮文が張り付けられている。81は土師器の受口状口縁甕の口縁部である。82は土師器の皿で非常に厚手で、指頭圧痕が目立つ。口縁部内面の一部にススが付着している。83~85は鉄器で、83は鎌の基部、84は鎌の茎部、85は刀子の刃部である。

時期は出土している遺物の遺存状態が悪いことに加え、原位置を保ったものが確認できないことから確定しがたいが、78~80・82が上層の落ち込み2の混入とみるならば、S385と同時期の5世紀後半代と考えることが妥当である。

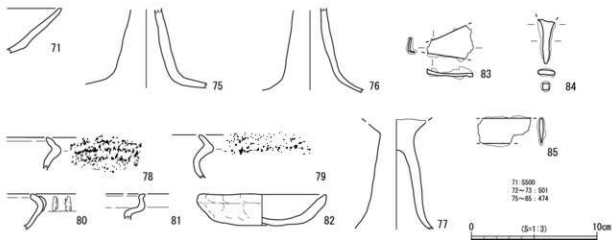
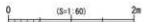
S502 (第22~24図・図版23・30~36) 調査区の西側、T3と接する位置、竪穴建物S385の西側、竪穴建物S474の南東側で検出された竪穴建物である。落ち込み1および土坑S501に切られている。土坑S501から土師器の高杯片(72~74)が出土している。竪穴建物は、東西約4.2m×南北4.5mとほぼ正方形の平面プランで、深さは遺構検出面から約20cmを測る。主軸はN42°Wである。埋土は褐色土である。落ち込み1の堆積層がS502周辺は非常に厚いことから、建物埋没後は窪地状を呈していたと考えられる。つまり、S502が埋没後窪地として残存していた部分に、落ち込み1が堆積したと考えられるのである。そのため平面プランの検出時は、境界が明瞭ではなく非



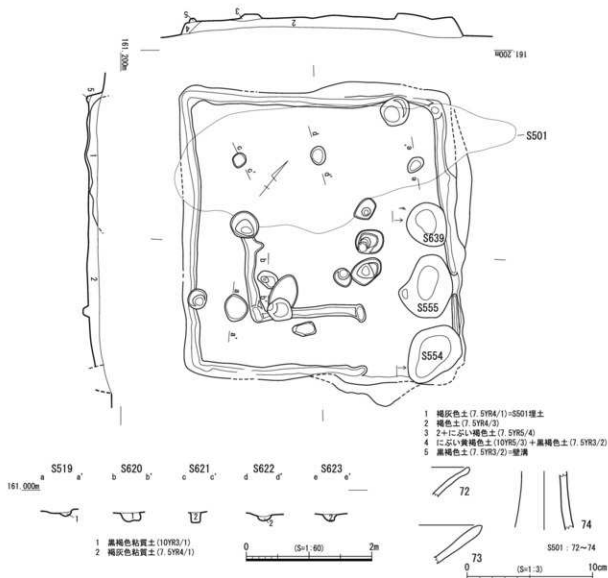
- 1 焼土 (10PR3/4) + にぶい黄褐色土 (10PR5/4) 敷置
 2 黄褐色土 (7. 5YR6/1)
 3 暗褐色土 (10PR3/2)



- 1 にぶい黄色土 (2. 5Y6/3) + 灰土
 2 黄褐色土 (10PR3/2: マンガン溜) = 中世の包含層 (薄ち込み?)
 3 黄褐色土 (10PR3/2) 堅穴埋土
 4 暗灰黄色土 (2. 5Y4/2)
 5 にぶい黄褐色土 (10PR4/3) = S500埋土
 6 黄褐色土 (10PR3/2) + 灰黄褐色土 (10PR4/2) ブロック溜
 7 暗色土 (7. 5YR5/6) = 灰土 灰溜か
 8 暗灰色土 (7. 5YR4/1) = 擾乱
 9 明黄褐色色砂まじり土 (10PR6/6) = 地山



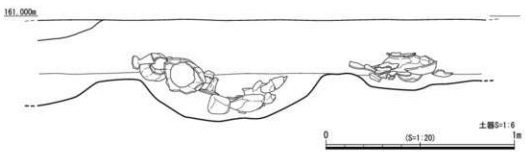
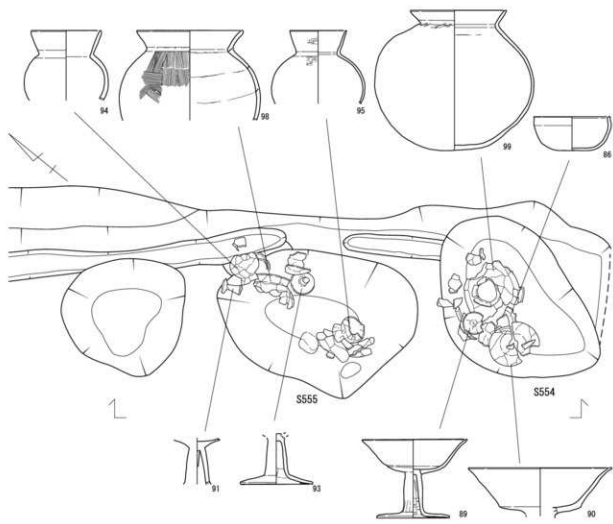
第21図 T2 堅穴建物 S474



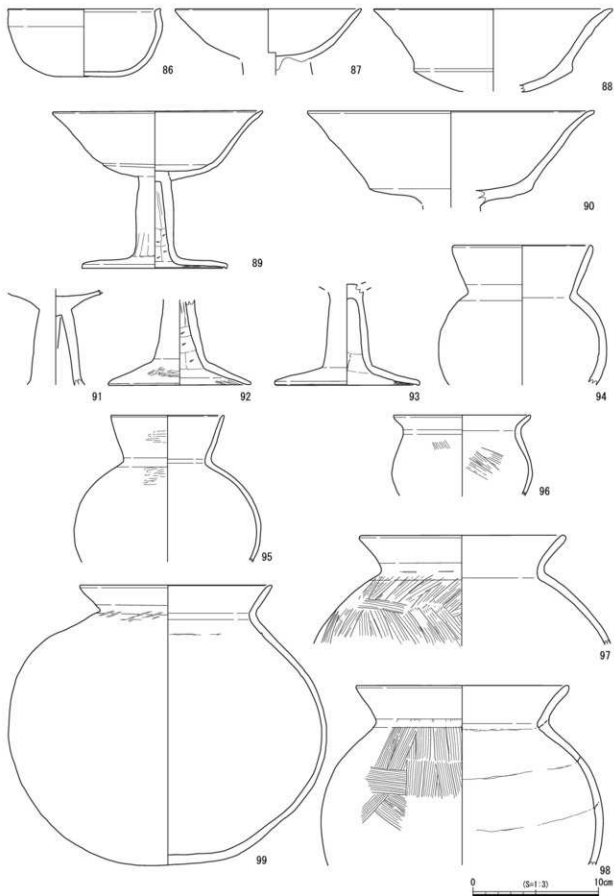
第22図 T2 竪穴建物S502

常に苦勞した。壁際には幅10~15cm、床面からの深さ5cm程度の浅い壁溝が巡っている。埋土は黒褐色土である。なお、南東側に壁溝が切れている部分があることから、この付近に入口があったと考えられる。床面はほぼ平坦で、貼り床は確認できなかった。床面ではピットが複数検出されているが、上層から切り込んでいる遺構か否かは判断できなかった。その中でS519・620・621・623が比較的しっかりしたピットであり、中央南寄りで検出した平面「L」字状の溝とあわせて何らかの構造物を構成していた可能性がある。溝の深さは床面から15cm程度である。

遺物は土師器86~99が出土している。86は鉢、87~93は高杯、94・95は壺、96~99は甕である。その多くが東側の壁際で検出されたS554・555で出土しており、貯蔵穴と判断される。S554は長軸約1m、短軸約0.7mのやや不整な楕円形で、深さは床面から10cm程度と浅い。埋土は黒褐色土(炭・焼土混)である。遺物は土師器の高杯(89・90)、鉢(86)、甕(99)が原位置で潰れた状態で検出された。S555は長軸1.05m、短軸0.7mの不整な楕円形を呈して、深さは床面から最



第23図 T2 竪穴建物S502内土坑S554・555遺物出土状況



第24図 T2 竪穴建物S502出土遺物

深部で25cmを測る。埋土は褐灰色土の単層である。遺物は比較的原位置を保った状況で出土した。土師器の高杯(91・93)、壺(94・95)、甕(98)が出土している。87の高杯は脚部との接続部に突起をつけて接続するタイプである。その接続部分で剥離している。89はほぼ完形であるが器表面が非常に荒れていて調整が確認できない。脚部裾内面にはハケ目を確認できる。92は裾部外面に横方向のミガキ、内面にはハケ目を確認できる。93も裾部内面にハケ目を確認できる。95は表面が非常に摩滅しているが、部分的に横方向のミガキを確認できる。体部下半にスス・炭化物が部分的に付着している。96は摩滅が著しいが、ハケ調整を確認できる。97は体部外面に羽状にハケ調整を行っている。98は内面に粘土紐痕が明瞭に確認できる。体部外面下半にススの付着が認められる。99は器面が全体的に摩滅しており調整を確認することができないが、体部外面下半にススの付着が認められる。

時期は出土遺物から、他の堅穴建物S385・474と同様5世紀後半代と考えられる。

3. 土坑

S19(図14・25) 調査区の東側で検出された土坑である。検出時は土坑墓の可能性も考えたが、完掘後は積極的に評価できる状況ではなかった。南北約2.5m、東西約1.2mの長方形を呈し、深さは最深部で約20cmを測る。埋土は主に黒褐色粘質土で、西側の肩口で褐色粘質土が認められる。遺物が出土しておらず、時期も不明である。

S39(第14・25図) 調査区の南東側、土坑S40の南東側、土坑S44の北東側で検出された土坑である。長軸が約85cm、短軸が約65cmのやや不整な楕円形を呈し、深さは15cmを測り、断面形は逆三角形を呈している。埋土は上層が黒褐色土、下層がぶい黄褐色土である。

遺物は土師器の細片が出土しているのみで、時期は不明である。

S40(第14・25図) 調査区の南東側で検出された土坑である。南東側は一部削平を受けており、全体像は不明である。現状では、約1.5m×約3mの三角形を呈し、中央付近が周辺に比べ深くなっている。最深部の深さは遺構検出面から25cmを測る。埋土は黒褐色土で一部に暗灰色粘質土が認められる。

遺物は土師器の細片が出土しているが、時期は不明である。

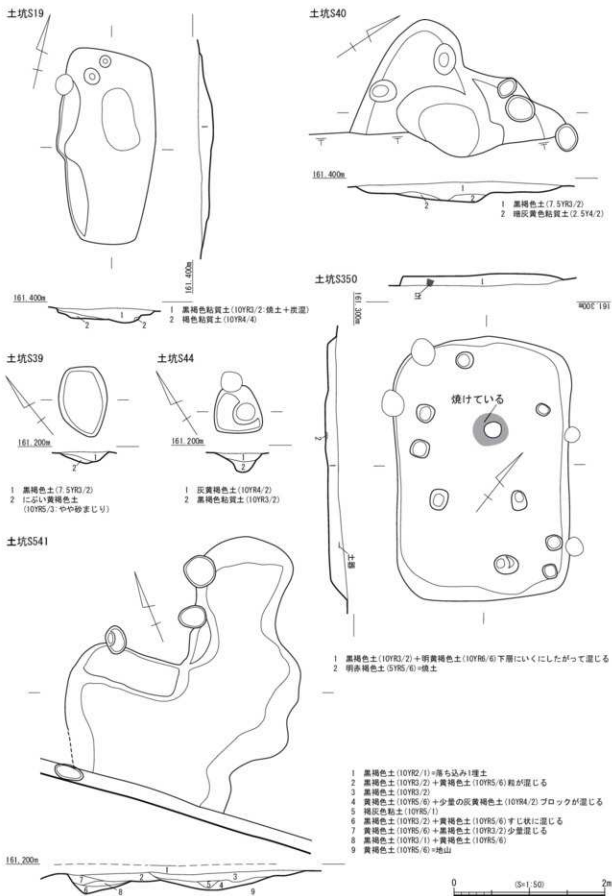
S44(第14・25図) 調査区の南東側、土坑S39の南西側、土坑S40の南側で検出された土坑である。一部別のピットに切られているが、約60cm×60cmの不整な三角形を呈している。深さは遺構検出面から28cmを測り、埋土は上層が灰黄褐色土、下層が黒褐色粘質土である。

遺物は土師器の細片しか出土していないが、一部に糸切り痕を確認できる底部が含まれることから、時期は11世紀後半から12世紀後半代の可能性がある。

S68(第14・26図) 調査区の中央西寄り、T3との境付近、堅穴建物S385の南側で検出された土坑である。長軸1.35m、短軸0.55mの楕円形を呈し、深さは遺構検出面から最深部で約20cmを測る。埋土は黒褐色土である。

遺物は106の土師器の甕が出土している。器面がやや摩滅気味であるが、ハケ目を確認できる。

S350(第14・25・26図・図版20・22) 調査区の北西側、堅穴建物S385の北側、堅穴建物S502の北東側で検出された土坑である。落ち込み1の下層で検出されている。長軸約3.5m、短軸約2.3m



第25図 T2 土坑S19・39・40・44・350・541

の隅丸長方形を呈している。断面形は浅い逆台形で、深さは最深部で遺構検出面から約15cmを測る。床面の中央やや北西寄りて焼土面が確認できた。用途は不明である。

遺物は土師器の細片が多いが、105の弥生土器の壺の頸部が出土している。ヘラによる刺突列点文、ハケによる斜格子文が施文されている。本遺構は落ち込み1に切られていることから、落ち込み1に帰属する遺物である可能性がある。

S541 (第14・25図・図版20) 調査区の西側端、堅穴建物S502の南側、堅穴建物S385の西側で検出された土坑もしくは溝である。落ち込み1の下層で検出されている。約3.5m×3.0mの不整形を呈し、深さは最深部で遺構検出面から約25cmを測る。土層断面の観察から土層のまとまりが見いだせる。最上層の単位は黒褐色土(図25第3層)、黄褐色土(少量の灰黄褐色土ブロック混:第4層)、次が黒褐色土(黄褐色粒混:第2層)、最下層のまとまりが黄褐色土(黒褐色土少量混:第7層)、黒褐色土(黄褐色土混:第8層)、黒褐色土(黄褐色土が筋状に混:第6層)である。

遺物は土師器の細片が多かったが、107の土師器の底部が出土している。非常に胎土が粗い。弥生時代の所産であると考えられるが、落ち込み1に切られていることから、混入の可能性もある。

4. ビット・その他

S1 (第14・26図) 調査区の東端で検出されたビットである。直径30cmの円形で、調査区外に半分延びている。深さは遺構検出面から8cm程度を測る。埋土は黒褐色土である。

遺物は101の弥生土器が出土している。101は端部を内側に屈曲させる口縁部を持つ壺の頸部で、櫛描きの横方向の直線文、振り幅の大きい波状文が施文されている。全体に摩滅気味で文様は鮮明ではない。時期は出土している土器から弥生時代中期と考えられる。

S57 (第14・26図) 調査区の南西側、T3と接する位置で検出された風倒木痕である。土層断面の観察から風倒木痕であると判断した。長軸約3m、短軸約5.5mのやや不整な楕円形を呈して深さは遺構検出面から30cmを測り、底面は凹凸が激しい。埋土は主に黒褐色土である。

遺物は102の弥生土器の受口状口縁部の口縁部である。全体に摩滅が著しく、文様は鮮明ではないが、櫛による刺突文が施文されている。時期は出土している土器から弥生時代中期である

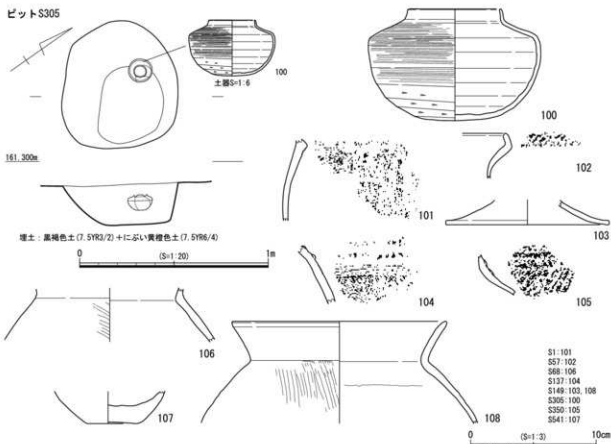
S137 (第14・26図) 調査区の北側、土坑S350の東側、ビットS149の西側で検出されたビットである。直径約30cmの円形を呈し、深さが遺構検出面から約15cmを測る。埋土は黒褐色土である。

遺物は104の弥生土器の壺の体部片である。肩部に刻目凸帯を巡らし、その下部に横走る櫛描き直線文、波状文を施文している。内面は摩滅が著しい。時期は出土している土器や周辺状況から弥生時代中期の可能性が高い。

S149 (第14・26図) 調査区の北側、ビットS137の東側で検出されたビットである。長軸が58cm、短軸が45cmのやや不整な楕円形を呈している。深さは遺構検出面より17cmを測り、埋土は黒褐色土である。

遺物は103の土師器の高杯、108の土師器の甕が出土している。103は全体が摩滅気味で調整は確認できない。108は体部内面に明瞭に粘土紐痕が残っている。外面は細かなハケ調整である。

時期は堅穴建物S385・502と同時期の5世紀後半代であると考えられる。



第26図 T2 ビットS305・その他ビット出土遺物

S305 (第14・26図・図版21) 調査区の中央から北東寄り、土坑S350の東側、竪穴建物S385の北側で検出されたビットである。直径約65cmの不整な円形を呈し、断面形は逆台形を呈している。埋土は黒褐色土（にぶい黄橙色土混）である。

遺物は100の須恵器の短頸壺が出土している。ビットの北西側において底面から7cm上方で、正位で出土している。焼成は、生焼け状態で非常に軟質である。そのため表面の摩滅が著しい。体部外面上半部にはカキ目、下半部はケズリである。6世紀後半から7世紀代と考えられる。

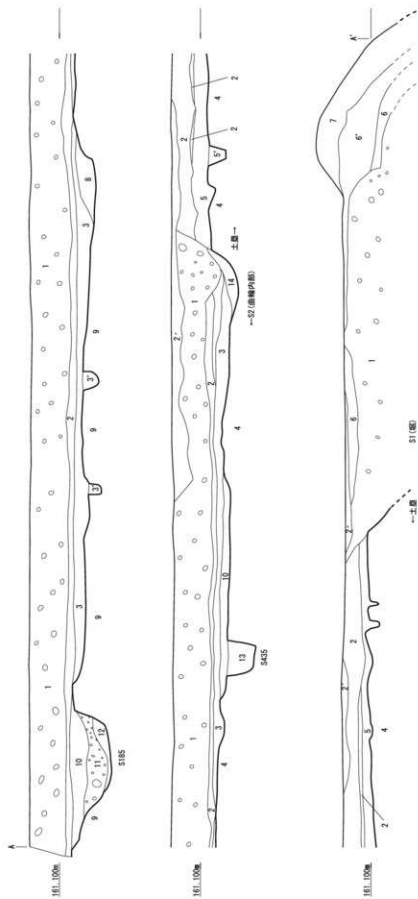
第3節 T3の調査成果 (第27～64図・図版37～40)

T3は調査対象地の中で最も北西側に位置する調査区である。北東—南西約50m、幅約25m、北西—南東約54m、幅約18mのL字状を呈し、面積は1,850㎡である。調査区の南西側は、もともと同一区画の水田であったものが、部分的に宅地化されている。

基本層序 (第28図) は耕土、砂礫、黄灰色土 (鉄分混じり: 旧床土)、黒褐色土、褐灰色土 (砂礫を多く含む: 地山) である。遺構は地山面で検出している。遺構検出面は標高161.1m前後である。調査区全体が半町四方の城館跡である。調査前はまったく想定されていなかった遺構で、城館の区画が旧の水田の区画に踏襲されていたと考えられる。そのため、調査区の外から内側に向かって堀、土塁、曲輪の順で検出されている。また、城館は曲輪部分を一段掘り下げているた



第27図 T3全体図



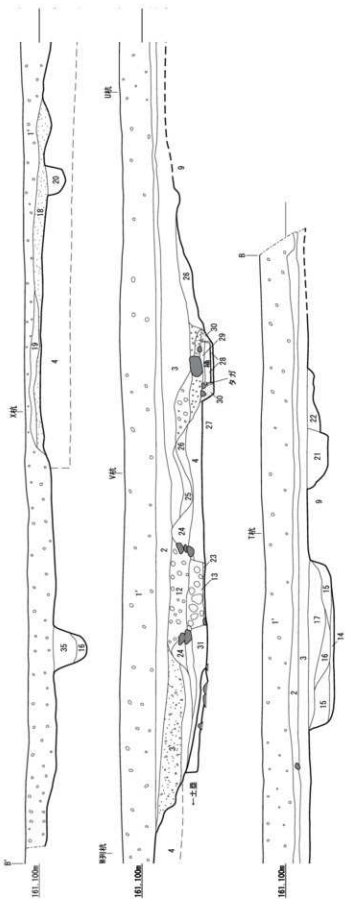
第28図 T3 南壁土層断面図

- | | | | |
|----|--|----|--|
| 1 | 黄灰色砂礫層(硬成土) | 7 | 緑灰色土(10%)(1)層礫層土 |
| 2 | 黄灰色土(2.5%) ⁽¹⁾ 黄まじり成土 | 8 | 紅成層成土(50%)(2)アロソック層 |
| 3 | 黄褐色土(10%) ⁽¹⁾ →緑灰色土(10%) ⁽¹⁾ 層 | 9 | 紅成層成土(50%)(2)アロソック層(赤褐色)を多く含む |
| 3' | 砂、礫を多く含む | 10 | 紅成層成土(7.5%) ⁽¹⁾ 12. 4/10層成土(赤褐色)を多く含む |
| 4 | 明黄褐色土(10%) ⁽¹⁾ →赤山層 | 11 | *(1→10)成土の層成土(赤褐色)を多く含む |
| 5 | 黄褐色土(10%) ⁽¹⁾ →落ち込み1層土(古溝→中世の包含層) | 12 | 明黄褐色土(10%) ⁽¹⁾ 層 |
| 5' | 粘土を多く含む | 13 | 明黄褐色土(10%) ⁽¹⁾ 層 |
| 6 | 粘土を多く含む | 14 | 緑灰色土(10%) ⁽¹⁾ →成層土 |
| 6' | 砂、礫を多く含む | | |

※断面位置のアルファベットは要訂正に対応

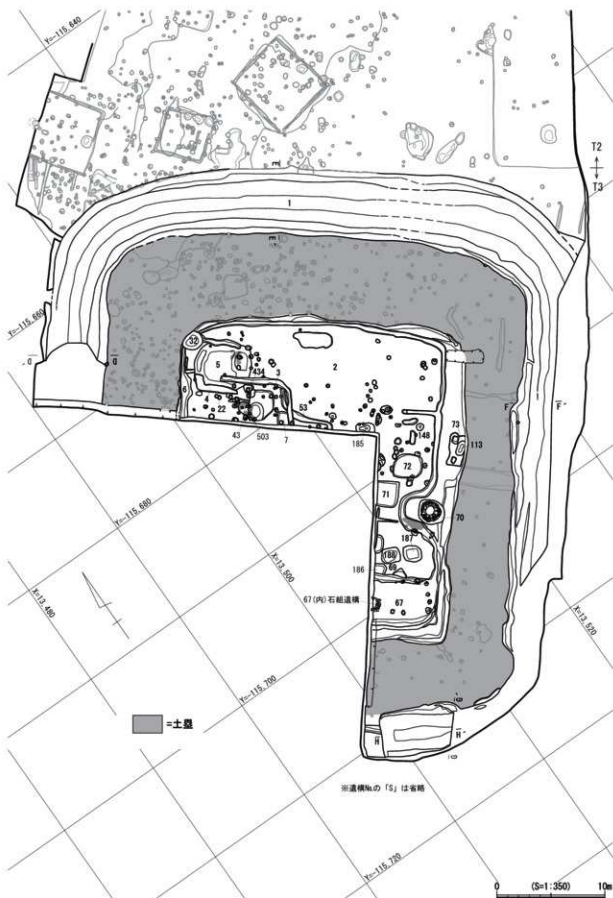


東壘土層断面図



- 1* 砂・礫の多量より小さい
 2 灰褐色土(10765/1)最上じり(凍土)
 3 灰褐色土(10765/1)凍土
 4 凍土を多く含む(凍土)
 5 灰褐色土(10765/6)-砂山層
 11 灰褐色土(10765/1)凍土
 12 灰褐色土(10765/1)凍土
 13 灰褐色土(10765/1)凍土
 14 灰褐色土(10765/1)凍土
 15 灰褐色土(10765/1)凍土
 16 灰褐色土(10765/1)凍土
 17 灰褐色土(10765/1)凍土
 18 灰褐色土(10765/1)凍土
 19 灰褐色土(10765/1)凍土
 20 灰褐色土(10765/1)凍土
 21 灰褐色土(10765/1)凍土
 22 灰褐色土(10765/1)凍土
 23 灰褐色土(10765/1)凍土
 24 灰褐色土(10765/1)凍土
 25 灰褐色土(10765/1)凍土
- 26 灰褐色土(10765/1)やや微分含む
 27 灰褐色土(10765/1)1-3cm次の小石を多く含む
 28 灰褐色土(10765/1)5-10cm次の小石を多く含む
 29 灰褐色土(10765/1)5-10cm次の小石を多く含む
 30 灰褐色土(10765/1)5-10cm次の小石を多く含む
 31 灰褐色土(10765/1)5-10cm次の小石を多く含む
 32 細かい黄褐色土(10765/6)
 33 細かい黄褐色土(10765/6)
 34 灰褐色土(10765/1)
 35 灰褐色土(10765/1)
- 断面位置のアルファベットは第27図に対応

第29図 T3 東壘土層断面図



第30図 T3全体図(上層)

め、結果的に土塁の基底部は削り出されたようになっている。そのことにより、土塁上には城館築造以前の時期の遺構が検出されている。よって、この調査区では遺構が城館の機能時期と、それ以前の2時期が存在する。以下、城館の機能時期を上層、それ以前の時期を下層として記述を進めていく。上層の遺構は、堀、土塁、曲輪内に溝、落ち込み、井戸、土坑、ピット等、下層は土坑、溝、ピット等がそれぞれ検出されている。遺構の主な埋土は黒褐色～灰褐色土である。

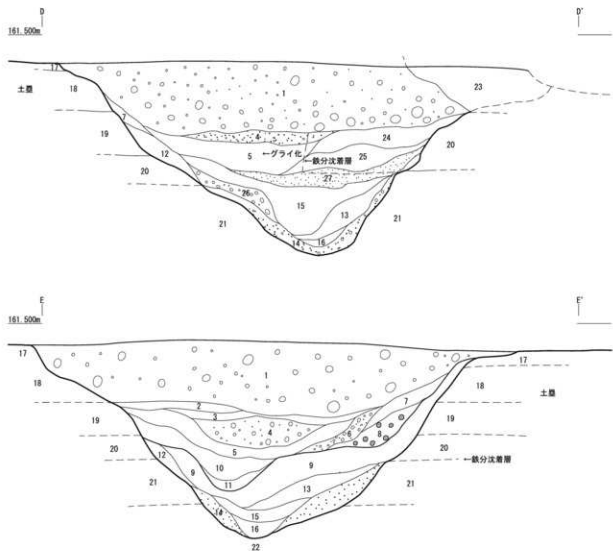
◇上層

1. 土塁 (図版47～50)

土塁は、調査区の外周を廻る堀の内側で検出されている。調査区南西壁面の土層に明瞭に表れている (第28図)。平面観察および断面観察から幅は6.5～8mで、南東側が狭い傾向にある。また、曲輪側が一段落ち込んでいる。つまり、当時の生活面を掘りくはめて曲輪をつくっている。土塁部分の土層は、最下層が地山層 (第28図以下同様、4層:明黄褐色土)、その上層が黒褐色土 (5層)、黄灰色土 (2層) である。2層は最上層のため後世の耕作によって部分的に攪乱を受けているものの、土塁の盛土もしくは鎌倉時代以降、城館築城時期以前の堆積層で、黒褐色土は、T1・2で検出されている落ち込み1の埋土である。そのことから土塁の基盤は、曲輪部・堀部の両側を削り込んでつくっていることがわかる。そのため、土塁の崩落土中からは城館が機能していた時期ではなく、落ち込み1に包含されていた時期 (12世紀代) の土器が出土している。ちなみに土層観察から曲輪の底面は、土塁の残存面から約80cm以上の高低差がある。それは曲輪をつくる時は当時の生活面 (黒褐色土以上の上層) から80cm以上掘削していたことを示している。そして、このために土塁の基底部には、城館と時期を越えた遺構が検出されている (下層)。

2. 堀

S1 (第30～35図・図版41～47) 調査区の外周を廻る状態で検出されている。外周で北西—南東が約48m、内周で北西—南東で約39m、南西—北東で約42mである。堀の一部が調査区外に延びているため正確な数値は提示できないが、南西—北東方向がやや長い可能性がある。南西端で途切れている。幅は全面が検出されている地点で、上面約6.4m、深さは遺構検出面から約2.6～2.8mを測る。底面の標高は158.6m前後で、堀が途切れている部分では159m前後と浅くなっている。断面形状はおおむね逆台形を呈しているが、土塁側の傾斜がやや急である。そのためどの地点においても初期の段階で土塁側の崩落土層が確認できる。埋土は最上層にぶい黄褐色土 (砂・礫を多く含む)、以下灰色砂質土、黒褐色土 (黄褐色土混)、灰色粘土である。北東側では下半部がグライ化している一方、南東側の途切れている部分の周辺では、ラミナが確認でき水流があったことがうかがわれる。ただし、上層で植物質が絨毯のように折り重なっている層 (第32図:16層) があることから帯水時期も存在していたようである。また、最上層のぶい黄褐色土 (砂・礫を多く含む:第31図1層・第32図1層および25層) は、北東側では1mをこえる厚さであるが、南西側の途切れた部分では10数cmを測るのみである。この層は曲輪内で検出された黄灰色砂礫層 (第28・29図1層) と同一土層と判断され、出土している最新の遺物から城館廃絶後の埋め土と理解できる。



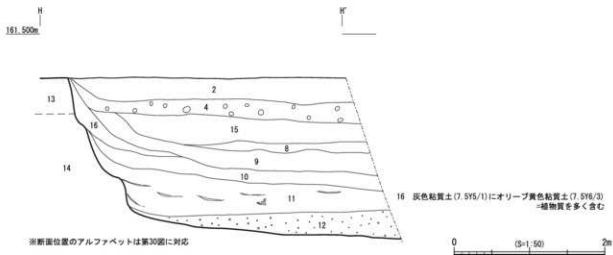
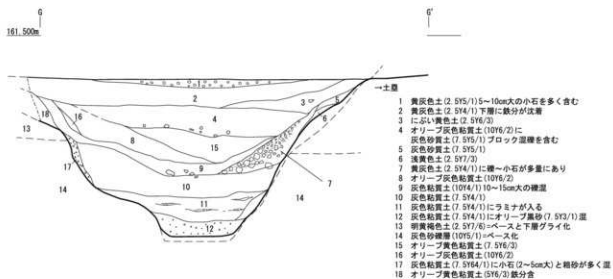
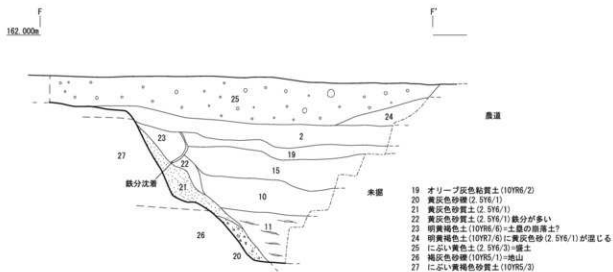
- 1 不ふい黄褐色土(10YR5/3)砂、礫層=造成土
- 2 灰色粘質土(5Y6/1)砂と少量の礫(1~500μ)含む
- 3 灰色粘質土(5Y6/0)
- 4 灰色粘質土(5Y6/1)1~500μの礫含む
- 5 緑灰色粘土(7.5YR6/1)
- 6 灰色土(7.5Y6/1)砂と1~500μの小石を多く含む
- 7 黄褐色土(2.5Y5/3)
- 8 黄褐色土(2.5Y5/3)+黒褐色土(2.5Y3/1)ブロック面→古墳→中世の包含層 } 土層の顆落土
- 9 黒褐色土(2.5Y3/1)に黄褐色土(2.5Y5/1)が混
- 10 灰色粘土(7.5Y5/1)
- 11 灰色粘土(7.5Y4/1)植物遺体を少量含む
- 12 灰色粘土(7.5Y4/1)
- 13 オリーブ灰色粘質土(5Y5/1)
- 14 暗オリーブ灰色粘土(5Y4/1)3~1000μの小石混→初期の顆落土(19~20)

- 15 灰色粘土(10Y4/1)
- 16 オリーブ黒粘土(10Y3/1)
- 17 黒褐色土(2.5Y3/1)古墳→中世の包含層
- 18 不ふい黄色土(2.5Y6/4)地山
- 19 灰色砂礫層(10Y5/1)地山 1~300μの小石
- 20 暗オリーブ褐色砂礫(2.5Y3/2)地山 3~1000μの小石、鉄分沈着
- 21 灰色砂礫(5Y/1)地山 3~1000μの小石、鉄分沈着
- 22 灰色砂礫(5Y/1)地山 10~1500μの小石、粗砂
- 23 不ふい黄褐色土(10YR5/4)=後世の擾乱
- 24 明黄褐色土(10YR6/6)やや砂質、小石混
- 25 暗黄褐色土(2.5Y4/2)やや砂質、小石混
- 26 黄灰色粘質土(5Y4/1)5~1000μの礫を多く含む
- 27 灰色粘質土(5Y5/1)

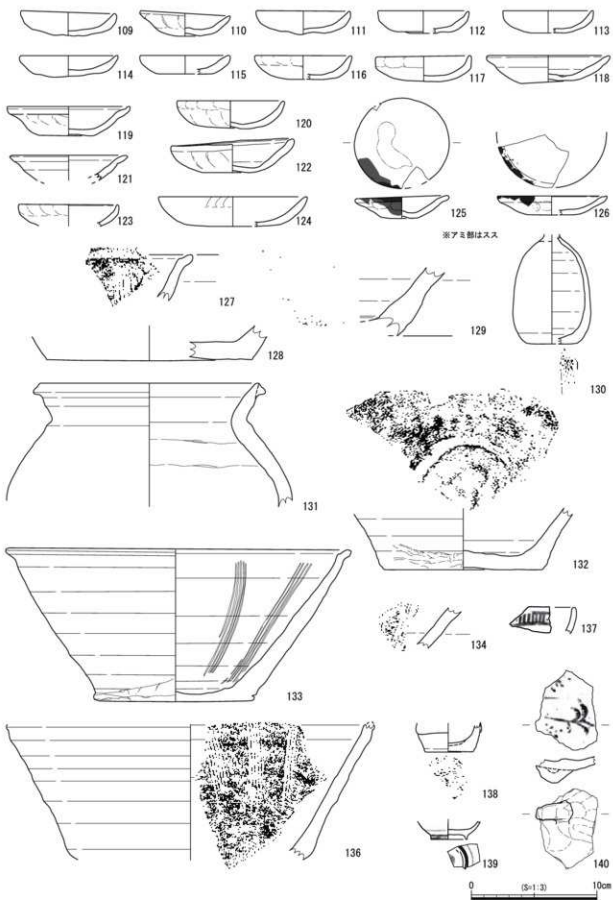
※断面位置のアルファベットは第30図に対応



第31図 T3 堀S1土層断面図1



第32図 T3 堀S1土層断面図2



第33図 T3 堀S1 出土遺物1

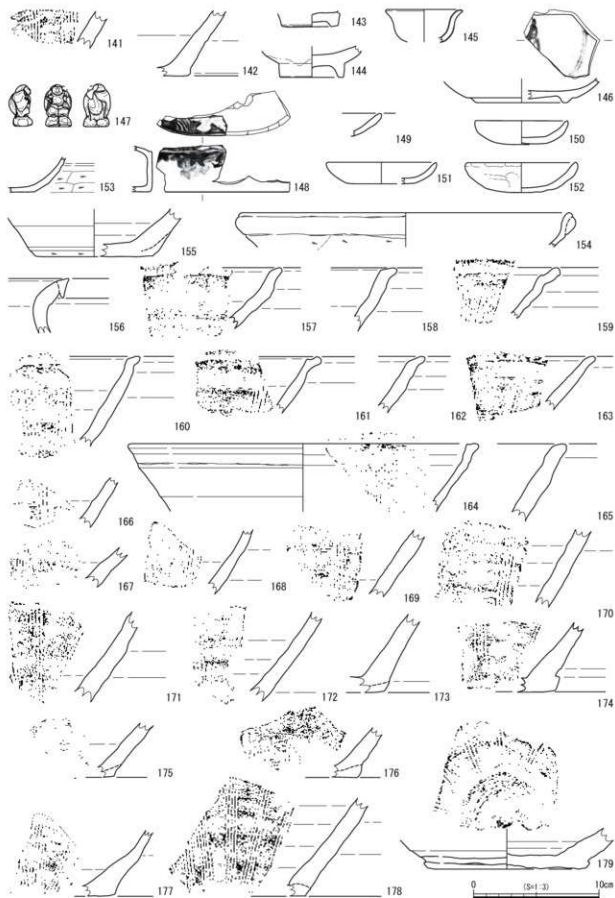
遺物は109～134・136～195が出土している。出土している層は灰色粘土層が中心で、北東辺は遺物が少なく、南側ほど出土量が多い。その中でも南西端の途切れている部分の下層から比較的まとまって出土している。それが、土師器の皿109～122・124～126、漆器の碗182である。第32図の11層の灰色粘土（ラミナが入る）から出土していることから、流水があった時期と判断でき、城館が機能していた段階と考えられる。土師器の皿は、総じて厚手で重量感があり、口縁端部を連続する指押さえて仕上げているものが多い。その中でも118・119・121・125・126は比較的薄手で口縁端部にヨコナデを施している。直径は前者が7.5cm前後、後者は9cm後半が中心である。125・126は口縁端部および外面の一部にススが付着している。灯明皿と考えられる。182は外面が黒漆、内面は赤漆仕上げである。外面には朱漆で鶴と扇？が描かれている。樹種はミズキ属である。

また、帯水して湿地状となり植物質層が形成される段階＝城館の機能停止段階（第32図16層）以前の層（第32図10層）から123・127・128・132・133・136が出土している。123の土師器の皿は厚手で口縁端部を指押さえて仕上げている。127・133・136の信楽焼の播鉢である。127は5条一単位の播目である。133は5条一単位の播目で内面にススの付着を確認できる。また、内面は使用による摩耗が顕著で、非常に平滑である。外面体部下半に蔓痕が残る。136は端部が欠損している。6条一単位の播目で、内面は使用による摩耗が顕著で、下半部の播目はほとんど確認できず、非常に平滑である。128・132は信楽焼の捏鉢である。128は非常に焼き締まっており、胎土が青灰色系の色調を示している。底部の小片であるが播目が確認できないことから捏鉢である可能性が高い。132は外面体部最下部に蔓痕が確認でき、内面は使用による摩耗が著しく、非常に平滑である。

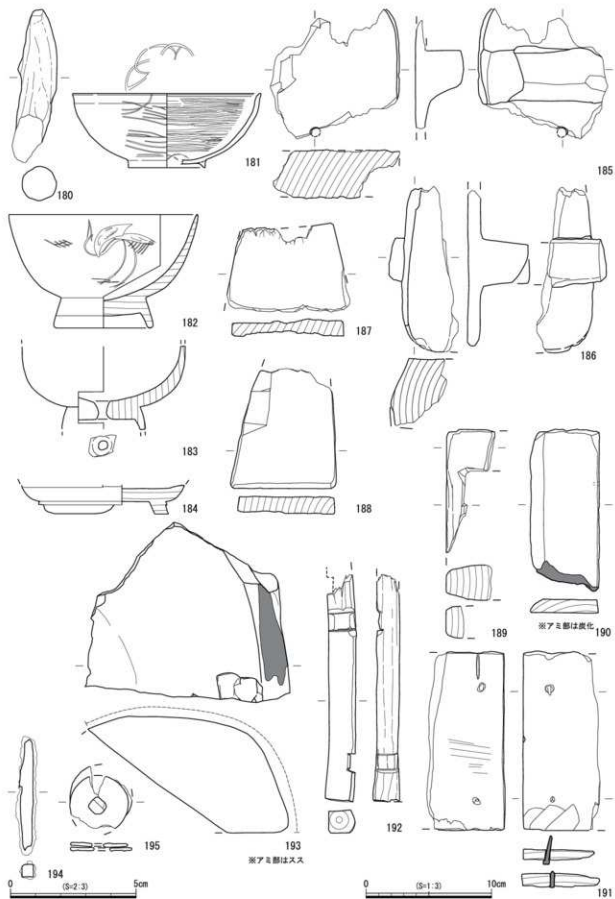
帯水して湿地状となり植物質層が形成される段階＝城館の機能停止段階（第32図16層）直後（第32図9層）からは129～131が出土している。129は信楽焼の播鉢で5条一単位の播目で、内面は使用による摩耗が顕著で、非常に平滑である。130は産地不明の陶器で非常に焼成がよい。底部に円形の刺突（印？）が残る。131は信楽焼の壺である。

埋め戻し土と考えられる層（第32図1・2層）からは134・137～140・145・146・148が出土している。134は信楽焼の播鉢の体部片で、5条一単位の播目を確認できる。137は志野の鉄絵皿である。口縁部内面に梯子状文様が描かれている。138は壺の底部で外面の一部と内面に灰釉の袖溜まりを確認できる。底部に糸切り痕が残る。139は染付の小碗の底部片である。非常に透明感のある白地に薄い青みがかった呉須で文様が描かれている。底部に角銘を確認できる。140は志野織部の平向付である。付輪高台である。鉄絵で草木が描かれている。145は青磁の小碗でややくすんだ緑色を呈し、内面には貫入が目立つ。胎土は灰色がかかった色調を示す。146は染付の皿でやや暗い青みがかった釉である。148は染付で器種は不明である。平面形が楕円を呈し、中空である。

重機掘削中もしくは埋土掘削中に141～144・147・149～195が出土している。141は信楽焼の播鉢で、6条一単位の播目を持つ。内面は使用による摩耗を確認できる。142は信楽焼の捏鉢で内面は使用による摩耗が著しい。143は瀬戸美濃焼の天目茶碗である。144が瀬戸美濃焼の丸碗である。削り出し高台で御深井釉を確認できる。147は型作りの小型の大黒天像である。149～152は



第34図 T3 堀S1出土遺物2



第35図 T3 堀S1出土遺物3

土師器の皿である。153は土師器の鉢であろうか。底部外面がケズリである。154は土師器の炮烙である。外面にはススが付着している。155は信楽焼の捏鉢である。内面は使用による摩耗で、非常に平滑である。156は信楽焼の甕の口縁部である。157～179は信楽焼の搦鉢もしくは捏鉢である。157は1条以上一単位の搦目で、内面下部は使用による摩耗を確認できる。158・162・165・173は小片のため搦目が確認できないため搦鉢か捏鉢か確定できない。165は内面下部が使用のため摩耗している。159・161・163・170・171・176・178・179は4条一単位の搦目で、159・176はやや太めの搦目である。176・178は外面に蔓痕を確認できる。170は非常に軟質で焼成が悪い。171は内面下部が、使用による摩耗により搦目が消えかけている。178は内面に使用による摩耗を確認できる。179は底部に置台の圧痕を確認できる。160・164・166・167・169・174・175は5条一単位の搦目である。167は内面にススが付着している。169は搦目に切られる工具痕を確認できる。174・175は内面が使用による摩耗が認められる。168は6条以上一単位の搦目である。172は4条以上一単位の搦目である。内面下部は使用による摩耗が認められる。177は6条一単位の搦目である。非常に硬質で焼成が良い。180は土師器の脚付羽釜の脚部である。摩耗が著しい。181は瓦器の椀である。高台は高さのある二等辺三角形で、体部内面は密、外面は粗い暗文を確認できる。見込み部分の暗文は3回転以上連結輪状を呈している。183・184は漆器で、183は椀で内外面ともに朱漆である。底部が二次的に穿孔されている。樹種はトチノキである。184は皿で、内外面とも黒漆で仕上げている。隅丸長方形を半裁した形状の脚を三方向に持つ。樹種はコウヤマキである。185～188は下駄である。185・186は連歯下駄でともに樹種はマツ属複雑管束亜属である。ともに遺存状態が悪い。187・188は差歯下駄の歯で、樹種は187がヒノキ、188は広葉樹である。189は用途不明品で、柄穴が確認できる。ミカン割り材で樹種はマツ属複雑管束亜属である。190は板材で小口が炭化している。用途は不明である。樹種はヒノキである。191は板材で中央ラインに2穴釘穴が確認でき、ともに釘が残存していた。樹種はスギである。192は用途が不明である。2側面に位置を違えて凹状に加工がなされている。樹種はマツ属複雑管束亜属で芯持材である。193は紙石である。全面に擦痕が認められ、非常に平滑である。側面にススを確認できる。石材は頁岩である。194は鉄釘である。先端部が欠損している。断面形は正方形である。195は銭貨であるが、錆による腐食が著しく、X線撮影を試みたが銭貨は確認できなかった。2枚重なって出土している。

出土遺物は、181が土塁の基底部包含層の崩落土に包含されていた遺物で12世紀後半の年代観を示すほかは、城館に関連する時期を示していると考えられる。城館に関連する時期、すなわち機能していた時期が16世紀中頃から後半代、廃絶・埋め戻し時期が17世紀前半代と考えられる。

3. 曲輪

S2（第30・36・37図・図版50・51）曲輪は調査区の外周を廻る堀（S1）、その内側に土塁、さらにその内側で検出された区域になる。市教委が実施した試掘調査の第3トレンチのSV0305は、この曲輪の北側隅の部分に対応する。検出されている部分から復元するならば、北西―南東が約30m、南西―北東で約26mである。堀と同様に南西―北東方向にやや長い可能性がある。曲輪の底面の標高は160.9mでほぼ平坦であるが、調査区の南東側では造成を行った痕跡が読み取れ、

S2 タチワリ土層断面図



- 1 掘削(後田の埋土)形式の中心
- 2 灰褐色砂まじり土(10785/2)に灰色土(10786/1)がまじる
- 3 灰褐色砂まじり土(10785/4)→薄積層・火山
- 4 細かい灰褐色土(10785/6)・灰褐色砂質土(5784/2)ブロック層
- 5 明灰褐色土(10786/6)・灰褐色砂質土(5784/2)ブロック層
- 6 灰褐色砂まじり土(10785/2)
- 7 明灰褐色土(10786/6)

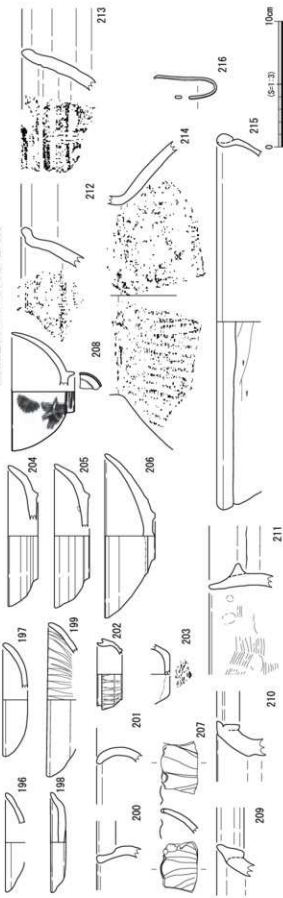
※断面位置のアルファベットは第7面に列記

曲輪内断面

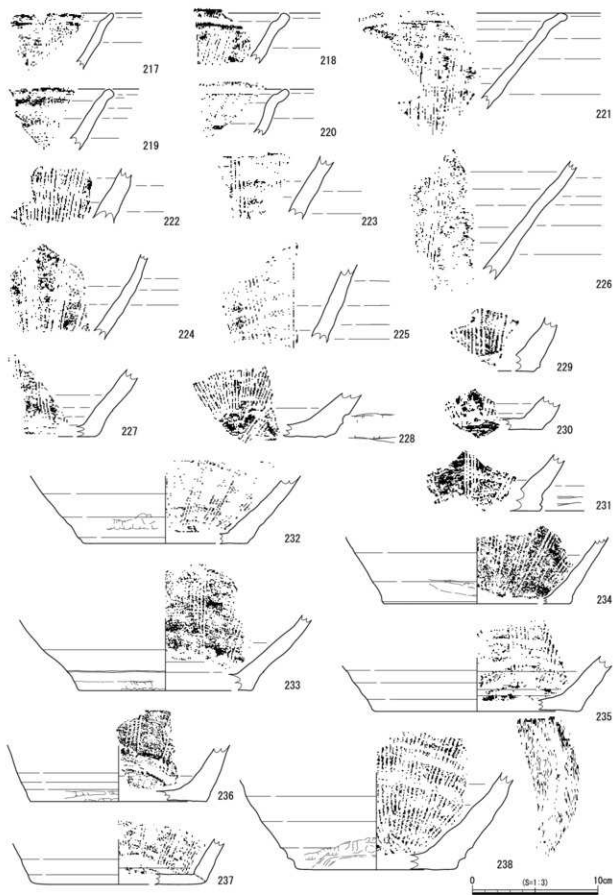


- 1 暗灰褐色土(2,3)(S2・ヤンガン層)
- 2 明灰褐色土(10786/6)・灰褐色砂質土(10786/2)ブロック層
- 3 細かい灰褐色砂まじり土(10785/4)ヤンガン層・54埋土

※断面位置のアルファベットは第7面に列記



第36図 T3 曲輪S2断面図・出土遺物1



第37図 T3 曲輪S2出土遺物2

最下面是標高約160.0mである。埋土は最上層が黄灰色砂礫層、それ以下、黄灰色土、黒褐色土（褐灰色土混）、にぶい黄褐色土（地山）である。最上層の黄灰色砂礫層は、堀の最上層の埋土（にぶい黄褐色土）と同一と判断でき、17世紀前半代の埋め戻し土と考えられる。

遺物は196～238が出土している。196・199・206・210・212・217・225・226・228・231・235が最上層の黄灰色砂礫層から、残りは地山直上の黒褐色土層から出土している。196・197は土師器の皿、198は瓦器の皿である。内外面の摩滅が著しく、調整法は確認できない。199は瀬戸美濃焼の灰軸の丸皿である。内面に放射状に沈線が巡る。200は産地不明の焼き締め陶器の壺である。201は信楽焼の水指であろうか。202は青白磁の合子の身である。203は瀬戸美濃焼の壺である。外面に鉄釉が施軸されている。底部には糸切り痕が残る。204・205は志野の皿である。205の口縁端部にススの付着を確認できる。206は唐津の皿である。淡橙色の胎土に灰白色の釉が施軸されており、見込み部分にはトチン痕を確認できる。207は青磁の皿である。内外面に鎬文がみられる。208は染付の丸碗である。釉はやや青味がかかった灰白色である。209・210は信楽焼の甕である。211は瓦質土器の羽釜である。ただし、炭素が残っていない。212・213・217～238は信楽焼の播鉢である。212・218・220～222・224・228は6条一単位、213は3条一単位、217・223・230は4条一単位、219・225・226・229・231～235・237・238は5条一単位、220・227・236は4条以上一単位の播目である。223・226・227・230～233・235～237は内面が使用による摩耗が認められ非常に平滑である。特に231・233・234・236は播目が消えかかっている。228は外面に蔓痕、見込み部分に播目を確認できる。229～234・236は外面に蔓痕が残る。234は焼成が悪く軟質である。235は底部に置台の圧痕が残る。238は播目の単位数が他と比較すると多く、非常に器壁が厚い印象を受ける。214は産地不明の須恵器の甕である。非常に細かな目の叩き痕および当て具痕が残る。215は土師器の炮烙である。外面にはススが付着している。216は銅製の用途不明品である。

時期は、出土している遺物は曲輪堆積土もしくは埋め戻し土に包含されていたものと判断できる。つまり、城館の機能していた時期が16世紀後半を中心とする時期、機能が停止し埋め戻されるのが17世紀初頭と考えられる。これは堀の状況と矛盾しない。

（1）曲輪北西地区（第38～43図）

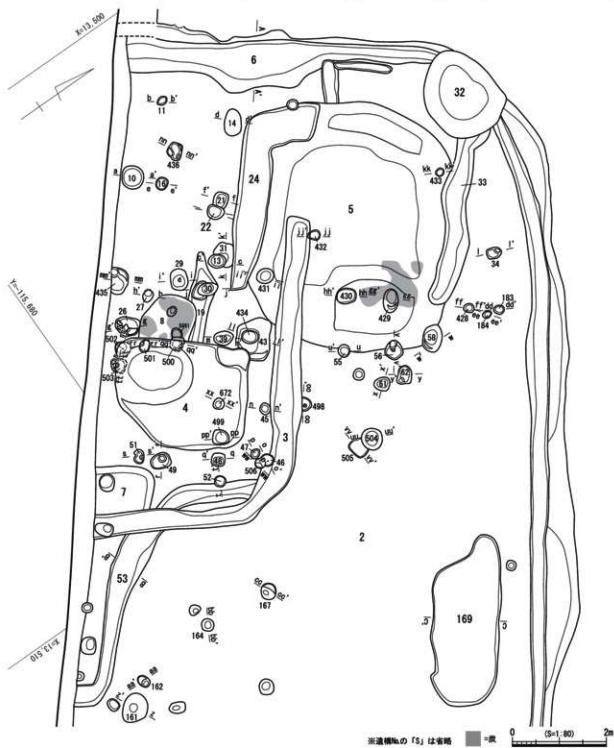
i）溝

S3（第30・38・39図） 曲輪の北西部、土坑S4の東側で検出された溝である。土坑S5・7、溝S53を切っている。調査区内でL字に屈曲しており、南西―北東方向に約5.6m、南東―北西方向に約5.8m、幅が約40cmを測る。深さは遺構検出面から8～10cmで、断面形は浅い皿状を呈している。埋土は明黄褐色土（褐灰色土ブロック混）である。

遺物は254～257である。254は信楽焼の鉢、255は瓦器の皿、256は信楽焼の控鉢もしくは播鉢、257は信楽焼の控鉢である。

時期は、255が土塁基盤の包含層等からの混入と判断され、他の少量遺物から16世紀代と考えられる。

S6（第30・38・39図・図版54） 曲輪の土塁の際で検出された溝である。ほぼ、曲輪の外周を巡っ



溝S6

181.000m A



1 黄灰色粘質土 (2.5YR/1) 10~20cm大の礫を多く含む
2 黄褐色土 (10YR/6)

溝S53

181.000m B



1 灰褐色砂まじり土 (7.5YR5/2)

溝S169

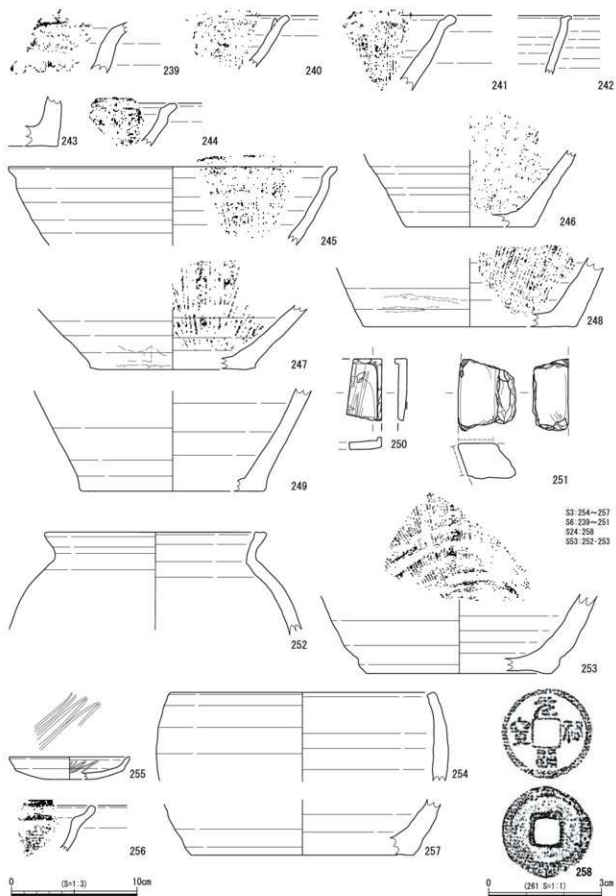
181.000m C



1 灰褐色砂まじり土 (7.5YR5/2)

0 (S=1:40) 1m

第38図 T3 曲輪北西地区



第39図 T3 溝出土遺物

しており、排水路であったと考えられる。土坑S32に切られている。幅は約40cmで、遺構検出面から8～10cmを測る。埋土は主に褐灰色砂質土である。所々で分岐したり、曲輪の最北西部では幅が1m程度に広がっている地点もある。また、南西部地区では井戸S70の外周を屈曲させて巡らせていることから、水はけを意識した排水路的な性格が読み取れる。この最北西部では上層に黄灰色粘質土、下層に明黄褐色土が堆積しており、上層には拳大の円礫が多く含まれていた。

遺物は239～251が出土している。239～241・244～248は信楽焼の播鉢である。239は3条以上一単位、240・241・244・246・248は5条一単位、245・247は4条一単位の播目である。239は焼成がやや不良で軟質である。246は見込みに播目を確認できる。247・248は外面に蔓痕を確認できる。248は内面に使用による摩耗が認められる。242は信楽焼の水指である。243は信楽焼の壺である。外面に蔓痕を確認できる。249は信楽焼の甕の底部である。250は石製の携帯用硯である。陸部に擦痕が明瞭に残る。粘板岩であろうか。251は砥石である。6面中4面は欠損して、2面が使用により非常に平滑である。砂岩製である。

時期は出土している遺物から16世紀後半代から17世紀初頭である。

S24 (第30・38・39図) 曲輪の北西端で検出された溝である。土坑S5を切っている調査区内でL字に小さく屈曲しており、南西—北東方向に約1.4m、南東—北西方向に約3.4m、幅が約60cmを測る。深さは遺構検出面から8～13cmで、断面形は浅い皿状を呈している。埋土は褐灰色砂質土(炭化物混)である。

遺物は258が出土している。元祐通寶(初鑄1086年)である。

時期は遺物がほとんど出土していないことから不明であるが、S5より後出するのは間違いのない。

S53 (第30・38・39図) 曲輪の北西で検出された溝である。溝S3に切られている。調査区内では南西—北東に0.4m、南東—西—北と約6mの長さで緩やかな円弧を描いて検出されている。幅は60～70cmで、埋土は灰褐色砂混じり土、深さは遺構検出面から10cm前後を測る。断面形は浅い皿状を呈する。

遺物は252・253が出土している。252は信楽焼の壺、253は信楽焼の播鉢である。253は6条一単位の播目が比較的密に配置され、底部内面にも播目が施される。底部内面は使用により平滑である。外面に蔓痕を確認できる。

時期は出土している遺物が少ないもののおおむね16世紀後半から17世紀初頭と考えられる。

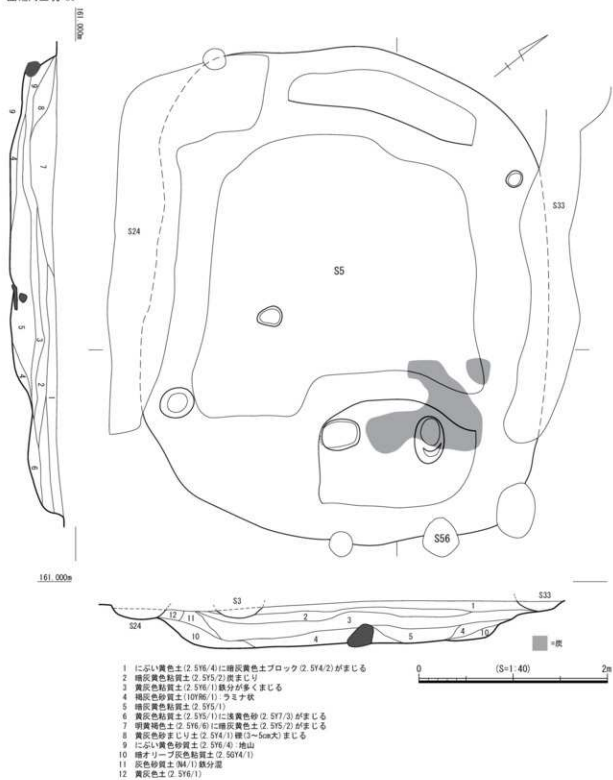
ii) 土坑

S4 (第30・42図) 曲輪の北西側で検出された土坑である。土坑S8・43を切っている。約2.8m×2.3mのやや不整な長方形で、南西側がやや深くなっている。その最深部で遺構検出面から約19cmを測る。埋土は暗灰黄色粘質土の単層である。

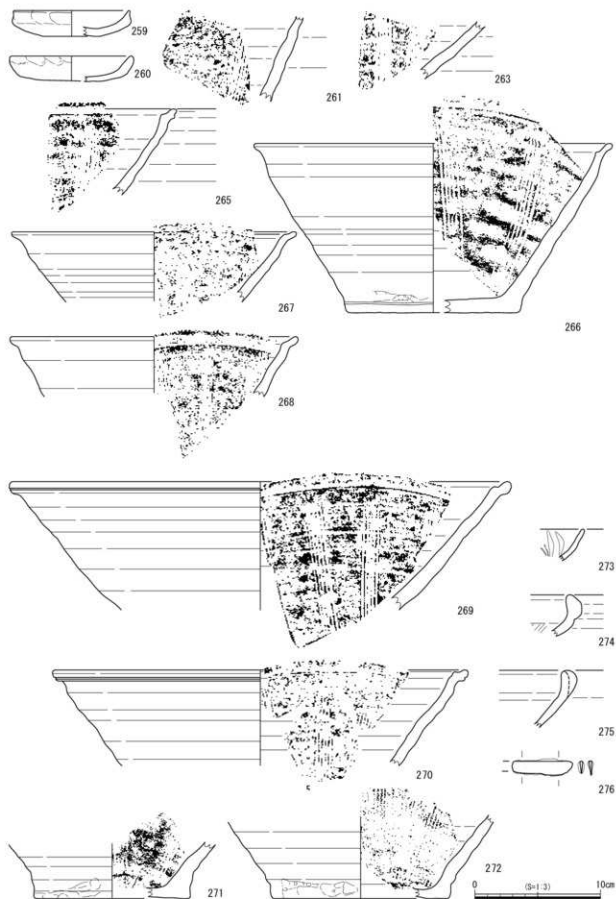
遺物は277の信楽焼の播鉢が出土している。5条一単位の播目である。出土している遺物は16世紀後半から17世紀前半代である。

S5 (第30・38・40・41図・図版51・52) 曲輪の北西側で検出された土坑である。溝S3・24・33に切られている。長軸が約5.2m、短軸が約4.2mに復元ができるやや不整な長方形を呈している。

曲輪内土坑 S5



第40図 T3 土坑S5



第41圖 T3 土坑S5出土遺物

深さは遺構検出面から最深部で約45cmを測る。主な埋土は上層からにぶい黄色土、暗灰黄色粘質土（炭混じり）、黄灰色粘質土（鉄分多く混じる）、褐灰色砂質土である。暗灰黄色粘質土中の炭は土坑の西側隅に偏って面的に確認された。また、中央部付近の最下層からは石材が数点検出されているが、使用痕等は認められず、機能は不明である。

遺物は259～261・263・265～276が出土している。259・260は土師器の皿で、ともに器壁が非常に厚く、端部を押しながら積み上げて成形している。261・263・265～272は信楽焼の播鉢である。261・263・265～270・272は5条一単位、271は4条一単位の播目である。266は内面下半部が使用による摩耗が著しい。外面に蔓痕、ススを確認できる。269・272は内面下半部が使用による摩耗で非常に平滑である。271は内面が使用による摩耗で非常に平滑で、播目が部分的に消えている。外面に蔓痕を確認できる。272は内外面の一部にススを確認できる。273は瀬戸美濃焼の灰軸の皿である。内面に篆文が施文されている。274・275は土師器の炮烙である。共に外面は全面にススを確認できる。276は刀子である。

時期は出土している遺物から16世紀後半代と考えられる。

S7（第30・38・42図）曲輪の北西部で検出された土坑である。溝S3に切られている。また、南西側は調査区外に延びている。1m以上×1.3m以上を測り、深さは遺構検出面から10cm程度である。埋土は明黄褐色土（灰褐色土ブロック混）である。

遺物は280が出土している。280は信楽焼の鉢である。

S8（第30・38・42図・図版53）曲輪の北西部で検出された土坑である。長さが0.9m以上、幅が1.1mで、南東側が土坑S4に切られている。深さは遺構検出面から5cm程度と非常に浅く、炭化物が面で広がっている。埋土は主に褐灰色砂質土である。

遺物は出土していない。

S32（第30・38・42図・図版54）曲輪の北隅で検出された土坑である。溝S6を切っている。長軸約1.9m、短軸約1.5mのやや不整な楕円形を呈している。深さは遺構検出面から約45cmを測る。埋土は主に上層から褐灰色土（砂・小石1～5cm大）、灰黄褐色土、黒褐色砂混じり土、褐灰色粘質土（鉄分混）、褐灰色土、褐灰色粘質土（鉄分混）である。

遺物は278・279が出土している。278は土師器の皿で、口縁端部を上方に積み出している。279は信楽焼の播鉢で6条一単位の播目で、内面は使用による摩耗が著しく平滑である。外面に蔓痕を確認できる。

時期は16世紀代から17世紀であると考えられる。

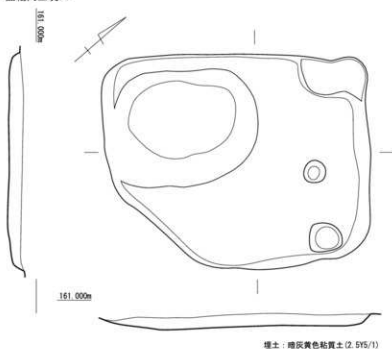
S43（第30・38・42・43図）曲輪の北西部で検出された土坑である。土坑S4、ピットS434に切られている。約90cm×約70cmの不整な方形で、深さは約50cmを測る。埋土は上層から明黄褐色土、灰褐色砂混じり土、灰褐色粘質土である。

遺物は281が出土している。281は信楽焼の播鉢で2条以上一単位の播目である。

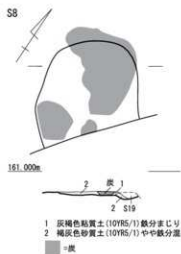
S169（第30・38図）曲輪の北西部で検出された土坑である。長軸約3.6m、短軸1.4mの不整な楕円形で、深さは遺構検出面から10cm程度を測る。埋土は灰褐色砂混じり土の単層である。

遺物は図化できない土師器の細片が出土しているのみである。

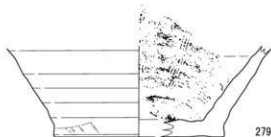
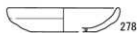
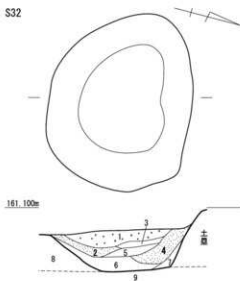
曲輪内土坑S4



埋土：暗灰色粘質土(2. S19/1)

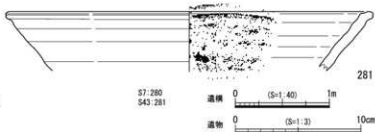
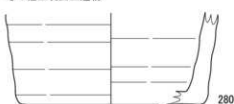


S32



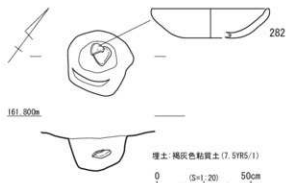
- | | |
|----------------------------|---------------------------|
| 1 暗灰色土(10YR4/1) 砂、小石1~5cm大 | 6 暗灰色粘質土(10YR6/1) 鉄分まじり |
| 2 暗褐色砂まじり土(10YR2/2) | 7 に近い黄褐色粘土(10YR7/4) 土層崩落土 |
| 3 灰黄褐色土(10YR5/2) やや粘質 | 8 明黄褐色土(10YR6/6) 地山 |
| 4 暗灰色土(10YR4/1) やや砂まじり | 9 明黄褐色土(10YR6/6) 礫を多く含む地山 |
| 5 暗灰色粘質土(10YR5/1) 鉄分まじり | |

その他土坑出土遺物

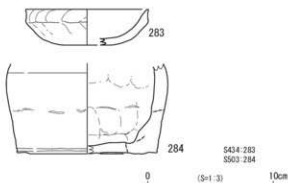


第42図 T3 土坑S4・8・32断面図・出土遺物

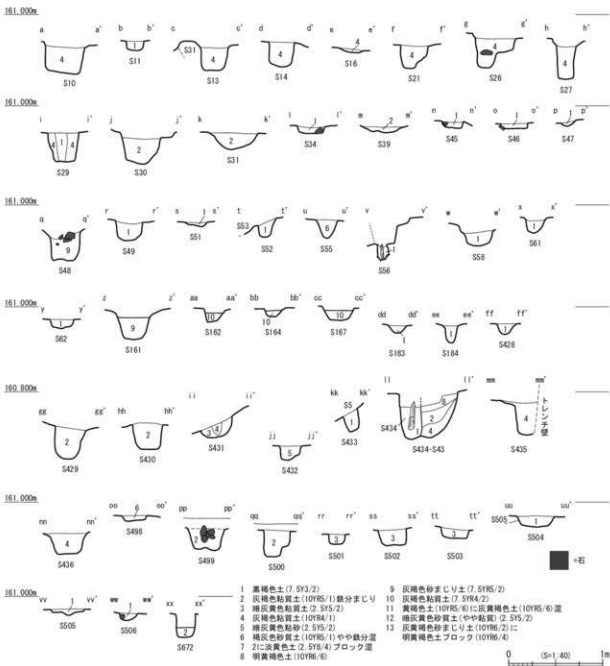
ビットS22 土器出土状況図



その他ビット出土遺物



その他ビット



第43図 T3 曲輪内ビット断面図・出土遺物

iii) ビット

建物を形成する柱穴や礎石は確認できなかった。大きさは直径および長軸の長さが10～60cmを測り、深さが遺構検出面から5～40cmほどである。柱痕が検出されたビットはほとんどない。その中で、S56・S343は柱材が検出されている。埋土はおもに黒褐色土、暗灰黄色粘質土、灰褐色粘質土である。

S22(第30・38・43図・図版78) 曲輪の北西部で検出されたビットである。一辺17cmのやや不整な方形で、深さは遺構検出面から約18cmを測る。底部から少し上方で扁平な石材の上に重なって土師器の皿(282)が出土している。埋土は褐灰色粘質土である。

遺物は282の土師器の皿が出土している。口縁端部を上方へ摘み上げている。

S56(第30・38・43図) 曲輪の北西部で検出されたビットである。土坑S5を切っている。掘方が直径40cmのやや不整な円形で、深さが遺構検出面から40cmを測る。掘方のほぼ中央で柱根が検出されている。樹種はマツ属複雑維管束亜属である。埋土は黒褐色土である。

遺物は出土していない。

S434(第30・38・43図) 曲輪の北西部で検出されたビットである。土坑S43を切っている。長軸35cm、短軸28cmの楕円形を呈し、深さは遺構検出面から45cmを測る。埋土は黒褐色土である。掘方の中央で柱根が検出されている。樹種はサクラ属である。

遺物は283の土師器の皿が出土している。器壁が厚く、口縁端部を強く押さえながら、上方へ摘み上げている。

S503(第30・38・43図) 曲輪の北西部で検出されたビットである。土坑S4に切られている。一辺34cmのやや不整な方形の掘方で、中央をやや南西側で柱痕が検出されている。埋土は暗灰黄色粘質土である。

遺物は284の信楽焼の壺が出土している。

(2) 曲輪東地区(第30・44～46図)

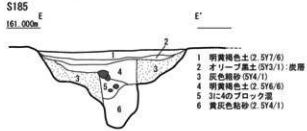
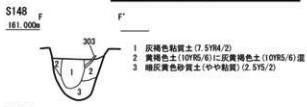
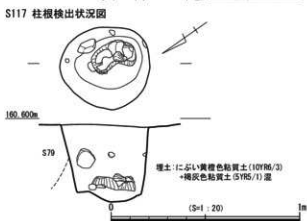
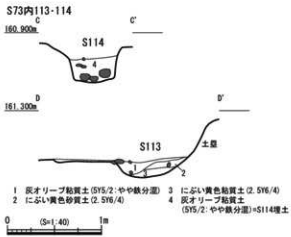
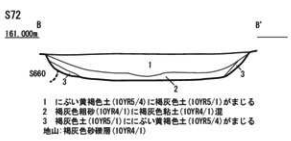
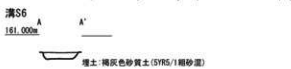
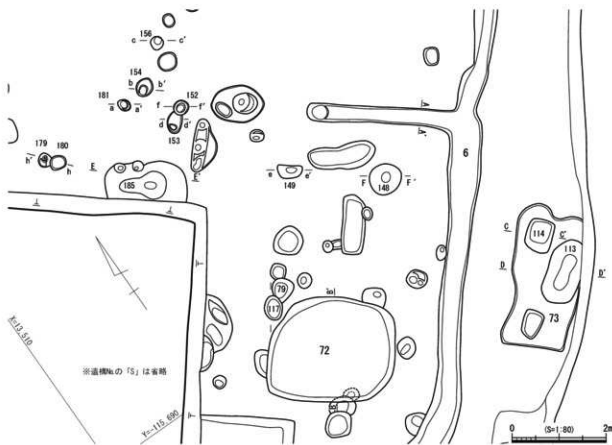
i) 溝

S6 北西地区ですでに詳述しているので省略する。

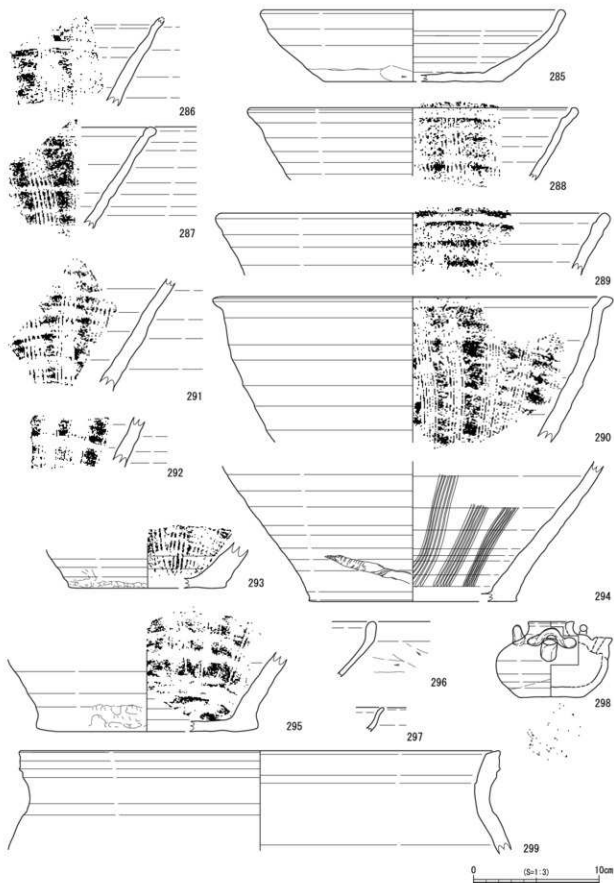
ii) 土坑

S72(第30・44・45図・図版63～65) 曲輪東地区のやや南寄りで検出された土坑である。長軸2.6m、短軸2.2mのやや不整な隅丸長方形で、深さは遺構検出面から28cmを測る。底面はほぼ平坦で断面形状は逆台形を呈している。埋土は上層がにぶい黄褐色土、下層が褐灰色粗砂である。

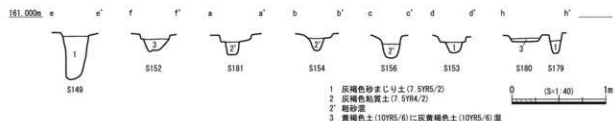
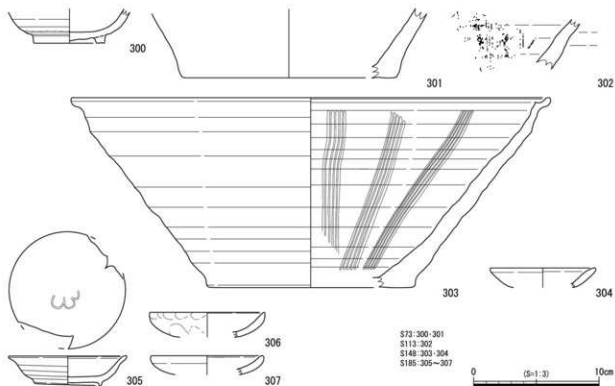
遺物は285～299が出土している。285は信楽焼の鉢である。286～295は信楽焼の播鉢である。286・291・293・295は5条一単位、287・288・290・292・294は6条一単位、289は4条一単位の播目である。290は内面の下半部が使用による摩耗が著しく平滑である。293は外面に蔓痕を確認できる。295は内面が非常に平滑で播目が摩耗により消えかけている。外面には蔓痕が認められる。294は内面下半に重ね焼きによる円形の融着痕が認められる。外面には蔓痕が残る。296は土師器の炮烙である。体部外面にはヌスが付着している。297は瀬戸美濃焼の鉄釉小椀の口縁部であら



第44図 T3 曲輪東地区



第45图 T3 土坑S72出土遺物



第46図 T3 土坑出土遺物、ビット断面図

うか。298は瀬戸美濃焼の土瓶形の水滴である。外面の鉄釉の表面が非常に荒れていて、なおかつ白濁していることから二次的な被熱を受けている可能性が高い。二か所ある取手のうち一か所は欠損している。299は信楽焼の甕の口縁部である。

出土している遺物から16世紀後半から17世紀初頭である。

S73 (第30・44・46図・図版66) 曲輪東地区、土塁に接する地点で検出された土坑である。長軸約3m、短軸約1.4mのやや不整な長方形で、内部でビットS113・114が検出されている。S73は非常に浅く、遺構検出面から5cm程度の深さしかない。埋土は灰オリーブ粘質土である。S113は長軸が1.4m、短軸が0.76mのやや不整な楕円形で、深さが遺構検出面から約17cmを測る。埋土は上層から灰オリーブ粘質土、にぶい黄色砂質土、にぶい黄色粘質土である。S114は長辺が0.7m、短辺が0.55mの長方形を呈し、深さは遺構検出面から45cmを測る。埋土は灰オリーブ粘質土の単層で、円礫が多く混じる。

遺物はS73から300・301が、S113から302が出土している。300は瀬戸美濃焼の灰釉の丸碗である。内外面の釉の一部に気泡を確認できる。301は信楽焼の甕の底部である。302は信楽焼の搦鉢で、

5条一単位の描目をもつ。

時期は出土している遺物から16世紀後半から17世紀初頭と考えられる。

S185 (第30・44・46図・図版67) 曲輪東地区の端で検出された土坑である。調査区外に延びていることから全体像は不明である。調査区内では長さ1.75m、幅0.75m以上を測る。深さは最深部で遺構検出面から約90cmを測る。埋土は上層から明黄褐色土、炭層、灰色粗砂、明黄褐色土、黄灰色粘砂である。

遺物は305～307が出土している。305は瀬戸美濃焼の灰釉の皿である。見込み部分に不明瞭ながら印花文が認められる。底部の高台の内側に輪ドチ痕がこのころ。306・307は土師器の皿である。306は口縁端部を強い指押さえによって上方に摘み上げている。

時期は出土した遺物から16世紀後半から17世紀初頭である。

iii) ビット

曲輪東地区ではあまり密度は高くないが、ビットが検出されている。柱痕が確認されているが、建物に復元できるビットはない。大きさは直径もしくは長軸が20～60cmほどの円形、楕円形を呈しているものが多く、深さも遺構検出面から10～20cm程度と総じて浅い。埋土は主に灰褐色砂混じり土である。その中で、S117では柱根が検出されている。

S117 (第30・44図・図版78) 曲輪東地区、土坑S72の北側に隣接する地点で検出されたビットである。掘方は直径約45cmのやや不整な円形を呈し、深さは遺構検出面から40cmを測る。掘方の北よりで柱根が検出されている。傷みが激しく、遺存状態が悪かった。樹種はムクノキである。遺物は出土していない。

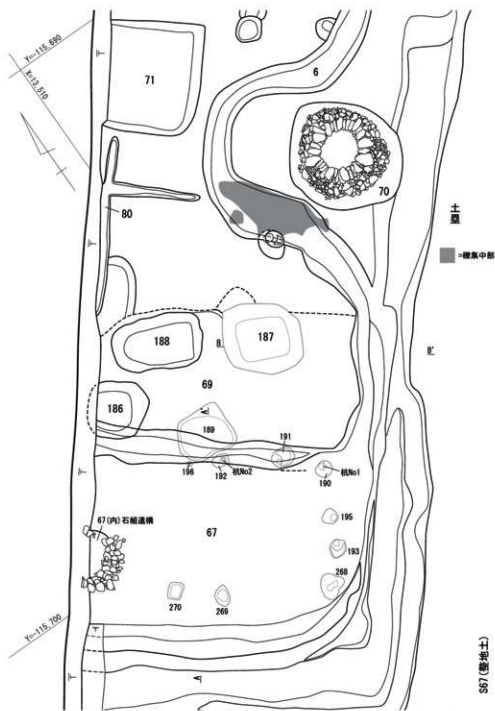
S148 (第30・44・46図・図版78) 曲輪東地区、土坑S72の東側で検出されたビットである。掘方は直径60cmで、その中央付近で直径20cmの柱痕が確認できた。埋土は柱痕が灰褐色粘質土、掘方の上層が黄褐色土、下層が暗灰黄色砂質土である。

遺物は303・304が出土している。303は掘方の上層から出土している。303は信楽焼の描鉢で、5条一単位の描目で、内面下部の底部周辺は使用による摩耗が著しく、非常に平滑である。304は土師器の皿である。

時期は16世紀後半代から17世紀初頭と考えられる。

(3) 曲輪南東地区 (第29・30・47～57図)

◇造成土 曲輪南東地区では、南側端を中心に造成土が面で確認できた。それは北東壁面の土層観察からも読み取れ (第29図)、曲輪全体の埋め戻し土 (黄灰色砂礫層：1層) からその下層の堆積土層 = 黒褐色土 (褐灰色土混：3層・3層 = S69)、そして、それより下層が造成土に該当する (第2期造成土)。つまり、南東地区は他の曲輪地区と比較すると地山面 (褐灰色土：9・27層) が著しく低い。この第2期の造成土中には礫が多く含まれる。他の曲輪地区では黒褐色土層を除去すると地山面 = 遺構検出面であったが、この南東地区の南側は、黒褐色土除去後に石組み遺構や結桶が設置してあった土坑S186などが検出され、さらにその下層の明黄褐色土 (第1期造成土：S67)、そしてそれを除去した下層から土坑S187・189が検出されている。このように



- 土器
- 土器中部
- S67 (整地土)
- 161,000m
- 1 灰黄色粘質土 (2. S16/2)
 2 黄灰色粘質土 (2. S16/1) 3~5cm次の小石を多く含む、細分沈砂
 3 灰黄色土 (M/0)
 4 灰黄色土 (S16/1) やや細分まじり
- 5 灰黄色粘質土 (10YR5/2) 566の埋土
 6 灰黄色粘土 (10YR2/1)
 7 細かい黄褐色粘土 (10YR/2) S194埋土
 8 褐色粘土 (10YR5/1)
- 9 黄灰色粘土 (10YR6/1) 1~3cmの小石混
 10 黄褐色粘質土 (10YR7/6) ベース
 11 黄褐色粘土 (10YR6/6) ブロック状
 12 黄灰色粘土 (2. S16/6)

溝S80出土遺物



308

土坑S194出土遺物



135

0 (S=1:3) 10cm

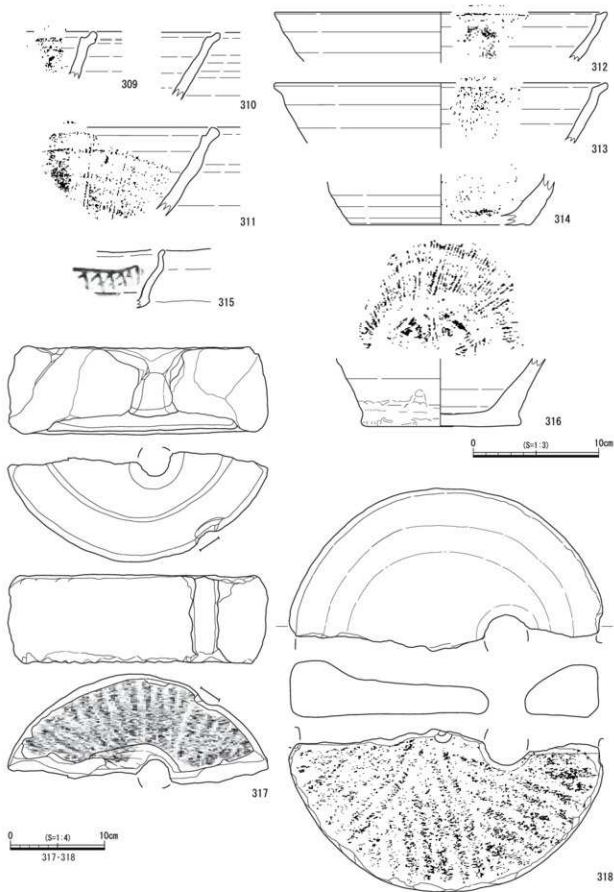
S69 東側盛土 (整地土)



- 1 明黄色土: ブロック状 (10YR6/6) に褐灰色土 (10YR6/1) がまじる
 2 黄褐色粘質土 (10Y3/2)
 3 黄灰色粘質土 (2. S15/3) 粗砂混
 4 細かい黄褐色粘土 (10YR6/3) 1~3cm次の礫と粗砂混
 5 黄灰色粘土 (2. S16/1)

0 (S=1:80) 2m

第47図 T3 曲輪南西地区



第48圖 T 3 整地土層 S69出土遺物

この地区では、数次にわたり造成がなされている。

埋め戻し土 (S69) 中からは309~318が出土している。309~314・316は信楽焼の播鉢で、309は5条一単位以上、311~314は5条一単位、316は6条一単位の播目で、314・316は底部内面にも播目を確認できる。316は内面の底部周辺が使用による摩耗が著しく、播目が消えかけている。また、外面には蔓痕を確認できる。315は志野の平向付で内面に鉄絵が描かれている。317・318は花崗岩製の石臼である。共に上臼である。いずれも外周部分に挽き手を取り付ける溝を確認できる。時期は17世紀初頭と考えられる。

第2造成土 (S67) 中からは319~325が出土している。319・320は土師器の皿である。319は底部周縁部に圏線状のナデが認められる。320は口縁端部を強い指押さえにより上方に立ち上がらせている。321は信楽焼の水指である。322・323は信楽焼の播鉢で、ともに5条一単位の播目である。322はやや深手の播目、323はやや焼成があまく軟質である。324は瀬戸美濃焼の鉄釉壺の底部である。底部はケズリ仕上げである。325は叩き石である。

時期は出土している遺物から16世紀後半から17世紀初頭であると考えられる。

(i) 溝

S6 (第30・47図) 曲輪北西地区で詳述している。この南東部地区では井戸S70の外周を廻るように屈曲させている。また井戸の南西部では拳大の礫が溝内から集中して検出されている。これは、井戸S70でも埋め戻しの際=17世紀前半に大量に礫を投棄している状況と同じと判断できる。それは井戸S70を埋め戻すときに余った礫を使った可能性も想定することができる。また、第1期造成時は土坑S186の南西側を通るルートに屈曲している。

S80 (第30・47図) 曲輪南西地区の中央、調査区西側壁に接して検出された溝である。調査区内では分岐している。幅約0.2m、深さは遺構検出面から5~7cmと非常に浅い。埋土はにぶい黄褐色土である。

遺物は308の土師器の皿が出土している。全体に指押さえ痕が目立つ。時期は16世紀後半代と考えられる。

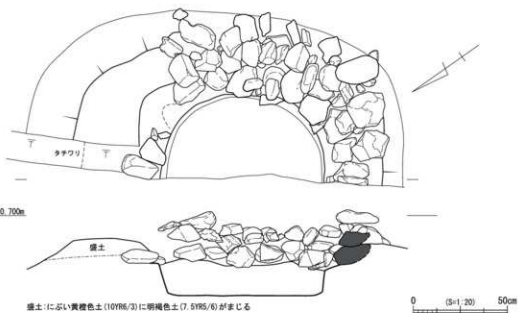
(ii) 土坑

S67内石組み遺構 (第29・30・47・49図・図版55) 曲輪南西部地区の西側の調査区壁に接して検出された遺構である。西側の調査区外に延びているが、直径約0.8mの円形の掘り込みに復元できる。そして、その周囲に幅約0.5mで盛土・石材が帯状に巡っている。掘り込み部分の深さは、盛土上端部から約30cmを測る。埋土は、褐灰色粘質土 (拳大の橙色土ブロック混) である。桶等の埋設物は検出されなかった。掘り込みの周囲は地山面から10cm程度にぶい黄橙色土 (明褐色土混) を盛り上げ、拳大の角礫を積んでいる。丁寧に積み上げている様子はうかがえない。

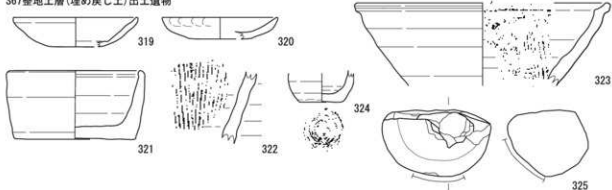
遺物は出土していない。

S71 (第30・47・49図・図版62) 曲輪南西地区の北東端、調査区の西側壁に接する地点で検出された土坑である。南西側が調査区外に延びているが、2.4m×1.9m以上の長方形もしくは方形を呈していると考えられる。深さは遺構検出面から約45cmを測り、断面形は逆台形で、底面はほぼ

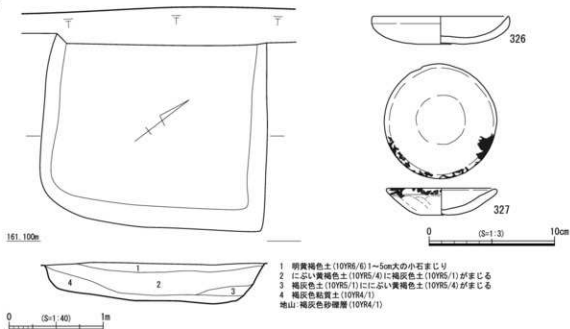
S67内石組み土坑



S67整地土層(埋め戻し土)出土遺物

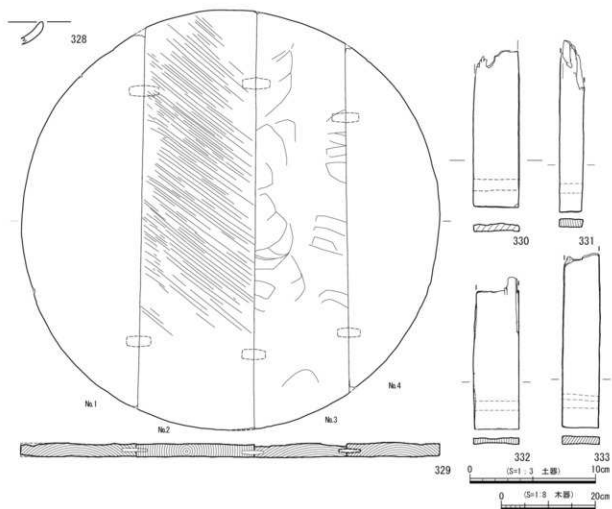
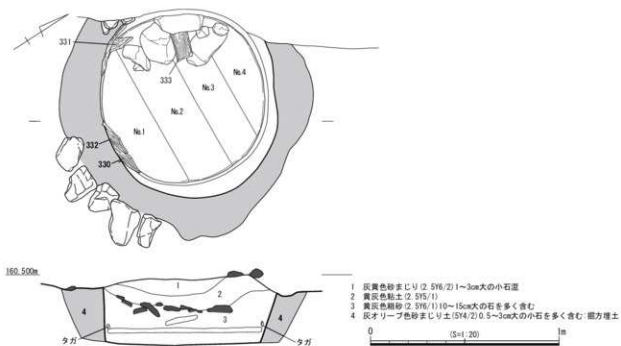


土坑S71



第49図 T3 S67内石組み土坑、土坑S71

土坑S186 (S67下層)



第50図 T3 土坑S186

平坦である。埋土は上層から明黄褐色土、にぶい黄褐色土（褐灰色土混）、褐灰色土（にぶい黄褐色土混）、褐灰色粘質土である。

遺物は326・327の土師器の皿が出土している。326は摩滅が著しく、調整法が不明瞭である。327は口縁端部内外面にタールが付着していることから灯明皿として使用されていたと考えられる。

時期は周辺の遺構の状況から16世紀後半代と判断される。

S186（第30・47・50図・図版68～71） 曲輪南西地区のほぼ中央、調査区の西壁に接する位置で検出された土坑である。掘方が直径1.35mのやや不整な円形で、その中央に底径88cmの結び桶が据えられている。掘方の外周で石材が確認された。一部しか残っていないがS67内石組み遺構と同様に石材が外周を巡っていた可能性がある。掘方の埋土は灰オリーブ色砂混じり土、桶内の埋土は上層から灰黄色砂混じり土、黄灰色粘土、黄灰色粗砂である。桶の内側に側板の一部が落ち込んでいた（330～333）。また、底板の直上でタガが確認されている。桶の埋土からは328の土師器の皿が出土している。掘方からは遺物は出土していない。桶の底板（329）は4枚の板目材をダボで接いで作っている。樹種は底板No1がスギ、残りがマツ属複雑管束亜属である。表面が荒れているため加工痕の残りがよくないが、No2で鋸痕、No3でハツリ痕が確認できた。側板はすべてヒノキである。底部から5cm前後の高さでタガの圧痕を確認できる。

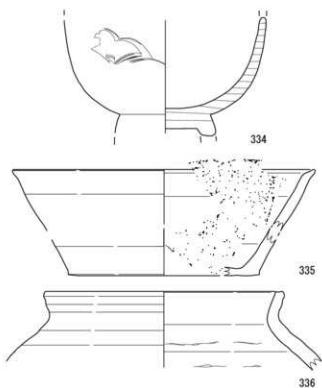
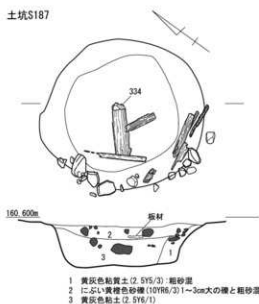
S187（第30・47・51図・図版68・71～73） 曲輪南西地区の中央で検出された土坑である。第1期造成土除去後に検出されている。直径1.6mのやや不整な円形で、深さは検出面から42cmを測る。埋土は上層がにぶい黄褐色砂礫、下層が黄灰色粘土である。断面形は逆台形で、底面は平坦である。上層には用途不明な板材片が散っていた。

遺物は上層から334～336が出土している。334は漆器椀で板材片とともに出土している。内面は赤漆、外面は黒漆で、外面には扇の文様が赤漆で描かれている。樹種はブナ属である。335は信楽焼の播鉢で、5条一単位の播目である。336は信楽焼の壺である。内面に粘土紐の接痕を確認できる。

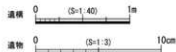
時期は16世紀後半代と考えられる。

S188（第30・47・52図・図版68・74～75） 曲輪南西地区の中央、土坑S187の西側、土坑S186の北東側、土坑S189の北側で検出された土坑である。第2期造成土を除去したのちに検出できた。掘方は西側が崩れてしまっているが、東西約1.5m、南北1.2mの長方形を呈し、深さは、北側の検出面から約50cmを測る。埋土は黄灰色粘質土である。その内側には、南側と東側で遺存状態が悪いものの横板が、北側は石積を確認できる。北側の石積は2段程度で、とくに石の面や目地を意識はしていない。また、南側では隅と中央で柱材が検出されており、横板材を押さえていたものと考えられる。板材はクリで樹皮が残る。南側で検出された杭もしくは柱材の掘方は、西側の隅のピットが直径30cm程度で、深さは土坑の底面から30cmを測る。埋土は褐灰色粘砂である。ピット内からは炭化した材が出土している。中央のピットは長軸25cm、短軸20cmの不整な楕円形で、深さは土坑の底面から約20cmを測る。西寄りで杭材（No5）が出土しており、樹種はモミ属近似種である。埋土は褐灰色粘砂である。なお、このピットは、埋土がにぶい黄色粘質土の別のピットを切っていることが確認できた。東側のピットは直径35cmの円形で、深さは35cmを測る。埋土

土坑S187



土坑S189



第51図 T3 土坑S187・189

は褐灰色粘砂である。中央付近で柱材が出土している。底部が鋭利に加工されていないことから柱材と判断した。樹種はクリである。この土坑の埋土は上層から暗灰色土、黄灰色粘土で暗灰色土中には拳大の礫が大量に含まれていた。これは埋め戻し土と判断される。

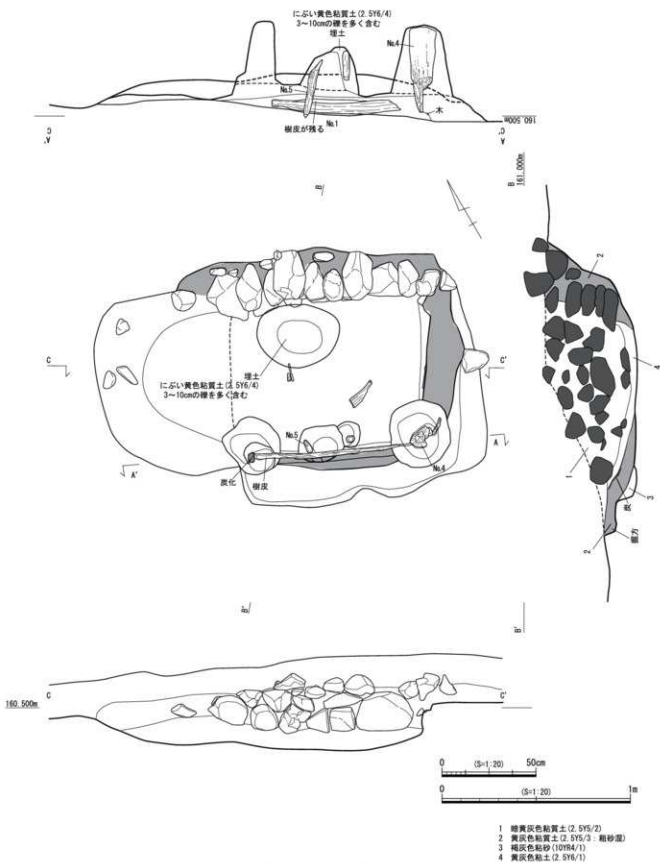
土器等の遺物は、出土していない。

S189 (第30・47・51図・図版75) 曲輪南西地区、土坑S186の南東側、土坑S187・188の南側で検出された土坑である。第1期造成土を除去後に検出された。長軸1.2m、短軸0.95mの不整な長方形を呈し、深さは検出面から22cmを測る。断面の形状は逆台形で、底部はほぼ平坦である。埋土は上層から黄灰色粘土、黄灰色粘質土、黄灰色粗砂である。

遺物は出土していない。

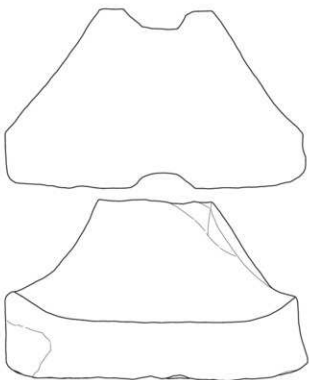
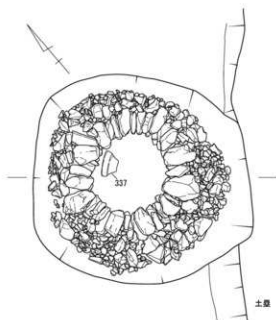
S194 (第47図) 曲輪南西地区の南西端で検出された土坑もしくは落ち込みである。第1期の造成土(灰色粘土・黄灰色粘質土)を除去したのちに検出された。幅は土塁側から約1mで、検出された曲輪部全体に広がる。深さは検出面から10~12cmを測る。埋土は上層から灰白色粘土、にぶい黄褐色粘土、褐灰色粘土である。

遺物は135の信楽焼の描鉢が出土している。6条一単位の描目で、内面は使用による摩耗が著



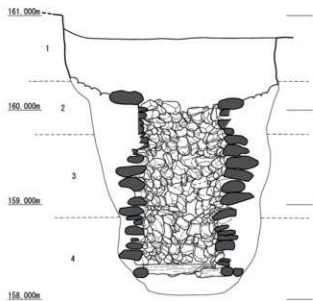
第52図 T3 土坑S188

平面図



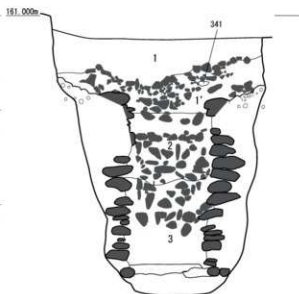
337
0 (S=1:4) 10cm

立面図



地山層
1 赤黄褐色土(10YR5/3)
2 1~10mm大の砂礫 粗くなる
3 傘大の円礫
4 人頭大の円礫が多い

断面図

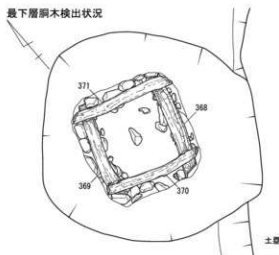


1 にぶい黄褐色土(10YR5/3)
1' 傘大~人頭大の礫を多く含む
2 黄灰色粘土(2.5Y4/1)
3 灰黄褐色粘土(10YR6/2)

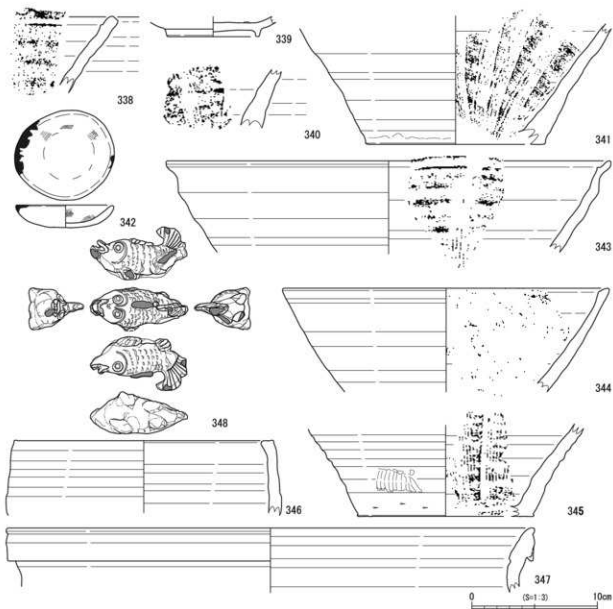
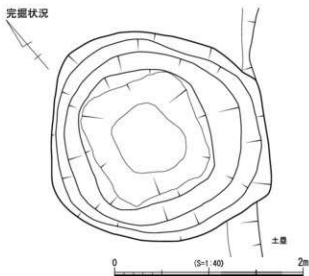
0 (S=1:40) 2m

第53図 T3 井戸S70

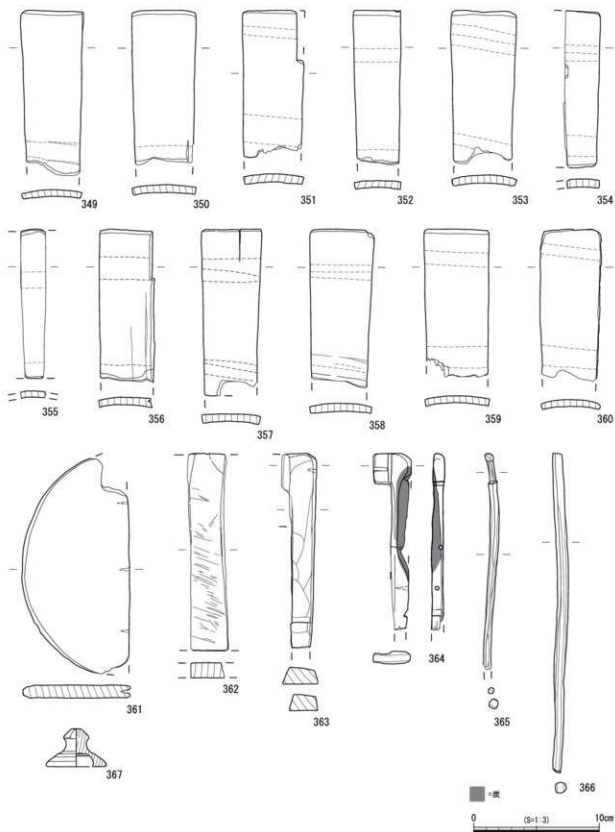
最下層桐木検出状況



完備状況



第54図 T3 井戸S70出土状況図・出土遺物



第55図 T3 井戸S70出土遺物2



第56図 T3 井戸S70出土胸木

しく、描目が消えかけている。また、外面には蔓痕を確認できる。

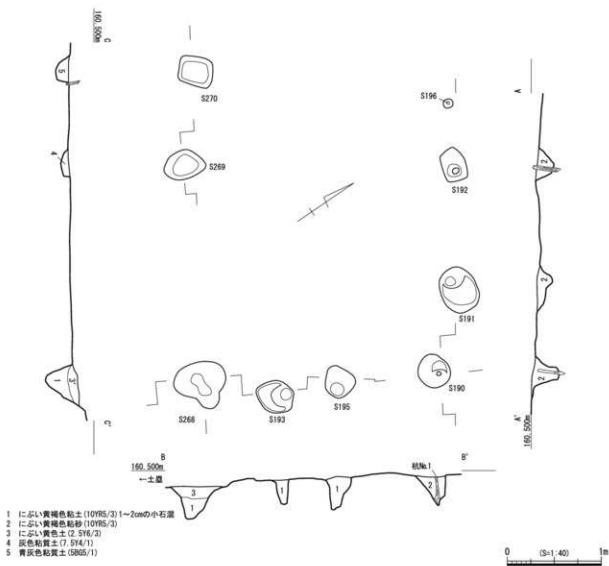
時期は16世紀後半代と考えられる。

(iii) 井戸

S70 (第30・47・53～56図・図版56～61) 曲輪南西地区の北東端、土坑S71の南側の土塁に接する位置で検出された井戸である。掘方は土塁の一部を削ってつくられている。掘方は直径2.1m、のやや不整な円形である。断面形は底部に向かって幅が狭くなる逆台形を呈しており、底部は直径約80cmの不整な円形で、ほぼ平坦であった。埋土は、検出面から深いところで50cm、浅いところで20cmの厚さでふい黄褐色土であったが、掘り進めていくと拳大～人頭大の礫が検出された。礫が主で土がその間隙に流れ込んだような状況であった。厚さは20～30cmを測る。この礫層は堀S1の最上層(ふい黄褐色土)、曲輪S2の最上層(黄灰色砂礫)に相当すると判断した。つまり、城館の廃絶時期の埋め戻し土である。その砂礫層を除去すると井戸枠の石材が検出された。井戸枠内の埋土は上層から黄灰色粘土、灰黄褐色粘土である。下層にいくにしたがい礫の量が少なくなる。井戸枠には長さ25～50cm、幅10～25cmの大きさの円礫の長軸を放射状に積み上げている。壁面の観察から石材を反時計回りで積み上げていたことが分かる。井戸の内径は直径約80cmの円形で、枠材から底まで約2.1mを測る。枠材の裏側には人頭大の円礫を含みつつ、主に拳大の角礫が充填されている。井戸枠の石組みの最下部では井桁状に組まれた胴木(368～371)が検出されている。すべて芯持ちの丸太材で、両端部を凹凸で仕上げ、相欠きつぎで組まれていた。樹種はすべてマツ属複雑管束亜属である。

遺物は埋め戻し土中から338～341が出土している。338・340・341は信楽焼の播鉢で、338は3条以上一単位、340は5条一単位、341は6条一単位の描目である。341は内面の底部上方に重ね焼きに伴う融着を引き剥がした跡が残る。339は瀬戸美濃焼の灰釉の皿である。

埋め戻し土の下層、底面から約55cmの上方の灰黄褐色粘土中から337の五輪塔の火輪が出土している。全体に風化が進んでおり、稜が不明瞭である。底部周辺の灰黄色粘土中からは342～348が出土している。342は土師器の皿である。完形で出土した。口縁端部内外面二か所にタールが付着しており、灯明皿と考えられる。343～345は信楽焼の播鉢である。343・344は5条一単位、345は6条一単位の描目である。345は内面が使用による摩擦で非常に平滑で、外面には蔓痕を確認できる。346は信楽焼の水指である。口縁端部にスガが付着していることから転用している可能性もある。347は信楽焼の甕の口縁部である。348は瀬戸美濃焼の魚形水滴である。いわゆる御深井輪が施されている。背びれ、尾びれ、胸びれ、口唇部が融着によって欠損している。鱗を半裁竹管状の工具による刺突で、眼は円形の浮文、鱗条やえらは沈線で表現されている。口の部分と背びれと尾びれの中間部を穿孔している。349～360は結桶の側板である。井戸の釣瓶として使われていた可能性がある。一枚の大きさは残存部から復元すると高さが約13cm、幅は口縁側が約5cm、底部側が約4cmである。個々の板材は緩やかに弧を描いている。また、底部から約2cm、6cmの高さにタガ締め印の圧痕を確認できる。同一個体を構成していたと判断した。樹種は12点中半数の6点を選択して同定した結果、すべてスギであった。361は曲物の底板である。前述の結い桶の底板の可能性もあるが確定できない。直径約17cmの円形に復元できる。ただし、釘穴が中



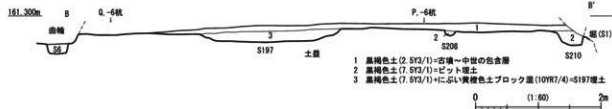
第57図 T3 ビット列

央で確認できることから、二枚以上を接いで底板としていたことが分かる。樹種はヒノキである。362は加工板材である。表面に細かな刃物痕、黒色塗布物を確認できる。363・364は用途不明材である。363部分的に欠損しているものの中央に柄穴のような方形の透かしが復元できる。また、側面に釘穴が残る。樹種はヒノキである。364はL字に屈曲した形状を呈し、側面二か所に切れ込み、釘穴を確認できる。側面が部分的に炭化している。樹種はスギである。365は用途不明品である。先端部を加工している。樹種はサカキである。366は面取りをした棒状の加工材で箸であろうか。樹種はヒノキである。367は宝珠状にロクロ引き加工してある。蓋であろうか。非常にきれいに仕上がっている。樹種はエゴノキ属である。

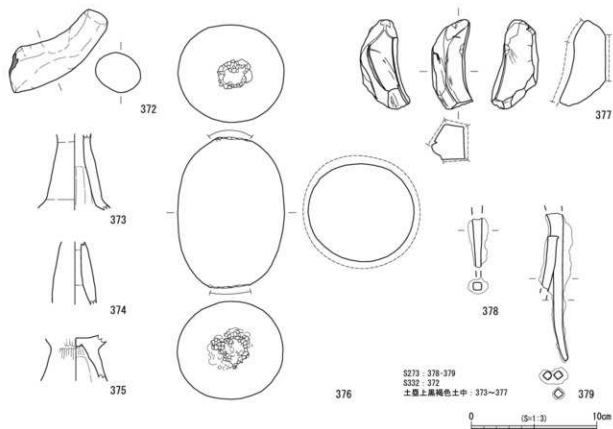
時期は、出土した遺物から最終埋め戻された段階が17世紀初頭で、16世紀後半を中心に機能していたと考えられる。



土屋タチワリ



第58図 T3全体図(下層)



第59図 T3 出土遺物

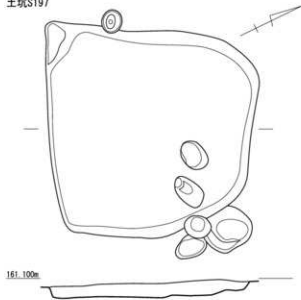
(iv) ビット列 (第57図・図版77)

ここでは曲輪南西地区の最下層で検出されたビット列について詳述する。これらのビットは、第1期造成以前の遺構と判断でき、土坑S194と同時期の可能性が高い。建物を構成している可能性が高いものの、平面的に柱（掘方）が確認できないこと、間隔が不統一であることからビット列として報告する。ビットの大きさは主に直径25～50cmの不整な円形を呈しており、深さは検出面から20cm前後を測る。主軸はN56°Wで、土塁と方向を描いている。埋土は主ににぶい黄褐色粘土（1～2cmの小石混じり）である。S190・S192・S270で柱材もしくは杭材と考えられる木質が検出されている。樹種はクリ・モミ属・サクラ属である。

◇下層 (図版79・80)

下層は土塁上および堀の外側（調査区の北側）を中心に検出されている。北東側では土塁上の黒褐色土（落ち込み1：第58図）を除去した下層から、南西側では土塁検出面で遺構が確認されている。黒褐色土からは373～377が出土している。373～375は土師器の高杯の脚部である。373・374は摩滅が著しく調整法が不明である。375は杯部と脚部の接合部周辺でミガキを確認できる。376は花崗岩製の叩石である。両極に敲打痕が認められる。377は砂岩製の砥石である。三面で使用による湾曲が認められ、残る一面でも筋状の擦痕を確認できる。

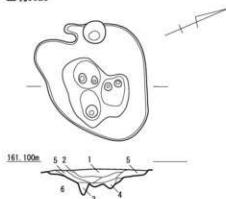
土坑S197



161.100m

埋土：黒褐色土 (2.5Y3/1) に明黄褐色ブロック (10YR6/6) 混

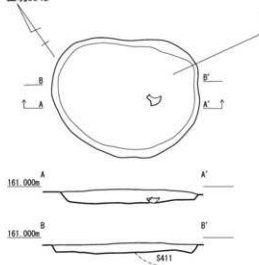
土坑S328



161.100m

- 1 黒褐色土 (10YR3/1) 炭ブロック混
- 2 褐灰色土 (10YR5/1) に明黄褐色土 (10YR6/6) ブロック混
- 3 褐灰色土 (10YR5/1)
- 4 黒褐色土 (10YR3/1) 炭ブロックを多く混
- 5 褐灰色土 (10YR5/1)
- 6 褐灰色土 (10YR5/1)
- 7 黄褐色土 (10YR8/6) 地山

土坑S342



161.000m

161.000m

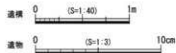
埋土：黒褐色土 (10YR3/1)
地山：明黄褐色土 (10YR6/6)



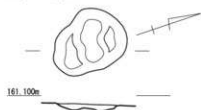
土器S-1-6



380



土坑S452 焼土



161.100m

埋土：にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 焼土塊を含む。炭化物ナシ

第60図 T3 土坑S197・328・342・452

1. 溝

S578 (第58図・図版84) 調査区の南東で検出された溝である。ちょうど土塁を横断する方位で検出されている。幅1.7mで、深さは遺構検出面から45cmを測る。断面形は逆台形で底面はほぼ平坦である。埋土は上下2層で上層が灰白色粗砂(明黄褐色土ブロック混)、下層が褐灰色土(鉄分混)である。遺物は図化できない土師器と須恵器の細片が出土している。

2. 土坑

S197 (第58・59図) 土塁の北側で検出された土坑である。一辺2.2mのやや不整な隅丸方形を呈している。深さは検出面から15cmで埋土は黒褐色土の単層である。

遺物は図化できない土師器の細片が出土している。受口状口縁と思われる細片も含まれる。

S328 (第58・59図・図版84) 土塁の北側、土坑S197の西側で検出された土坑である。1.1m×1.2mの不整形を呈しており、深さも検出面から最深部では30cm程度を測る。

遺物は図化できない土師器の細片が出土している。

S342 (第58・60図・図版80・81) 土塁の北側、竪穴建物S369の南西側で検出された土坑である。長軸1.5m、1.2mのやや不整な楕円形を呈している。深さは検出面から10~15cmを測る。埋土は黒褐色土である。

遺物は380の白磁の碗が中央、やや南寄り底面に接して、正位で出土している。釉はややくすんだ色調で、見込み部分に焼成時の荒れが認められる。

時期は11世紀後半から12世紀前半である。

S452 (第58・60図・図版84) 土塁の北側で検出された土坑である。長軸が83cm、短軸が65cmのやや不整な楕円形を呈し、深さは遺構検出面から最深部で18cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土(焼土塊を含む)である。地山面に焼け締まったような痕跡は認められなかった。

遺物は出土していない。

3. ビット

S273 (第58・59図) 土塁の北側、竪穴建物S369の西側で検出されたビットである。一辺約25cmの隅丸方形で、深さは遺構検出面から約10cmを測る。埋土は黒褐色土である。

遺物は378・379の鉄釘が出土している。共に断面方形である。

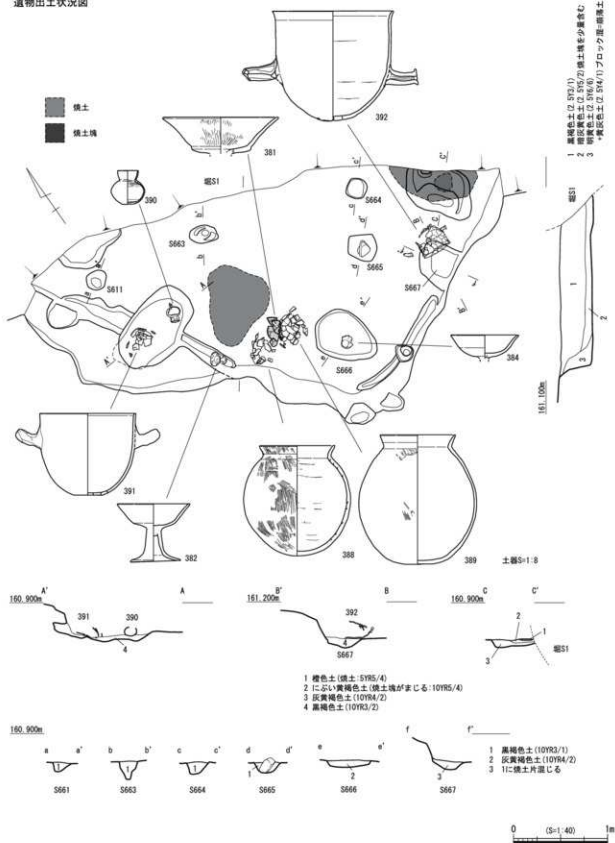
S332 (第58・60図) 土塁の北側、土坑S328の西側で検出されたビットである。直径45cmの円形で、深さは遺構検出面から46cmを測る。埋土は黒褐色土である。

遺物は372の土師器の甔の把手が出土している。全体に摩滅が著しい。

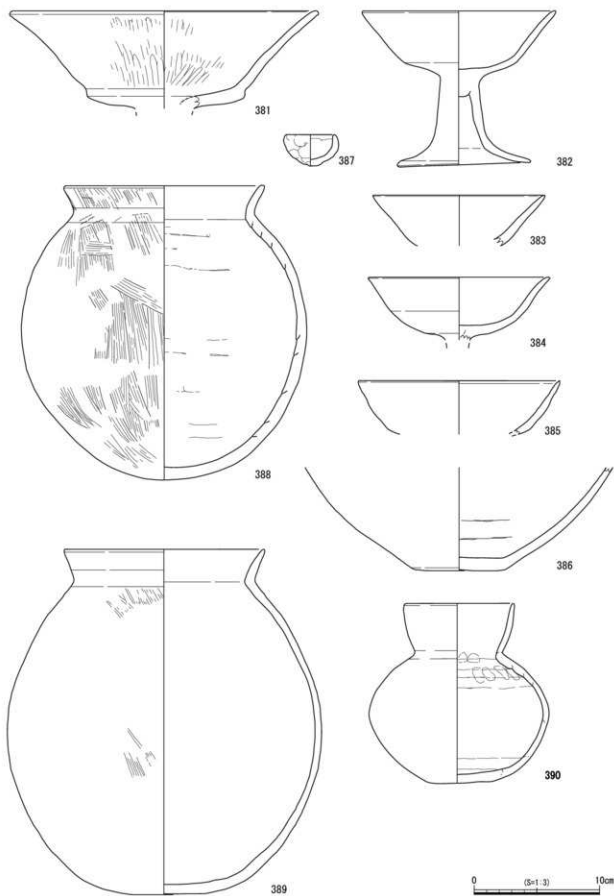
4. 竪穴建物

S369 (第58・61~63図・図版81~83) 土塁の北側、土坑S342の北東側で検出された竪穴建物である。建物の北東側が堀S1に切られている。北西—南東辺が約4m、北東—南西辺が約3.1m、主軸をN28°W方向である。深さは検出面から約30cmを測る。埋土は、上層から黒褐色土、暗灰黄色土で、南西側の肩部は緩やかに落ち込みながら途中で垂直の掘り込みを確認できることから、埋没段階で肩部が崩れたことが分かる。床面はほぼ平坦で、貼り床は認められなかった。また、

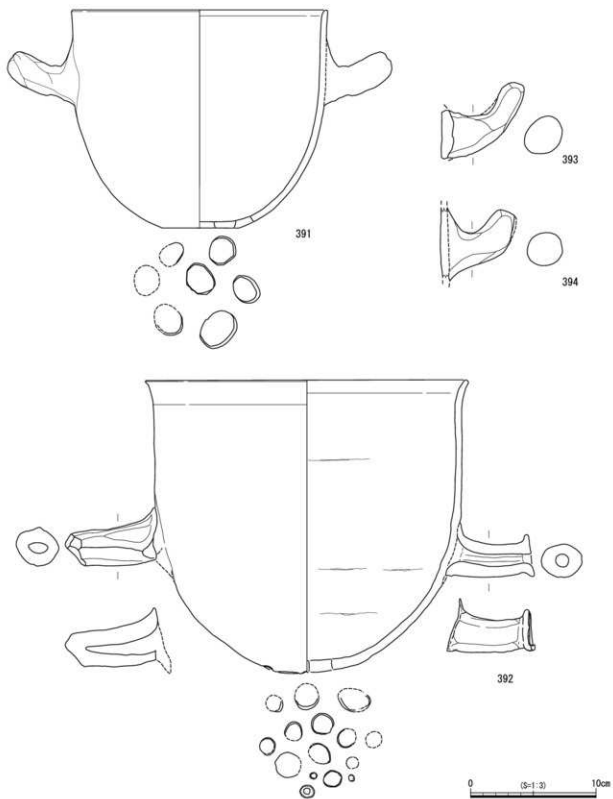
遺物出土状況図



第61図 T3 竪穴建物S369



第62図 T3 竖穴建物S369出土遺物



第63図 T3 竪穴建物S369出土遺物2

北西—南東辺と北東—南西辺の一部で壁溝が確認された。幅は約10cmで、深さは床面から2～3cmを測る。埋土は灰黄褐色土である。床面には土器がほぼ原位置を保った状態で検出され、部分的に焼土の広がりも確認されている。焼土は南東—北西辺の中央あたりと南西—北東辺の端の二か所で検出されている。南東—北西辺側は面的に焼土が散っている状況で、床面が硬化しているような状態は確認できなかった。南西—北東端は土坑状の凹みが確認できたことから炉のような構造物である可能性が考えられる。床面でピットが複数検出されているが、支柱穴と確信できるピットはなかった。床面で検出されたピット（S661・663・664・665・667）は直径もしくは一辺が20～25cmのやや不整な円形もしくは隅丸方形で、深さは床面から10～20cmを測る。埋土は主に黒褐色土である。S665は中央部で角礫が出土している。

遺物は381～394が出土している。壁際から原位置を保った状況で出土しているものが多い。出土レベルも床面直上である。381～385は土師器の高杯である。381は甕（388・389）と同じ場所で固まって出土している。器表面がやや荒れているものの、内外面ともにミガキを確認できる。382は南東—北西辺の肩部の比較的高い位置から出土している。杯部の上端面が床面から約30cm上方である。384はピットS666から出土している。底面から10cmほど上方で、正位で検出されている。387は手捏土器である。386・388・389は土師器の甕である。388・389は高杯（381）と同じ地点でまとめて出土している。体部下半部にススが認められる。390は土師器の壺で、南東—北西辺の中央の土坑から甌（391）とともに原位置で検出されている。この土坑は長軸約95cm、短軸約60cmの楕円形を呈し、壁側でややオーバーハンクしている。埋土は黒褐色土である。検出当初はカマドの可能性を考慮して掘り進めたが、埋土中に焼土や炭化物が含まれないことから可能性は低いと判断した。391～394は甌およびその把手である。391は壺（390）と同じ土坑から出土している。391は全体の摩滅が著しく、遺存状態は悪い。蒸気孔は中心に一孔、その周囲を六孔が巡る形に復元できる。392は北東—南西辺中央付近で潰れた状態で検出された。器表面の摩滅が著しいため調整法が確認できない。その中で、把手がほぼ原位置で検出されており、同一個体で間違いないが、その把手は高杯の脚部を製作段階で転用したものと推定される。図の右側の把手は、脚柱部を小さく曲げて持ちやすいように成形しているが、形状は杯部を接合しない脚柱そのものである。図の左側の把手は右側とは違い外面の形状が把手形を呈しているが、中空である。そのことから右側同様に高杯の脚部と転用したと判断したい。

時期は出土している遺物から5世紀後半代と考えられる。

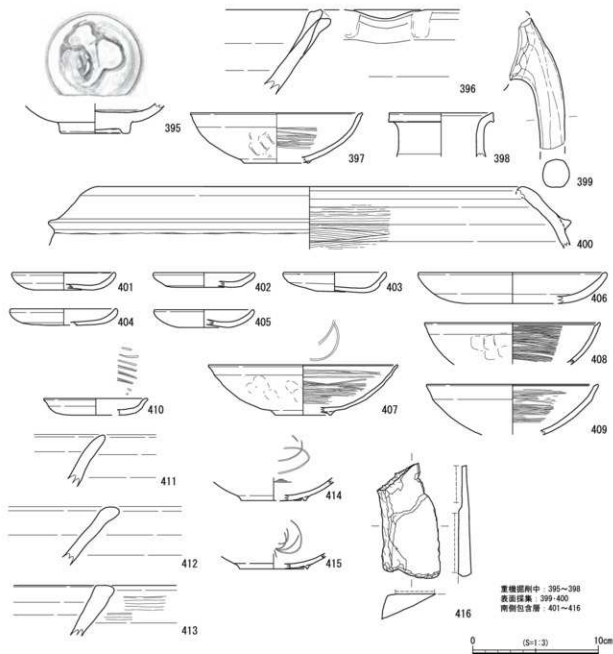
第4節 T4の調査成果（第64～98図）

T4は調査対象地のほぼ中央に位置する調査区である。北東—南西約44m、北西—南東約28～32mで、面積は1,620㎡である。調査区全体は水田であった。

基本層序（第66図）は耕土（灰色土）、明黄褐色土で、明黄褐色土が地山面＝遺構検出面である。調査区の南西側で厚さ10cm前後の遺物包含層（黄灰色土）が、明黄褐色土の上面に堆積していた。遺構検出面は標高161.3m前後である。調査区の南西側半分が溝・土塁囲いの屋敷地である。調査前はまったく想定されていなかった遺構である。遺構は溝、落ち込み、井戸、土坑、ピット等



第64図 T4 全体図

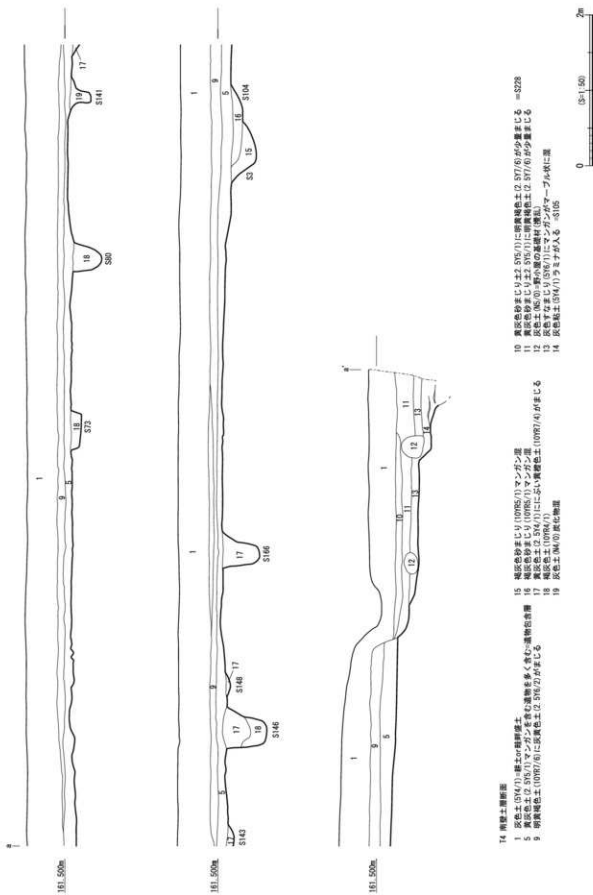


第65図 T4 出土遺物

が検出されている。遺構の主な埋土は褐灰色土～灰黄褐色土である。

調査区の遺構の記述については、調査区全体に遺構が広がっているため、最初に掘立柱建物、櫓、井戸のみ調査区（T4・5）全域を対象として詳述し、以下、遺構の密集度が高く、まとまりが見いだせる南西部を別項として各遺構の内容について記述していくこととする。

重機による表土掘削中・調査前の表面採集品が395～400、調査区の南西側に広がる包含層から401～416が出土している。395は青磁の碗である。やや緑がかった色調を示す釉である。高台の端面・内側は露胎している。見込み部分には文様を確認できるが不明瞭である。396は信楽焼の播鉢もしくは捏鉢である。片口の周辺部の小片であるため挿目の有無は確定できない。内面口縁部下にススが認められる。397は瓦器の椀である。内面に線圈状の暗文が施されている。外面に



第66図 T4 南壁土層断面図

T4 南壁土層断面

- 1 灰土 (S147)・礫土の層状土
- 5 黄灰土 (S147)マンガンを含む遺物を多く含む遺物層
- 9 明灰褐色土 (1008/6)に灰質土 (2.517/6)がまじる
- 15 褐色色砂まじり (1076S/1)マンガン層
- 16 褐色色砂まじり (1076S/1)マンガン層
- 17 黄灰土 (1076/1)に多い黄褐色土 (1008/4)がまじる
- 18 灰土 (1076/1)に多い黄褐色土 (1008/4)がまじる
- 19 灰土 (104/10)礫化層

- 10 褐色色砂まじり土 (2.515/1)に明灰褐色土 (2.517/6)が少量まじる =S228
- 11 褐色色砂まじり土 (2.516/1)に明灰褐色土 (2.517/6)が少量まじる
- 12 灰土 (1076/1)の礫状層
- 13 灰土 (1076/1)に多い黄褐色土 (1008/4)がまじる
- 14 灰土 (104/1)がまじる =S105

は指押さえ痕が明瞭に残る。398は須恵器の壺の口縁部である。399は瓦質土器の羽釜の脚部である。全体が摩滅気味である。400は土師器の羽釜である。401～406は土師器の皿である。口縁部にヨコナデを施し、端部を丸く収めている。407～409・414・415は瓦器の椀、410は瓦器の皿である。瓦器の椀は内面に細かな単位の圏線状の暗文を施している。外面には暗文は確認できない。410は口縁部を強くヨコナデし、端部を外方へ摘み出している。見込み部分に平行線状の暗文を確認できる。411は東播系須恵器の捏鉢、412は信楽焼の捏鉢、413は土師器の鍋の口縁部である。416は砂岩製の砥石である。下部が剥離しているが、上面は使用により平滑である。包含層の時期は、出土している遺物から13世紀前葉から中葉であると考えられる。

1. 掘立柱建物

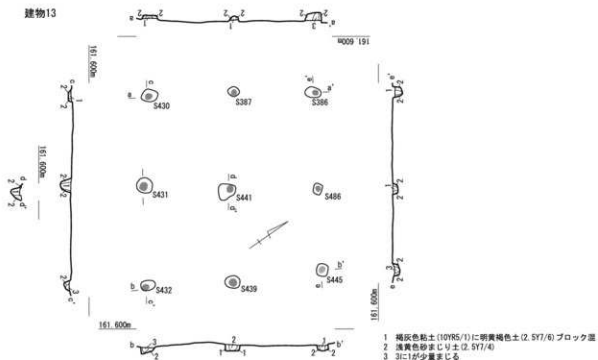
掘立柱建物はT4・5で通し番号を付与している。検出・確定していく段階で番号を付与しているため番号順に並んでいない。両調査区に跨って検出されている建物は、T4で詳述することとする。

建物11 (第64・67図・図版105) 調査区の東側、T5に跨って検出された身舎が北西—南東3間(約6.5m)、北東—南西3間(約6.5m)、一面庇付の総柱の掘立柱建物である。庇部分もいれて平面積は50.7㎡である。建物4・柵5と切りあい関係がある。建物4とは、構成するピット(T5-S845)にT5-S843が切られている。柵5とは平面的な切りあい関係が認められるが構成するピットの直接的な切りあい関係がないため前後関係は確定できない。建物の主軸はN38°E方向で、柱間は北西—南東が2.2m、2.1m、2.2m、北東—南西が2.2m、2.1m、2.2mである。身舎と庇の間は1.3mを測る。全体に柱筋が通っている。掘方は直径もしくはは一辺30～45cmの円形もしくは隅丸方形で、深さはややばらつきが認められるが、主に遺構検出面から25～40cmを測る。ほぼすべての掘方で柱痕を確認できる。柱痕は直径15cm前後の円形を呈している。埋土はおもに、掘方がにぶい黄色土、柱痕が浅黄色土(暗灰黄色土)である。S457で柱根が検出されている。樹種はモミ属である。

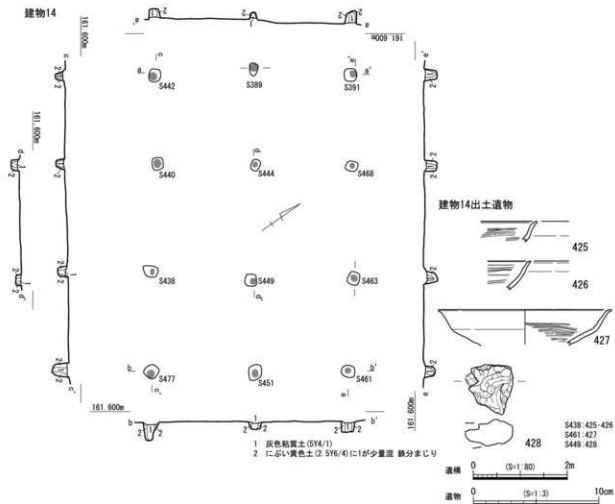
遺物はT4-S455、T5-S493・498から土師器、瓦器の図化できない細片が、T5-S478からは417の土師器の皿、418・419の瓦器の椀が出土している。418・419は内面に圏線状の暗文を確認できる。外面には認められない。時期は出土している遺物が少量・小片であるが、おおむね13世紀初めから中頃と考えられる。

建物12 (第64・68図・図版105) 調査区の東側、建物11の北東側、T5に跨って検出された身舎が北西—南東4間(約8.2m)、北東—南西4間(約8.7m)の一面庇付の掘立柱建物である。庇部分もいれて平面積は79.54㎡である。建物4と柵5と平面的な切りあい関係が認められるが、それぞれを構成する柱穴の直接的な切りあい関係がないため、前後関係を確定できない。建物の主軸はN32°W方向で、柱間は北西—南東が2.1m、2.1m、1.9m、2.1m、北東—南西が2.1m、2.1m、2.4m、2.1mである。身舎と庇の間は約1mを測る。全体に柱筋が通っている。掘方は直径もしくはは一辺25～35cmの円形もしくは隅丸方形で、深さはややばらつきが認められるが、主に遺構検出面から25～40cmを測る。ほぼすべての掘方で柱痕を確認できる。柱痕は直径15cm前後の円形を呈している。埋土はおもに掘方がにぶい黄色土、柱痕が灰色土である。S409で柱根が検出され

建物13



建物14



第69図 T4 建物13・14

ている。樹種はヒノキである。

遺物はT5-516・524・526から土師器、瓦器の図化できない細片が、T4-S410からは420・422の瓦器の椀、421・423の信楽焼の播鉢もしくは捏鉢、T5-S526からは424の瓦器の椀が出土している。420・422・424の瓦器の椀は内面に圏線状の暗文が施されている。外面には暗文は確認できない。421は2条以上一単位の播目、423は小片のため播鉢か捏鉢か確定できない。時期は出土している遺物が少量・小片であるが周囲の遺構の状況から421・423は混入と判断して、おおむね13世紀初めから中頃と考えておきたい。

建物13 (第64・69図) 調査区の中央やや東より、建物11の北西側で検出された、北西—南東2間(約3.8m)、北東—南西2間(約4m)の総柱の掘立柱建物である。平面積は15.2㎡である。建物14と平面的な切りあい関係が認められる。しかし、建物を構成するピットの直接的な切りあい関係がないために前後関係は確定できない。建物の主軸はN35°E方向で、柱間は北西—南東が1.9m、2.1m、北東—南西が1.7m、1.8mである。柱筋に一部乱れがみられる。掘方は直径もしくは一辺30~45cmの円形もしくは隅丸方形で、深さはややばらつきが認められるが、主に遺構検出面から15~30cmを測る。ほぼすべての掘方で柱痕を確認できる。柱痕は直径15cm前後の円形で、埋土はおもに掘方が浅黄色砂混じり土、柱痕が褐色灰色粘土(明黄褐色土ブロック混)である。

遺物はS439・441から図化できない土師器、瓦器の細片が出土している。

建物14 (第69図) 調査区の中央やや東寄り、欄5の南西側で検出された北西—南東3間(約6.2m)、北東—南西2間(約4.2m)の掘立柱建物である。平面積は79.54㎡である。建物の主軸はN35°E方向で、柱間は北西—南東が2.1m、2.3m、1.8m、北東—南西が2.1m、2.1mである。全体に柱筋がおおむね通っている。掘方は直径もしくは一辺15~35cmの円形もしくは隅丸方形・長方形で、深さはややばらつきが認められるが、主に遺構検出面から15~40cmを測る。すべての掘方で柱痕を確認できる。柱痕は直径15cm前後の円形を呈している。埋土はおもに掘方にぶい黄色土、柱痕が灰色粘質土である。

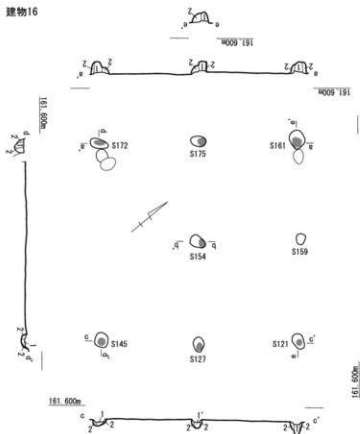
遺物はS391・442・477から土師器、瓦器の図化できない細片が、S438の柱痕から425・426の瓦器の椀、S449から428の鍛冶滓、S461から427の瓦器の椀が出土している。

時期は出土している遺物が少量・小片であるが、おおむね13世紀初めから中頃と考えておきたい。

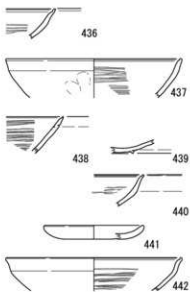
建物15 (第64・70図) 調査区の南西側、溝S3(T4-S410)の内側(南西側)で検出された北西—南東3間(約6.8m)、北東—南西2間(約4m)の一面庇付の掘立柱建物である。庇部分もいれて平面積は27.2㎡である。建物16と溝S3と切りあい関係が認められるが、建物16とは建物を構成する柱穴の切りあい関係から建物16が後出し、溝S3には切られている。建物の主軸はN37°E方向で、柱間は北西—南東が2.4m、2.2m、2.2m、北東—南西が2.1m、2.1mである。身舎と庇の間は約1.3mを測る。全体に柱筋が通っている。掘方は直径もしくは一辺25~35cmの円形もしくは隅丸方形・楕円形で、深さはややばらつきが認められるが、主に遺構検出面から15~30cmを測る。ほぼすべての掘方で柱痕を確認できる。柱痕は、直径15cm前後の円形を呈している。埋土はおもに掘方が明黄褐色土、柱痕が黄灰色土である。

遺物はS122・158・171・183・186・191から土師器、瓦器の図化できない細片が、S95からは429の瓦器の椀、S98の柱痕から430の土師器の皿、S150から431の瓦器の椀、153から434の瓦器

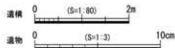
建物16



建物16出土遺物

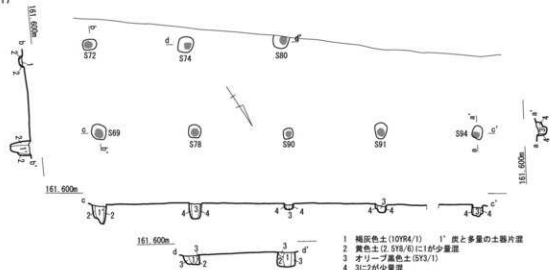


S121-436-437
S154-438
S161-439
S172-440-441
S175-442



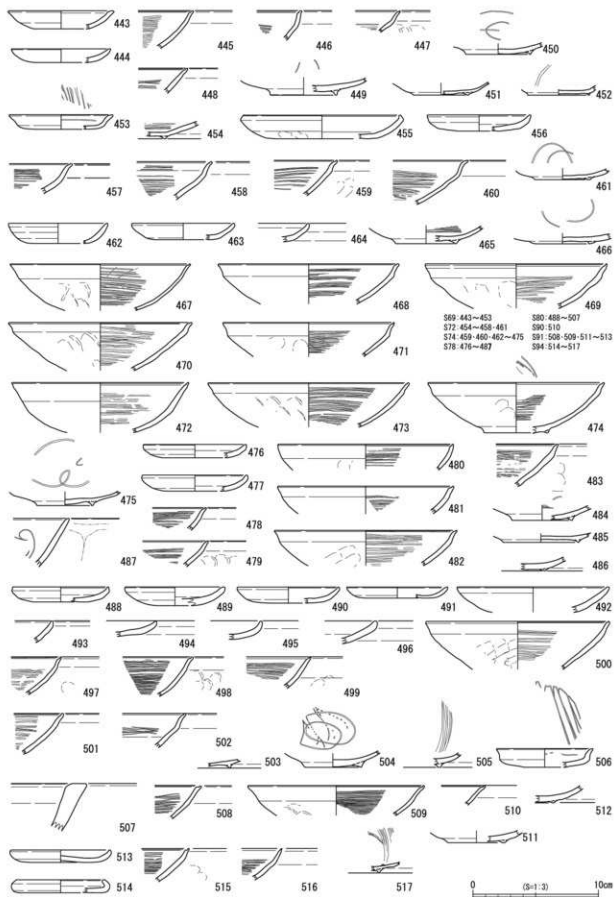
- 1 黒褐色土 (10YR3/1) に明黄褐色土 (10YR6/6) が少量混
- 1' 灰まじり
- 2 明黄褐色土 (10YR6/6) に黒褐色土 (10YR3/1) が少量混

建物17



- 1 褐灰色土 (10YR4/1) 1' 灰と多量の土器片混
- 2 黄灰色土 (S18/6) に1が少量混
- 3 オリーブ黒色土 (S13/1)
- 4 3に2が少量混

第71図 T4 建物16・17



第72図 T4 建物17出土遺物

の椀、掘方から432・433の瓦器の椀、S174の掘方から435の瓦器の椀が出土している。出土している瓦器の椀は内面に圏線状の暗文が施されているが外面には暗文は確認できない。

時期は出土している遺物が少量・小片であるが周囲の遺構の状況から、おおむね13世紀初めから中頃と考えておきたい。

建物16 (第64・71図) 調査区の南西側、溝S1 (T4-S365) の内側 (南西側) で検出された北西—南東2間 (約4.2m)、北東—南西2間 (約4.2m)、平面積が17.64㎡の掘立柱建物である。建物15、柵6・7と切りあい関係が認められる。建物15とは建物を構成する柱穴の切りあい関係から建物16が後出し、柵6・7とは構成するピットの直接の切りあい関係がないため前後関係は明確にできない。建物の主軸はN38°E方向で、柱間は北西—南東が2.1m、2.1m、北東—南西が2.1m、2.1mである。全体に柱筋が通っている。掘方は直径もしくは一辺25～35cmの円形もしくは隅丸長方形・楕円形で、深さはややばらつきが認められるが、主に遺構検出面から15～30cmを測る。ほぼすべての掘方で柱痕を確認できる。柱痕は直径15cm前後の円形を呈している。埋土はおもに掘方が明黄褐色土 (黒褐色土少量混)、柱痕が黒褐色土 (明黄褐色土少量混) である。

遺物はS127・159から土師器の図化できない細片が、S121からは436・437の瓦器の椀、S154から438の瓦器の椀、S161の掘方から439の瓦器の椀、S172から440の瓦器の椀、掘方から441の土師器の皿、S175から442の瓦器の椀が出土している。出土している瓦器の椀は内面に圏線状の暗文が施されているが外面には暗文は確認できない。

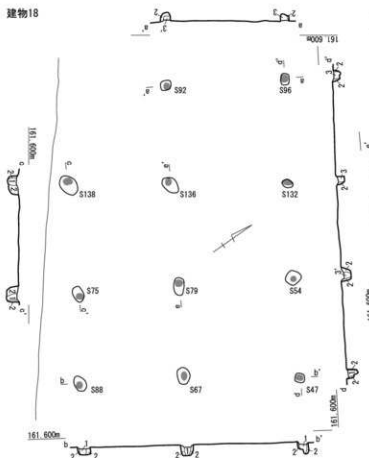
時期は出土している遺物が少量・小片であるが周囲の遺構の状況から、おおむね13世紀初めから中頃と考えておきたい。

建物17 (第64・71図) 調査区の南西端、溝S1 (T4-S365) の内側 (南西側) で検出された北西—南東4間 (約8m)、北東—南西1間以上 (約1.8m以上) の掘立柱建物である。建物の南西側は調査区外に延びている。建物18と平面的な切りあい関係が認められる。建物を構成する柱穴の切りあい関係が確認できないため前後関係は明確にできない。建物の主軸はN29°E方向で、柱間は北西—南東が2.0m、2.0m、2.0m、2.0m、北東—南西が1.8mである。全体に柱筋が通っている。掘方は直径もしくは一辺25～35cmの円形もしくは隅丸方形で、深さはややばらつきが認められるが、主に遺構検出面から15～45cmを測る。検出されているピットは、ほぼすべての掘方で柱痕を確認できる。柱痕は直径15cm前後の円形を呈している。埋土はおもに掘方がオリブ黒色土、柱痕が褐灰色土である。

遺物はS69から443～453、S72から454～458・461、S74から459・460・462～475、S78から476～487、S80から488～507、S90から510、S91から508・509・511～513、S94から514～517が出土している。出土している瓦器の椀は内面に圏線状の暗文が施されているが、外面には暗文は確認できない。また、高台部もほとんど高さがなく、粘土帯を撫でつけたような形状である。瓦器の皿は見込み部分に平行線状、体部内面は圏線状の暗文を施し、口縁を強くヨコナデし、端部を外方に摘み出している。487は青磁の碗の口縁部片で外面には鎬の有無は不明である蓮弁文が、内面にはヘラ状工具による文様を確認できる。507は土師器の鍋の口縁部である。

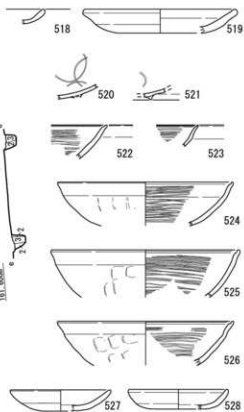
時期は出土している遺物が少量・小片であるが周囲の遺構の状況から、おおむね12世紀末から13世紀初頭と考えておきたい。

建物18



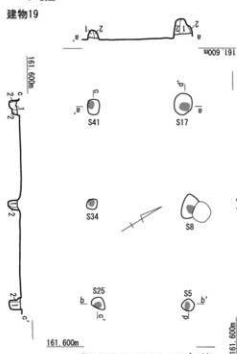
- 1 淡黄色土(2.5Y6/4)に黄灰色土(2.5Y6/1)がブロック状に混
- 2 淡黄色土(2.5Y6/4)に黄灰色土(2.5Y6/1)が少量混
- 3 黄灰色土(2.5Y6/1)
- 4 灰土

建物18出土遺物



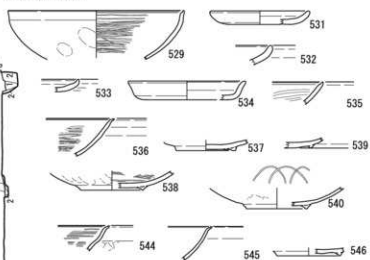
- S47: 518
- S54: 519-520
- S67: 521-523
- S88: 524
- S92: 525-527
- S96: 528

建物19

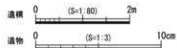


- 1 純灰色土(10YR4/1)
- 2 明黄褐色土(2.5Y7/6)に1が少量混

建物19出土遺物



- S5: 529
- S17: 531-538
- S25: 539-540
- S41: 544-546



第73図 T4 建物18・19

建物18 (第64・73図) 調査区の南西端、溝S1 (T4-S365)の内側(南西側)で検出された北西—南東3間(約6.2m)、北東—南西2間以上(約4.6m以上)の掘立柱建物である。建物の南西側は調査区外に延びている。建物15・16・17と平面的な切りあい関係が認められる。ともに建物を構成する柱穴の切りあい関係が確認できないため前後関係は明確にできない。建物の主軸はN31°E方向で、柱間は北西—南東が2.1m、2.0m、2.1m、北東—南西が2.4m、2.1mである。全体に柱筋が通っている。掘方は直径もしくは一辺25~35cmの円形もしくは隅丸方形で、深さはややばらつきが認められるが、主に遺構検出面から15~35cmを測る。検出されているピットでは、ほぼすべての掘方で柱痕を確認できる。柱痕は直径15cm前後の円形を呈している。埋土はおもに掘方が淡黄色土、柱痕が淡黄色土(黄灰色土ブロック混じり)である。

遺物はS75・79・136から土師器・瓦器の図化できない細片が、S47から518、S54から519・520、S67から521~523、S88から524、S92から525~527、S96から528が出土している。出土している瓦器の椀は内面に圏線状の暗文が施されているが、外面には暗文は確認できない。また、外面の指押さえ痕が非常に目立つ。高台部はほとんど高さがなく、粘土帯を撫でつけたような形状である。

時期は出土している遺物が少量・小片であるが、周囲の遺構の状況から、おおむね13世紀初頭から13世紀中頃と考えておきたい。

建物19 (第64・73図) 調査区の南西側、溝S1 (T4-S365)の内側(南西側)で検出された北西—南東2間(約4.2m)、北東—南西1間(約1.9m)、平面積が7.98㎡の掘立柱建物である。建物の主軸はN33°E方向で、柱間は北西—南東が2.1m、2.1m、北東—南西が1.9mである。全体に柱筋が通っている。掘方は直径もしくは一辺25~35cmの円形もしくは隅丸方形で、深さはややばらつきが認められるが、主に遺構検出面から10~40cmを測る。検出されているピットでは、ほぼすべての掘方で柱痕を確認できる。柱痕は直径15cm前後の円形を呈している。埋土はおもに掘方が明黄褐色土(褐灰色土が少量混)、柱痕が褐灰色土である。

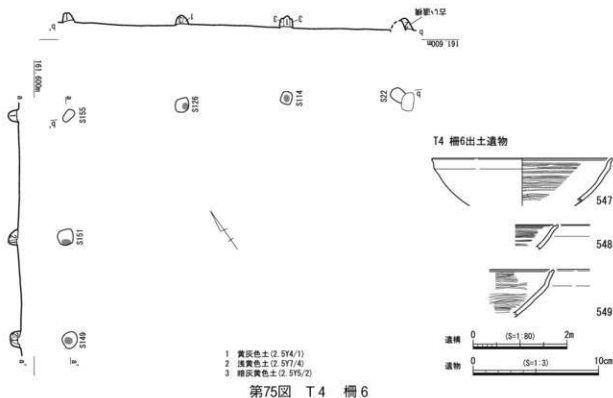
遺物はS8・34から土師器・瓦器の図化できない細片が、S5から529、S17から531~538、S25から539・540、S41から544~546が出土している。出土している瓦器の椀は内面に圏線状の暗文が施されているが外面には暗文は確認できない。また、外面の指押さえ痕が非常に目立つ。高台部はほとんど高さがなく、粘土帯を撫でつけたような形状である。

時期は出土している遺物が少量・小片であるが周囲の遺構の状況から、おおむね13世紀初頭から13世紀中頃と考えておきたい。

2. 柵

柵はT4・5で通し番号を付与している。検出・確定していく段階で番号を付与しているため番号順で並んでいない。両調査区に跨って検出されている柵は、T4で詳述することとする。

柵5 (第64・74図) 調査区の北東側、T4-5に跨る状況で検出された柵である。建物4・11・12と平面的な切りあい関係がある。ただし、構成されるピットで直接的な切りあい関係が認められないので前後関係は明確にできない。平面形は、北西—南東5間(約10.6m)、北東—南西3間(約6.2m)の北東に開く「コ」の字形を呈している。また、北東—南西列の北東から2列目



は内側に1間分が延びている。主軸は $N37^{\circ}E$ 方向で、柱間は北西—南東列が2.1m、2.1m、2.1m、2.1m、2.2m、北東—南西が1.9m、2.1m、2.2mである。内側に延びている1間分は2.1mである。掘方は直径もしくはは一辺25~35cmの円形もしくはは隅丸方形で、深さはややばらつきが認められるが、主に遺構検出面から10~35cmを測る。ほぼすべての掘方で柱痕が確認できた。柱痕は直径15cm前後の円形を呈している。埋土はおもに掘方が明黄褐色土、柱痕が褐灰色土である。

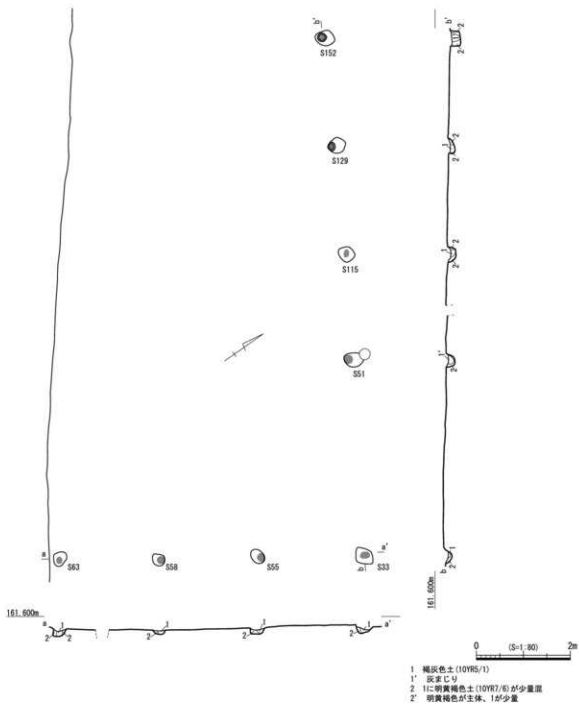
遺物は、S512から図化のできない土師器の細片が出土しているのみである。

柵6 (第64・74図) 調査区の北西側、溝S1 (T4-S365)の内側(南西側)で検出された柵である。建物15・16と平面的な切りあい関係が認められる。それぞれ建物を構成する柱穴の切りあい関係が確認できないため前後関係は明確にできない。北西—南東3間(6.8m)、北東—南西2間以上(約4.8m)で「L」字形で検出されている。主軸は $N35^{\circ}E$ 方向で、柱間は北西—南東が2.2m、2.1m、2.5m、北東—南西が2.7m、2.1mである。掘方は直径もしくはは一辺25~35cmの円形もしくはは隅丸方形で、深さはおおむね遺構検出面から20cm前後を測る。検出されている柱穴の大半で柱痕を確認できる。柱痕は直径15cm前後の円形を呈している。埋土はおもに掘方が浅黄色土、柱痕が黄灰色土である。

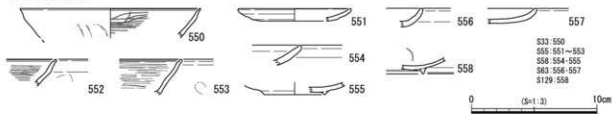
遺物はS22・126から土師器・瓦器の図化できない細片が、S151から547~549が出土している。出土している瓦器の腕は、内面に圏線状の暗文が施されているが、外面には暗文は確認できない。

時期は出土している遺物が少量・小片であるが周囲の遺構の状況から、おおむね13世紀初頭から13世紀中頃と考えておきたい。

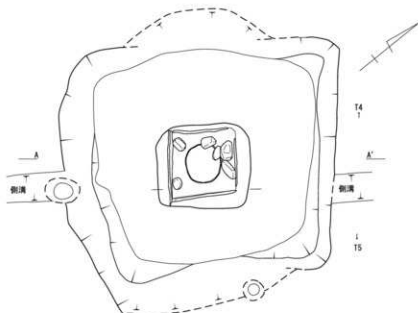
柵7 (第64・76図) 調査区の北西側、溝S1 (T4-S365)の内側(南西側)で検出された柵である。建物15・16と平面的な切りあい関係が認められる。それぞれ建物を構成する柱穴の切りあい



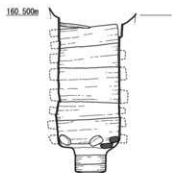
T4 柵7 出土遺物



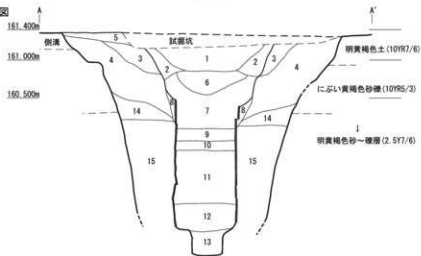
第76図 T4 柵7



立面図



断面図



- | | | |
|---|-------|----------------------------------|
| 1 黒褐色土(10YR3/1)に明黄色土(10YR7/6)ブロック埋 | 第2-1層 | 9 7と色調が同じ。砂質が強く入り井戸材等が混じる=2-4層 |
| 2 黒褐色土(10YR3/1) | | 10 灰色細砂混じり(2.5Y4/1)=2-5層(植物質を含む) |
| 3 褐色土(10YR4/1)に明黄色色砂質土ブロック(10YR7/6)=少量 | 第3層 | 11 オリーブ灰色粘質土(5Y6/1)=2-6層(やや砂混じり) |
| 4 褐色土(10YR4/1)に明黄色色砂質土ブロック(10YR7/6)=3よりブロック多い | | 12 黒褐色粘質土(2.5Y3/1)=2-7層(植物質混) |
| 5 褐色色砂混じり土(10YR4/1)=1層 | | 13 褐色粘質土(10YR4/1)=最下層 |
| 6 褐色粘土(10YR4/1)=2-2層 | | 14 灰色砂混じり(5Y5/1) |
| 7 灰色粘土(5A/0)=2-3層(やや砂質) | | 15 灰色粘質土(5Y5/1) |
| 8 オリーブ灰色粘土(2.5Y5/1)=井戸材の隙方? | | |

0 (5=1.50) 2m

第77図 T4 井戸S2

関係が確認できないため前後関係は明確にできない。北西—南東4間(10.8m)、北東—南西3間以上(約6.4m以上)で「L」字形で検出されている。南西側は調査区外に延びている可能性が高い。主軸はN35°E方向で、柱間は北西—南東が2.2m、2.2m、2.2m、4.2m、北東—南西が2.2m、2.2m、2.2mである。北西—南東列の柱間の長い地点については、間で柱穴が確認できなかった。掘方は直径もしくは一辺25~35cmの円形もしくは隅丸方形で、深さはおおむね遺構検出面から15cm前後を測る。検出されている柱穴の大半で柱痕を確認できる。柱痕は直径15cm前後の円形を呈している。埋土はおもに掘方が褐灰色土(明黄褐色土が少量混)、柱痕が褐灰色土である。

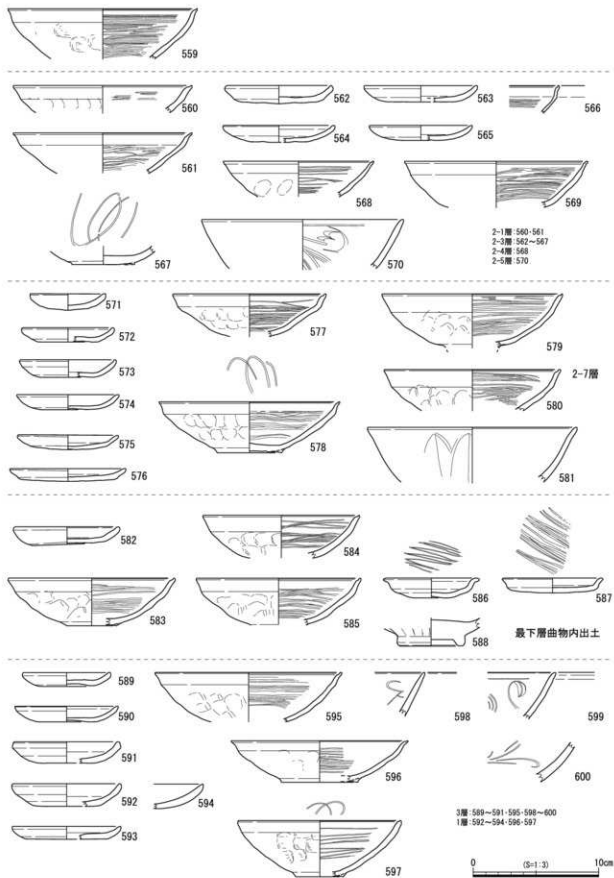
遺物はS33から550の瓦器の椀、S55から551の土師器の皿、552・553の瓦器の椀、S58から544の土師器の皿、555の瓦器の椀、S63から556・557の土師器の皿、S129から558の瓦器の椀が出土している。出土している瓦器の椀は、内面に圏線状の暗文が施されているが外面には暗文は確認できない。

時期は出土している遺物が少量・小片であるが周囲の遺構の状況から、おおむね13世紀初頭から13世紀中頃と考えておきたい。

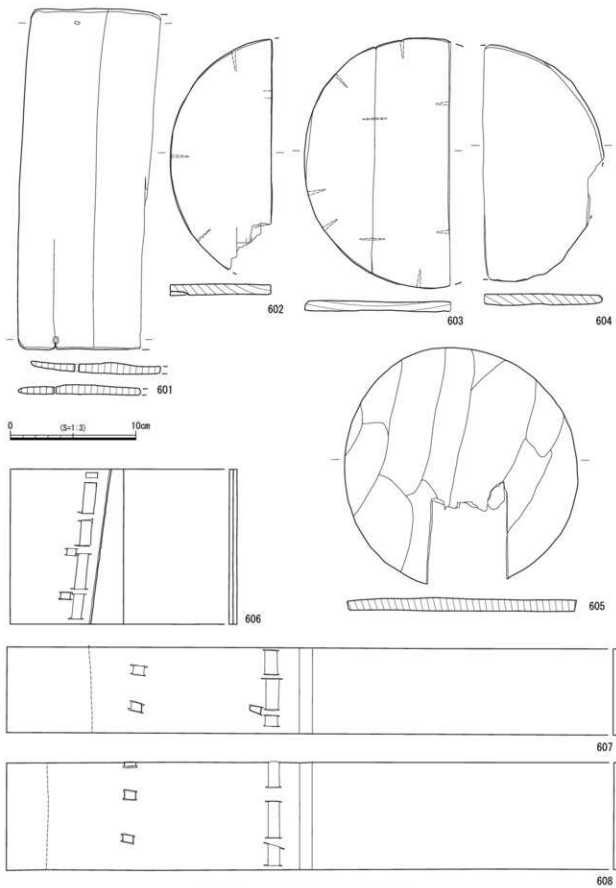
3. 井戸

S2(第64・77~81図・図版96~100) 調査区の北西側、溝S1(T4-S365)の内側(南西側)で検出された井戸である。この井戸S2は平成20年度に実施された試掘調査の際に検出された10トレンチのSX1001である。試掘調査時はトレンチ規模の制約もあり廃棄土坑と判断されていた。しかし、今回の調査で面的に広げた結果、井戸であることが判明した。掘方の規模は、北西—南東辺が約3m、北東—南西辺が3.5mである。掘方の埋土は上層から褐灰色土(明黄褐色砂質土ブロック混)、灰色砂混じり土、灰色粘質土である。最下層は湧水が激しかったため確認できていない。井戸の枠材は、掘方の中央部で遺構検出面から約90cm下がったところで検出された。土層の観察から枠材が現状では残存していないものの、検出面まで存在していたことがわかっていいる。井戸枠は約85cm×約85cmの正方形を呈し、深さは遺構検出面から約2.9mを測る。井戸の枠内の埋土は、上層から黒褐色土(明黄褐色土ブロック混)、黒褐色土、褐灰色土、灰色粘質土、灰色粗砂混じり土、オリブ灰色粘質土、黒褐色粘質土、褐灰色粘質土である。灰色粘土中からは、腐食して落下したと考えられる上部の枠材が包含されていた。そして最下層には曲物が2段積み上げられ、水溜めを形成していた。井戸の枠材は両側面が凸型のものと凹型のものが交互に積み上げられた蒸籠組で、5段が残存していた。枠内に落下していた材からもう一段復元することができ、合計6段である。樹種は、回収することができた下から3段目以上の材(609~615)はすべてクリであった。加工痕は、井戸枠の内側は表面が腐食していたため確認できなかったが、外側(掘方埋土に接していた面)はハツリ痕が確認できた。水溜めに使用していた曲物(607・608)はともに直径48cmに復元でき、緞じ皮が残存していた。樹種はヒノキである。

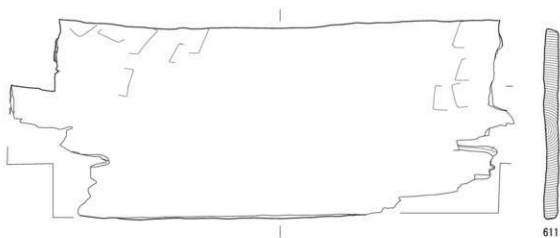
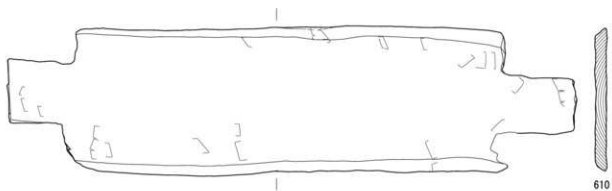
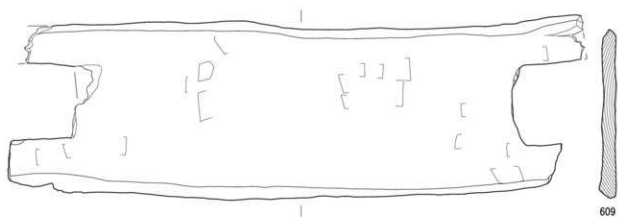
遺物は、各層単位で取り上げている。なお、試掘時に部分的に一度掘削され、そのあと埋め戻されていたが、その埋め戻し土中から559の瓦器の椀が出土している。取り上げ層位は2-1層(第77図1・2層=井筒内)、2-3層(第77図7層=井筒内)、2-4層(第77図9層=井筒内)、2-5層(第77図10層=井筒内)、2-7層(第77図12層=井筒内)、最下層曲物内(第77図13層=井



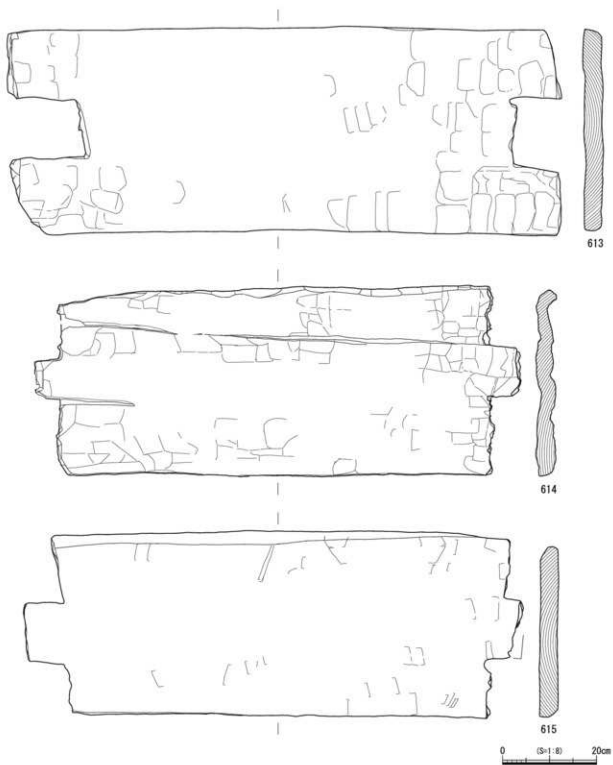
第78図 T4 井戸S2 出土遺物 1



第79図 T4 井戸S2 出土遺物2



第80図 T4 井戸S2 出土遺物3



第81図 T4 井戸S2 出土遺物4

筒内)、第3層(第77図3・4層=掘方)、第1層(第77図5層=掘方)である。遺物は全体的に遺存状態がよく、瓦器はローリングを受けておらず、銀化した器壁が非常によく残っていた。

2-1層からは、560・561の瓦器の椀が、2-3層からは562-565の土師器の皿、566・567の瓦器の椀、2-4層から568・569の瓦器の椀、604の曲物の底板、2-5層から570の青磁の椀が出土している。570は内面に櫛描き文が施されている。軸はややくすんだ灰白色を呈している。604は一枚物の底板で、樹種はヒノキである。また、層位で取り上げていないが、井筒内の埋土から601の板材、603・605の曲物の底板が出土している。601は上端と下端に釘穴があけられている。樹種はスギである。603は3枚以上を木釘によって組み合わせていたものと推定できる。樹種はヒノキである。605は一枚物の底板で、表面に幅広の加工痕を確認できる。樹種はスギである。2-7層からは、571-581が出土している。580の瓦器の椀の内面には暗文に切られるハケ目を確認できる。581は青磁の椀で外面に鑄連弁文が施されている。軸はやや青味がかっている。

井筒内最下層の曲物内からは582-588・602・606が出土している。586・587の瓦器の皿はともに見込みに平行線状の暗文が見られるが、体部内面に圏線状の暗文は認められない。588は青磁の椀の高台部である。鮮やかなやや緑がかった青色を呈する釉で、連弁の稜線を確認できる。高台の内側は露胎している。602は側板との接着面だけではなく、内側にも釘穴を確認できることから複数の板材を組み合わせていたものと考えられる。樹種はヒノキである。606は小型の曲物で最下層の水溜め用の曲物内に落ち込むような状態で出土した。側板はほぼ完存していたが底板は欠損していた。側板は2重で止めてあった。樹種はヒノキである。

掘方(第1・3層)からは589-600が出土している。598-600は青磁の椀の口縁部および体部片であるが、やや緑がかった色調を呈する釉である。599は外面が白い粉を振ったような状況を呈する。

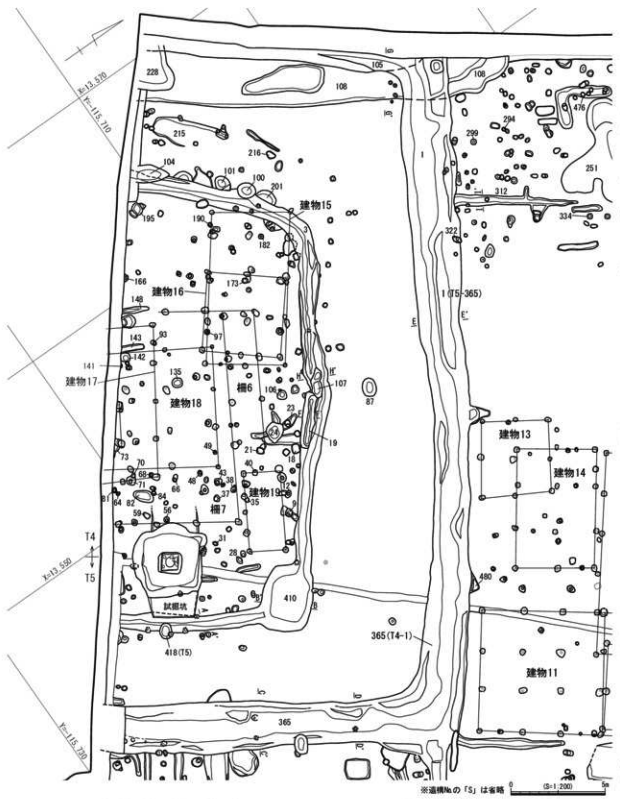
時期は、掘方出土品と井筒内出土品の間に明確な時期差は認められないことから、井戸設置から廃絶の期間は、おおむね13世紀初頭から13世紀中頃に取まると考えられる。

4. 南西地区

南西地区は溝S1(T5-S365)に囲まれた地域が中心で、その溝の内側では建物15-19、櫓6・7が検出されている。また、溝S1と溝S3(T5-S410)の間の区域は、他の地点と比較しても著しく遺構密度が低いことから、構造物が存在していたと考えられる。具体的には土塁のような土盛りを伴うもので、現状では後世の削平をうけたと考える。その規模(高さ)はうかがい知ることができない。ただし、溝S1の土層の観察から、溝の内側(溝S3側)の堆積層(明褐色土)は、土塁の崩落土と判断できる。なお、この溝S1-S3の間に土塁等が存在したとするならば、幅は南東側で4m、北東側で5-6m、北西側で7mを測る。南西側の調査区壁面の土層観察では土盛り等は確認できない。

(1) 落ち込み

S251(第64・82・83図) 調査区の東側で検出された落ち込みである。平面検出段階でも肩の境界が不明瞭であることから、人為的な構造物ではないと判断した。東西約12m、南北5-6mで不



第82図 T4南西地区

整形である。深さは最深部で遺構検出面から約20cmを測る。埋土は灰黄褐色土（炭混じり）の単層である。

遺物は616～618が出土している。616は緑釉陶器の椀の素地である。非常に硬質で、酸化炎焼成仕上げである。617は土師器の羽釜で外面は全面にススが付着している。口縁端部が欠損しているが、屈曲して外反していることからいわゆる大和型の羽釜の可能性が高い。618は瓦器の椀の底部であるが、全体に摩滅が著しく調整法はほとんど不明である。

時期は出土している遺物が少量であるため限定することが難しいが、616が10世紀代、617・618が13世紀前半代であり、他の遺構との関係から13世紀前半代に埋没したと判断しておきたい。

(2) 溝

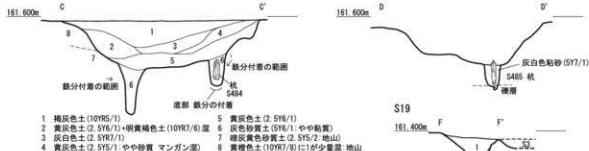
S1（第64・82・84～91図：T5-S365・図版92～95） 調査区の南西側で検出された溝である。調査区がT4とT5（S365）に跨っているが、T4で詳述することとする。S1は調査区内では「コ」の字形で検出されており、調査区外に延びていることが断面観察および地形から読み取れる。T3で検出されている堀S1（T4-S108）に切られている。調査区内では南西—北東に約19m、南東—北西に約35mを測る。幅は1.8～2.1mで、深さは遺構検出面から50～60cm、断面形は逆台形～半円形を呈している。埋土は地点により多少異なるが、おおまかには上層が褐灰色粘質土（もしくは褐灰色土）、下層が黄灰色土（褐灰色粘質土：上層より暗い色調）である。遺物は下層に集中して出土している。また、T5の範囲ではあまり遺物が出土せず、ちょうど西側角付近から北西方向に集中している。溝の南西側の中央付近の底で杭（S484・485：第83図）が検出されている。溝を完掘した後に検出されたことから、溝が機能していた段階の構造物であると考えられる。それぞれの杭の樹種はS484がモミ属、S485がマツ属複雑管束亜属である。

遺物は619～791が出土している。619～653は土師器の皿である。大小の2種類に分けられ大型品は直径12cm台を中心に、小型品は直径7cm後半から8cm前半台である。大小問わず体部を強くヨコナデシ、口縁部を丸く収める傾向が強い。637は体部南面および口縁部に内外面の一部にススが付着していることから灯明皿であろう。654・656～662・665～680・681・683・684は土師器の羽釜である。645・656・666～669・673・677・678は内外面ともに、657・670は外面の鏝の下部のみ、658は外面のみ、662は内面のみがススが付着している。655・663・664・682・685～690は瓦質の羽釜である。655は内外面ともにススが付着している。663は摩滅が著しい。681・683はいわゆる大和型の羽釜である。681が外面全面にススが付着している。684は受口状の口縁を持つ。686は体部下半に炭化物が付着している。691は信楽焼の掬鉢もしくは播鉢である。小片のため播目の有無については確定できない。内面は使用により非常に平滑である。692～694・696は常滑焼の鉢である。697は青磁の皿である。非常に透明感のある青味がかった釉で、底部外面は露胎、内面の見込みには描帯文を確認できる。698は青磁の皿である。ややくすんだ色調の釉で底部は露胎である。699は白磁の椀の口縁部である。701は信楽焼の播鉢で、1条—単位の播目である。702は信楽焼の壺の底部である。703は鍛冶滓である。いわゆる椀形滓である。704は古瀬戸焼の壺である。外面肩部から2条—単位の沈線が3単位施され、外面肩部から垂れる自然釉が部分的に欠失している。焼成時の窯内での位置による焼むらが原因と考えられる。705～788は瓦器の椀

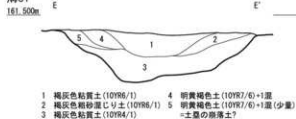
T5 溝S410(T4-S3)



溝S365



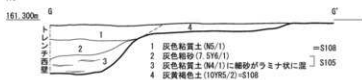
溝S1



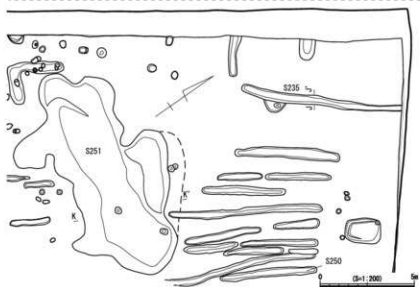
溝S3(T5-S410)・107



溝S105-108



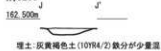
溝S312



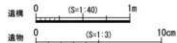
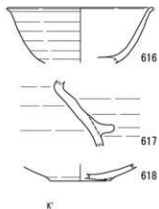
落ち込みS251



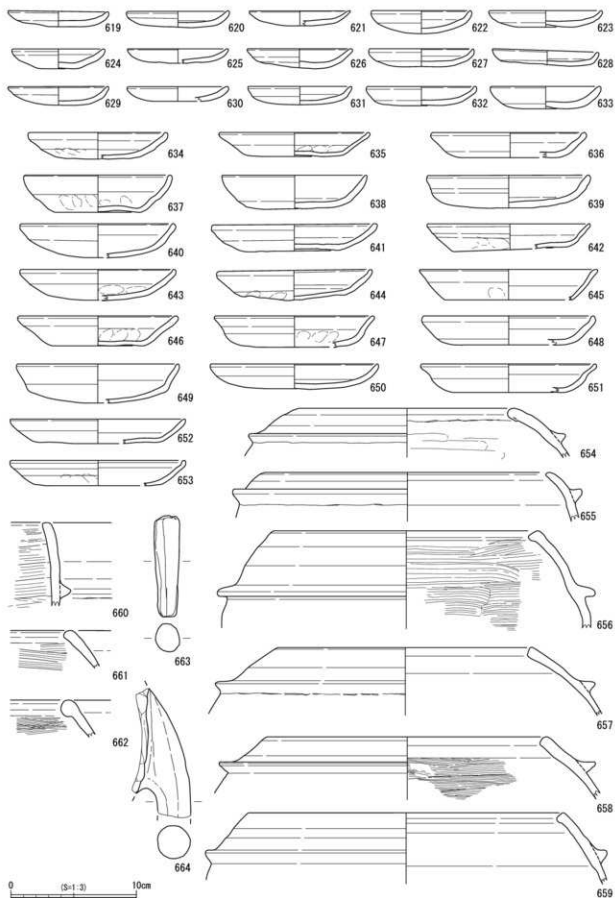
溝S235



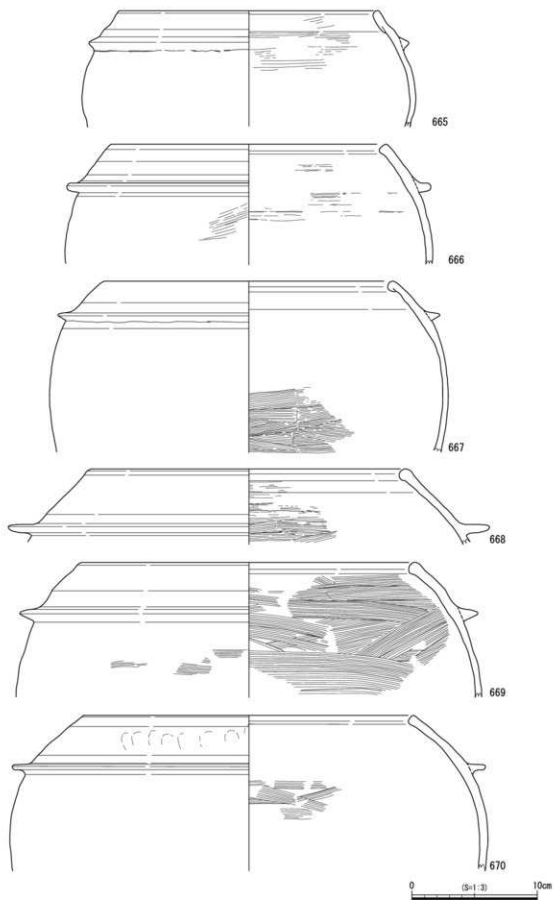
S251出土遺物



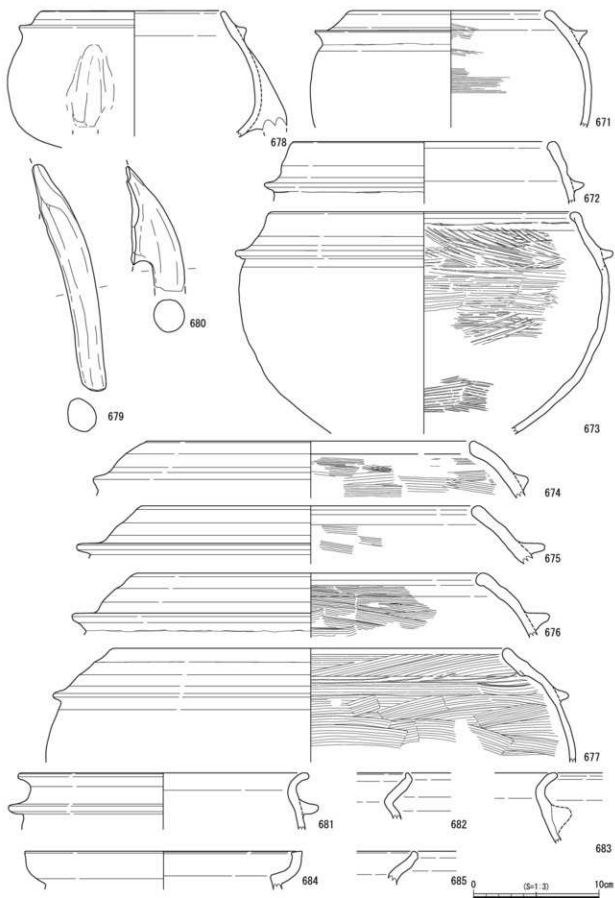
第83図 T4 溝・落ち込みS251



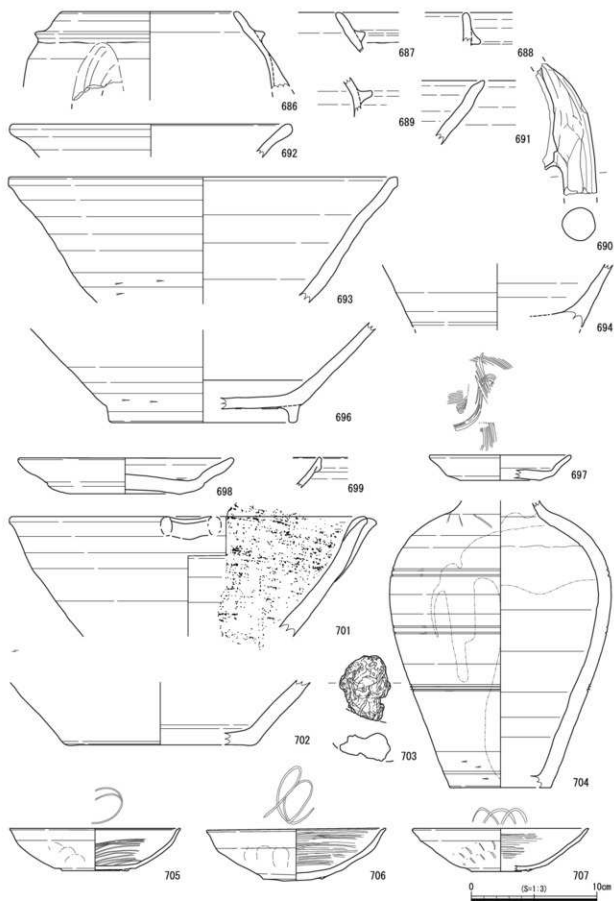
第84图 T4·T5 清S1 (S365) 出土遺物1



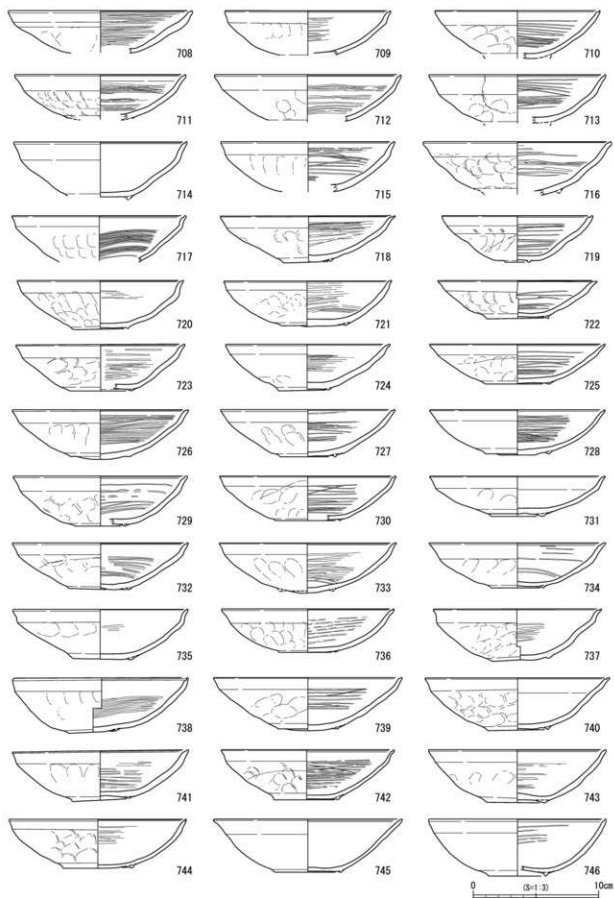
第85図 T4・T5 溝S1 (S365) 出土遺物2



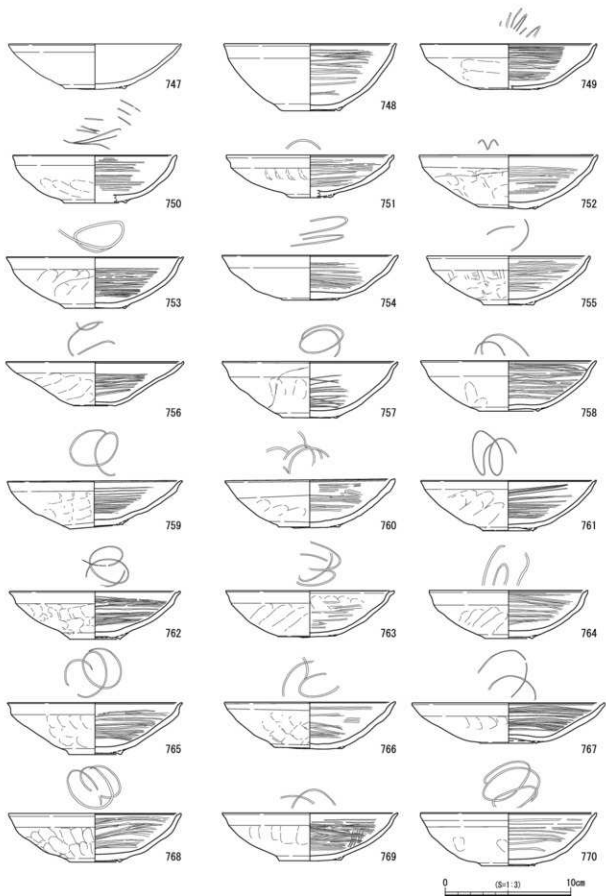
第86图 T4·T5 清S1 (S365) 出土遺物3



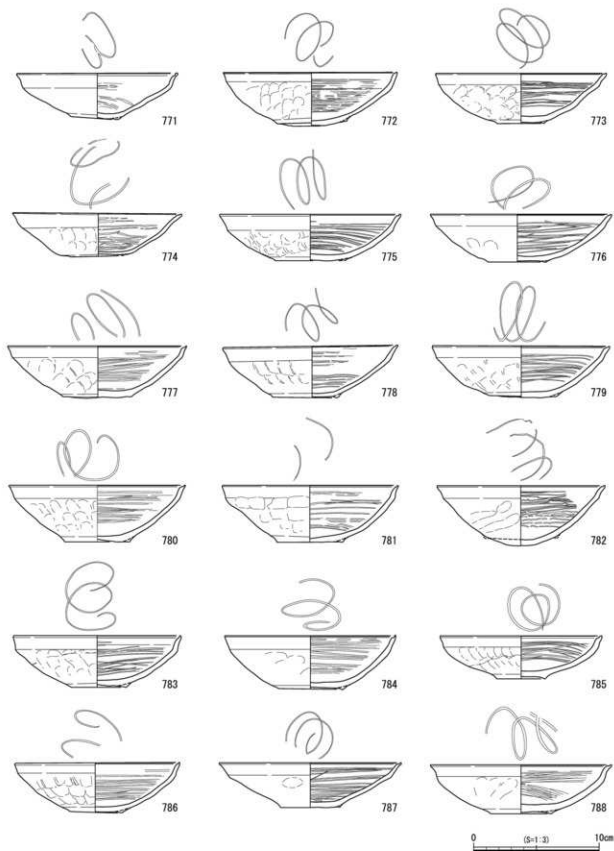
第87图 T4·T5 溝S1 (S365) 出土遺物4



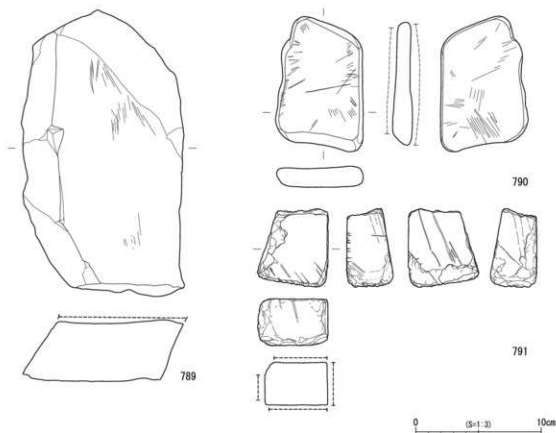
第88图 T4·T5 清S1 (S365) 出土遺物 5



第89図 T4・T5 溝S1 (S365) 出土遺物6



第90図 T4・T5 溝S1 (S365) 出土遺物7

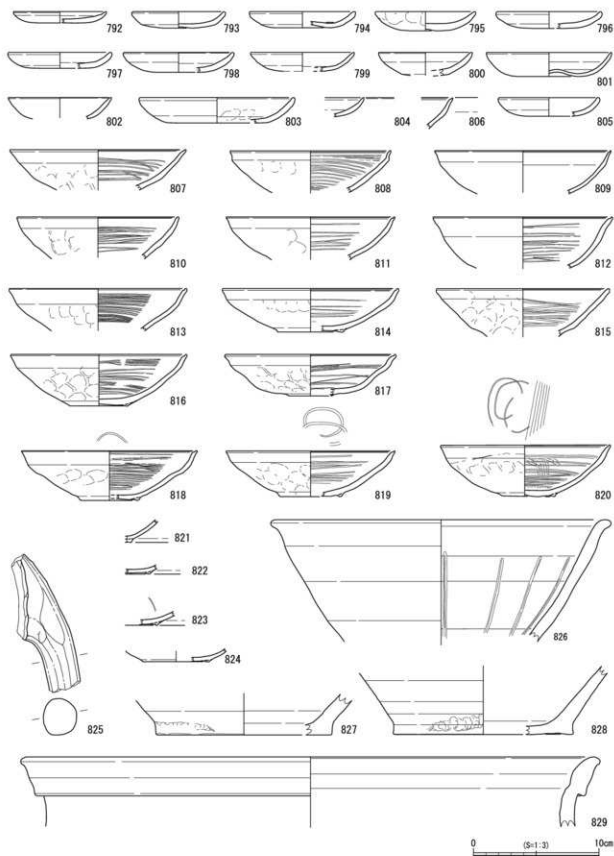


第91図 T4・T5 溝S1 (S365) 出土遺物 8

である。プロローションは直線的に延びる体部に外反する口縁部を持つ。口縁端部内面には一条の沈線が施される。口径は13cm台が中心、器高は3cm後半台で、扁平な印象を受ける。暗文は、体部内面には比較的密な圏線状、見込み部分には2～3回転程度の輪状もしくは「 ℓ 」字状、体部外面にはまったく確認できない。また、体部外面には指押え痕が明瞭に残るものが多い。高台部は粘土を簡単に張り付けたのみで、いわゆるミミズ腫れ状を呈している。そのため、底部が高台部より下部に突き出し、高台の役目を果たさないものが少なからずみられる。全体的に遺存状態は悪く、炭素が抜けているものが多い。789～791は砥石である。789は上部の一面が使用によって平滑である。一部に擦痕を確認できる。790は表裏の両面が使用によって平滑で、細かな擦痕が認められる。791は砂岩製で、6面中5面が使用されており、図の上段の4面は使用によって非常に平滑である。所々に金属器によるものと考えられる幅1mm程度の深さのある擦痕がみられる。

時期は出土遺物を概観すると、691・701・702の信楽焼が他の遺物と比較すると新しい様相である。出土状況を見ると、埋土最上層から出土している様相がうかがわれ、埋没後の窪地に堆積した層に含まれていた可能性がある。そのように考えれば、他の遺物の中心時期の13世紀前葉～中頃が溝の機能していた段階で、遅くとも15世紀前半の段階で完全に埋没していたと評価できる。

S3 (第64・82・92図・図版102・121) 調査区の南西側で検出された溝である。調査区がT4と



第92図 T4・T5 溝S3 (S410) 出土遺物

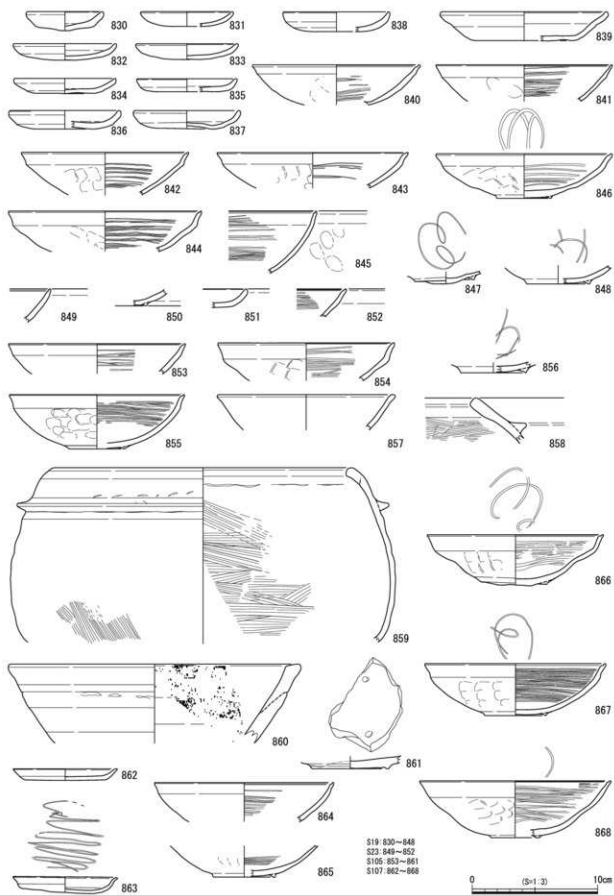
T5 (S410)に跨っているが、T4で詳述することとする。溝S19を切り、S107に切られている。S3は調査区内では、「コ」の字形で検出されており、調査区外に延びていることが断面観察および地形から読み取れる。市教委が実施した試掘調査の第10トレンチのSD1002に対応する。調査区内では南西―北東に約10m、南東―北西に約22mを測る。幅は0.8～1.0mで、深さは遺構検出面から20～40cm、断面形は浅い逆台形～半円形を呈している。東側隅は、3.5m×2.7mの隅丸長方形の土坑状を呈し、広がっている。底面の深さも、溝部と比較して10cm程度深い。当初、切りあい関係も想定されたが、平面・断面観察から同一遺構と判断した。埋土は、褐灰色土で、部分的に砂質が強い地点がある。また、東側隅の土坑部は黄灰色土（粗砂・鉄分混）である。遺物は全体的に散在して出土している。また、溝S1との位置関係、間の地区の遺構分布状況から溝S1と対になる可能性が高い。そのようであるならば、溝S1との間に土塁上の構造物を挟み、S3は内側（屋敷地側）の排水溝的な役割であったと考えられる。

遺物は792～829が出土している。792～800・802・804・805は土師器の小型の皿である。口径は7cm後半台～8cm前半台が中心で、体部をヨコナデで仕上げ、口縁端部を小さく摘み上げるもしくは丸く収める。801・803は大型品である。806～824は瓦器の椀である。プローションは直線的に延びる体部に外反する口縁部を持つ。口縁端部内面には一条の沈線が施される。口径は13cm台が中心、器高は3cm後半台で、扁平な印象を受ける。暗文は、体部内面には比較的密な圏線状、見込み部分には2～3回転程度の輪状もしくは「ℓ」字状、体部外面にはまったく確認できない。また、体部外面には指押え痕が明瞭に残るものが多い。高台部は粘土を簡単に張り付けたのみで、いわゆるミミズ腫れ状を呈している。そのため、底部が高台部より下部に突き出し、高台の役目を果たさないものが少なからずみられる。全体的に遺存状態は悪く、炭素が抜けているものが多い。820は体部内面にハケ状工具による調整痕が残る。825は瓦質の羽釜の脚部である。炭素が欠失している。胎土がやや粗い。826～829は信楽焼で、826～828は播鉢または捏鉢である。826は1条一単位の播目である。827・828はともに小片のため播鉢か捏鉢か確定できない。また、内面は使用のため非常に平滑である。829は甕の口縁部である。

時期は出土遺物を概観すると、S1と状況が非常に類似していることが分かる。826～829の信楽焼が他の遺物と比較すると新しい様相である。出土状況を見ると、重機による表土掘削直後の遺構検出時など埋土最上層から出土していることから、溝が埋没した後の窪地に堆積した層に包含されていた可能性がある。そのように考えれば、13世紀前半代～中頃が、溝の機能していた段階、そして遅くとも15世紀前半の段階では完全に埋没していたと評価できる。

S19 (第64・82・83・93図・図版102・103) 調査区の南西側で検出された溝である。溝S3に切られている。S3とはほぼ同方位で南東―北西に約3m、幅は0.8～1.0mで、深さは遺構検出面から約25cmを測る。断面形は深さのある逆台形を呈している。埋土は上下2層に分けることができる。上層は褐灰色土（灰褐色土混）、下層が褐灰色土である。

遺物は830～848が出土している。830～838は小型の土師器の皿である。口径が8cm前後を中心として、体部をヨコナデしたあとで口縁端部を摘み上げるもの、丸く収めるものがある。839は大型の土師器の皿で、直線的にのびる体部に小さく口縁端部を摘み上げている。840～848は瓦器の椀である。プローションは直線的に延びる体部に外反する口縁部を持つものが主である。口



第93図 T4 溝S19・23・81・105・107出土遺物

縁端部内面には一条の沈線が施される。口径は13cm台が中心、器高は3cm後半台で、扁平な印象を受ける。暗文は、体部内面には比較的密な圏線状、見込み部分には2～3回転程度の輪状、体部外面にはまったく確認できない。また、体部外面には指押え痕が明瞭に残るものが多い。高台部は粘土を簡単に張り付けたのみで、いわゆるミミズ腫れ状を呈している。そのため、底部が高台部より下部に突き出し、高台の役目を果たさないものがある。

時期は出土している遺物の主体は、後出する溝S3と同様の様相を呈しているが、瓦器の椀845が、他と比較して深手であることからやや古い様相を示している。そのことから12世紀後半に機能し、13世紀前半代に埋没したと考えられる。

S23 (第64・82・93図) 調査区の南西側で検出された溝である。溝S3の内側の屋敷地内で検出されている。土坑S24に切られている。ほぼ東西方向に約2.6mを測る。小さく湾曲している。幅は0.3～0.4mで、深さは遺構検出面から約5～10cmと浅い。断面形は浅い皿状を呈している。埋土は褐灰色土である。

遺物は849～852が出土している。849・850・852は瓦器の椀である。851は土師器の皿である。時期は出土した遺物が少量、小片であるため確定できないが13世紀前半代と考えられる。

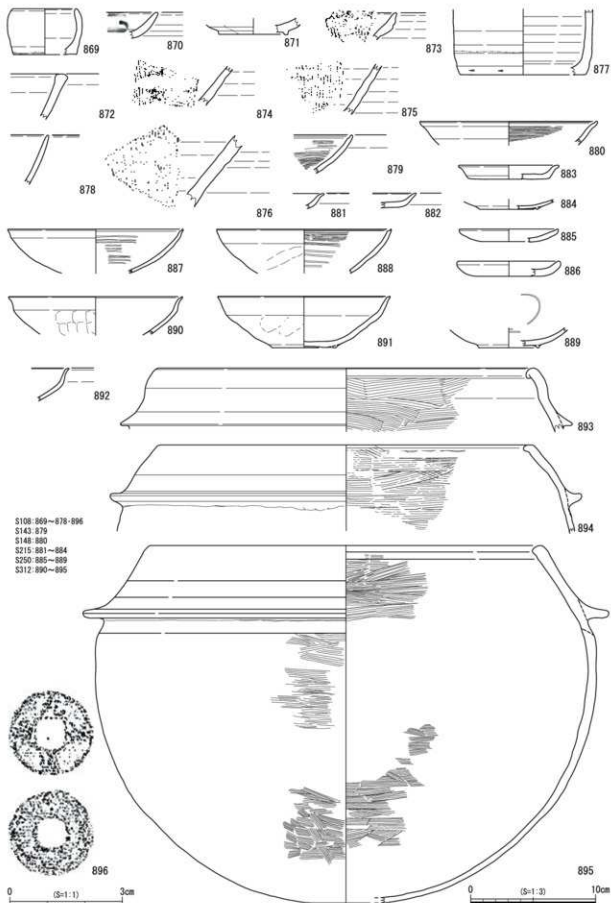
S105 (第64・82・93図・図版104) 調査区の西側で検出された溝である。溝S1と同一遺構と考えられる。溝S108に切られている。なお、溝S108はT3の堀S1の肩部周辺に相当すると考えられる。北西側の農道側に延びている。幅は0.8m以上で、深さは遺構検出面から約40cm以上である。埋土は上下2層で上層が灰色粗砂、下層が灰色粘質土(細砂がラミナ状に混)である。

遺物は853～861が出土している。853～857は瓦器の椀である。口縁端部内面には一条の沈線が施される。口径は13cm台が中心、器高は3cm後半台で、扁平な印象を受ける。暗文は、体部内面には比較的密な圏線状、見込み部分には2～3回転程度の輪状、体部外面にはまったく確認できない。また、体部外面には指押え痕が明瞭に残る。高台部は粘土を簡単に張り付けたのみで、いわゆるミミズ腫れ状を呈している。そのため、底部が高台部より下部に突き出し、高台の役目を果たさない。858・859は土師器の羽釜である。ともに外面全体にススが付着している。860は信楽焼の播鉢である。3条以上一単位の播目を持つ。861は瀬戸美濃焼の志野の皿である。内面に重ね焼きの際のトチン痕が残る。

時期は、おもな出土遺物が溝S1と同様の傾向を示していることから同一遺構の認識で間違いなだろう。つまり、13世紀前葉から中葉と考えられる。ただし、860・861は溝S108(T3-堀S1)の混入品と考えられ、16世紀後半から17世紀初頭の年代観を示す。

S107 (第64・82・93図・図版101・102) 調査区の南西側で検出された溝である。溝S3に切られ、溝S19を切っている。S3とはほぼ同方位で南東—北西に約1.4mを測る。幅は約50cmで、深さは遺構検出面から約30cmを測る。断面形は逆台形を呈している。埋土は褐灰色土である。

遺物は862～868が出土している。862・863は瓦器の皿である。862は器表面が荒れていて暗文は確認できない。863は内面見込み部分に平行線状の暗文を確認できる。864～868は瓦器の椀である。口縁端部内面には一条の沈線が施される。口径は13cm台が中心、器高は3cm後半台、扁平な印象を受ける器形である。暗文は、体部内面に比較的密な圏線状、見込み部分には2～3回転程度の輪状、体部外面にはまったく確認できない。また、体部外面に指押え痕が明瞭に残る。高



S108: 869~878・896
 S143: 879
 S148: 880
 S215: 881~884
 S250: 885~889
 S312: 890~895

第94図 T 4 溝S108・143・148・215・250・312出土遺物

台部は粘土を簡単に張り付けたのみで、いわゆるミミズ腫れ状を呈している。そのため、底部が高台部より下部に突き出し、高台の役目を果たしていない。

時期は出土している遺物から13世紀前葉から中葉と考えられる。

S108 (第64・82・83・94図・図版104) 調査区の西側で検出された浅い溝である。T3で検出されている堀S1と同一遺構で、その肩部周辺と考えられる。溝S105を切っている。調査区内で検出されている幅は2.6~3.4m以上で、深さは遺構検出面から約20cm、北東方向(T3方向)に向かって緩やかに下がっている。埋土は上下2層で上層が灰色粘質土、下層が灰黄褐色土である。

遺物は869~878・896が出土している。869は産地不明の陶器の小型の鉢もしくは壺である。内外面に鉄釉が施され、底部の外表面は露胎している。870は瀬戸美濃焼の志野の皿である。内面に鉄絵で文様が描かれている。872~876は信楽焼の播鉢である。872は小片のため描目が確認できない。873は5条以上一単位、874は6条一単位、875は8条一単位、876は7条以上一単位の描目である。875は内面が使用のため平滑である。877は産地不明の陶器で体部外面上半部は施釉されているが、内面および体部下下部、底部は露胎である。878は瀬戸美濃焼の灰釉の碗の口縁部である。896は銭貨で、表面の摩滅が著しく、銭文が不明瞭であるが、X線写真等で確認すると元符通寶の文字をかるうじて読むことができた。

時期は、出土している遺物からT3-堀S1の最終埋め戻し段階に相当する17世紀初頭前後と考えられる。

S143 (第64・66・82・94図) 調査区の南西側で検出された溝である。溝S3の内側の屋敷地内で検出されている。北西側の調査区外に延びており、調査区内では北西-南東方向で1.3mが検出されている。幅は約30cmで、深さは遺構検出面から約5cmと浅い。断面形は浅い皿状を呈している。埋土は黄灰色土(にぶい黄褐色土混)である。

遺物は879の瓦器の碗の口縁部が出土している。内面には圏線状の暗文を確認できるが、外面には認められない。

時期は小片であるため確定できないが13世紀前葉から中葉と考えられる。

S148 (第64・66・82・94図) 調査区の南西側で検出された溝である。溝S3の内側の屋敷地内で検出されている。北西側の調査区外に延びており、調査区内では北西-南東方向で1.5mが検出されている。幅は30~35cmで、深さは遺構検出面から約5cmと浅い。断面形は浅い皿状を呈している。埋土は黄灰色土(にぶい黄褐色土混)である。

遺物は880の瓦器の碗が出土している。内面には圏線状の暗文を確認できるが、外面には認められない。

時期は小片であるため確定できないが13世紀前葉から中葉と考えられる。

S215 (第64・82・94図) 調査区の西側で検出された溝もしくは落ち込みである。平面プランが明確でないことから落ち込みの可能性が高い。長さが3.5m、幅が1.4mで北東方向に深くなる。深さは遺構検出面から最深部で約5cmである。埋土は褐灰色土である。

遺物は881~883の瓦器の皿、884の瓦器に碗の底部が出土している。小片であること、摩滅が著しいことから調整法等は不明である。

時期は13世紀前半代としておきたい。

S235 (第64・83図) 調査区の北側隅で検出された溝である。南西から北東方向に長さ8.3mが検出されており、北東側の調査区外へ延びている。幅は約30cmで、深さは遺構検出面から約5cmと浅い。断面形は浅い皿状を呈しており、埋土は灰黄褐色土(鉄分が少量混)である。

遺物は図化できない土師器の細片が出土しているのみである。

S250 (第64・82・94図) 調査区の北側で検出された溝である。長さは南西—北東方向に約5.2m、幅約45cmを測る。深さは遺構検出面から3～5cmと非常に浅い。埋土は灰色土(にぶい黄褐色土ブロック少量混)である。周辺に同様の埋土、規模の溝が集中していることから畑作等にかかわる鋤溝痕と考えられる。

遺物は885～889が出土している。885・886は土師器の皿、887～889は瓦器の椀である。瓦器の椀は口縁端部内面に一条の沈線が施される。口径は13cm台が中心で、扁平な印象を受ける器形である。暗文は、体部内面は比較的密な圏線状、体部外面はまったく確認できない。また、体部外面には指押え痕が明瞭に残る。

時期は出土している遺物から13世紀前葉から中葉と考えられる。

S312 (第64・82・83・94図) 調査区の北東側で検出された溝である。溝S3に切られている。南西—北東方向に長さ約6.5m、幅が約60cmを測る。深さは最深处で遺構検出面から約10cmで、南西方向に緩やかに深くなっている。北東端から南西に約2m、2.5m地点で南東・北西方向に突起状に分岐していることから建物等にかかわる区画溝の可能性が高い。埋土は黄灰色土(浅黄色土少量混)である。

遺物は890～895である。890～892は瓦器の椀で、摩滅が著しいため暗文等は確認できない。体部外面に指押え痕が明瞭に残る。893～895は土師器の羽釜である。893は口縁端部に、894は内面の一部、895は内外面のほぼ全体にスガが付着している。

時期は出土している遺物から13世紀前半代であると考えられる。

(3) 土坑

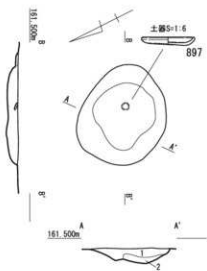
S24 (第64・82・95図・図版103・104) 調査区の南西側で検出された土坑である。溝S3の内側の屋敷地内で検出されている。溝S23を切っている。直径約1.1mの不整な円形を呈し、深さは遺構検出面から10cmを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は上層が褐色土(炭化物)、下層が浅黄色土(褐色土ブロック混)である。

遺物は、897～905が出土している。897は中央付近の上層で出土したほぼ完形の土師器の皿である。898～905は瓦器の椀である。口縁端部内面には一条の沈線が施され、扁平な印象を受ける器形を呈している。暗文は、体部内面に比較的密な圏線状、見込み部分に複数回転の輪状、体部外面にまったく確認できない。また、体部外面に指押え痕が明瞭に残る。高台部は粘土を簡単に張り付けたのみで、いわゆるミミズ腫れ状を呈している。

時期は出土している遺物からおおむね13世紀前半頃と考えられる。

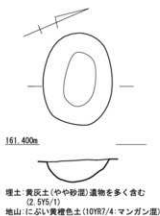
S82 (第64・82・96図) 調査区の南西側で検出された土坑である。溝S3の内側の屋敷地内で検出されている。長軸約1.1m、短軸0.6mのやや不整な楕円形で、深さは遺構検出面から約8cmを測る。埋土は褐色土(にぶい黄褐色土ブロック少量混)である。

土坑S24



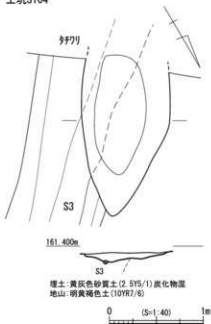
- 1 褐灰色土(10YR4/1)炭化物混
2 強黄色土(2.5Y7/4)に1のブロックが少量混

土坑S87



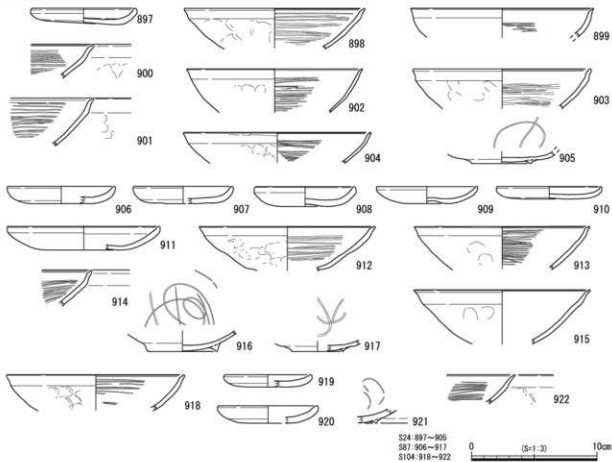
埋土: 黄灰土(やや砂混)遺物を多く含む
(2.5Y5/1)
地山: にぶい黄褐色土(10YR7/4: マンガン混)

土坑S104



埋土: 黄灰色砂質土(2.5Y5/1)炭化物混
地山: 明黄褐色土(10YR7/6)

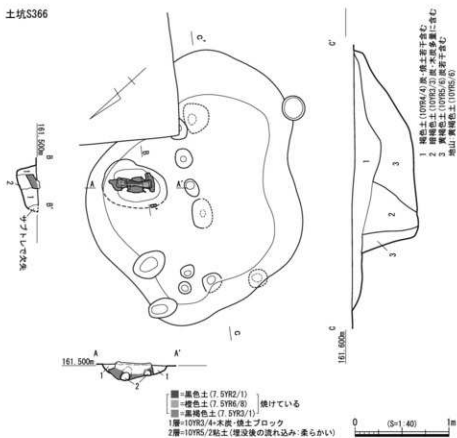
土坑S24・87・104出土遺物



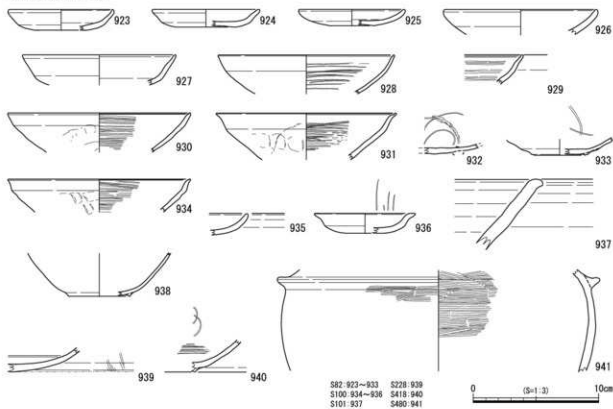
S24: 897~905
S87: 906~917
S104: 918~922

第95図 T4 土坑S24・87・104

土坑S366



その他土坑出土遺物



第96図 T4 土坑S366、その他土坑出土遺物

遺物は923～933が出土している。923～925は土師器の小型の皿、926・927は土師器の大型の皿である。928～933は瓦器の椀である。瓦器の椀は、口縁端部内面に一条の沈線が施され、口縁端部外面に強いヨコナデを施し、外反させる。暗文は、体部内面には比較的密な圏線状、見込み部分には複数回転の輪状を確認できるが、体部外面にはまったく確認できない。また、体部外面に指押え痕が明瞭に残る。高台部は粘土を簡単に張り付けたのみで、いわゆるミミズ腫れ状を呈している。

時期は出土している遺物から13世紀前半代と考えられる。

S87 (第64・82・95図) 調査区の南西側で検出された土坑である。溝S1と溝S3の間で検出されている。溝S1・3の間に土塁状の構造物があった可能性が高いことから、S87は土塁状構造物設置以前に埋没したと考えられる。長軸約1m、短軸約0.7mの楕円形を呈し、深さは最深部で遺構検出面から22cmを測る。断面は半円形で、埋土は黄灰色土(やや砂混)の単層である。

遺物は906～917が出土している。906～910は土師器の小型の皿で、口径が7cm後半台から8cm前半代で、口縁端部外面に面を持つようにヨコナデをしている。911は土師器の大型の皿で小型品同様に口縁端部に面を持つ。912～917は瓦器の椀である。口縁端部内面には一条の沈線が施され、直線的に上方に延びる体部を有し、全体として扁平な印象を受ける器形を呈している。暗文は、体部内面には比較的密な圏線状、見込み部分に複数回転の輪状を確認できるが、体部外面にはまったく確認できない。また、体部外面に指押え痕が明瞭に残る。高台部は粘土を簡単に張り付けた非常に簡素なつくりとなっている。

時期は出土している遺物から13世紀前半代と考えられる。

S100 (第64・82・96図) 調査区の南西側で、土坑S101の南東側、土坑S201の西側で検出された土坑である。溝S3を切っている。長軸約1m、短軸約0.8mの楕円形を呈し、深さは最深部で遺構検出面から20cmを測る。断面は半円形で、埋土は黄灰色土(やや砂混)の単層である。

遺物は934～936が出土している。934は瓦器の椀で、口縁端部内面には一条の沈線が施され、口縁端部外面に強いヨコナデを施し、外反させる。暗文は、体部内面に比較的密な圏線状を確認できるが、体部外面にはまったく確認できない。また、体部外面に指押え痕が明瞭に残る。935は土師器の皿である。936は瓦器の皿である。内面見込み部分に平行線状の暗文が施されている。全体に炭素が欠失している。

時期は出土している遺物から13世紀前半代と考えられる。

S101 (第64・82・96図) 調査区の南西側、土坑S100の南西側で検出された土坑である。溝S3に切られている。長軸約1m、短軸約0.7mの楕円形を呈し、深さは最深部で遺構検出面から15cmを測る。断面は半円形で、埋土は黄灰色土(やや砂混)の単層である。

遺物は937の信楽焼の捏鉢が出土している。

時期は、出土遺物が少量であることと遺構の切りあい関係などから、937は溝S3の最上層で確認されたような埋没後の堆積層の混入品の可能性が高いことから、明確にしえない。

S104 (第64・82・95図・図版104) 調査区の南西側、土坑S100・101の南西側で検出された土坑である。溝S3を切っている。調査区内で長軸1.5m以上、短軸約0.9mを測り、南西側は土層確認用の断ち割り欠失しているが、調査区壁面土層では確認できないことから、延びても40cm程度

である。深さは最深部で遺構検出面から10cmを測る。埋土は黄灰色砂質土（炭化物混）の単層である。

遺物は918～922が出土している。918・921・922は瓦器の椀である。口縁端部内面に一条の沈線、口縁端部外面に強いヨコナデを施し、外反させる。暗文は、体部内面に比較的密な圏線状、見込み部分に輪状を確認できるが、体部外面にはまったく確認できない。また、体部外面に指押え痕が明瞭に残る。高台部は粘土を簡単に張り付けたのみで、いわゆるミミズ腫れ状を呈している。919・920は土師器の小型の皿で、体部外面をヨコナデで成形し、口縁端部を丸く収める。

時期は出土している少量の遺物から13世紀前半代と考えられる。

S201（第64・82・96図） 調査区の南西側、土坑S100・101の北東側で検出された土坑である。溝S3に切られている。長軸約1.1m、短軸約0.5m以上の楕円形に復元できる。深さは最深部で遺構検出面から20cmを測る。埋土は黄灰色土（やや砂混）の単層である。

遺物は938の瓦器の椀である。全体に摩滅が著しく、調整法等は不明である。

時期は遺物が少量しか出土していないが13世紀前半代であると考えられる。

S228（第64・66・82・96図） 調査区の南西隅で検出された土坑である。溝S108を切っている。調査区内で長軸2.1m以上、短軸約1.9m以上を測り、南西側の調査区外に延びている。深さは最深部で遺構検出面から約5cmと浅い。埋土は黄灰色砂まじり土（明黄褐色土少量混）の単層である。

遺物は939の青磁の碗である。内面に圏線が巡り、外面にはハケ状工具による施文がされている。

時期は少量であるが、遺物と遺構の切りあい関係から16世紀後半から17世紀初頭と考えられる。

S366（第64・96図・図版101） 調査区の北西、調査区の端で検出された土坑である。長軸約2.8m、短軸が約2.2mの不整形を呈している。深さは最深部で遺構検出面から0.7mを測る。埋土は上層が褐色土（炭・焼土を少量混）、下層が黄褐色土（少量炭混）である。その土坑中の西側端で上層の褐色土を除去した後に60cm×50cmの楕円形の掘り込みが検出できた。その中から被熱した土塊が出土している。被熱した土塊は厚さ約15cm、高さ約15cm、幅約40cmでその下部に直径約10cmの円形の孔が2孔確認できた。表面は埋土と簡単に分離できるほど焼け締まっている。この土塊は土坑内で使用されたのではなく、別のところで使われたものを破棄した印象である。用途としては断定できないが鍛冶の際の遮熱壁が想定できるかもしれない。

遺物は図化できない青磁、土師器の細片が出土している。時期は断定できないが、周辺の遺構の状況から12世紀から13世紀代と考えておきたい。

S418（第64・82・96図：T5） 調査区の南東側、井戸S2の南西側で検出された土坑である。溝S3（T5-S410）を切っている。本来はT5の項で詳述すべきであるが、溝S1（T5-S365）の内側の想定屋敷地内であることからここで報告する。長軸約1.8m、短軸約0.6mの楕円形を呈し、深さは遺構検出面から約8cmを測る。埋土は褐灰色土（にぶい黄褐色土ブロック少量混）である。

遺物は940の瓦器の椀が出土している。内面体部にやや密な圏線状、見込み部分に複数回転の輪状の暗文を確認できる。高台は粘土を簡単に張り付けたほとんど高さのない簡易なものである。

S480（第64・82・96図） 調査区の西側で検出された土坑である。溝S1に切られている。90cm×60cmで平面が直角三角形の形状で検出されている。深さは遺構検出面から最深部で18cmを測る。埋土は褐灰色土（にぶい黄褐色土ブロック少量混）である。

遺物は941の土師器の羽釜が出土している。外面全体にススが付着している。

(4) ビット

S9 (第64・82・97図) 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内、建物19の西側で検出されたビットである。建物19を構成するビットS8を切っている。長軸約40cm、短軸35cmの隅丸長方形の掘方で、南側隅に直径15cmの柱痕が確認できた。深さは最深部で遺構検出面から15cmを測る。埋土は掘方が褐灰色砂質土（明黄褐色土少量混）、柱痕は褐灰色砂質土である。

遺物は942の土師器の羽釜、943の瓦器の椀である。943は柱痕から出土している。口縁部内面に一条の沈線、暗文は体部内面には比較的密な圏線状を確認できるが、体部外面にはまったく確認できない。また、体部外面に指押え痕が散見される。

時期は出土している遺物から13世紀前半代と考えられる。

S11 (第82・97図) 調査区の南側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたビットである。建物19と平面的に切りあい関係があるが、構成するビットと直接的な切りあい関係が無いため前後関係は不明である。ビットS12を切っている。長軸45cm、短軸25cmの不整な楕円形で、深さは遺構検出面から34cmを測る。埋土は褐灰色砂質土である。

遺物は530の信楽焼の播鉢が出土している。4条一単位の播目である。

S12 (第64・82・97図) 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内、建物19の西側で検出されたビットである。直径40cmのやや不整な円形の掘方で、南西側を別のビットに切られている。ほぼ中央部分に直径15cmの柱痕が確認されている。深さは最深部で遺構検出面から20cmを測り、埋土は掘方が褐灰色砂質土（明黄褐色土少量混）、柱痕は褐灰色砂質土である。

遺物は944の土師器の皿の口縁部が出土している。小片のため時期を明確にしたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S18 (第64・82・97図) 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたビットである。建物19の北側、土坑S24の西側に位置する。40×50cmの隅丸長方形を呈し、深さは遺構検出面から9cmを測る。埋土は褐灰色土である。

遺物は945の土師器の皿の口縁部が出土している。小片のため時期を明確にしたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S21 (第64・82・97図) 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたビットである。建物19の北西側、土坑S24の南側に位置する。溝6を構成するビットS22を切っている。一辺約30cmの隅丸方形を呈し、深さは遺構検出面から12cmを測る。埋土は褐灰色土である。

遺物は946の瓦器の椀の底部が出土している。摩滅が著しいため調整法は不明である。高台は粘土紐を薄く張り付けた非常に低いものである。小片のため時期を明確にしたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S26 (第82・97図) 調査区の南側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたビットである。建物19と平面的に切りあい関係があるが、構成するビットと直接的な切りあい関係が無いため前後関係は不明である。一辺45cmの隅丸方形で、深さは遺構検出面から22cmを測る。埋土は褐灰色土である。

遺物は541の瓦器の椀が出土している。内面に圏線状暗文が確認できる。

S28（第64・82・97図） 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物19の南側、井戸S2の北東側に位置する。長軸約40cm、短軸約20cmの楕円形を呈し、深さは遺構検出面から15cmを測る。埋土は褐灰色土である。

遺物は947の土師器の皿が出土している。体部をヨコナデし、口縁端部を小さく摘み上げている。小片のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S31（第64・82・97図） 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物19の南西側、井戸S2の北側に位置する。長軸約30cm、短軸約20cmの楕円形を呈し、深さは遺構検出面から約4cmを測る。埋土は褐灰色土である。

遺物は948の瓦器の皿が出土している。口縁部を強くヨコナデし、端部を小さく外方へ摘み出している。端部には平坦な面をつくっている。内面見込みで平行線状の暗文が認められる。小片のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S35（第64・82・97図） 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物19と平面的に切りあい関係がある位置である。東側を別のピットに切られているが、直径約20cmの円形に復元できる。深さは遺構検出面から約6cmを測る。埋土は褐灰色土である。

遺物は949の土師器の皿が出土している。少量の遺物のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S36（第82・97図） 調査区の南側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物19と平面的に切りあい関係があるが、構成するピットと直接的な切りあい関係が無いため前後関係は不明である。ピットS35を切っている。直径30cmで、深さは遺構検出面から34cmを測る。

遺物は542の土師器の皿、543の瓦器の椀の底部が出土している。543は内面見込み部に輪状の暗文が確認できる。

S37（第64・82・97図） 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物19の南西側に位置する。直径約35cmの円形の掘方で、掘方の南西よりで直径15cmの柱痕が確認されている。深さは柱痕部で遺構検出面から35cmを測る。埋土は掘方が褐灰色砂質土（明黄褐色土少量混）、柱痕は褐灰色砂質土である。

遺物は950～952の瓦器の椀が出土している。そのうち951は柱痕から出土している。全体に摩滅が著しいため調整法が不明な部分があるが、体部内面に圏線状の暗文を比較的密に施し、高台は粘土紐を薄く張り付けた非常に低いものである。小片・少量のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S38（第64・82・97図） 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物19の南西側、ピットS37の北側に位置する。一辺約25cmの隅丸方形の掘方で、西寄り直径約15cmの柱痕が検出されている。深さは最深部で遺構検出面から13cmを測る。埋土は掘方が褐灰色砂質土（明黄褐色土少量混）、柱痕は褐灰色砂質土である。

遺物は953の土師器の大型の皿、954の瓦器の椀が出土している。954は摩滅が著しいため調整法が不明である。小片・少量のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S40 (第64・82・97図) 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物19の南西—北東辺に重なる位置である。長軸約30cm、短軸約20cmの隅丸長方形の掘方で、北西隅で直径10cm程度の柱痕が検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から22cmを測る。埋土は掘方が褐灰色砂質土(明黄褐色土少量混)、柱痕は褐灰色砂質土である。

出土している遺物は955～959の瓦器の椀で、そのうち958は柱痕から出土している。口縁端部内面に一条の沈線、口縁端部外面に強いヨコナデを施し、外反させる。暗文は、体部内面に比較的密な圏線状、見込み部分に輪状を確認できるが、体部外面にはまったく確認できない。また、体部外面に指押え痕が明瞭に残る。高台部は粘土を簡単に張り付けたのみで、いわゆるミミズ腫れ状を呈している。高台は粘土紐を薄く張り付けた非常に低いものである。小片のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S43 (第64・82・97図) 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物19の南西側、ピットS38の西側に位置する。長軸約40cm、短軸約35cmの不整な隅丸長方形の掘方で、南西寄り直径約20cmの柱痕を検出した。深さは柱痕部で遺構検出面から11cmを測る。埋土は掘方が褐灰色砂質土(明黄褐色土少量混)、柱痕は褐灰色砂質土である。

遺物は960の瓦器の椀の口縁部が、柱痕部分から出土している。口縁端部内面に一条の沈線、口縁端部外面に強いヨコナデを施し、外反させる。暗文は、体部内面に比較的密な圏線状、見込み部分に輪状を確認できるが、体部外面にはまったく確認できない。また、体部外面に指押え痕が残る。小片のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S48 (第64・82・97図) 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物18の南東側、ピットS43の南西側に位置する。直径約30cmの掘方で、中央部分で直径約15cmの柱痕を検出した。深さは柱痕部で遺構検出面から16cmを測る。埋土は掘方が褐灰色砂質土(明黄褐色土少量混)、柱痕は褐灰色砂質土である。

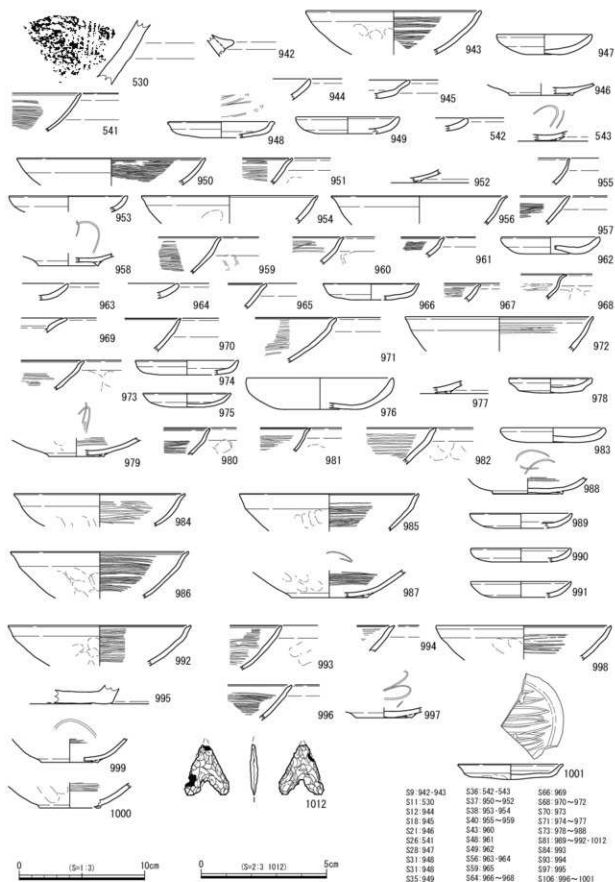
遺物は961の瓦器の椀の口縁部の小片が出土している。口縁端部に一条の沈線、内面に圏線状の暗文を確認できる。小片のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S49 (第64・82・97図) 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物18の北西—南東辺と重なる位置である。直径約25cmの円形の掘方で、中央部分で直径約10cmの柱痕を検出した。深さは柱痕部で遺構検出面から20cmを測る。埋土は掘方が褐灰色土(明黄褐色土少量混)、柱痕は褐灰色土である。

遺物は962の土師器の小型の皿が出土している。遺物が少量のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S56 (第64・82・97図) 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物18の南東側、井戸S2掘方の北西側に隣接する位置である。直径約30cmの円形の掘方で、ほぼ中央部分で直径約15cmの柱痕を検出した。深さは柱痕部で遺構検出面から12cmを測る。埋土は掘方が褐灰色土(明黄褐色土少量混)、柱痕は褐灰色土である。

遺物は柱痕から963・964の土師器の小型の皿の小片が出土している。遺物が少量・小片のため



第97図 その他ピット出土遺物 1

時期を明確にしたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S59 (第64・82・97図) 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物18の南東側、井戸S2掘方の北西側に隣接する位置である。長軸約40cm、短軸約25cmのやや不整な長方形を呈している。深さは最深部で遺構検出面から10cmを測る。埋土は褐灰色土である。

遺物は柱痕から965の瓦器の碗の口縁部の小片が出土している。遺物が少量・小片のため時期を明確にしたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S64 (第64・82・97図) 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物18の南東側、井戸S2の西側に位置する。直径約20cmの不整な円形で、深さは最深部で遺構検出面から13cmを測る。埋土は褐灰色土である。

遺物は柱痕から966の土師器の小型の皿、967・968の瓦器の碗の口縁部の小片が出土している。瓦器の碗は口縁端部内面に一条の沈線を巡らし、内面にやや密度の高い圏線状の暗文を施す。体部外面に指押さえ痕が残る。遺物が少量・小片のため時期を明確にしたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S66 (第64・82・97図) 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物18の南東側、井戸S2掘方の北西側に位置する。長軸約40cm、短軸約20cmのやや不整な長方形の掘方で、南側で直径約15cmの柱痕を検出した。深さは柱痕部で遺構検出面から9cmを測る。埋土は掘方が褐灰色土(明黄褐色土少量混)、柱痕は褐灰色土である。

遺物は柱痕から969の青磁の皿の小片が出土している。内面見込み外縁部に圏線が巡る。遺物が少量・小片のため時期を明確にしたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S68 (第64・82・97図) 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物18の南東側、井戸S2掘方の北西側に隣接する位置である。建物17を構成するピットS69を切っている。一辺約25cmの隅丸方形の掘方で、ほぼ中央部分で直径約10cmの柱痕を検出した。深さは柱痕部で遺構検出面から18cmを測る。埋土は掘方が褐灰色土(明黄褐色土少量混)、柱痕は褐灰色土である。

遺物は柱痕から970～972の瓦器の碗が出土している。摩滅が著しい中、口縁端部に一条の沈線を巡らし、体部内面にやや密度の高い圏線状の暗文を施す。遺物が少量・小片のため時期を明確にしたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S70 (第64・82・97図) 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物18の南東—北西辺に隣接し、ピットS68の南西側に位置する。ピットS71を切っている。長軸約25cm、短軸約20cmの楕円形を呈し、深さは最深部で遺構検出面から28cmを測る。埋土は黒褐色土である。

遺物は973の瓦器の碗が出土している。摩滅が著しいが、口縁端部に一条の沈線を巡らし、体部内面にはやや密度の高い圏線状の暗文を施していることが確認できる。体部外面に指押さえ痕が残る。遺物が少量・小片のため時期を明確にしたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S71 (第64・82・97図) 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建

物18の南東—北西辺に隣接し、ピットS68の南西側に位置する。ピットS70に切られている。直径約50cm円形の掘方で、中央部で直径15cmの柱痕が検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から52cmを測る。埋土は掘方が褐灰色土（明黄褐色土少量混）、柱痕は褐灰色土である。

遺物は974～977が出土している。そのうち974・975は柱痕から出土している。974～976は土師器の皿、977は瓦器の椀の底部である。977は摩滅が著しいが粘土帯を張り付けた非常に低い高台を確認できる。遺物が少量・小片のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S73（第64・82・97図） 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物17・18と平面的に切りあい関係を持ち、建物17を構成するピットS79に切られている。南西側が調査区壁であることとS79に切られていることから、平面的にはわずかしか確認できない。深さは最深部で遺構検出面から36cmを測る。埋土は褐灰色土である。

遺物は978～988が出土している。978・983は土師器の小型の皿、979～982・984～988は瓦器の椀である。瓦器の椀は口縁端部内面に一条の沈線、口縁端部外面に強いヨコナデを施し、外反させる。暗文は、体部内面に比較的密な圏線状、見込み部分には輪状を確認できるが、体部外面にはまったく確認できない。また、体部外面に指押え痕が明瞭に残る。高台部は粘土を簡単に張り付けたのみで、いわゆるミズ腫れ状を呈している。非常に低いものである。遺物が少量・小片のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

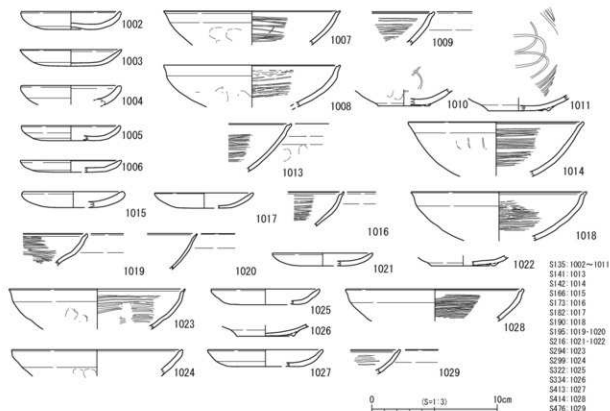
S81（第64・82・97図） 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物17・18の南東側、ピットS64の西側の調査区の端に位置する。長軸約30cm、短軸約20cmの掘方で、ほぼ中央に直径約15cmの柱痕を確認できる。深さは柱痕部で遺構検出面から15cmを測る。埋土は掘方が褐灰色土（明黄褐色土少量混）、柱痕は褐灰色土である。

遺物は989～992・1012が出土している。989～991は土師器の小型の皿、992は瓦器の椀である。992は口縁端部内面に一条の沈線を巡らし、暗文は体部内面に比較的密な圏線状が確認されるが、体部外面にはまったく確認できない。また、体部外面に指押え痕が残る。1012はサヌカイト製の石鏝である。遺物が少量・小片のため時期を明確にしがたいが、1012は混入品と評価でき、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S84（第64・82・97図） 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物17・18の南東側に位置する。土坑S82を切っている。直径約20cmの円形の掘方で、北西端で直径約10cmの柱痕を確認できる。深さは柱痕部で遺構検出面から20cmを測る。埋土は掘方が褐灰色土（明黄褐色土少量混）、柱痕は褐灰色土である。

遺物は993の瓦器の椀が出土している。口縁端部内面に一条の沈線を巡らし、暗文は体部内面に比較的密な圏線状を確認できるが、体部外面にはまったく確認できない。また、体部外面には指押え痕が残る。遺物が少量・小片のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S93（第64・82・97図） 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物17の北西—南東辺と重なっている。長軸約30cm、短軸約25cmの楕円形の掘方で、東側で直径約10cmの柱痕を確認できる。深さは柱痕部で遺構検出面から14cmを測る。埋土は掘方が褐灰色土（明



第98図 T4 その他ピット出土遺物 2

黄褐色土少量混)、柱痕は褐灰色土である。

遺物は994の瓦器の椀が出土している。小片であるが口縁端部内面に一条の沈線を巡らし、暗文は体部内面に確認できる。遺物が少量・小片のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S97 (第64・82・97図) 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物15・16と平面的に切りあい関係をもつ。建物18の北西側に位置する。一辺約25cmの隅丸方形の掘方で、ほぼ中央に直径約10cmの柱痕を確認できる。深さは柱痕部で遺構検出面から22cmを測る。埋土は掘方が褐灰色土(明黄褐色土少量混)、柱痕は褐灰色土である。

遺物は995の信楽焼の壺もしくは甕の底部が出土している。遺物が少量・小片で、混入の可能性もあるため時期は明確にできない。

S106 (第64・82・97・98図) 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物19の北西側に位置する。直径約50cmのやや不整な円形で、深さは最深部で遺構検出面から29cmを測る。埋土は褐灰色土である。

遺物は996~1001が出土している。996~1000は瓦器の椀で、口縁端部内面に一条の沈線を巡らし、暗文は体部外面が比較的密な團線状、見込み部分は輪状で、体部外面にはまったく確認できない。また、体部外面に指押え痕が残る。高台は粘土紐を擦り付けた簡便なもので、高台の役割を果たしていない。1001は瓦器の皿で、口縁部を強くヨコナデし、外側に摘み出している。内面見込み部分に平行線状の暗文を施している。出土している遺物から13世紀前半代とを考えておきたい。

い。

S135 (第64・82・98図) 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物17の北東側に位置する。建物18とは平面的な切りあい関係を有する。直径約45cmの円形で、深さは最深部で遺構検出面から15cmを測る。埋土は黒褐色土である。

遺物は1002～1011である。1002～1006は土師器の小型の皿である。体部をヨコナデし、口縁端部を丸く収めるものが主体である。1007～1011は瓦器の椀で、口縁端部内面に一条の沈線を巡らし、暗文は体部内面が比較的密な圏線状、見込み部分には複数回転の輪状である。体部外面にはまったく確認できない。また、体部外面には指押え痕が残る。出土した遺物から13世紀前半代と考えておきたい。

S141 (第64・66・82・98図) 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。南西側の調査区壁際で検出されている。建物17と平面的な切りあい関係を有する。調査区内では平面形は確認できないが、直径約20cmの円形に復元できる。深さは遺構検出面から18cmを測る。埋土は灰色土（炭化物混）である。

遺物は1013の瓦器の椀が出土している。口縁端部内面に一条の沈線を巡らし、暗文は体部内面に比較的密な圏線状が確認されるが、体部外面にはまったく確認できない。また、体部外面に指押え痕が残る。遺物が少量・小片のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S142 (第64・82・98図) 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。溝S143の南東側に位置する。建物17と平面的な切りあい関係を有する。一辺約50cmの隅丸方形で、深さは最深部で遺構検出面から46cmを測る。埋土は褐灰色土である。

遺物は1014の瓦器の椀が出土している。口縁端部内面に一条の沈線を巡らし、暗文は体部内面に比較的密な圏線状が確認されるが、体部外面にはまったく確認できない。また、体部外面には指押え痕が残る。遺物が少量・小片のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S166 (第64・66・82・98図) 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。調査区の南西壁面に接し、建物17北側に位置する。調査区外に延びていることから全体像は把握できないが、直径約30cm程度の円形と考えられる。深さは最深部で遺構検出面から40cmを測る。埋土は黄灰色土（にぶい黄橙色土混）である。

遺物は1015の土師器の小型の皿が出土している。遺物が少量・小片のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S173 (第64・82・98図) 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物15・16と平面的な切りあい関係を有し、建物15を構成するピットS171を切っている。直径約30cmの円形の掘方で、北端で直径約10cmの柱痕を確認できる。深さは柱痕部で遺構検出面から24cmを測る。埋土は掘方が褐灰色土（明黄褐色土少量混）、柱痕は褐灰色土である。

遺物は1016の瓦器の椀が出土している。口縁端部内面に一条の沈線を巡らし、体部内面に比較的密な圏線状の暗文を確認できる。体部外面には暗文はまったく確認できない。遺物が少量・小片のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S182 (第64・82・98図) 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物15と平面的な切りあい関係を有する。一辺約30cmの隅丸方形の掘方で、ほぼ中央で直径約10cmの柱痕を確認できる。深さは柱痕部で遺構検出面から13cmを測る。埋土は掘方が褐灰色土(明黄褐色土少量混)、柱痕は褐灰色土である。

遺物は1017の土師器の皿が出土している。摩耗が著しく調整法は不明である。遺物が少量・小片のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S190 (第64・82・98図) 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。建物15と平面的な切りあい関係を有する。一辺約20cmの隅丸方形の掘方で、西端で直径約10cmの柱痕を確認できる。深さは柱痕部で遺構検出面から15cmを測る。埋土は掘方が褐灰色土(明黄褐色土少量混)、柱痕は褐灰色土である。

遺物は1018の瓦器の椀が出土している。口縁端部内面に一条の沈線を巡らし、体部内面に比較的密な圏線状の暗文を確認できる。体部外面には暗文はまったく確認できない。遺物が少量・小片のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S195 (第64・82・98図) 調査区の南西側、溝S3の内側の屋敷地内で検出されたピットである。調査区内で検出されている屋敷の西側隅に位置する。一辺約60cmのやや不整な隅丸方形で、深さは最深部で遺構検出面から20cmを測る。埋土は褐灰色土である。

遺物は1019・1020の瓦器の椀が出土している。1020は摩滅が著しく、調整法が確認できないが、1019は口縁端部内面に一条の沈線を巡らし、体部内面に比較的密な圏線状の暗文が確認できる。体部外面には暗文はまったく確認できない。遺物が少量・小片のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S216 (第64・82・98図) 調査区の南西側、溝S1・S3の間で検出されたピットである。長軸約50cm、短軸約35cmのやや不整な楕円形で、深さは最深部で遺構検出面から5cmを測る。埋土は褐灰色土である。

遺物は1021の土師器の皿、1022の瓦器の椀が出土している。1022は高台に粘土紐を擦り付けた簡便なもので、高台の役割を成していない。遺物が少量・小片のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S294 (第64・82・98図) 調査区の北西側、溝S1の北側で検出されたピットである。直径約20cmの円形で、深さは最深部で遺構検出面から15cmを測る。埋土は褐灰色土(にぶい黄橙色土ブロック少量混)である。

遺物は1023の瓦器の椀が出土している。口縁端部内面に一条の沈線を巡らし、体部内面に比較的密な圏線状の暗文を確認できる。体部外面には暗文はまったく確認できない。遺物が少量・小片のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S299 (第64・82・98図) 調査区の北西側、溝S1の北側、ピットS299の南側で検出されたピットである。直径約30cmの円形で、深さは最深部で遺構検出面から31cmを測る。埋土は褐灰色土(にぶい黄橙色土ブロック少量混)である。

遺物は1024の瓦器の椀が出土している。全体に摩滅が著しいが、口縁端部内面に一条の沈線を巡らしていることは確認できる。遺物が少量・小片のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構

の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S322 (第64・82・98図) 調査区の中央やや西より、溝S1の北東岸で検出されたピットである。S1を切っている。別のピットに東側を切られている。直径25cm程度のやや不整な円形に復元できる。深さは最深部で遺構検出面から7cmを測る。埋土は褐灰色土（にぶい黄橙色土ブロック少量混）である。

遺物は1025の土師器の皿が出土している。遺物が少量・小片のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S334 (第64・82・98図) 調査区の中央やや北西より、溝S312の西側で検出されたピットである。直径約20cmの円形で、深さは最深部で遺構検出面から29cmを測る。埋土は褐灰色土（にぶい黄橙色土ブロック少量混）である。

遺物は1026の瓦器の椀の底部が出土している。高台に粘土紐を擦り付けた簡便なもので、高台の役割を果たしていない。遺物が少量・小片のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S399 (第64・98図・図版105) 調査区の中央北寄り、櫛5の内側で検出されたピットである。長軸約23cm、短軸約18cmの楕円形で、深さは最深部で遺構検出面から17cmを測る。ピットの北西側で柱根が検出されている。先端部を加工して尖らせている。樹種はモミ属で、埋土は褐灰色土である。櫛もしくは建物を構成する可能性があるが、断定できない。遺物は出土していない。

S413 (第64・98図) 調査区の北側、建物12の西側外縁と平面プランで切りあう関係を有している位置で検出されたピットである。直径長軸約25cm、短軸約15cmの楕円形で、深さは最深部で遺構検出面から10cmを測る。埋土は褐灰色土である。

遺物は1027の土師器の皿が出土している。遺物が少量・小片のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S414 (第64・82・98図) 調査区の北側、建物12西側で検出されたピットである。長軸約35cm、短軸約20cmの楕円形の掘方で、南西側で直径約10cmの柱痕が検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から13cmを測る。埋土は掘方が褐灰色土（明黄褐色土少量混）、柱痕が褐灰色土である。

遺物は1028の瓦器の椀が出土している。やや摩滅気味であるものの、口縁端部内面に一条の沈線を巡らし、体部内面に比較的密な圏線状の暗文を確認できる。体部外面には暗文はまったく確認できない。遺物が少量・小片のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

S476 (第64・82・98図) 調査区の南西端、落ち込みS251の南側で検出されたピットである。直径約20cmの円形で、中央部に拳大の石が検出されている。深さは最深部で遺構検出面から11cmを測る。埋土は褐灰色土（にぶい黄橙色土ブロック少量混）である。

遺物は1029の瓦器の椀が出土している。やや摩滅気味であるものの、口縁端部内面に一条の沈線を巡らし、体部内面に比較的密な圏線状の暗文を確認できる。体部外面には暗文はまったく確認できない。遺物が少量・小片のため時期を明確にしがたいが、周辺の遺構の状況から13世紀前半代と考えておきたい。

第5節 T5の調査成果(第99~128図)

T5は調査対象地の南東端、T4の東側に位置する調査区である。北東—南西約41~56m、北西—南東約23~34mで、面積は2,096㎡である。調査区全体が水田であった。当初、調査区の北東側が調査対象地であったが、調査の過程で遺構が南西方向に広がっていることが確認されたため、市教委との協議を経て調査区を拡張することとなった。

基本層序(第100図)は耕土(灰色土)以下、にぶい黄橙色砂質土、明黄褐色土で、明黄褐色土が地山面=遺構検出面である。遺構検出面は標高161.4~161.7mと調査区全体としては北東側から南西側に向かって緩やかに低くなる傾向があるが、特に調査区中央付近で検出されている溝S81・98を境に20cm程度の高低差が生じている。これは、水田の区画の段差に起因している。また、調査区の西側隅周辺では、他の地点と比較して遺構の密度が低いことから、大きく削平されている可能性が高い。遺構は掘立柱建物、土坑接続溝、溝、落ち込み、土坑、ピット等が検出されている。遺構の主な埋土は褐灰色土~灰黄褐色土である。調査区内には市教委の試掘調査9トレンチ=建物2付近が設定されている。

調査区の遺構の記述については、調査区全体に遺構が広がっているため、最初に掘立柱建物のみ調査区(T5)全域を対象として詳述し、以下、北東部・中央部・南西部(拡張区)と大きく3地区に分割して各遺構の内容について記述していくこととする。

調査区の周囲に排水用の溝を掘削した際や重機による表土掘削中の出土および表面採集した遺物が第101図の1033~1042・1048である。1033・1034は小型の土師器の皿、1035・1036は大型の土師器の皿である。ともに口縁外部面をヨコナデして内傾する面を持つ。1037・1038は瓦器の椀で、口縁端部に一条の沈線を巡らし、体部内面に圏線状の暗文を施す。外面には指押え痕が残る。1037に残る高台は薄い粘土を張り付けた簡便なもので、ほとんど高台の役割を果たしていない。1039は青磁の合子の身である。小片であるが透明感のある釉を施している。1040は信楽焼の捏鉢もしくは播鉢である。小片のため確定できない。内面下半部は使用のため平滑である。1041・1042は信楽焼の甕の口縁~頸部である。1048はサヌカイト製の石甌である。

また、T4とT5の境で検出された井戸T4-S2周辺の試掘調査時の埋め戻し土から出土した遺物が1043~1047の瓦器の椀である。口縁端部内面には一条の沈線が施される。暗文は体部内面に比較的密な圏線状、見込み部分に複数回転の輪状が確認がされるが、体部外面にはまったく確認できない。また、体部外面には指押え痕が残る。高台部は粘土を簡単に張り付けたのみで、いわゆるミミズ腫れ状を呈している。

1. 掘立柱建物

掘立柱建物はT4・5で通し番号を付与している。検出・確定していく段階で番号を付与しているため番号順で並んでいない。よって、両調査区に跨って検出されている建物は、すでにT4で記述している。ここでは、T5内で検出された掘立柱建物を対象として詳述する。

建物1(第99・102・113図・図版109) 調査区の北東側中央付近で検出された、身舎が北西—南東

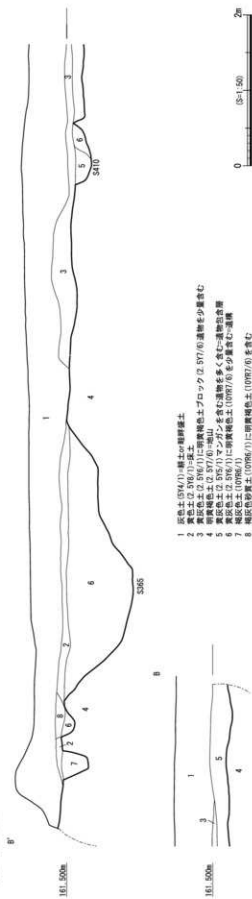


第99図 T5全体図

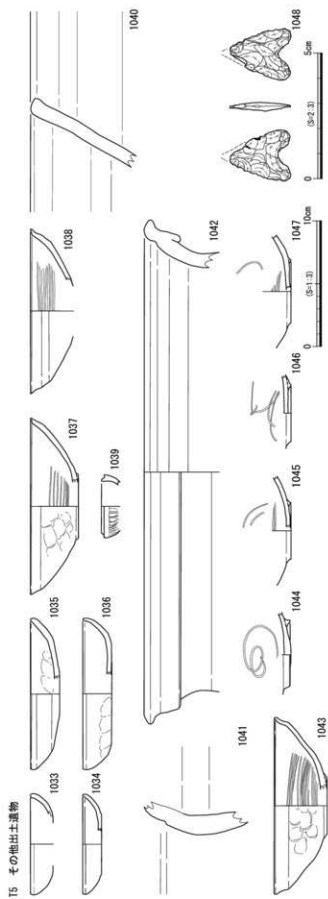


第100図 T5 東壁土層断面図

T5南壁土層断面図



第101図 T5 南壁土層断面図・出土遺物



3間(約6.6m)、北東—南西2間(約4.4m)の北東側に一面庇付の総柱の掘立柱建物である。底部分もいれて平面積は36.96㎡である。建物の主軸はN°38E方向で、柱間は北西—南東が2.2m、2.2m、2.2m、北東—南西が2.2m、2.2mである。身舎と庇の間は0.8mを測る。きれいに柱筋が通っている。掘方は直径もしくは一辺30~45cmの円形もしくは隅丸方形で、深さはややばらつきが認められるが、主に遺構検出面から15~40cmを測る。ほぼすべての柱穴で柱痕を確認できる。柱痕は直径15cm前後の円形を呈している。埋土はおもに掘方が明黄褐色土(褐灰色細砂混)、柱痕が褐灰色土である。S91で外皮だけの柱根が検出されている。樹種はモミ属である。また、S81においても木質が柱痕で検出されている。

遺物はS86~91・93・94・102の柱痕から土師器、瓦器の図化できない細片が、S83の柱痕からは1049・1050・1052~1054、掘方から1052、S84の柱痕から1055、S85の柱痕から1056~1058が出土している。1049~1051・1055・1056は土師器の小型の皿、1052は大型の土師器の皿である。1053・1054・1057・1058は瓦器の椀である。口縁端部内面には一条の沈線が施される。暗文は、遺存状態の良い1053は体部内面に比較的密な圈線状、見込み部分には輪状の暗文を確認できる。さらに調整痕とみられるハケ目も認められる。体部外面に暗文はまったく確認できない。また、体部外面には指押え痕が明瞭に残る。高台部は粘土を簡単に張り付けたのみで、いわゆるミミズ腫れ状を呈している。

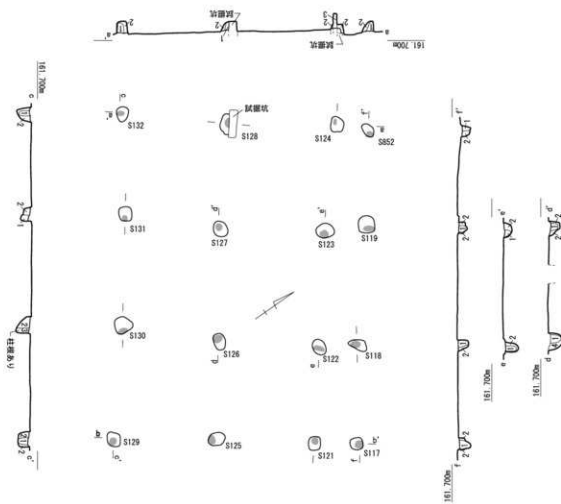
時期は出土している遺物が少量・小片であるがおおむね13世紀初めから中頃と考えられる。

建物2(第99・103・117図・図版109・110) 調査区のはほぼ中央付近で検出された、身舎が北西—南東2間(約4.4m)、北東—南西3間(約6.8m)の北東側に一面庇付の総柱の掘立柱建物である。底部分もいれて平面積は38.08㎡である。市教委の試掘調査9トレンチで検出されたSB0901に相当する。建物の主軸はN°38E方向で、柱間は北西—南東が2.2m、2.4m、2.4m、北東—南西が2.2m、2.2mである。身舎と庇の間は0.8mを測る。北西—南東方向は比較的きれいに柱筋が通っているが、北東—南西方向はやや乱れている。掘方は直径もしくは一辺30~45cmの円形もしくは隅丸方形で、深さはややばらつきが認められるが主に遺構検出面から20~40cmを測る。ほぼすべての柱穴で柱痕を確認できる。柱痕は直径15cm前後の円形を呈している。埋土はおもに掘方が褐灰色土(明黄褐色土)、柱痕が褐灰色土である。S130で柱根が検出されている。樹種はモミ属である。また、S125においても原型をとめない木質が柱痕から出土している。

遺物はS117・852を除くピットから土師器・瓦器が出土している。その中で図化することができたのは、S121の柱痕から出土した1059の瓦器の椀、S1027の柱痕から出土した1060の瓦器の椀である。口縁端部内面には一条の沈線が施される。暗文は、体部内面には比較的密な圈線状の暗文を確認できる。体部外面に暗文はまったく確認できない。また、体部外面には指押え痕が残る。

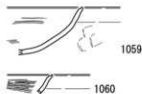
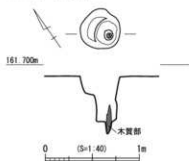
時期は出土している遺物が少量・小片であるがおおむね13世紀初めから中頃と考えられる。

建物3(第99・104・113図・図版111) 調査区の北東側中央付近、建物1の北東で検出された、北西—南東2間(約4.2m)、北東—南西3間(約6m)の総柱の掘立柱建物である。平面積は25.2㎡である。建物の主軸はN38°E方向で、柱間は北西—南東が2.2m、2m、北東—南西が1.9m、1.9m、2.2mである。全体に柱筋の乱れがみられる。掘方は直径もしくは長軸が30~45cmの円形もしくは楕円形で、深さはややばらつきが認められるが、主に遺構検出面から15~40cmを測る。ほぼす



- 1 純灰色土 (10YR5/1) 数分層
- 2 純灰色土 (10YR5/1) より鉄分多い+明黄褐色土 (10YR6/6)
- 3 純灰色粘質土 (10YR5/1)
- 4 明黄褐色土 (10YR6/6) に純灰色と (10YR5/1) が少量混

S130 出土状況図



S121 : 1059
S127 : 1060

遺構 0 (S=1:80) 2m

遺物 0 (S=1:3) 10cm

第103図 T5 建物2

すべての柱穴で柱痕が確認できる。柱痕は直径15cm前後の円形を呈している。埋土はおもに掘方が褐色土(明黄褐色土が少量混)、柱痕が褐色土である。S171では柱痕で石材が検出されている。礎板石であろうか。

遺物はS164の掘方、S170から土師器、瓦器の図化できない細片が、S79は1061・1062、S169から1063・1064、S176の柱痕から1065～1067が出土している。1061・1062・1066は土師器の小型の皿、1067は土師器の大型の皿である。1063・1064・1065は瓦器の碗である。口縁端部内面には一条の沈線が施される。暗文は体部内面に比較的密な圏線状、見込み部分に輪状の暗文を確認できる。体部外面に暗文はまったく確認できない。高台部は粘土を簡単に張り付けたのみで、いわゆるミミズ腫れ状を呈している。

時期は出土している遺物が少量・小片であるがおおむね13世紀初めから中頃と考えられる。

建物4 (第99・104・113図・図版110) 調査区の北側、建物11・12と平面で切りあい関係を持つ位置で検出された、北西―南東2間(約4.5m)、北東―南西1間(約2.9m)の掘立柱建物である。建物11の庇を構成するピットS844・843を、建物4を構成するピットS490・845が直接切っているため、建物11に後出する建物といえる。平面積は13.05㎡である。建物の主軸はN35°E方向で、柱間は北西―南東が2.1m、2.4m、北東―南西が2.9mである。全体に柱筋は比較的整っている。掘方は直径もしくは長軸が20～45cmの円形もしくは楕円形で、深さはややばらつきが認められ、遺構検出面から10～45cmを測る。ほぼすべての柱穴で柱痕を確認できる。柱痕は直径15cm前後の円形を呈している。埋土はおもに掘方が浅黄色砂混じり土、柱痕が褐色粘質土である。S502では柱根が検出されている。樹種はモミ属である。

遺物はS490・494から図化できない土師器・瓦器の細片が出土しているのみである。

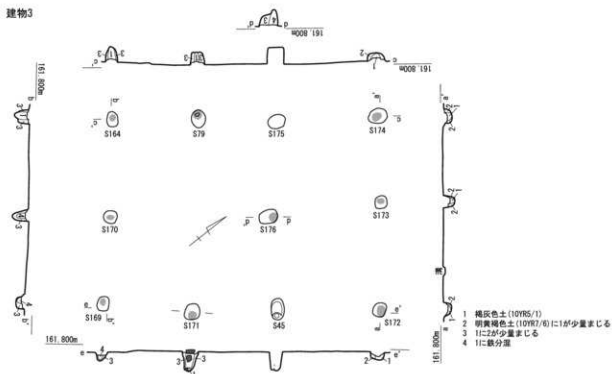
建物5 (第99・105・117図・図版110) 調査区の中央やや南寄りの建物が集中している地区で検出された北西―南東2間(約3m)、北東―南西2間(約3.8m)の総柱の掘立柱建物である。建物を構成するピットS251が、土坑S249に切られている。平面積は11.02㎡である。建物の主軸はN31°E方向で、柱間は北西―南東が1.6m、1.4m、北東―南西が1.9m、1.9mである。全体に柱筋は整っている。掘方は直径もしくは長軸が15～30cmの円形もしくは楕円形で、深さはややばらつきが認められ、遺構検出面から10～35cmを測る。ほぼすべての柱穴で柱痕を確認できる。柱痕は直径10～15cm前後の円形を呈している。埋土はおもに柱穴が明黄褐色土(暗灰黄色土少量混)、柱痕が暗灰黄色土(炭少量混)である。S210では柱根が検出されている。樹種はモミ属である。

遺物はS210・238・251から土師器(皿・羽釜)、黒色土器の細片が、S255の掘方から1068の瓦器の碗が出土している。全体に摩滅が著しく、調整法等は確認できない。

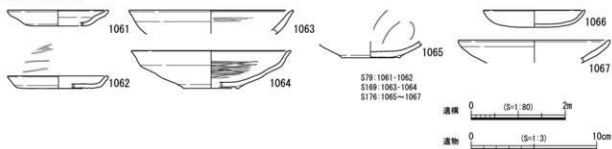
時期は出土している遺物が少量・小片であるがおおむね13世紀初めから中頃と考えられる。

建物6 (第99・105・117図) 調査区の中央やや南寄りの拡張区に跨る、建物が集中している地区で検出されている。北西―南東2間(約4m)、北東―南西2間(約4m)の総柱の掘立柱建物である。平面積は16㎡である。建物の主軸はN32°E方向で、柱間は北西―南東が1.8m、2.2m、北東―南西が2m、2mである。全体に柱筋は比較的整っている。掘方は直径もしくは長軸が20～30cmの円形もしくは楕円形で、深さはややばらつきが認められ、遺構検出面から25～45cmを測る。相対的に南側のピットが深い傾向がある。ほぼすべての柱穴で柱痕を確認できる。柱痕は直

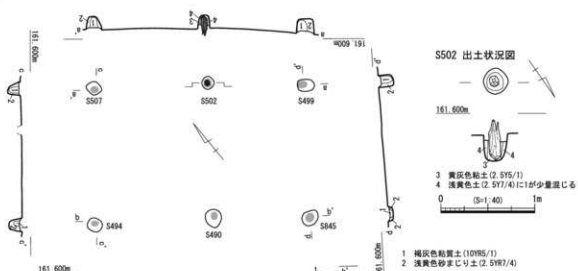
建物3



建物3 出土遺物

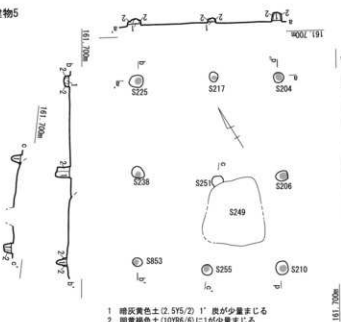


建物4

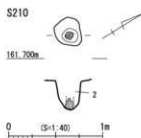


第104図 T5 建物3・4

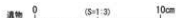
建物5



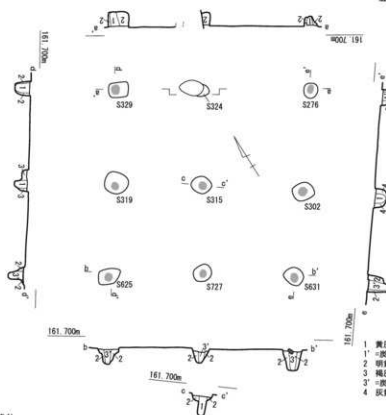
- 1 暗灰色土(2.5Y5/2) 1' 度が少量まじる
- 2 明黄褐色土(10YR6/6)に1が少量まじる



建物5 S255出土遺物



建物6



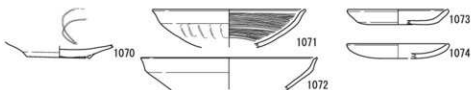
- 1 黄灰色土(2.5Y5/1)鉄分まじり
- 1' = 炭・灰土層
- 2 明黄褐色土(10YR7/6) 1が少量まじる やや砂質
- 3 暗灰色土(10YR6/1) 炭が少量まじる
- 3' = 炭がまじらない
- 4 灰黄褐色土(10YR6/2)

建物6 出土遺物

S302, 329, 631出土遺物



S302: 1069
S329: 1070~1072
S631: 1073-1074



第105図 T5 建物5・6

径10~15cm前後の円形を呈している。埋土はおもに掘方が明黄褐色土、柱痕が黄灰色土（一部焼土・混）である。

遺物はS276・315・319・625から土師器、黒色土器の細片が、S302から1069の土師器の皿、S329から1070~1072の瓦器の椀、S631から1073・1074土師器の皿が出土している。1071・1072は柱痕からの出土である。瓦器の椀は、口縁端部内面には一条の沈線が施される。暗文は、体部内面に比較的密な園線状の暗文を確認できるが、体部外面はまったく認められない。また、体部外面に指押え痕が残る。高台は粘土をわずかに張り付けた非常に簡便なもので、役割を果たすようなものではない。

時期は出土している遺物が少量・小片であるがおおむね13世紀初めから中頃と考えられる。

建物7（第99・106・126図・図版111~113）調査区の南端、拡張区で検出されている。北西-南東2間（約3.9m）、北東-南西2間（約3m）の総柱の掘立柱建物である。平面積は11.7㎡である。建物の主軸はN32°E方向で、柱間は北西-南東が1.1m、1.6m、1.2m、北東-南西が1.5m、1.5mである。全体に柱筋は整っている。掘方は直径が15~30cmの円形で、深さはややばらつきが認められ、遺構検出面から15~50cmを測る。ほぼすべての柱穴で柱痕を確認できる。柱痕は直径10~15cm前後の円形を呈している。埋土はおもに掘方・柱痕ともに灰色土で、柱痕がやや暗い色調を示す。S691・693で柱根が検出されている。S693の樹種はモミ属である。また、S701の柱痕からは炭と一緒に柱材の一部と考えられる木質が出土している。

遺物はS687・688・691・692・694から土師器、黒色土器の細片が出土している。

時期は遺物が少量・小片であるため確定できない。

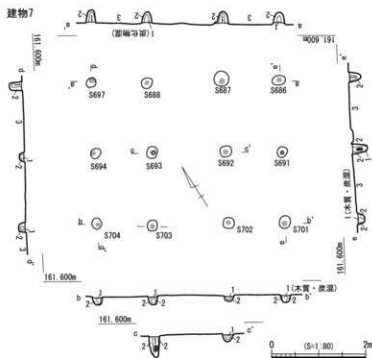
建物8（第99・106・117図）調査区の中央やや南寄りの拡張区に跨る、建物が集中している地区で検出されている。北西-南東2間（約4.4m）、北東-南西3間（約5.8m）の総柱の掘立柱建物である。平面積は25.52㎡である。建物9を構成するピットと直接的な切りあい関係が存在している。建物9が後出する。また、建物6と平面的な切りあい関係を有しているが、前後関係は不明である。建物の主軸はN32°E方向で、柱間は北西-南東が2.2m、2.2m、北東-南西が2m、2.2m、1.6mである。全体に柱筋のとおりは悪い。掘方は直径もしくは長軸が20~30cmの円形もしくは楕円形で、深さはややばらつきが認められ、遺構検出面から25~50cmを測る。ほぼすべての柱穴で柱痕を確認できる。柱痕は直径10~15cm前後の円形を呈している。埋土はおもに掘方が明黄褐色土、柱痕が黄灰色土（一部焼土混）である。

遺物はS257・269・272・289・314・335・718から土師器、黒色土器の細片が、S263から1075の瓦器の椀、S283の柱痕から1076の瓦器の皿、S630から1077のフイゴの羽口が出土している。1076は底部片で、体部内面には比較的密な園線状の暗文を確認できる。高台は粘土をわずかに張り付けた非常に簡便なもので、役割を果たすようなものではない。1076は全体に摩滅気味で、調整法が不明瞭である。1077は先端部片で、部分的にガラス化している。小片のため口径は復元できない。

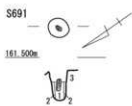
時期は出土している遺物が少量・小片であるがおおむね13世紀初めから中頃と考えられる。

建物9（第99・108図・図版112・114・137）調査区の南西端、拡張区の西側で検出されている。北西-南東3間（約7.2）、北東-南西5間（約10.2~11m）の総柱の掘立柱建物である。平面積は

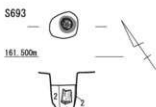
建物7



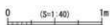
S691



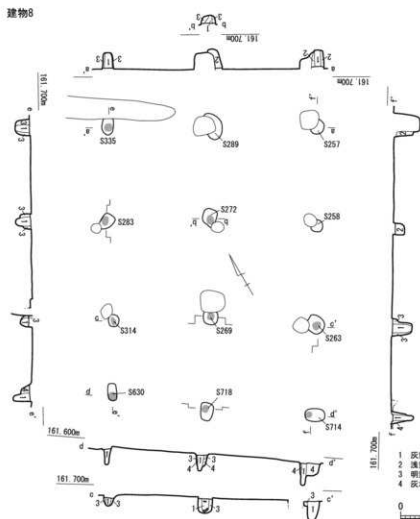
S693



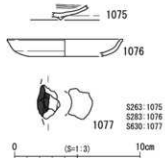
- 1 灰色土 (S1/1: 鉄分)
- 2 灰色土 (S1/1: 鉄分・マンガン)



建物8

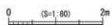


建物8 出土遺物



- S263: 1075
- S283: 1076
- S630: 1077

- 1 灰黄褐色土 (10P6/2) 1' = 数まじり
- 2 淡黄色土 (2. 5P6/3)
- 3 明黄褐色土 (10P7/5)
- 4 灰オリーブ色土 (7. 5V5/2)



第106図 T5 建物7・8

73.44㎡以上である。建物8を構成するピットの直接的な切りあい関係が存在している。建物8が後出する。また、建物6、櫓1・3、土坑接続溝S159と平面的な切りあい関係を有しているが、建物6、櫓1・3との前後関係は不明である。土坑接続溝S159に切られている。建物の主軸はN26°E方向である。柱間が北東側から2列目、3-5列目、6列目と異なり、柱筋のおとも大きく乱れていることから、別建物もしくは櫓などの可能性もある。ここでは同一建物として扱っておく。柱間は北西-南東が2.4m、2.4m、2.4北東-南西（西側辺）が2.4m、2m、1.8m、1.8m、2.2mである。掘方は直径もしくは一辺が30~50cmの円形もしくは隅丸方形で、深さはややばらつきが認められ、遺構検出面から15~40cmを測る。ほぼすべての柱穴で柱痕を確認できる。柱痕は直径10~15cm前後の円形を呈している。埋土はおもに掘方が明黄褐色土（やや砂質）、柱痕が黄灰色土である。S256の柱痕から柱材が検出されている。ただし、S256出土材は板材であることから柱根ではなく礎板である可能性が高い。樹種はモミ属である。

遺物はS438以外のピットから図化することのできない土師器、黒色土器の細片が出土している。S256から1078・1079の瓦器の椀、S337から1080の青磁の碗、S418から1081の瓦器の椀、S439の柱痕から1082の瓦器の椀が出土している。1079は柱痕から出土である。瓦器は摩滅して遺存状態が悪いものの、1079・1081は体部内面に圏線状の暗文を確認できる。1082は体部内面および外面の口縁部周辺に暗文を確認できる。また、器形的にやや深手である。1083の青磁碗片はやや暗い色調の釉で、外面に鎗連弁文が認められる。

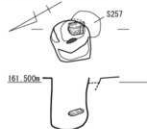
時期は出土している遺物に時期差がみられるが、出土状況から瓦器の椀1082が示す12世紀後半代に建てられたと考えておきたい。

建物10（第99・108・109・126図・図版113~116・140）調査区の中央やや南寄りの拡張区に跨る、建物が集中している地区で検出されている。北西-南東5間（約11.2m）、北東-南西4間（約7.6m）の総柱の掘立柱建物である。面積は85.12㎡である。主軸方向はN30°Eである。柱間は北西-南東が2m、2.2m、2.2m、2.2m、2.6m、北東-南西が1.8m、2.2m、2m、1.6mである。掘方は直径もしくは長軸が30~50cmの円形もしくは隅丸方形で、深さはややばらつきが認められ、遺構検出面から30~60cmを測り、他の建物のピットの深さと比較すると総じて深い。ほぼすべての掘方で柱痕を確認できる。柱痕は直径10~15cm前後の円形を呈している。埋土はおもに掘方が褐色土（黄色土ブロック混）、柱痕が褐色土である。S558・761・780・811・814から柱根が出土している。樹種はそれぞれヒノキ科・モミ属・モミ属・ヒノキ科・ヒノキ科・ヒノキである。S562・570・797は柱痕から柱材の一部と考えられる木質が検出されている。また、S616の柱痕の底で板石が検出されており、礎板石と考えられる。

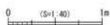
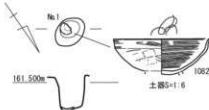
遺物はS800・805・826を除いたピットから図化することのできない細片も含めて出土している。その中で図化することができたものは、S558の掘方出土の1083の瓦器の椀、S562の柱痕出土の1084の瓦器の椀、S576の柱痕出土の1085の土師器の皿、S616から出土した1086・1087の土師器の皿・羽釜、S620の柱痕から出土した1088の土師器の羽釜、S637の掘方から出土した1089の土師器の羽釜、S761の柱痕から出土した1090の瓦器の椀、S784の柱痕のから出土した1091の土師器の皿、S822から出土した1092の瓦器の椀、掘方から出土した1093の土師器の羽釜、S823の掘方から出土した1094の瓦器の椀、柱痕から出土した1095の瓦器の椀である。瓦器の椀は全体にや

建物9 出土状況図

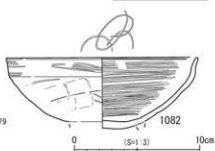
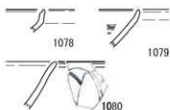
S256 礎板出土状況図



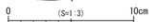
S439



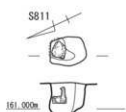
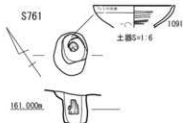
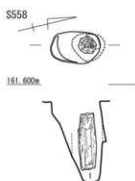
建物9 出土遺物



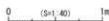
S256: 1078-1079
S337: 1080
S418: 1081
S439: 1082



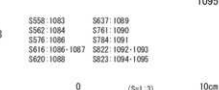
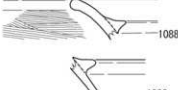
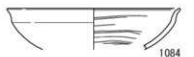
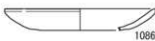
建物10 出土状況図



埋土: 1 褐灰色粘土 (0YR5/1)-柱痕



建物10 出土遺物



S558: 1083
S562: 1084
S378: 1086
S616: 1086-1087
S620: 1088
S637: 1089
S761: 1090
S784: 1091
S822: 1092-1093
S823: 1094-1095



第109図 T5 建物9・10 出土遺物

や丸みを帯びた体部を持ち、体部内面に圏線状の暗文が認められる。外面に暗文を確認できる個体は無い。I088は内面にススが付着している。

時期は、出土している遺物や周囲の遺構との関係から13世紀初めから中頃と考えられる。

2. 柵

柵はT4・5で通し番号を付与している。検出・確定していく段階で番号を付与しているため番号順で並んでいない。よって、両調査区に跨って検出されている建物は、すでにT4で詳述している。ここでは、T5内で検出された柵を対象として詳述する。

柵1（第99-110-117図） 調査区の中央、やや南寄りで検出された柵である。土坑接続溝S159に切られている。北西—南東5間（10.8m）、北東—南西4間（約8m）で「L」字形で検出されている。主軸はN32°E方向で、柱間は北西—南東が2.2m、2.2m、4.2m、2.2m、北東—南西が1.9m、2m、2.1m、2mである。北西—南東列の北西から3間目の柱間の長い地点については、ちょうど土坑接続溝S159と重なっており柱穴が確認できなかった。柱穴の有無について不明である。掘方は直径もしくは長軸25～35cmの円形もしくは楕円形で、深さはおおむね遺構検出面から25～45cm前後を測る。検出されている柱穴の大半で柱痕を確認できる。柱痕は直径10～15cmの円形を呈している。埋土はおもに掘方が明黄褐色土（暗灰黄色土少量混）、柱痕が暗灰黄色土である。

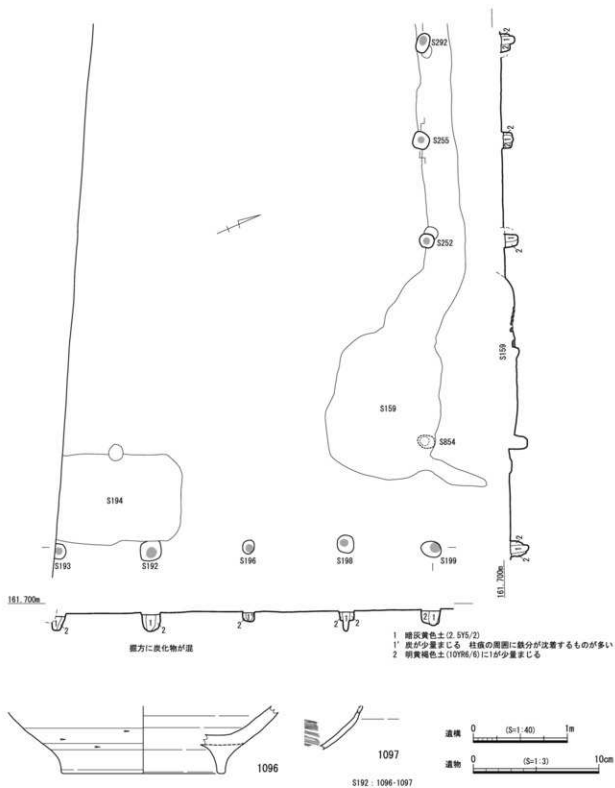
遺物はS193・854以外から瓦器・土師器の小片が出土している。その中でS192から1096の常滑焼の捏鉢、1097の瓦器の椀を図化することができた。1096は内面が摩耗しており、使用痕と考えられる。1097は体部内面に圏線状の暗文が認められる。外面では確認できない。

柵2（第99-111-117図・図版117） 調査区の南西側の拡張区を跨いで検出された柵である。建物8・9、柵3と平面的な切りあい関係がある。ただし、構成するピットの直接的な切り合い関係がみとめられないため、前後関係は不明である。北西—南東3間（約6m）、北東—南西4間（約7.8m）で「L」字形で検出されている。主軸はN32°E方向で、柱間は北西—南東が1.8m、2.2m、2m、北東—南西が1.8m、1.6m、2.4m、2mである。掘方は直径もしくは長軸25～40cmの円形もしくは楕円形で、深さはおおむね遺構検出面から15～70cm前後を測る。S657は他のピットと比較して突出して深い。検出されている柱穴の大半で柱痕を確認できる。柱痕は直径10～15cmの円形を呈している。埋土はおもに掘方が褐灰色土（にぶい黄褐色土混）、柱痕が褐灰色土である。S268・347・657で柱根が検出されている。樹種はS347・657ともにモミ属である。

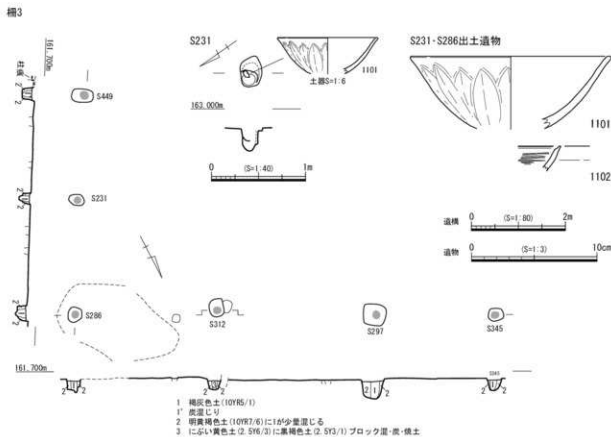
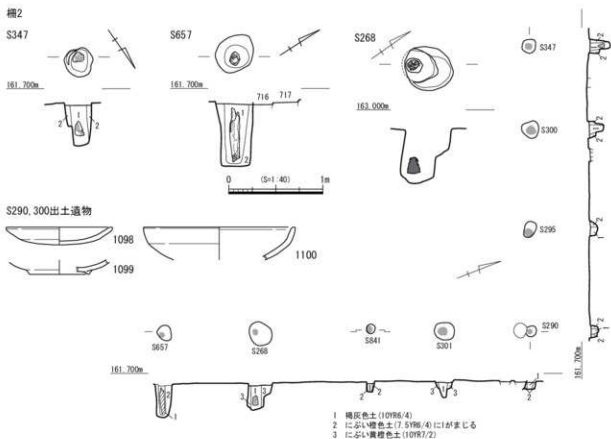
遺物はS841以外から瓦器・土師器の小片が出土している。その中でS290から出土した1098の土師器の皿、S300から出土した1099の瓦器の椀、1100の土師器の皿を図化することができた。1100は柱根からの出土である。1099は摩耗が著しく調整法がほとんどわからない。

時期は出土している遺物が少量・小片であるが周囲の遺構の状況から、おおむね13世紀初頭から13世紀中頃と考えておきたい。

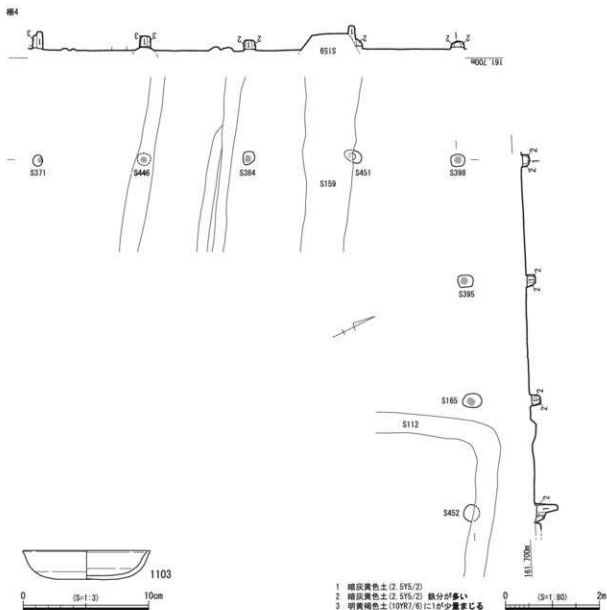
柵3（第99-111-117図・図版117） 調査区の南西側、拡張区に接する地点で検出されている。建物9、柵2と平面的な切りあい関係を有するが、構成するピットの直接的な切りあい関係が認められないため、前後関係は不明である。北西—南東3間（約8.9m）、北東—南西2間（約4.6m）で「L」字形で検出されている。主軸はN30°E方向で、柱間は北西—南東が2.5m、3.4m、3m、



第110図 T5 柵1



第111図 T5 欄2・欄3



第112図 T5 欄4

北東—南西が2.4m、2.2mである。掘方は直径もしくは一辺25～35cmの円形もしくは隅丸方形で、深さはおおむね遺構検出面から25～40cm前後を測る。検出されている柱穴の大半で柱痕を確認できる。柱痕は直径10～15cmの円形を呈している。埋土はおもに掘方が明黄褐色土（褐灰色土少量混）、柱痕が褐灰色土である。

遺物はS297以外から瓦器・土師器の小片が出土している。その中でS231の柱痕から出土した1101の青磁の碗、S286の掘方から出土した瓦器の碗を図化することができた。1101は非常に透感のある釉で、体部外面に鎬連弁文を確認できる。1102は口縁端部内面に沈線、圏線状の暗文が認められる。外面では確認できない。

時期は出土している遺物が少量・小片であるが周囲の遺構の状況から、おおむね13世紀初頭から13世紀中頃と考えておきたい。

欄4 (第99・112・117図) 調査区の南西側、拡張区に接する地点で検出されている。土坑接続溝 S112・159に切られている。北西—南東3間(約7.6m)、北東—南西4間(約8.8m)で「L」字形で検出されている。主軸はN27°E方向で、柱間は北西—南東が2.6m、2.6m、2.4m、北東—南西が2.2m、2.2m、2.2m、2.2mである。掘方は直径もしくは一辺25~45cmの円形もしくは隅丸方形で、深さはばらつきがあり遺構検出面から15~50cmを測る。検出されている柱穴の大半で柱痕を確認できる。柱痕は直径10~15cmの円形を呈している。埋土はおもに掘方が暗灰黄色土(鉄分が多く混)、柱痕が暗灰黄色土である。

遺物はS395・446・451以外から瓦器・土師器の破片が出土している。その中で図化できたのはS371の柱痕から出土した1103の瓦器の皿である。全体に摩滅が著しく、調整法は不明である。

時期は出土している遺物が少量・小片であるが周囲の遺構の状況から、おおむね13世紀初頭から13世紀中頃と考えておきたい。

3. 北東地区 (第113図)

この地区は、遺構密度はあまり高くないが、切りあい関係をほとんど持たない建物が区画溝を伴いながら展開している。

(1) 溝

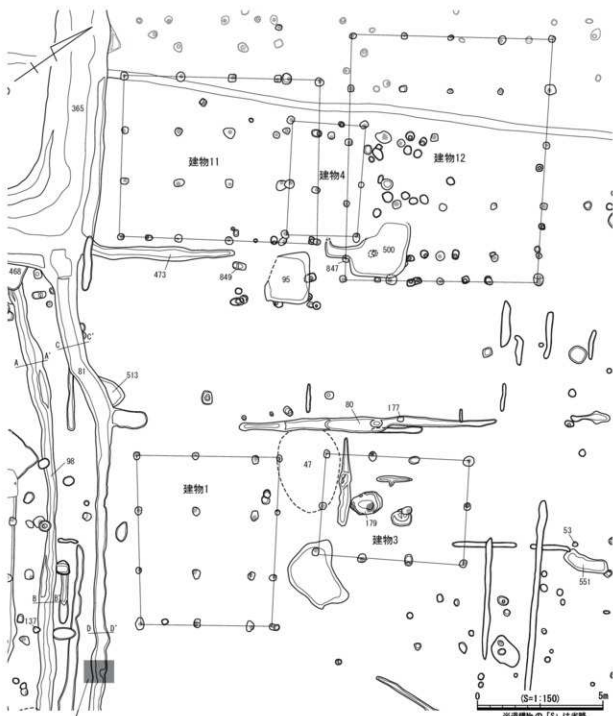
S80 (第99・113・114図) 調査区の北東部、建物1・3の北西部で検出された溝である。南西—北東に長さ約10m、幅は0.35~0.55mで、深さは遺構検出面から4~5cmと浅い。断面は浅い皿状を呈している。主軸はN34°Eである。埋土は、褐灰色土(にぶい黄橙色土ブロック少量混)で、建物1・3との位置関係から区画溝の可能性が高い。

遺物は1104・1105の土師器の羽釜が出土している。1104は外面全体にススが附着している。

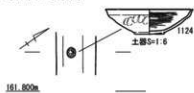
時期は出土遺物が少量・小片であることから明確にしがたいが、周辺の他の遺構を参考にするならば13世紀前半代から中頃と考えられる。

S81 (第99・113・114図・図版118・119) 調査区の北東部、建物1南西側で検出されたS365(T4-S1)に接続する溝である。北西—南東方向に長さ約24mが検出されており、幅は0.4~0.85mで北東側が比較的狭い。深さは遺構検出面から4~20cmで、断面は半円形を呈しているが、北東側の幅が狭くなっている部分では浅い。北西部ではやや蛇行している部分があるが、主軸はおおむねN55°Wである。埋土は黄灰色土で、部分的に砂質が強い地点がある。南西側で平行して検出されている溝S98と対になって道路の側溝である可能性もある。

遺物は1106~1133が出土している。1106は青磁の碗の口縁部である。1107~1110は土師器の小型の皿、1111~1113は土師器の大型の皿である。土師器の皿は大型・小型を問わず、体部が丸みを持つものと直線的に上方にのびるものがある。口縁端部は丸く収めている。1114~1116は土師器の羽釜である。すべて外面の鋳下部全体にススが附着している。1117~1133は瓦器の椀である。やや丸みを帯びた体部に外反する口縁部を持つ。口縁端部内面には一条の沈線が施される。口径は13cm台が中心、器高は3cm後半台と、扁平な印象を受ける。暗文は、体部内面に比較的密な圏線状、見込み部分に複数回転の輪状もしくは「ℓ」字状、体部外面にはまったく確認できない。また、体部外面に指押え痕が明瞭に残るものが多い。高台部は粘土を簡単に張り付けただのみで、

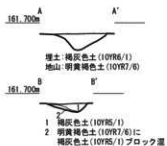


S81 出土状況図



161.850m

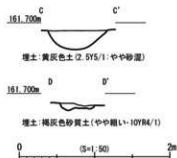
溝S98 断面



埋土: 褐色土 (10YR6/1)
地山: 明黄褐色土 (10YR7/6)

1 褐色土 (10YR5/1)
2 明黄褐色土 (10YR7/6)に
褐色土 (10YR5/1)ブロック混

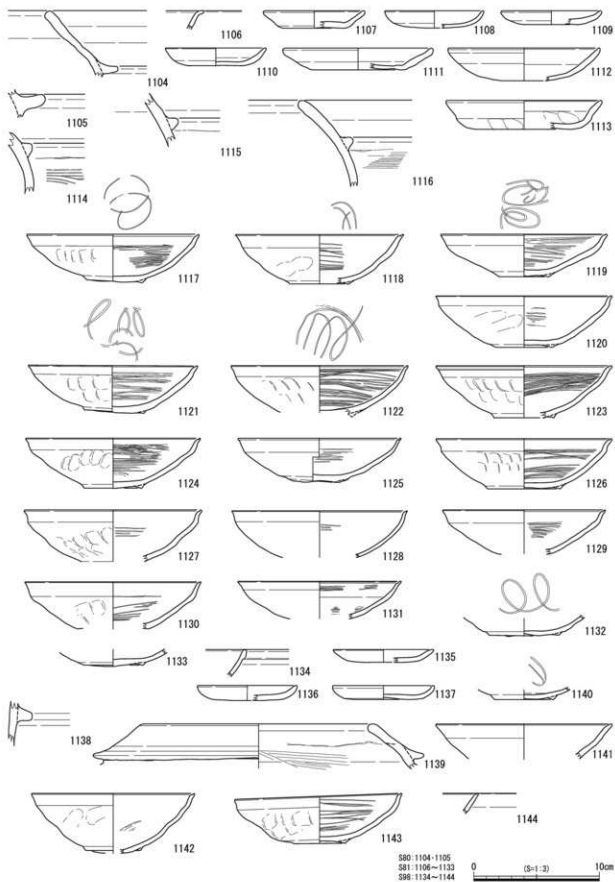
溝S81 土層断面



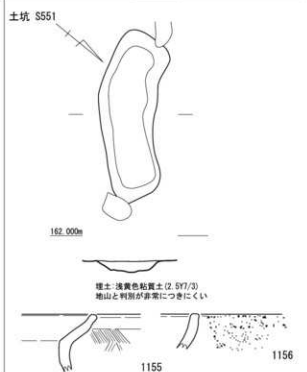
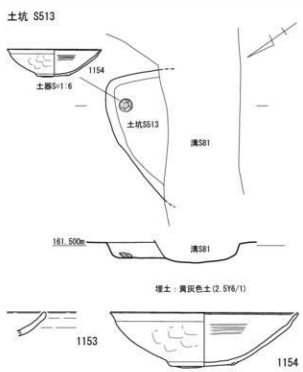
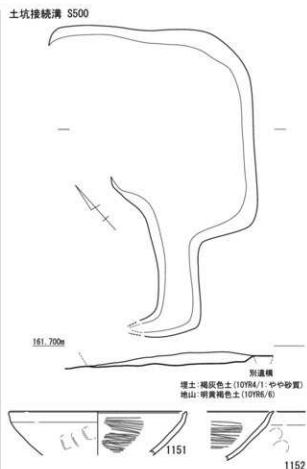
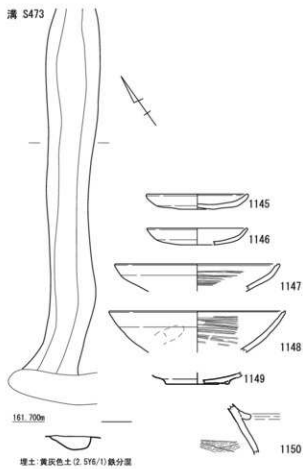
埋土: 黄灰色土 (2.5Y5/1) やや砂混

埋土: 褐色色砂質土 (やや細い) 10YR4/1

第113図 T5 北東地区



第114図 T5 溝S80・81・98出土遺物



第115図 T5 溝S473、土坑接続溝S500、土坑S513・551

いわゆるミミズ腫れ状を呈しており、部分的に剥離しているものが多くみられる。全体的に遺存状態は悪く、炭素が抜けているものが多い。1124はちょうど検出された中央付近で、底面から正位で検出された。

時期は出土している遺物から13世紀前葉から中葉が中心と考えられる。接続している溝S365(T4-S1)の様相と矛盾しない。

S98 (第99・113・114図・図版118・120) 調査区の北東部、建物1南西側で検出された溝である。土坑S468に切られており、溝S365(T4-S1)と接続していたかは確定できないが、隣接する溝S81の状況から接続していた可能性が高い。北西—南東に長さ約20mが検出されており、幅は0.4～0.7mで、北東側で狭くなって消えてなくなってしまう。深さは遺構検出面から平均して20cmで、断面は逆三角形を呈している。隣接する溝S81と同様に主軸はおおむねN55°Wである。埋土は、おもに褐灰色土で、部分的に底面付近で明黄褐色土(褐灰色土ブロック混)が認められる。北東側で平行して検出されている溝S81と対になって道路の側溝である可能性もある。

遺物は1134～1144が出土している。1134は白磁の碗の口縁部である。軸は全く光沢感がなく、器表面が非常に荒れている。1135～1137は土師器の小型の皿である。1138・1139は土師器の羽釜である。1138は外面、1139は内面前面にススが附着している。1140～1144は瓦器の椀である。摩滅が著しいものが多い。口縁端部内面には一条の沈線が施される。暗文は、体部内面にやや疎な圏線状、見込み部分に複数回転の輪状を確認できる。体部外面にはまったく確認できない。また、体部外面に指押え痕が認められる。高台部は粘土を簡単に張り付けたのみで、いわゆるミミズ腫れ状を呈しており、部分的に剥離しているものが多くみられる。そのため底部が高台よりも下部に突出して、役割を果たさない。全体的に遺存状態は悪く、炭素が抜けているものが多い。

時期は出土している遺物から13世紀前葉から中葉が中心と考えられる。

S473 (第99・113・115図) 調査区の北東部、建物11南東部で検出された溝である。ちょうど溝S365(T4-S1)と接する地点で他の遺構に切られているものの、断面観察等から接続していたと判断される。北東—南西に長さ約5.5mが検出されており、幅は0.3～0.55m、深さは遺構検出面から平均して12cmで、南西に向かって緩やかに深くなっている。断面はややつぶれた逆台形を呈している。主軸はおおむねN36°Wである。埋土は、黄灰色土(鉄分混)である。建物11に伴う区画溝である可能性が高い。

遺物は1145～1150が出土している。1145・1146は土師器の小型の皿である。1147～1149は瓦器の椀である。全体的に遺存状態は悪く、炭素が抜けているものが多い。口縁端部内面に一条の沈線が施され、暗文は、体部内面に比較的な圏線状、体部外面にはまったく確認できない。高台部は粘土を簡単に張り付けたのみの非常に簡便なものである。1150は土師器の羽釜である。内外面ともに部分的にススが附着している。

時期は出土している遺物から13世紀前葉から中葉が中心と考えられる。

(2) 土坑接続溝

S500 (第99・113・115図・図版130) 調査区の北側で検出された土坑接続溝である。建物12と切りあい関係があり、建物12を構成するピットS847を切っている。検出された地点は、水田の段

があり、遺構の北東側は削平されていることから、本来は土坑接続溝S112・158・159のように土坑に接続して北西方向に延びる溝があったと考えられる。土坑部分は北西—南東2.1m以上、北東—南西1.7m、深さは南東側で遺構検出面から約8cmである。溝部分は土坑から南西方向に約1m延び、直角に屈曲し、深さは約5cmである。埋土は褐灰色土（やや砂質）である。

遺物は1151・1152の瓦器の腕が出土している。口縁端部内面に一条の沈線が施され、暗文は、体部内面が比較的密な圏線状であるが、体部外面にはまったく確認できない。体部外面に指押さえ痕が明瞭に残る。

時期は、出土している遺物から13世紀前葉から中葉が中心と考えられる。

(3) 土坑

S59 (第99図) 調査区の北東端で検出された土坑である。規模は長さ1.35m、幅0.4~0.5mのやや不整な隅丸長方形を呈し、深さは最深部で遺構検出面から14cmを測る。埋土は褐灰色土（にぶい黄橙色土ブロック少量混）である。

遺物は1032の瓦器の腕が出土している。内外面ともに摩滅が著しいため調整法は不明である。

時期は小片であるが出土した遺物と周辺の状況から13世紀前葉から中葉としておきたい。

S95 (第99・113・116図・図版123) 調査区の中央北寄り、建物4・11の南東側で検出された土坑である。土坑接続溝S500と同じく、水田の段に遺構がかかっており西側が削平されており、全体像は不明である。ただし、土坑の規模等から溝が接続していた可能性もある。規模は長軸約2m、短軸約1.8mで、深さは最深部で遺構検出面から約10cmを測る。埋土は黄灰色土（焼土・炭化物混）である。

遺物は1157~1168が出土している。1157は土師器の小型の皿である。1158・1161~1167は瓦器の腕である。瓦器の腕は口縁端部内面に一条の沈線が施され、暗文が体部内面に比較的密な圏線状で、確認されるが、体部外面にはまったく確認できない。高台部は粘土を簡単に張り付けた非常に簡便なもので、個体によっては底部が高台接地面より下方に飛び出ているものもある。1162は北東側で伏せた状態で法面から出土している。1159・1160・1168は土師器の羽釜である。すべて摩滅が著しく、調整法が不明瞭である。

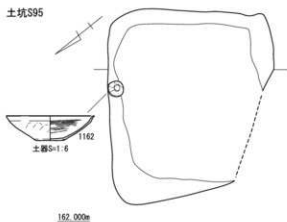
S179 (第99・113・116図) 調査区の北東部で検出された土坑である。建物3と平面的な切りあい関係があるが、建物を構成するピットと直接的な切りあい関係が確認できないので前後関係は不明である。規模は長軸1.3m、短軸が0.8mの楕円形を呈し、深さは最深部で遺構検出面から43cmを測る。埋土は上層から褐灰色土、褐灰色土（灰白色土粒混）、黒褐色土（焼土混）である。黒褐色土中の焼土は北東側に集中していた。

遺物は出土していない。

S513 (第99・113・115図・図版130) 調査区の中央、北寄りで検出された土坑である。長軸1.3m以上、短軸0.5m以上で、溝S81に切られていることから全体像は不明である。深さは遺構検出面から約17cmを測り、底面は平坦である。埋土は黄灰色土である。

遺物は1153の土師器の皿、西側隅付近の底面で検出された1154の瓦器の腕が出土している。1154は摩滅が著しいものの、体部内面に圏線状の暗文を確認できる。

土坑S95



162,000m

埋土：黄灰色土(2.5Y6/1)・焼土・炭化物混



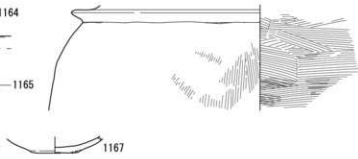
1164



1165



1166



1167



1157



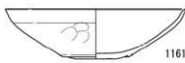
1158



1159



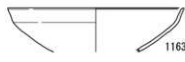
1160



1161



1162



1163



1168

土坑S179



161,800m



- 1 稀灰色土(7.5Y8/1)
- 2 稀灰色土(7.5Y8/1)に灰白色土層(10Y8/1)がまじる
- 3 黄褐色土(10YR2/1)に褐色土(焼土・7.5YR7/6)がまじる

※アミ網は焼土集中部

落ち込みS47出土遺物



1169

その他ピット出土遺物



1170



1171



1172



1173

- S47-1169
- S53-1170
- S95-1157-1168
- S137-1171
- S177-1172
- S849-1173

遺構 0 (S=1:40) 1m

遺物 0 (S=1:3) 10cm

第116図 土坑S95・179、その他ピット、落ち込み

時期は出土している遺物から13世紀前葉から中葉と考えられる。

S551 (第99・113・115図) 調査区の北東隅で検出された土坑である。長さ約1.8m、幅0.6mで、深さは遺構検出面から最深部で約15cmを測る。埋土は浅黄色粘質土で、地山と非常に見分けが付きにくかった。

遺物は1155・1156の弥生土器である。胎土が非常に粗く、器表面の摩耗も著しい。外面の口縁部から頸部にかけて粗いハケ目を確認できる。

時期は調査地内の他の遺構等から、弥生時代中期であろうか。

(4) 落ち込み

S47 (第99・113・116図) 調査区の北東部、建物1と建物3の間で検出された落ち込みである。明確な掘り込みがなく、平面プランも明瞭でなかったこと、遺物を包含していたことから落ち込みと判断した。おおむね長軸が約3.5m、短軸が2.5mの楕円形で検出された。深さは遺構検出面から3～5cmと非常に浅い。埋土は褐灰色土である。

遺物は1169の土師器の羽釜である。外面は全面にスガが付着している。

(5) ビット

S48 (第99図) 調査区の西側で検出されたビットである。周辺では遺構の密度が薄いことから後世の削平を受けている可能性が高い。直径約70cmのやや不整な円形を呈し、深さは最深部で遺構検出面から29cmを測る。埋土は褐灰色土（にぶい黄橙色土ブロック少量混）である。

遺物は1030の土師器の皿の口縁部片、1031の瓦器の椀が出土している。瓦器の椀は炭素が欠失しているが、体部内面には比較密な圏線状の暗文が認められる。外面に確認できない。

時期は小片であるが出土した遺物と周辺の状況から13世紀前葉から中葉としておきたい。

S53 (第113・116図) 調査区の北東端、土坑S551の西側で検出されたビットである。直径約20cmの円形で、深さは遺構検出面から3cmと非常に浅い。埋土は褐灰色土（にぶい黄橙色土ブロック少量混）である。

遺物は1170の瓦器の椀の口縁部片が出土している。

時期は出土した遺物と周辺の状況から13世紀前葉から中葉としておきたい。

S137 (第113・116図) 調査区の中央やや東寄りで検出されたビットである。溝S98を切っている。直径25cmやや不整な円形で、深さは遺構検出面から3cmと非常に浅い。埋土は褐灰色土（にぶい黄橙色土ブロック少量混）である。

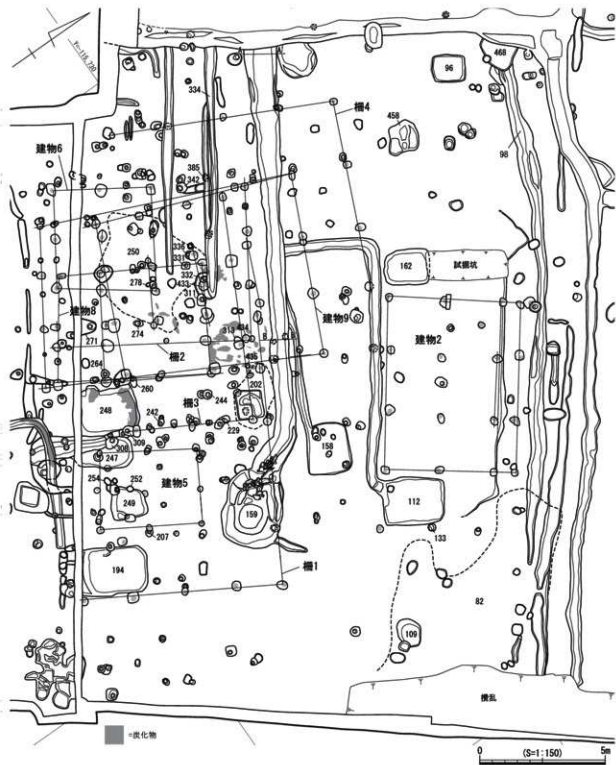
遺物は1171の土師器の羽釜が出土している。鈔周辺部の小片である。

時期は出土した遺物と周辺の状況から13世紀前葉から中葉としておきたい。

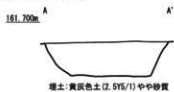
S177 (第99・113・116図) 調査区の北西側、建物3の北西側に位置する溝S80と切りあい関係を有するビットである。溝S80を切っている。直径25cmのやや不整な円形で、深さは遺構検出面から14cmを測る。埋土は褐灰色土（にぶい黄橙色土ブロック少量混）である。

遺物は1172の瓦器の椀が出土している。

時期は小片であるが出土した遺物と周辺の状況から13世紀前葉から中葉としておきたい。

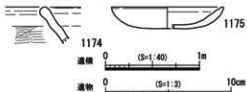


S159清部土層断面



埋土:黄灰色土(2.5Y6/1)中砂質

S334 出土遺物



遺構

遺物

第117図 T5 中央地区

S849 (第99・113・116図) 調査区の北東側、溝S473の東側、建物11の南東側で検出されたピットである。長辺52cm、短辺30cmの隅丸長方形で南西隅が一段深くなっている。その深くなっているところで遺構検出面から35cmを測る。埋土は褐灰色土(にぶい黄橙色土ブロック少量混)である。

遺物は1173の土師器の大型の皿が出土している。口縁部をヨコナデし、端部外面に面を持つ。

時期は小片であるが出土した遺物と周辺の状況から13世紀前葉から中葉としておきたい。

4. 中央地区

全調査区の中で最も遺構が密集している地点である。建物5・6・8・9、柵1～4、土坑接続溝、土坑が検出されている。また、建物が集中している地点では、遺構検出面で炭が複数地点で面的に確認できた。平面・断面的な観察から掘り込み等を伴う遺構ではないと判断した。炭の広がる範囲が建物の平面プランと重なることから、屋内での生活痕の可能性があると断定できない。

(1) 溝

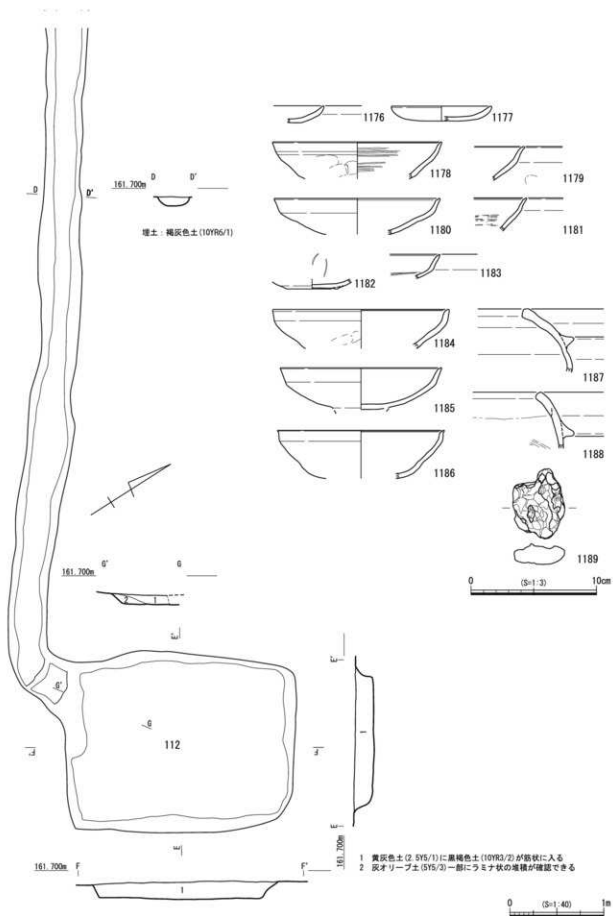
S334 (第99・117図) 調査区のはほぼ中央、土坑接続溝の南西側で検出された溝である。溝S365(T4-S1)に切られている。建物9、柵4と平面的な切りあい関係を有する。共に構成するピットと直接的な切りあい関係が確認できないので時期的な前後関係は不明である。規模は長さ約10m、幅が20～45cmを測る。深さは遺構検出面から4～6cm程度と浅い。埋土は褐灰色土(にぶい黄橙色土ブロック少量混)である。

遺物は1174の土師器の羽釜の口縁部片、1175の土師器の皿である。時期は小片であるが出土した遺物と周辺の状況から13世紀前葉から中葉としておきたい。

(2) 土坑接続溝

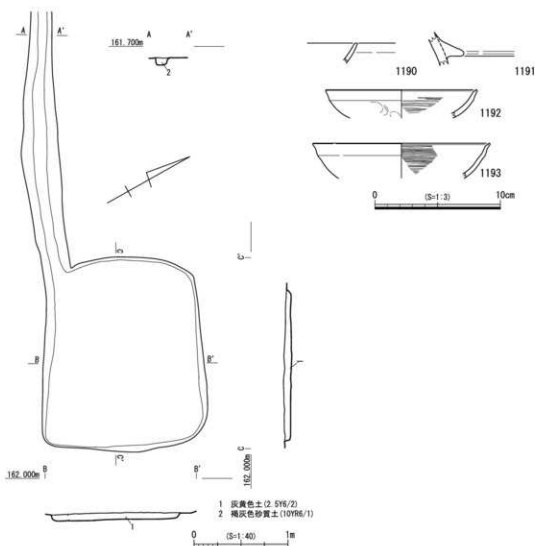
S112 (第99・117・118図・図版131・132) 調査区のはほぼ中央で検出された土坑接続溝である。市教委が実施した試掘調査の第9トレンチのSX0903に対応する。建物9、柵4と平面的な切り合いがあり、構成するピットとの切りあい関係から建物9より先行し、柵4より後出する。また土坑接続溝S159には切られている。土坑部分の規模は長軸が2.4m、短軸が1.9mの整った隅丸長方形を呈し、深さは遺構検出面から24cmを測る。底面はほぼ平坦である。溝部は土坑の西側隅に接続し、北西方向に約10m、そこから直角に屈曲し南西報告に約3.5m延び、土坑接続溝S159に切られている。幅は40～50cmでほぼ均一で、深さは遺構検出面から10～15cmを測り、底面の高さは土坑から離れるにしたがいわずかであるが深くなっている。ただし、土坑との接続部分の堆積状況は溝からの流入を示唆しており、この堆積がどの段階を示しているのか確定できない。溝部の主軸方位はN55°Wである。埋土は土坑部分が灰黄色土、溝部分は褐灰色土である。

遺物は1176～1189が出土している。1180・1183～1186・1189は溝部からの出土である。1176・1177は土師器の小型の皿である。1178～1186は瓦器の椀である。瓦器の椀は摩滅気味で、全体的に遺存状態は悪く、炭素が抜けているものが多い。口縁端部内面に一条の沈線が施され、暗文は、体部内面に比較的密な線状が確認されるが、体部外面にはまったく確認できない。1187・1188



- 1 黒灰色土(2.5Y5/1)に黒褐色土(10YR2/2)が筒状に入る
- 2 灰オリーブ土(5Y5/3)一部にラミナ状の堆積が確認できる

第118図 T5 土坑接続溝S112



第119図 T5 土坑接続溝S158

は土師器の羽釜で、1187はともに銕の下部に炭化物が付着している。1189はいわゆる鍛冶滓である。重量は39.7gである。

時期は出土している遺物から13世紀前葉から中葉と考えられる。

S158 (第99・117・119図・図版131・133) 調査区のはほぼ中央で検出された土坑接続溝である。建物9と平面的な切りあいを有する。構成するピットとの直接的な切りあい関係がないため、前後関係は不明である。土坑接続溝S159に切られている。土坑部分の規模は長軸約2.1m、短軸1.7mのやや不整な隅丸長方形で、深さは遺構検出面から7cm程度と非常に浅い。底面は平坦である。溝部は土坑の西側隅に接続し、北東方向に約5m延び、土坑接続溝S159に切られている。幅は20~30cmで、深さは遺構検出面から7~10cmを測る。底面の高さはわずかであるが北西側が深い。主軸方位はN65°Wである。埋土は土坑部分が灰黄色土、溝部分が褐灰色砂質土である。

遺物は1190~1193が出土している。1190は青磁の碗の口縁部片である。1191は土師器の羽釜の銕部で、全体に摩滅が著しい。1192・1193は瓦器の椀である。口縁部端部内面には一条の沈線が施され、暗文は、体部内面に比較的密な圏線状で確認されるが、体部外面にはまったく確認でき

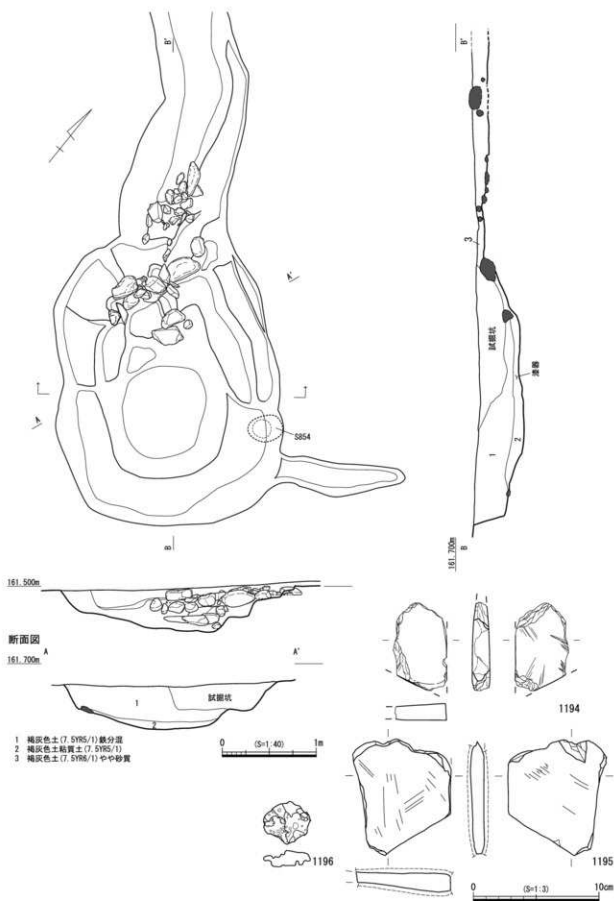
ない。

時期は小片であるが出土した遺物と周辺の状況から13世紀前葉から中葉としておきたい。

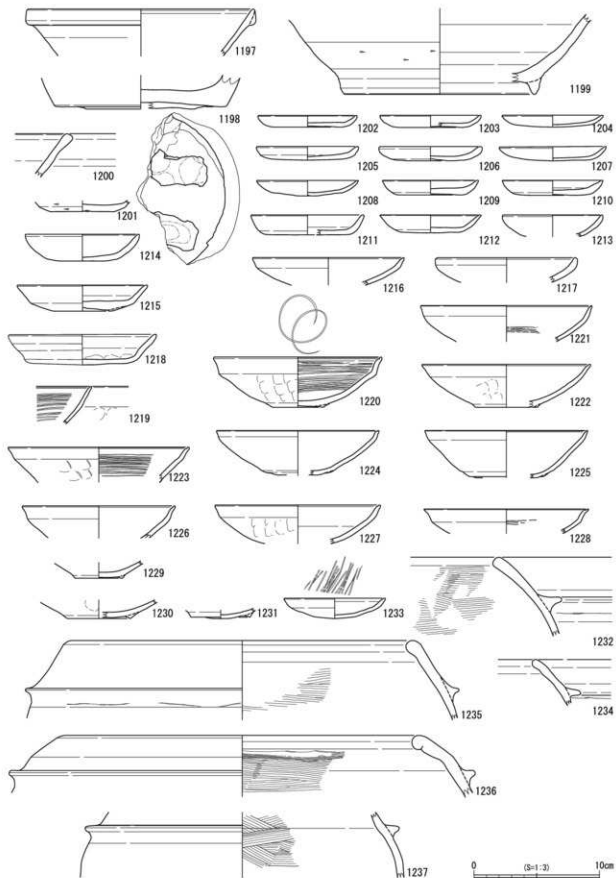
S159 (第99・110・112・117・120図・図版133～135) 調査区のほぼ中央部で検出された土坑接続溝である。建物9、柵1・4、溝S365 (T4-S1) と切りあい関係を有している。建物9とは建物を構成しているビットS361を切っていることから後出する。柵1とは構成するビットS252・255・292に切られていることから先行する。柵4とは構成するビットS451を切っていることから後出する。溝S365には切られている。市教委が実施した試掘調査の第10トレンチのSD0902が対応する。土坑部分の規模は長軸が2.9m、短軸が2.3mの隅丸長方形を呈し、深さは中央付近の最深部で遺構検出面から約50cmを測る。埋土は一部試掘時に掘削されており不明な部分もあるが上下2層に分けられる。上層が褐灰色土(鉄分混)、下層が褐灰色粘質土である。土坑部と溝部が接続する部分で拳大から人頭大の石材が複数検出されている。しかし、この石材は積み上げられているわけではなく、また、掘方を持って据えられているわけではない。そのため、原位置を保っていないと判断した。ただしまわりで石材が検出されていないことから、検出されている周辺で石材を使用した構造物があったことが想定される。溝は土坑の北東側に取りつき、やや北側に振った後直線的に北東方向に延びている。長さは約20m、幅70～120cmで北東側に向かって広がっている。深さは遺構検出面から20～30cmで、底面の高さは土坑側と溝S365側で比高差が20cm程度あり、溝S365側に向かって低くなっている。また、土坑の東側隅から北東側に延びる溝に直行する方向で、長さ1.3m、幅30～40cm、深さが遺構検出面から5cm程度と浅い。北東に延びる溝の主軸方位はN58°Wである。埋土は褐灰色土(やや砂質)である。

遺物は1194～1237が出土している。1194・1195・1197～1237は溝部、1196が土坑部出土である。また、土坑の下層(褐灰色粘質土)中から漆器碗が出土している。しかし、木質部が腐食のため消失し、漆皮膜のみが残存していた。1194・1195は砥石である。ともに表裏面に擦痕が認められる。1196は鍛冶滓である。1197は白磁の碗である。釉の発色があまり良くなく、やや緑がかった色調を呈している。1198は産地不明の陶器の底部で器種は不明である。底部外面に下駄の歯状に粘土紐が張り付けられている。1199・1200は常滑焼の控鉢で、1199は内面による摩擦が認められる。1201は青磁の皿の底部片である。底部外面に墨混がうっすらと認められる。墨書の可能性があるが、判読は全くできない。1202～1214は小型の土師器の皿である。全体に扁平なものが多く、口縁端部にヨコナデをおこなっておりやや鋭角な端部を呈している。1215は青磁の皿である。緑灰がかった釉を厚く施している。萁筒底部は露胎である。1216～1218は大型の土師器の皿である。1219～1231は瓦器の碗である。瓦器の碗は摩滅気味で、全体的に遺存状態は悪く、炭素が抜けているものが多い。端部内面には一条の沈線が施され、暗文は、体部内面に比較的密な圏線状が確認されるが、体部外面にはまったく確認できない。また高台部は粘土を薄く張り付けただけの非常に簡便なもので、底部が高台下部より飛び出ているものも認められ、高台の役目をはたしていない。1233は瓦器の皿である。内面見込みに平行線状の暗文が認められる。1232・1234～1237は土師器の羽釜である。全体に摩滅気味である。1236・1237は内面の一部にスガが付着している。

時期は出土している遺物から13世紀前葉から中葉と考えられる。

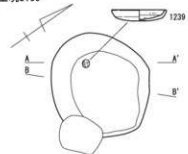


第120図 T5 土坑接続溝S159

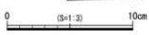
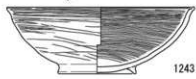
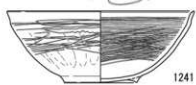


第121図 T5 S159出土遺物

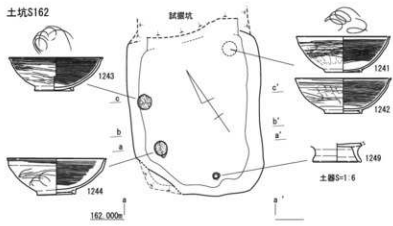
土坑S109



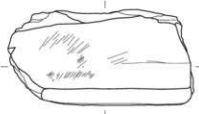
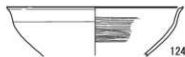
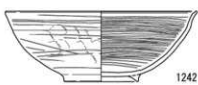
- 1 灰色細砂 (7.5Y6/1)
- 2 淡黄色土 (2.5Y7/4) に炭化物が混じる



土坑S162



- 1 2に灰白色土 (5Y8/2) のブロック混
- 2 灰褐色土 (7.5Y6/2)
- 3 1より灰白色土ブロックが細かい
- 4 に近い黄褐色土 (10YR7/2)
- 5 灰白色土 (10YR8/2)



1250

第122図 T5 土坑S109・162

(3) 土坑

S96 (第99-117-123図・図版123-124) 調査区の中央西よりで検出された土坑である。長軸約1.3m、短軸約1mの隅丸長方形である。深さは遺構検出面から約10cmを測る。埋土は上下2層確認でき、上層が浅黄色土(焼土塊を少量混)、下層が浅黄色土(炭化物・焼土・骨片混)である。掘方の周囲が被熱で赤く変色している。被熱していること、最下層に細かな骨片を確認できることなどから、茶毘用の土坑と考えられる。主軸はN32°Eである。

遺物は1251～1255が出土している。1251～1253は土師器の小型の皿である。1254・1255は瓦器の椀である。1255は体部内面に暗文が認められる。遺物は総じて遺存状態が悪く、摩滅が著しい。

時期は出土している遺物や周辺の遺構の状況から13世紀前葉から中葉と考えられる。

S109 (第99-117-122図・図版125) 調査区の中央、やや東寄り検出された土坑である。長軸約1.1m、短軸が約1mのやや不整な楕円形を呈し、深さは遺構検出面から22cmを測る。埋土は上下2層に分けることができ、上層は灰色細砂、下層が浅黄色土である。

遺物は1238・1239の土師器の小型の皿、1240の瓦器の椀の底部が出土している。1239は土坑の西側、上層の最下層から出土している。1240は粘土を薄く張り付けた高台を有している。

時期は出土している少量、小片の遺物、周辺の遺構の状況から13世紀前葉から中葉としておきたい。

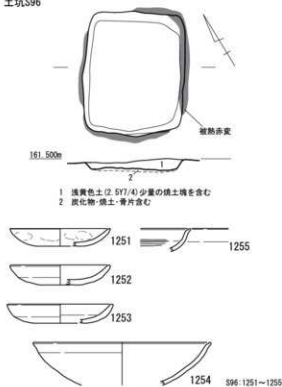
S162 (第99-117-122図・図版126-127) 調査区の中央、建物2の北西側で検出された土坑である。北東側と上層部は市教委の試掘調査時に断ち割りが入れられており消失していた。規模は、長軸が1.6m以上、短軸が1.4mのおそらく隅丸長方形に復元できる。主軸はN31°Eである。深さは遺構検出面から35cmを測り、底面はほぼ平坦である。断面は長方形に近い逆台形を呈している。遺物の出土状況から土坑墓の可能性が高い。おもな埋土は上層から灰褐色土(灰白色土ブロック混)、灰褐色土、灰白色土であるが、断面観察で木棺等の痕跡は見いだせなかった。しかし、堆積状況を、最上層の灰褐色土(灰白色土ブロック混)が木棺が腐食した後の陥没穴に堆積した土と解釈できることから、木棺墓である可能性も指摘しておきたい。

遺物はおもに土坑の四か所で検出されている。北東隅で瓦器の椀1241・1242が底面上に正位で重なって出土している。また、西側で瓦器の椀1243と1244が少し距離をおいて、やや中央側に傾いた状態で底面から出土している。南側では1249の脚付きの土師器の皿の脚部が底面直上で出土している。その他に1245・1246の瓦器の椀、1247の土師器の皿、1248の土師器の脚付き皿の脚部、1250の砂岩製の砥石が出土している。瓦器の椀は深手で、口縁外部外面にヨコナデを施し外反させている。内面には一条の沈線が巡る。暗文は内面が密な圏線状、外面がやや疎、見込みは複数回転の輪状である。高台は断面が直角三角形で、比較的高さがある。1250は表面に捺痕を確認できる。

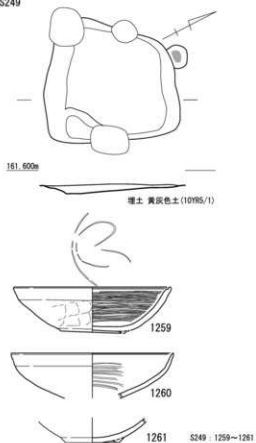
時期は出土している遺物から12世紀後半代と考えられる。

S194 (第99-117-123図・図版128) 調査区の中央南寄りの拡張区との境で検出された土坑である。柵1を構成しているピットS194を切っている。南西側が調査用の排水溝で欠失しているが、規模は長軸2.6m以上、短軸が1.9mの隅丸長方形に復元できる。深さは遺構検出面から16cm程度を測り、埋土は褐色土(灰白色土ブロック混)の単層である。主軸はN30°Eである。

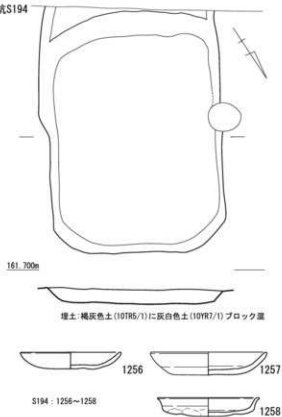
土坑S96



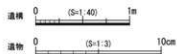
土坑S249



土坑S194

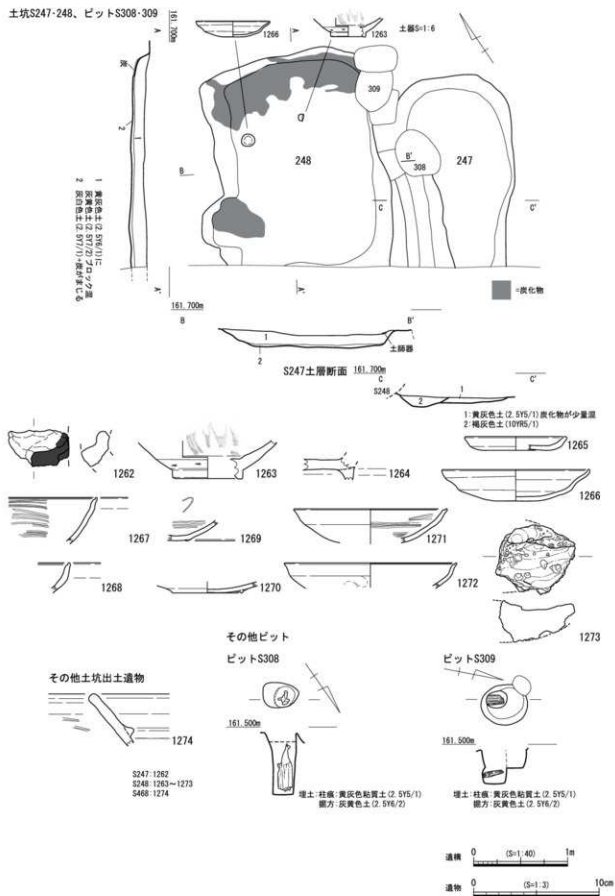


土坑S458



第123図 T5 土坑S96・194・249・458

土坑S247-248、ピットS308-309



第124図 T5 土坑S247・248 その他土坑

遺物は1256・1257の土師器の皿、1258の瓦器の皿が出土している。1258は摩滅が著しく暗文等の調整法は確認できない。

S247 (第99・117・124図) 調査区の中央南西寄りの拡張区に接した地点で検出された土坑である。切りあい関係から建物5 (ピットS853)、溝S660、土坑S248に先行する。南西側が調査用の排水溝により欠失している。長軸が2m以上、短軸が1.4mの隅丸長方形に復元できる。深さは遺構検出面から8cmと比較的浅い。埋土は黄灰色土(炭化物少量混)の単層である。

遺物は1262のフイゴの羽口の先端部片が出土している。外面が被熱している。小片のため口径は復元できない。

S248 (第99・117・124図・図版128・129) 調査区の中央南西寄りの拡張区に接した地点で検出された土坑である。溝3、溝S660、土坑S247と平面的な切りあい関係を有する。構成するピットS449に切られていることから溝3に先行する。溝S660、土坑S247とともに切っていることから後出する。南西側が調査用の排水溝のために欠失している。長軸が2.3m以上、短軸が1.8mで、隅丸長方形に復元できる。深さは遺構検出面から18cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は黄灰色土(灰黄色土ブロック混)で、底面付近に薄く灰白色土(炭混じり)が堆積している。土坑の北東側を中心に炭が集中して検出されている。用途は確定できないが、出土している1273の鍛冶滓やS247から出土している1262のフイゴの羽口片から鍛冶関係の遺構である可能性がある。

遺物は1263～1273が出土している。1263は青磁の碗の高台部である。底部周辺が露胎で、青灰色を呈する胎土である。内面にはハケ状工具による施文がされている。1264は常滑焼の捏鉢である。1265・1266は土師器の皿である。1267～1272は瓦器の碗である。口縁端部内面に一条の沈線が巡り、内面にやや疎な圏線状の暗文が施される。底部は薄い粘土をすり付けたような高台が付加されている。1273は鍛冶滓である。重さは116.6gである。

時期は出土している遺物から13世紀前葉から中葉と考えられる。

S249 (第99・105・117・123図) 調査区の中央南西側、拡張区と接する地点で検出された土坑である。土坑S249の北西側に位置する。建物5と平面的な切りあい関係を有し、建物5を構成するピットS251を切っていることから後出する。規模は長軸1.4m、短軸が1.1～1.3mの不整な方形を呈している。深さは最深部が遺構検出面から8cmである。埋土は黄灰色土の単層である。

遺物は1259～1261の瓦器の碗が出土している。1259は器壁がやや厚手で、体部内面に密な圏線状の暗文が施されている。高台部はほとんど剥離して欠失しているが、薄い粘土を張り付けた非常に低いものである。

時期は出土した少量の遺物と周辺の遺構の状況から13世紀前葉から中葉と考えられる。

S458 (第99・117・123図・図版130) 調査区の中央西よりで検出された土坑である。土坑S96の南側に位置する。1.1m×1.3mの不整な方形で、深さは遺構検出面から19cmを測る。埋土は灰白色粘質土(炭混じり)の単層であるが、平面検出時には非常に地山との区別が付きにくかった。

遺物は出土していない。

S468 (第99・117・124図) 調査区の中央西よりで検出された土坑である。溝S365(T4-S1)に切れ、溝S98を切っている。北側を溝S365に切られているため全体像は不明であるが、1.5m×1mの三角形で検出されている。深さは遺構検出面から約10cmを測る。埋土は褐灰色土(に

ぶい黄橙色土ブロックが少量混)である。

遺物は1274の土師器の羽釜が出土している。

時期は遺物が少量、小片であるが、周辺の遺構の状況を合わせるとおおむね13世紀前葉から中葉であると考えられる。

(4) ビット

S133 (第99・117・125図) 調査区の中央東寄りで見出されたビットである。土坑接続溝S112の東側に隣接する位置である。掘方が直径30cmの円形で、南寄りで直径25cmの柱痕検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から23cmを測る。埋土は掘方が明黄褐色土(褐灰色土混)、柱痕が褐灰色土(ぶい黄橙色土ブロック少量混)である。

遺物は柱痕から1280の瓦器の椀が出土している。内外面ともに摩滅気味である。口縁部内面に一条の沈線が巡り、体内面に圏線状の暗文を確認できる。外面には指押さえ痕が目立つが、暗文は認められない。高台は剥離して欠失しているが、薄い粘土を擦りつけた低いものに復元できる。

時期は出土している遺物が少量であるものの13世紀前葉から中葉と考えられる。

S207 (第99・117・125図) 調査区の中央北寄りで見出されたビットである。土坑S194の北側、土坑S249の東側に位置する。建物5を構成するビットS206に切られていることから、建物5に先行する。直径30cmの円形の掘方で、ほぼ中央で直径15cmの柱痕が検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から26cmを測る。埋土は掘方が明黄褐色土(褐灰色土混)、柱痕が褐灰色土(ぶい黄橙色土ブロック少量混)である。

遺物は柱痕から1281の瓦器の椀の口縁部が出土している。口縁部に一条の沈線を巡らし、体内面に圏線状の暗文を施す。外面には暗文は認められない。

時期は出土している遺物が少量、小片であることから周辺の遺構の状況から13世紀前葉から中葉としておきたい。

S229 (第99・117・125図) 調査区の中央南西側の建物が集中している地点で見出されたビットである。他のビットに切られているため全体像は不明であるが、長軸30cm以上、短軸30cmのおおむね楕円形の掘方に復元できる。ほぼ中央付近で直径20cm程度の柱痕が検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から14cmを測る。埋土は掘方が明黄褐色土(褐灰色土混)、柱痕が褐灰色土(ぶい黄橙色土ブロック少量混)である。

遺物は1282の瓦器の椀が出土している。内面に圏線状の暗文が認められ、外面に指押さえ痕が残る。

時期は出土している遺物が少量、小片であることから周辺の遺構の状況から13世紀前葉から中葉としておきたい。

S242 (第99・117・125図) 調査区の中央南西側の建物が集中している地点で見出されたビットである。長軸30cm、短軸20cmの楕円形で、中央南東よりで直径15cm程度の柱痕が検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から39cmを測る。埋土は掘方が明黄褐色土(褐灰色土混)、柱痕が褐灰色土(ぶい黄橙色土ブロック少量混)である。

遺物は柱痕から1283の瓦器の椀が出土している。摩滅気味で暗文等の調整法が確認できない。

時期は出土している遺物が少量、小片であることから周辺の遺構の状況から13世紀前葉から中葉としておきたい。

S244 (第99・117・125図) 調査区の中央南西側の建物が集中している地点で検出されたピットである。直径40cmの円形の掘方で、ほぼ中央付近で直径20cm程度の柱痕が検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から40cmを測る。埋土は掘方が明黄褐色土(褐灰色土混)、柱痕が褐灰色土(にぶい黄橙色土ブロック少量混)である。

遺物は1284の土師器の皿が出土している。

時期は出土している遺物が少量、小片であることから周辺の遺構の状況から13世紀前葉から中葉としておきたい。

S252 (第99・117・125図) 調査区の中央南西側の建物が集中している地点で検出されたピットである。土坑S249を切っている。また、建物5と平面的な切りあい関係を有している。建物を構成しているピットと直接的な切りあい関係がないが、建物5との切りあい関係からS249に先行することが分かっていることから、結果、建物5には後出すると考えられる。直径20cmの円形で、深さは遺構検出面から4cmと浅い。埋土は褐灰色土(にぶい黄橙色土ブロック少量混)である。

遺物は1285の瓦器の椀が出土している。内外面ともに表面が摩滅気味であることから、調整法が確認できない。

時期は出土している遺物が少量、小片であることから周辺の遺構の状況から13世紀前葉から中葉としておきたい。

S254 (第99・117・125図) 調査区の中央南西側の建物が集中している地点で検出されたピットである。長軸30cm、短軸20cmの楕円形で、深さは遺構検出面から5cmと浅い。埋土は褐灰色土(にぶい黄橙色土ブロック少量混)である。

遺物は1286・1287の瓦器の椀が出土している。1286は内外面ともに摩滅が著しく調整法は確認できない。1287は口縁端部内面に一条の沈線を巡らし、体部内面には比較的密な圏線状の暗文が施されている。外面には暗文は確認できず、指押しえ痕が明瞭に残る。

時期は出土している遺物が少量、小片であることから周辺の遺構の状況から13世紀前葉から中葉としておきたい。

S260 (第99・117・125図) 調査区中央南西側の建物集中地点で検出されたピットである。土坑S248の北側に位置する。長軸40cm、短軸が20cmの楕円形を呈する掘方で、その西寄り直径10cmの円形の柱痕が検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から26cmを測る。埋土は掘方が明黄褐色土(褐灰色土混)、柱痕が褐灰色土(にぶい黄橙色土ブロック少量混)である。

遺物は1288の土師器の皿が出土している。

時期は出土している遺物が少量、小片であることから周辺の遺構の状況から13世紀前葉から中葉としておきたい。

S264 (第99・117・125図) 調査区の中央南西側の建物が集中している地点で検出されたピットである。建物8を構成するピットS263を切っている。直径35cmの円形の掘方で、ほぼ中央に直径15cmの柱痕が検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から25cmを測る。埋土は掘方が明黄褐

色土（褐灰色土混）、柱痕が褐灰色土（にぶい黄橙色土ブロック少量混）である。

遺物は1289の灰軸陶器の碗の口縁部が出土している。輪花が認められ、灰軸を漬け掛けしている。

時期は出土している遺物が9世紀後半から10世紀前半頃と考えられるが、少量、小片であることから、遺構の時期を示しているのかの判断は保留しておきたい。

S271 (第99・117・125図) 調査区の中央南西側の建物が集中している地点、拡張区と接する位置で検出されたピットである。南西側が調査用の排水溝で欠失している。ピットの周辺を約2cm掘りくぼめると、直径30cmの円形の掘方が検出できた。掘方の南西側で直径15cm程度の柱痕が検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から31cmを測る。埋土は掘方が明黄褐色土（褐灰色土混）、柱痕が褐灰色土（にぶい黄橙色土ブロック少量混）である。

遺物は1290の瓦器の碗が出土している。

時期は出土している遺物が少量、小片であることから周辺の遺構の状況から13世紀前葉から中葉としておきたい。

S274 (第99・117・125図) 調査区の中央南西側の建物が集中している地点で検出されたピットである。建物8と平面的な切りあい関係を有するが、建物を構成するピットと直接的な切りあい関係がないため前後関係は不明である。長軸35cm、短軸20cmの楕円形の掘方で、ほぼ中央付近で直径15cm程度の柱痕が検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から33cmを測る。埋土は掘方が明黄褐色土（褐灰色土混）、柱痕が褐灰色土（にぶい黄橙色土ブロック少量混）である。

遺物は1291の瓦器の碗の高台部分が出土している。

時期は出土している遺物が少量、小片であるが12世紀後半から13世紀初頭としておきたい。

S278 (第99・117・125図) 調査区の中央南西側の建物が集中している地点で検出されたピットである。建物8・9と平面的な切りあい関係を有する。別のピットとの切りあい関係から建物8より後出する。建物9との前後関係は、建物を構成するピットと直接的な切りあい関係が無いため不明である。直径15cmの円形を呈し、深さは遺構検出面から12cmを測る。埋土は褐灰色土（にぶい黄橙色土ブロック少量混）である。

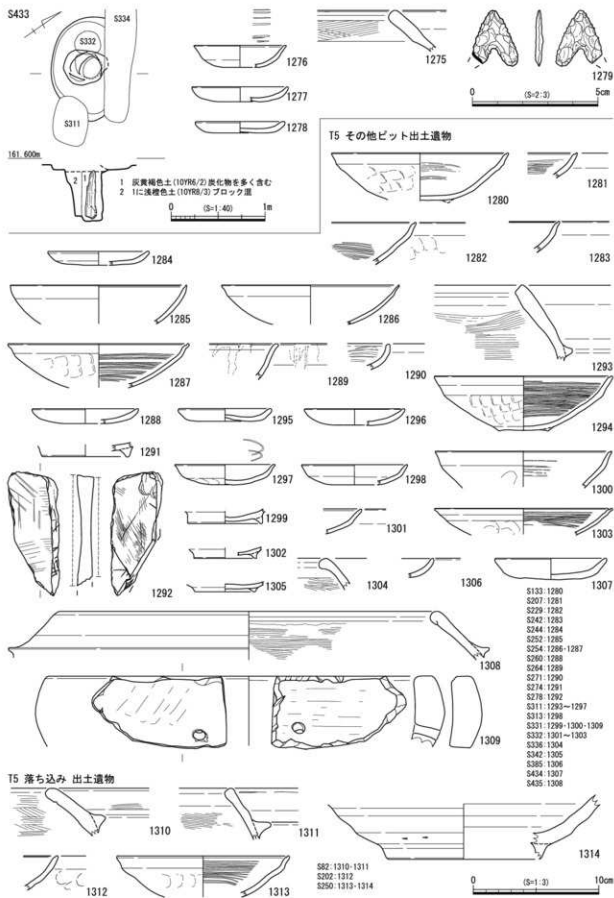
遺物は1292の砥石が出土している。表裏面を使用しており非常に平滑である。

S308 (第99・117・124図・図版136) 調査区の中央南西寄りの拡張区に接した地点で検出されたピットである。土坑S247を切っている。掘方は長軸38cm、短軸26cmのやや不整な楕円形を呈し、掘方の北西側で柱根が検出された。柱根は上部が腐食していたもの下部は比較的遺存状態が良かった。深さは柱痕部で遺構検出面から65cmを測る。埋土は掘方が灰黄色土、柱痕が黄灰色粘質土である。検出された柱根の樹種はツガ属である。

遺物は土師器、瓦器の図化できない細片が出土している。

S309 (第99・117・124図・図版136) 調査区の中央南西寄りの拡張区に接した地点で検出されたピットである。土坑S248を切っている。掘方は長軸49cm、短軸43cmの楕円形を呈し、掘方の南側で直径約20cmの柱痕の底から礎板が検出された。深さは柱痕部で遺構検出面から35cmを測る。埋土は掘方が灰黄色土、柱痕が黄灰色粘質土である。検出された礎板の樹種はモミ属である。

遺物は図化できない土師器の羽釜の細片が出土している。



第125図 T5 その他ピット、落ち込み

S311 (第99・117・125図) 調査区の中央南西側の建物が集中している地点で検出されたピットである。溝S334の南東端に接する位置である。長軸約50cm、短軸約35cmのやや歪な楕円形を呈する掘方で、中央で直径15cmの円形の柱痕が検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から15cmを測る。埋土は掘方が明黄褐色土(褐色土混)、柱痕が褐色土(にぶい黄褐色土ブロック少量混)である。

遺物は1293・1297が出土している。1293・1294・1296は掘方から、残りは柱痕から出土している。1293は土師器の羽釜で、外面には全面にススが付着している。1294は瓦器の椀で全体にやや摩滅気味であるものの、体部内面に比較的密な圏線状の暗文を施している。外面には暗文が認められず、指押さえ痕が残る。高台部は高さがほとんどなく、薄い粘土を張った簡便なものである。1295～1296は土師器の皿である。1297は瓦器の皿である。見込み部分に平行線状の暗文を確認できる。

時期は出土している遺物から13世紀前葉から中葉としておきたい。

S313 (第99・117・125図) 調査区の中央南西側の建物が集中している地点で検出されたピットである。建物9と平面的な切りあい関係があるが、建物を構成するピットと直接的な切りあい関係がないため前後関係は不明である。構3とは構成するピットS312に切られていることから先行する。長軸約25cm、短軸15cm以上の楕円形に復元できる掘方で、その北東寄りで直径10cmの円形の柱痕が検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から27cmを測る。埋土は掘方が明黄褐色土(褐色土混)、柱痕が褐色土(にぶい黄褐色土ブロック少量混)である。

遺物は柱痕から1298の瓦器の皿が出土している。1298は摩滅気味で調整法が不明である。

時期は出土している遺物が少量、小片であるが周辺の遺構の状況から13世紀前葉から中葉としておきたい。

S331 (第99・117・125図) 調査区の中央南西側の建物が集中している地点で検出されたピットである。溝S334の南東端に隣接した位置である。一辺約25cmのやや歪んだ隅丸方形を呈する掘方で、その中央で直径10cmの円形の柱痕が検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から23cmを測る。埋土は掘方が明黄褐色土(褐色土混)、柱痕が褐色土(にぶい黄褐色土ブロック少量混)である。

遺物は1299・1300の瓦器の椀、1309の滑石製の石鍋片が出土している。1299は高さのある比較的しっかりした高台である。1300は摩滅気味であり調整法が明瞭ではないが内面に横方向の暗文が認められる。1309は破断面部分が摩耗して平滑になっていることから、温石として転用したと考えられる。

時期は出土している遺物が少量、小片であるが12世紀後半から13世紀初頭としておきたい。

S332 (第99・117・125図) 調査区の中央南西側の建物が集中している地点で検出されたピットである。溝S334に切られている。また、建物8・9と平面的な切りあい関係を有しているが、建物を構成するピットと切りあい関係がないため前後関係は不明である。直径約25cmのやや歪んだ円形を呈する掘方で、中央で直径15cmの円形の柱痕が検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から22cmを測る。埋土は掘方が明黄褐色土(褐色土混)、柱痕が褐色土(にぶい黄褐色土ブロック少量混)である。

遺物は1300～1303が出土している。すべて瓦器の椀で、1302は高さのある高台を持つ。1303は内面に横方向の暗文が確認でき、外面には指押さえ痕が残る。

時期は出土している遺物が少量、小片であるが12世紀後半から13世紀初め頃としておきたい。

S336 (第99・117・125図) 調査区の中央南西側の建物が集中している地点で検出されたピットである。建物9を構成するピット337に切られていることから、建物9に先行する。一辺30cmの隅丸方形に復元できる掘方で、中央で直径15cmの円形の柱痕が検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から22cmを測る。埋土は掘方が明黄褐色土(褐灰色土混)、柱痕が褐灰色土(にぶい黄橙色土ブロック少量混)である。

遺物は1304の土師器の羽釜が出土している。内外面にススが付着している。

時期は出土している遺物が少量で、小片であるため周囲の遺構の状況から13世紀前葉から中葉としておきたい。

S342 (第99・117・125図) 調査区の中央南西側の建物が集中している地点で検出されたピットである。建物6の北西側に位置する。直径約35cmのやや歪な円形を呈する掘方で、中央で直径15cmの円形の柱痕が検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から25cmを測る。埋土は掘方が明黄褐色土(褐灰色土混)、柱痕が褐灰色土(にぶい黄橙色土ブロック少量混)である。

遺物は1305の瓦器の椀の高台部が出土している。やや高さのある高台である。

時期は出土している遺物が小片であるが13世紀前半としておきたい。

S385 (第99・117・125図) 調査区の中央南西側の建物が集中している地点で検出されたピットである。溝S334に切られている。直径約20cmの円形を呈する掘方で、中央で直径10cmの円形の柱痕が検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から39cmを測る。埋土は掘方が明黄褐色土(褐灰色土混)、柱痕が褐灰色土(にぶい黄橙色土ブロック少量混)である。

遺物は柱痕から1306の土師器の皿が出土している。

時期は出土している遺物が小片、少量であるため、周囲の遺構の状況等から13世紀前葉から中葉としておきたい。

S433 (第99・117・125図・図版136) 調査区の中央南西寄り検出されたピットである。溝S334、ピットS332に切られている。建物を構成していた可能性もあるが、認識できなかった。長軸が47cm、短軸が38cmの不整な楕円形を呈し、中央やや西寄りで直径25cmの柱痕が検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から53cmを測る。柱痕部からは柱根が出土している。樹種はヒノキである。

遺物は1276の瓦器の皿、1277・1278の土師器の皿、1275の土師器の羽釜、1279のサスカイト製の石鏝が出土している。1276は内面見込み部分に平行線状の暗文が認められる。1279は混入品と考えられる。

時期は周囲の遺構の状況から13世紀前葉から中葉と考えられる。

S434 (第99・117・125図) 調査区の中央南西側の建物が集中している地点で検出されたピットである。ピットS313の北側に位置する。柵2を構成するピットS290を切っていることから、柵2に後出する。直径約25cmの円形を呈する掘方である。その中央で直径15cmの円形の柱痕が検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から22cmを測る。埋土は掘方が明黄褐色土(褐灰色土混)、

柱痕が褐灰色土（にぶい黄橙色土ブロック少量混）である。

遺物は1307の土師器の皿が出土している。

時期は出土している遺物が少量、小片であることから周辺の遺構の状況等から13世紀前葉から中葉としておきたい。

S435（第99・117・125図） 調査区の中央南西側の建物が集中している地点で検出されたピットである。建物9と平面的な切りあい関係を有するが、構成するピットとは直接的な切りあい関係がないため前後関係は不明である。一辺約15cmの隅丸方形を呈し、深さは遺構検出面から15cmを測る。埋土は褐灰色土（にぶい黄橙色土ブロック少量混）である。

遺物は1308の土師器の羽釜が出土している。

時期は出土している遺物が少量、小片であるため、周辺の遺構の状況から13世紀前葉から中葉としておきたい。

（5）落ち込み

S82（第99・117・125図） 調査区の中央東寄りで検出された落ち込みである。6m×7m程度の範囲で厚さが約10cm程度の遺物を包含する褐灰色砂質土（にぶい黄橙色土ブロック混）が埋土である。除去後、溝S98が検出されている。

包含されていた遺物は1310・1311の土師器の羽釜である。

S202（第99・117・125図） 調査区の中央南西寄りで検出された落ち込みである。長軸2.5m、短軸が1.5m程度の楕円形の範囲で、厚さが約10cm程度の遺物を包含する褐灰色砂質土（にぶい黄橙色土ブロック混）が検出された。

包含されていた遺物は1312の瓦器の椀である。摩滅が著しく調整法が不明である。

S250（第99・117・125図） 調査区の中央南西寄りで検出された落ち込みである。一辺3.5m程度のやや歪んだ方形の範囲で、厚さが約10cm程度の遺物を包含する褐灰色砂質土（にぶい黄橙色土ブロック混）が埋土である。除去後、建物を構成するピットなどが検出されている。

包含されていた遺物は1313の瓦器の椀、1314の常滑焼の播鉢である。1313は内面に圏線状の暗文が認められ、外面には指押さえ痕が残る。1314は内面が使用により摩耗している。

遺物の時期は13世紀前葉から中葉である。

4. 南西地区（拡張区）

全調査区の南東端に位置し、当初は調査対象地外であったものの、隣接地（T5-中央地区）の調査結果から当地区に遺構が広がっている可能性が高いことが判明し、市教委との協議を経て、追加調査を行った地区である。遺構の密度は、北西部と南東部で異なり、北東部に遺構が集中している。遺構の内容は、掘立柱建物、溝、土坑等である。この地区は遺構検出面が北東から南西方向に緩やかに低くなっており、高低差が30cm程度ある。

（1）溝

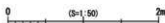
S645（第99・126・127図・図版121・122） 調査区の南西側検出された溝である。調査区内では南



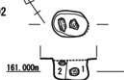
S645 土層断面



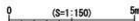
埋土 黄灰色土(2. S15/1)に黄色土(2. S18/6)ブロック置
地山 黄色土(2. S18/6)



S792



埋土:1 灰オリーブ色粘質土(S15/2)
2 灰オリーブ色粘質土(S16/2)やや粘質、炭化物置



第126図 T5 南西地区

東一北西に約5m、南西一北東に約13mの長さで平面「L」字形を呈し、南西側に延びている。幅は50～60cm、深さは遺構検出面から10～15cmを測る。断面は逆台形に近い形状を呈している。主軸方向はN34°Eである。底面の標高差は北東端と南西端で30cmあり、南西側が低い。埋土は黄灰色土（黄色土ブロック混）である。ただし、北東側の屈曲部分付近では、炭および炭化材がまとめて検出された。

遺物は1315～1323が出土している。1315～1317は土師器の皿である。個体差が大きい。1315・1317は直線的に上方に延びる口縁部を持ち、端部を小さく外反させる。1317は全体に摩滅が著しい。1318は青磁の碗の高台部である。内面見込み部分に圈線が巡る。やや緑味がかった色調の軸が薄く施されている。高台周辺は露胎で青灰色を呈している。1319は瓦器の碗の口縁部であるが摩滅が著しく、調整法が確認できない。炭素は全く遺存していない。1320は産地不明の陶器の壺の底部である。1321・1322は土師器の羽釜である。ともに内外面ともにススが附着している。1323は古瀬戸の水注である。口縁部が欠損しているが受口状の口縁が付属するものと考えられる。取手が付属しないタイプである。ほぼ全面に灰軸が施されているが、器表面に窯壁等が附着しており、非常に荒れている。

時期は13世紀中頃を中心とした時期であると考えられる。

S653 (第99・126・127図) 調査区の南西側でも中部地区に近い位置で検出された溝である。溝S645に切られている。溝の主軸はN58°Wであるが、北西側、南東側を別の遺構に切れおり、約1.4mの長さで検出されているのみである。幅は約40cmで、深さは遺構検出面から3～5cmと非常に浅い。埋土は褐灰色土（にぶい黄橙色土ブロック少量混）である。

遺物は1324の土師器の皿、1325の瓦器の碗が出土している。瓦器の碗は全体に摩滅が著しく、調整法が不明瞭であるものの、体部内面には横方向の暗文が確認できた。

時期は出土している遺物が少量、小片であるが、13世紀前葉から中葉としておきたい。

S660 (第99・126・127図) 調査区の南西側、中部地区に跨る形で検出された溝である。切りあい関係から、土坑S247より後出し、溝S645・ビットS308に先行することが分かる。長さは約3.2m以上、幅は40～50cmを測る。深さは遺構検出面から17cmで、埋土は褐灰色土（にぶい黄橙色土ブロック少量混）である。

遺物は1326～1330が出土している。1326は常滑焼の控鉢である。内面が使用により摩耗している。1327・1328は土師器の羽釜である。1329は瓦器の碗の口縁部である。体部内面にわずかであるが横方向の暗文が認められる。1330は砥石である。6面中4面を使用している。

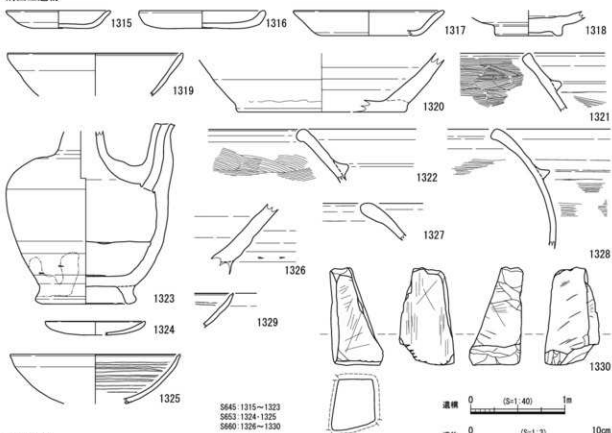
時期は出土している少量の遺物から13世紀前半を中心とした時期と考えられる。

(2) 土坑

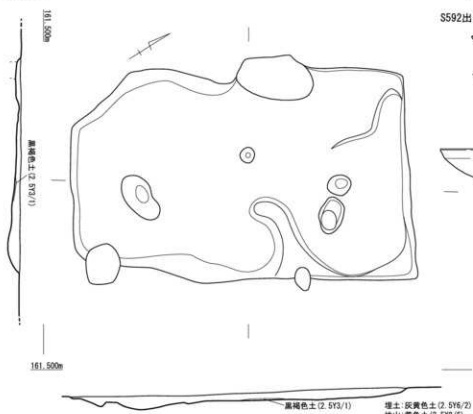
S592 (第99・126・127図) 調査区の南西端で検出された土坑である。建物10を構成するビットと切りあい関係を有し、先行することが分かる。長軸約3.6m、短軸約2.2mのやや歪んだ長方形を呈している。深さは遺構検出面から3～10cmと幅があり、底面に凹凸がある。埋土は灰黄色土で、中央付近に黒褐色土が部分的に薄く堆積している。

遺物は1331～1333が出土している。1331は土師器の皿、1332は山茶碗の小碗の底部、1333は瓦

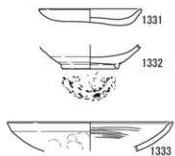
溝出土遺物



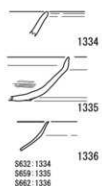
土坑S592



S592出土遺物



その他土坑出土遺物



第127図 T5 溝S645・土坑S592、その他土坑出土遺物

器の碗である。1333は摩滅が著しいが、かろうじて体部内面の横方向の暗文を確認できる。

時期は出土遺物が少量、小片であるが13世紀前半代と考えられる。

S632 (第99・126・127図) 調査区の南西側、調査区の西端で検出された土坑である。北西側が調査用の排水溝で欠失している。長さ1.7m、幅1.3m以上の正方形もしくは長方形を呈している。深さは遺構検出面から16cmを測る。埋土は褐灰色土（にぶい黄橙色土ブロック少量混）である。

遺物は1334の青磁の碗の口縁部である。

時期は出土している遺物が少量、少片なため確定できないが13世紀の前半代としておきたい。

S659 (第99・126・127図) 調査区の南西側、中央部地区と接する位置で検出された土坑である。溝S645に切られ、溝660を切っている。直径約80cmの円形で、深さは遺構検出面から8cm程度を測る。埋土は褐灰色土（にぶい黄橙色土ブロック少量混）である。

遺物は1335の瓦器の碗が出土している。内外面ともに摩滅が著しく、かろうじて一部に横方向の暗文を認めることができる。

時期は出土している遺物が少量なうえ遺存状態が悪いため確定できないが13世紀前半代と考えられる。

S662 (第99・126・127図) 調査区の南西側、土坑S659の南側で検出された土坑である。検出時は長軸1.4m、短軸1～1.2mのやや不整な長方形を呈していた。5cm程度を掘り進めていくと、ほぼ中央に一辺70cmの方形のプランが確認できた。深さは遺構の検出面から23cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。埋土は褐灰色土（にぶい黄橙色土ブロック少量混）である。

遺物は1336の瓦器の碗の口縁部である。摩滅が著しく、炭素は欠失している。調整法は全く確認できない。

時期は遺物が小片で、遺存状態も良くないことから限定できないが、他の遺構との切りあい関係から13世紀前半代とすることが妥当であろう。

(3) ピット

S554 (第99・126・128図・図版137) 調査区の北西側の西端で検出されたピットである。建物10と平面的な切りあい関係を有するが、構成するピットと直接的な切りあい関係がないため前後関係は不明である。長軸43cm、短軸32cmの楕円形の掘方で、その北側で柱根が検出されている。深さは柱痕部分で遺構検出面から25cmを測る。埋土は掘方が淡黄色土（灰黄色土ブロック混）、柱痕が灰黄色粘質土である。検出された柱根は、ヒノキ科である。

遺物は土師器の皿の細片が出土している。

S564 (第99・126・128図・図版138) 調査区の北西側で検出されたピットである。建物10と平面的な切りあい関係を有するが、構成するピットと直接的な切りあい関係がないため前後関係は不明である。長軸35cm、短軸28cmの楕円形の掘方で、その西側端で直径15cmの柱痕が検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から43cmを測る。埋土は掘方が黄色土（褐灰色土が少量混）、柱痕が褐灰色土である。柱痕から柱根が出土している。樹種はヒノキ科である。

遺物は土師器の皿、瓦器の細片が出土している。

S569 (第99・126・128図・図版138) 調査区の北西側、南端で検出されたピットである。建物10と平面的な切りあい関係を有するが、構成するピットと直接的な切りあい関係がないため前後関係は不明である。長辺50cm、短軸25cmの長方形の掘方で、その北東端で直径20cmの柱痕が検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から33cmを測る。埋土は掘方が灰黄色土（灰黄色土が少量混）、柱痕が灰黄色土である。柱痕から柱根が出土している。樹種はモミ属である。

遺物は土師器の皿、瓦器の細片が出土している。

S574 (第99・126・128図) 調査区の北西側、南端で検出されたピットである。直径10cmの円形で、深さは遺構検出面から3cmと非常に浅い。埋土は褐灰色土（にぶい黄橙色土ブロック少量混）である。

遺物1337の瓦器の碗の口縁部が出土している。

時期は小片のため確定できないが、13世紀前半代と考えておきたい。

S575 (第99・126・128図・図版138・139) 調査区の北西側、南端で検出されたピットである。建物10と平面的な切りあい関係を有するが、構成するピットと直接的な切りあい関係がないため前後関係は不明である。長軸40cm、短軸27cmの楕円形の掘方で、その南西端で柱痕が検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から37cmを測る。埋土は掘方が灰黄褐色土（明黄褐色土ブロック混）、柱痕が灰黄褐色土（下層は砂質）である。柱痕から柱根が出土している。樹種はモミ属である。

遺物は1338の瓦器の碗が出土している。検出時に掘方の上面で、潰れた状態で出土している。ほぼ完形で、口縁端部内面に一条の沈線が巡り、体部内に横方向、見込み部分には複数回転の輪状の暗文が施されている。外面には暗文は確認できず、指押さえ痕が残る。高台は粘土を薄く張り付けたのみで、役目を果たしていない。

時期は、出土遺物から13世紀中葉と考えられる。

S578 (第99・126・128図・図版139) 調査区の北西側で検出されたピットである。建物10と平面的な切りあい関係を有するが、構成するピットと直接的な切りあい関係がないため前後関係は不明である。長軸30cm、短軸25cmの楕円形の掘方で、その北西側で直径13cmの円形の柱痕が検出されている。この柱痕を掘削中に柱根が確認された。検出された柱根はツガ属である。深さは柱痕部分で遺構検出面から47cmを測る。埋土は掘方が灰黄褐色粘土（淡橙色土ブロック混）、柱痕が灰黄色粘質土である。

遺物は土師器の羽釜の細片が出土している。

S579 (第99・126・128図) 調査区の北西側で検出されたピットである。建物10と平面的な切りあい関係を有するが、構成するピットと直接的な切りあい関係がないため前後関係は不明である。長軸30cm、短軸20cmの楕円形の掘方で、その南側で直径15cmの円形の柱痕が検出されている。深さは柱痕部分で遺構検出面から13cmを測る。埋土は掘方が明黄褐色土（褐灰色土少量混）、柱痕が褐灰色土である。

遺物は柱痕から1339の瓦器の碗が出土している。やや摩滅気味であるが、体部内面に横方向の暗文を確認できる。

時期は出土している遺物が少量、小片であるため確定できないが、周辺の遺構の状況からも13

世紀前半代と考えておきたい。

S581 (第99・126・128図) 調査区の北西側で検出されたピットである。ピットS579の南側、ピットS584の西側に位置する。建物10と平面的な切りあい関係を有するが、構成するピットと直接的な切りあい関係がないため前後関係は不明である。直径40cmの円形で、深さは遺構検出面から33cmを測る。埋土は褐灰色土(にぶい黄橙色土ブロック混)である。

遺物は1340～1342が出土している。1340は土師器の皿、1341・1342は瓦器の椀である。瓦器の椀は摩滅が著しいが、1342で体部内面に横方向の暗文がわずかに確認できる。1341の高台は粘土を薄く張り付けたもので、ほとんど高台の役目を果たしていない。

時期は出土している遺物が少量、小片であるため確定できないが、周辺の遺構の状況からも13世紀前半代と考えておきたい。

S584 (第99・126・128図・図版139) 調査区の北西側で検出されたピットである。建物10と平面的な切りあい関係を有するが、構成するピットとは直接的な切りあい関係がないため前後関係は不明である。直径30cmの円形の掘方で、その中央で直径15cmの柱痕が検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から40cmを測る。埋土は掘方が灰黄褐色土、柱痕が褐灰色土である。柱痕から柱根が出土している。樹種はモミ属である。

遺物は土師器の細片が出土している。

S585 (第99・126・128図) 調査区の北西側で検出されたピットである。ピットS581の南東側、ピットS579の東側に位置する。建物10と平面的な切りあい関係を有するが、構成するピットと直接的な切りあい関係がないため前後関係は不明である。直径25cmの円形で、深さは遺構検出面から15cmを測る。埋土は褐灰色土(にぶい黄橙色土ブロック混)である。

遺物は1343の瓦器の椀が出土している。摩滅が著しくまったく調整が確認できない。高台部も部分的に剥離しているが、粘土を薄く張り付けた簡便なものであることがわかる。

時期は出土している遺物が少量、小片であるため確定できないが、周辺の遺構の状況からも13世紀前半代と考えておきたい。

S591 (第99・126・128図) 調査区の北西側、南端で検出されたピットである。長軸30cm、短軸20cmの楕円形の掘方で、その南側で直径15cmの円形の柱痕が検出されている。深さは柱痕部分で遺構検出面から20cmを測る。埋土は掘方が明黄褐色土(褐灰色土少量混)、柱痕が褐灰色土である。

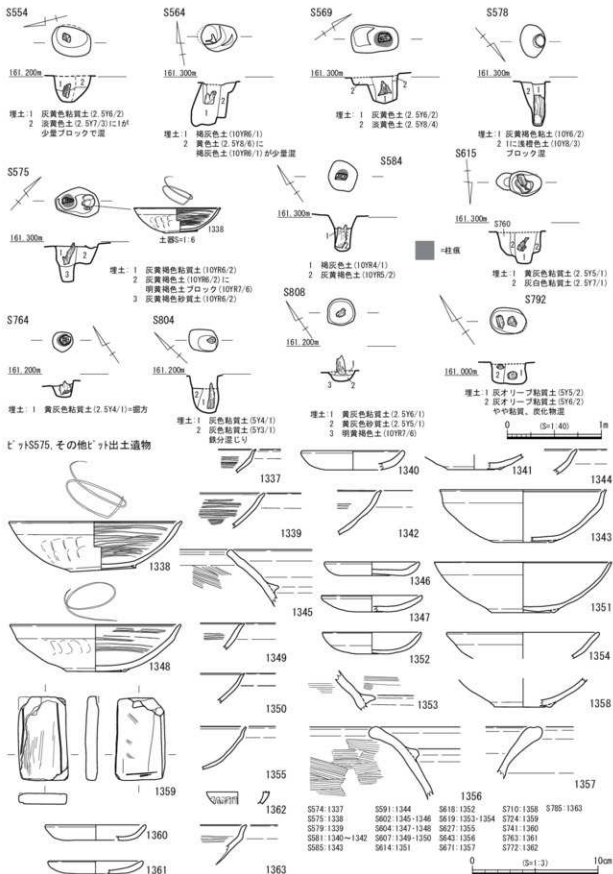
遺物は柱痕から1344の瓦器の椀が出土している。小片で摩滅気味で調整法等が確認できない。

時期は出土している遺物が少量、小片であるため確定できないが、周辺の遺構の状況からも13世紀前半代と考えておきたい。

S602 (第99・126・128図) 調査区の北西側で検出されたピットである。ピットS564の東側に位置する。建物10と平面的な切りあい関係を有するが、構成するピットと直接的な切りあい関係がないため前後関係は不明である。直径30cmの円形で、深さは遺構検出面から34cmを測る。埋土は褐灰色土(にぶい黄橙色土ブロック混)である。

遺物は1345の土師器の羽釜、1346の土師器の皿が出土している。1345は内外共に摩滅が著しいが、外面にススの痕跡が認められる。時期は出土している遺物が少量、小片であるため確定できないが、周辺の遺構の状況からも13世紀前半代と考えておきたい。

その他ピット



第128図 T5 その他ピット

S604 (第99-126-128図) 調査区の北西側で検出されたピットである。建物10と平面的な切りあい関係を有するが、構成するピットと直接的な切りあい関係がないため前後関係は不明である。長軸50cm、短軸25cmの楕円形の掘方で、その南側で直径15cmの円形の柱痕が検出されている。深さは柱痕部分で遺構検出面から23cmを測る。埋土は掘方が明黄褐色土(褐灰色土少量混)、柱痕が褐灰色土である。

遺物は1347の土師器皿、1348の瓦器の椀が出土している。1348は柱痕から出土している。1348は外面がやや摩滅気味であるが、体部内面に横方向、見込み部分に「 ℓ 」字状の暗文を確認できる。

時期は出土している遺物から13世紀前半代と考えておきたい。

S607 (第99-126-128図) 調査区の北西側で検出されたピットである。建物10を構成するピット784の東側に位置する。建物10と平面的な切りあい関係を有するが、構成するピットと直接的な切りあい関係がないため前後関係は不明である。直径20cmの円形で、深さは遺構検出面から17cmを測る。埋土は褐灰色土(にぶい黄褐色土ブロック混)である。

遺物は1349・1350の瓦器の椀が出土している。ともに遺存状態は悪いが、1349では体部内面に横方向の暗文を確認できる。

時期は出土している遺物が少量、小片であるため確定できないが、周辺の遺構の状況からも13世紀前半代と考えておきたい。

S614 (第99-126-128図) 調査区の北西側で検出されたピットである。土坑S592の南東側に位置する。建物10と平面的な切りあい関係を有するが、構成するピットと直接的な切りあい関係がないため前後関係は不明である。長軸25cm、短軸が15cmのやや不整な楕円形で、深さは遺構検出面から15cmを測る。埋土は褐灰色土(にぶい黄褐色土ブロック混)である。

遺物は柱痕から1351の瓦器の椀が出土している。全体に摩滅が著しく、調整法は確認できない。高台は粘土を薄く張り付けた簡便なものである。

時期は出土している遺物が少量、小片であるため確定できないが、周辺の遺構の状況からも13世紀前半代と考えておきたい。

S615 (第99-126-128図・図版140) 調査区の北西側、南端で検出されたピットである。建物10と平面的な切りあい関係を有するが、構成するピットと直接的な切りあい関係がないため前後関係は不明である。長軸35cm、短軸25cmのやや歪んだ楕円形の掘方で、そのほぼ中央で柱痕が検出されている。深さは柱痕部分で遺構検出面から約35cmを測る。埋土は掘方が灰白色粘質土、柱痕が黄灰色粘質土である。柱痕で柱根が出土しており、樹種はツガ属である。

S618 (第99-126-128図) 調査区の北西側で検出されたピットである。建物10を構成するピット780の北側に位置する。建物10と平面的な切りあい関係を有するが、構成するピットと直接的な切りあい関係がないため前後関係は不明である。直径20cmの円形で、深さは遺構検出面から30cmを測る。埋土は褐灰色土(にぶい黄褐色土ブロック混)である。

遺物は柱痕から1352の土師器の皿が出土している。

時期は出土している遺物が少量、小片であるため確定できないが、周辺の遺構の状況からも13世紀前半代と考えておきたい。

S619 (第99・126・128図) 調査区の北西側で検出されたピットである。建物10を構成するピット620に切られており、建物10に先行する。長径45cm、短径25cmの楕円形で、深さは遺構検出面から21cmを測る。埋土は褐色土（にぶい黄褐色土ブロック混）である。

遺物は1353の土師器の羽釜、1354の土師器の皿が出土している。1353は外面にスガが認められる。

時期は出土している遺物が少量、小片であるため確定できないが、周辺の遺構の状況からも13世紀前半代と考えておきたい。

S627 (第99・126・128図) 調査区の北西側で検出されたピットである。建物9の南西側に位置する。直径25cmの円形で、深さは遺構検出面から18cmを測る。埋土は褐色土（にぶい黄褐色土ブロック混）である。

遺物は柱痕から1355の瓦器の椀が出土している。摩滅が著しく調整は確認できない。

時期は出土している遺物が少量、小片そして遺存状態が悪いため確定できないが、周辺の遺構の状況からも13世紀前半代と考えておきたい。

S643 (第99・126・128図) 調査区の北西側で検出されたピットである。建物10と平面的な切りあい関係を有するが、構成するピットと直接的な切りあい関係がないため前後関係は不明である。長軸35cm、短軸20cmの楕円形の掘方で、その南側で直径約10cmの円形の柱痕が検出されている。深さは柱痕部分で遺構検出面から8cmを測る。埋土は掘方が明黄褐色土（褐色土少量混）、柱痕が褐色土である。

遺物は柱痕から1356の土師器の羽釜が出土している。

時期は出土している遺物が少量、小片であるため確定できないが、周辺の遺構の状況からも13世紀前半代と考えておきたい。

S671 (第99・126・128図) 調査区の北西側で検出されたピットである。土坑S662の東側に位置する。溝S645を切っている。直径20cmの円形で、深さは遺構検出面から21cmを測る。埋土は褐色土（にぶい黄褐色土ブロック混）である。

遺物は1357の東播系須恵器の捏鉢の口縁部が出土している。内面にスガが付着している。

時期は出土している遺物が少量であるため確定できないが、周辺の遺構の状況からも13世紀前半代と考えておきたい。

S710 (第99・126・128図) 調査区の北西側で検出されたピットである。土坑S662の西側に位置する。溝S645に切られている溝646を切っている。直径30cmの円形で、深さは遺構検出面から12cmを測る。埋土は褐色土（にぶい黄褐色土ブロック混）である。

遺物は1358の瓦器の椀の底部が出土している。内外面の摩滅が著しいため、調整等は不明である。高台は粘土を薄く張り付けた非常に簡便なものである。

時期は出土している遺物が少量であるため確定できないが、周辺の遺構の状況からも13世紀前半代と考えておきたい。

S724 (第99・126・128図) 調査区の北西側で検出されたピットである。建物9を構成しているピットS725の西側に位置する。直径15cmの円形で、深さは遺構検出面から5cmと浅い。埋土は褐色土（にぶい黄褐色土ブロック混）である。

遺物は1359の携帯用硯が出土している。両面ともに縁を作り出すための沈線が残存している一方、全体に擦痕が見られる。製作途中もしくは破損品を転用したかは判断できない。

S741 (第99・126・128図) 調査区の北西側で検出されたピットである。建物10の北東側に位置する。長軸40cm、短軸25cmの楕円形の掘方で、そのほぼ中央で直径約15cmの円形の柱痕が検出されている。深さは柱痕部分で遺構検出面から17cmを測る。埋土は掘方が明黄褐色土(褐灰色土少量混)、柱痕が褐灰色土である。

遺物は柱痕から1360の土師器の皿が出土している。

時期は出土している遺物が少量、小片であるため確定できないが、周辺の遺構の状況からも13世紀前半代と考えておきたい。

S763 (第99・126・128図) 調査区の北西側で検出されたピットである。土坑S592の南西に位置する。直径23cmのやや歪んだ円形の掘方で、そのほぼ中央で直径約10cmの円形の柱痕が検出されている。深さは柱痕部分で遺構検出面から15cmを測る。埋土は掘方が明黄褐色土(褐灰色土少量混)、柱痕が褐灰色土である。

遺物は柱痕から1361の土師器の皿が出土している。

時期は出土している遺物が少量、小片であるため確定できないが、周辺の遺構の状況からも13世紀前半代と考えておきたい。

S764 (第99・126・128図・図版141) 調査区の北西側、南端で検出されたピットである。一辺20cm、隅丸方形の掘方で、その中央やや東寄りで柱根が検出されている。埋土は掘方が黄灰色粘質土である。深さは遺構検出面から15cmを測る。柱根の樹種はモミ属である。

土器等の遺物は出土していない。

S772 (第99・126・128図) 調査区の北西側で検出されたピットである。土坑S592の北側に位置する。建物10と平面的な切りあい関係を有するが、構成するピットと直接的な切りあい関係がないため前後関係は不明である。長軸25cm、短軸20cmの楕円形の掘方で、そのほぼ中央で直径約10cmの円形の柱痕が検出されている。深さは柱痕部分で遺構検出面から31cmを測る。埋土は掘方が明黄褐色土(褐灰色土少量混)、柱痕が褐灰色土である。

遺物は柱痕から1362の青白磁の合子が出土している。

時期は出土している遺物が少量、小片であるため確定できないが、周辺の遺構の状況からも13世紀前半代と考えておきたい。

S785 (第99・126・128図) 調査区の北西側で検出されたピットである。建物10と平面的な切りあい関係を有するが、構成するピットと直接的な切りあい関係がないため前後関係は不明である。ピットS575の東側、ピットS579の南側に位置する。直径15cmの不整な円形で、深さは遺構検出面から3cmと浅い。埋土は褐灰色土(にぶい黄橙色土ブロック混)である。

遺物は1363の瓦器の椀が出土している。内外面ともに摩擦が著しいが、体部内面に横方向の暗文を確認できる。

時期は遺物が少量、小片であるため確定できないが、周辺の遺構の状況からおおむね13世紀前半代としておきたい。

S792 (第99・126・128図) 調査区の北西側、南端で検出されたピットである。建物10と平面的な

切りあい関係を有するが、構成するピットと直接的な切りあい関係がないため前後関係は不明である。長軸40cm、短軸27cmの楕円形の掘方で、その南西端で柱痕が検出されている。深さは遺構検出面から27cmを測る。埋土は掘方が灰オリーブ色土（やや砂質・炭化物混）、柱痕が灰オリーブ色土である。柱痕から柱根が出土している。樹種はモミ属である。

土器等の遺物は出土していない。

S804（第99・126・128図・図版141） 調査区の北西側、西端で検出されたピットである。建物10と平面的な切りあい関係を有するが、構成するピットと直接的な切りあい関係がないため前後関係は不明である。一辺25cmの隅丸方形の掘方で、その南端で直径15cmの柱痕が検出されている。深さは柱痕部で遺構検出面から42cmを測る。埋土は掘方が灰色粘質土（鉄分混）、柱痕が灰色粘質土である。柱痕から柱根が出土している。樹種はモミ属である。

土器等の遺物は出土していない。

S808（第99・126・128図・図版141） 調査区の北西側、西端で検出されたピットである。調査用の排水溝掘削時に検出した。直径30cmの円形の掘方で、そのほぼ中央でモミ属の柱根が検出されている。深さは隣接している遺構検出面から25cmを測る。埋土は掘方が黄灰色砂質土である。

土器等の遺物は出土していない。

第5章 理化学的分析の結果

バリノ・サーヴェイ株式会社 高橋 敦

第1節 はじめに

平成25・26年度の滋賀県甲賀市水口町所在の貴生川遺跡の発掘調査で検出された平安時代末から安土桃山時代にかけての集落・城館から出土した木製品および建物を構成していたと考えられる柱材等を対象に、木材利用状況を把握することを目的として、樹種同定を実施する。

第2節 試料

試料は、出土した柱根、基礎材、井戸枠、杭等の建築・施設・土木材や、曲物、漆器碗、結桶、下駄等の木製品92点である。

第3節 分析方法

資料の木取りを観察した上で、剃刀を用いて木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレバラートとする。プレバラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、鳥地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にした。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にした。

第4節 結果

同定結果は、表2・3のとおりである。木製品は、針葉樹7分類群（マツ属複維管束亜属・モミ属・ツガ属・スギ・コウヤマキ・ヒノキ・ヒノキ科）と広葉樹8分類群（ブナ属・クリ・ムクノキ・サカキ・サクラ属・トチノキ・ミズキ属・エゴノキ属）に同定された。なお、T3の堀S1から出土した188の差歯下駄（歯）は、道管の配列から、環孔材の道管配列を有する広葉樹と考えられるが、保存状態が悪く、晩材部の道管配列や放射組織の特徴が観察できないため、種類不明である。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属 (*Pinus subgen. Diploxylon*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急一や

や緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・モミ属 (*Abies*) マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁には数珠状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

なお、No44は組織の特徴からモミ属と考えられるが、保存状態が悪く、数珠状の肥厚が明瞭に観察できないため、近似種とした。

・ツガ属 (*Tsuga*) マツ科

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞は、年輪界近くに認められるが、数が少なく目立たない。放射組織は仮道管と柔細胞で構成される。柔細胞壁は滑らかで、垂直壁には数珠状の肥厚が認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc.) コウヤマキ科コウヤマキ属

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は窓状となり、通常1分野に1個。放射組織は単列、1～5細胞高。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・ヒノキ科 (Cupressaceae)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1～10細胞高。

上記ヒノキを含むヒノキ科のいずれかであるが、保存状態が悪いために同定に至らず、ヒノキ科とした。

・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、道管は単独または放射方向に2～3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織までである。

表2 木器樹種同定結果一覧表

階層地	調査区	遺構番号	地区・層位群	部種	木取り	種類	備考	実測地
182	7.3	S1		漆器板	榎木板(板目取)	ゾウノ木	外周(黒色(朱檜材))、内周(赤色)	30
183	7.3	S1		漆器板	榎木板(板目)	ゾウノ木	内周(赤色)、板目(赤色)	31
184	7.3	S1	X、-1区	漆器板	榎木板	ゾウノ木	内周(黒色)	34
185	7.3	S1	X、-2区	漆器下板	板目	マツ属(漆器用支那産)		1
186	7.3	S1	X、-1区	漆器下板	板目(一枚目)	マツ属(漆器用支那産)	本家は南の中央付近に搬入	2
187	7.3	S1	X、-2区	漆器下板(裏)	板目	ヒノキ		3
188	7.3	S1	X、-2区	漆器下板(裏)	板目	ヒノキ		6-2
189	7.3	S1	地1層	漆器下板	ヒノキ組板	マツ属(漆器用支那産)		12
190	7.3	S1	X、-2区		板目	ヒノキ	漆器板化	3
191	7.3	S1	X、-1区	板目	板目	ヒノキ		40
192	7.3	S1	X、-1区	板目	ヒノキ	マツ属(漆器用支那産)		1
-	7.3	S107		柱板	板目	ヒノキ		-
229-1	7.3	S206		漆器(板板)	板目	マツ属(漆器用支那産)		42
229-2	7.3	S206		漆器(板板)	板目	ヒノキ		42
229-3	7.3	S206		漆器(板板)	板目	マツ属(漆器用支那産)		42
229-4	7.3	S206		漆器(板板)	板目	マツ属(漆器用支那産)		42
230	7.3	S206		漆器(板板)	板目	ヒノキ		8
231	7.3	S206		漆器(板板)	板目	ヒノキ		10
232	7.3	S206		漆器(板板)	板目	ヒノキ		7
233	7.3	S206		漆器(板板)	板目	ヒノキ		9
234	7.3	S207		漆器板	榎木板(板目取)	ゾウノ木	外周(黒色(朱檜材))、内周(赤色)	32
-	7.3	S208		板	ヒノキ	ヒノキ		6-1
-	7.3	S208		板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.3	S208		板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.3	S209		板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.3	S210		板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.3	S211		板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.3	S212		板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.3	S213		板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.3	S214		板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.3	S215		板	ヒノキ	ヒノキ		-
249	7.3	S20(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ		15
250	7.3	S20(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ		16
251	7.3	S20(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ		19
252	7.3	S20(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ		20
253	7.3	S20(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ		17
256	7.3	S20(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ		18
261	7.3	S20(板目)	最下層	漆器(板板)	板目(一枚目)	ヒノキ		23
262	7.3	S20(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ	竹筒(黒色漆器用板)	11
263	7.3	S20(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ		22
264	7.3	S20(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ		14
265	7.3	S20(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ		25
266	7.3	S20(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ		28
267	7.3	S20(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ		29
268	7.3	S20(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ		31
269	7.3	S20(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ	マツ属(漆器用支那産)	40
270	7.3	S20(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ	マツ属(漆器用支那産)	46
271	7.3	S20(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ	マツ属(漆器用支那産)	45
272	7.3	S20(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ	マツ属(漆器用支那産)	41
603	7.4	S2(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ		44
602	7.4	S2(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ		29
603	7.4	S2(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ	漆器板化(板目1枚目か)	43
604	7.4	S2(板目)	2-4層	漆器(板板)	板目	ヒノキ		36
605	7.4	S2(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ	竹筒(黒色漆器用板)	38
606	7.4	S2(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ		43
607	7.4	S2(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ		37
608	7.4	S2(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ		32
609	7.4	S2(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ		35
610	7.4	S2(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ		33
611	7.4	S2(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ		30
612	7.4	S2(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ		34
613	7.4	S2(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ		34
614	7.4	S2(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ		50
615	7.4	S2(板目)	最下層	漆器(板板)	板目	ヒノキ		48
-	7.4	S20		板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S409	建物12	柱板	平截法	ヒノキ		-
-	7.4	S410	建物11	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S411	建物1	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S412	建物2	柱板	ヒノキ	ヒノキ	炭は丸木か	-
-	7.4	S413	建物3	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S414	建物4	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S415	建物5	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S416	建物6	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S417	建物7	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S418	建物8	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S419	建物9	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S420	建物10	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S421	建物11	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S422	建物12	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S423	建物13	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S424	建物14	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S425	建物15	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S426	建物16	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S427	建物17	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S428	建物18	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S429	建物19	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S430	建物20	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S431	建物21	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S432	建物22	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S433	建物23	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S434	建物24	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S435	建物25	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S436	建物26	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S437	建物27	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S438	建物28	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S439	建物29	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S440	建物30	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S441	建物31	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S442	建物32	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S443	建物33	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S444	建物34	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S445	建物35	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S446	建物36	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S447	建物37	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S448	建物38	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S449	建物39	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S450	建物40	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S451	建物41	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S452	建物42	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S453	建物43	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S454	建物44	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S455	建物45	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S456	建物46	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S457	建物47	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S458	建物48	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S459	建物49	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S460	建物50	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S461	建物51	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S462	建物52	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S463	建物53	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S464	建物54	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S465	建物55	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S466	建物56	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S467	建物57	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S468	建物58	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S469	建物59	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S470	建物60	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S471	建物61	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S472	建物62	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S473	建物63	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S474	建物64	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S475	建物65	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S476	建物66	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S477	建物67	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S478	建物68	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S479	建物69	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S480	建物70	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S481	建物71	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S482	建物72	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S483	建物73	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S484	建物74	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S485	建物75	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S486	建物76	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S487	建物77	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S488	建物78	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S489	建物79	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S490	建物80	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S491	建物81	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S492	建物82	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S493	建物83	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S494	建物84	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S495	建物85	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S496	建物86	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S497	建物87	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S498	建物88	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S499	建物89	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S500	建物90	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S501	建物91	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S502	建物92	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S503	建物93	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S504	建物94	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S505	建物95	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S506	建物96	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S507	建物97	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S508	建物98	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S509	建物99	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-
-	7.4	S510	建物100	柱板	ヒノキ	ヒノキ		-

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火災状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

・ムクノキ (*Aphananthe aspera* (Thunb.) Planchon) ニレ科ムクノキ属

散孔材で、横断面では角張った楕円形、単独または2-3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1~4細胞幅、1~30細胞高。柔組織は周囲状およびターミナル状。

・サカキ (*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.) ツバキ科サカキ属

散孔材で、小径の道管がほぼ単独で散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列~階段状に配列する。放射組織は異性、単列、1~20細胞高。

・サクラ属 (*Prunus*) バラ科

散孔材で、道管は単独または2~6個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1~4細胞幅、1~30細胞高。

・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科トチノキ属

散孔材で、道管は単独または2~3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1~15細胞高で層階状に配列する。

・ミズキ属 (*Swida*) ミズキ科

散孔材で、道管はほぼ単独で散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1~3細胞幅、1~30細胞高。

・エゴノキ属 (*Styrax*) エゴノキ科

散孔材で、道管は単独または2~4個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1~3細胞幅、1~20細胞高。

第5節 考察

分析を実施した木製品等は、伊東・山田(2012)の木器分類を参考にすれば、容器(曲物・結桶・漆器・蓋?)、食器具(箸?)、服飾具(下駄)、建築部材(柱・基礎材)、施設材・器具材(井戸枠)、土木材(杭)、その他(板材・加工材・不明)に分けられ、樹種は合計15種類に同定された。

同定された各種類の材質をみると、針葉樹のマツ属複雑管束亜属は、針葉樹としては比較的硬軟部類に入り、強度と保存性が高い。モミ属は、軽軟で強度と保存性は低い。ツガ属は、比較的硬軟で強度と保存性が高い。スギ、コウヤマキ、ヒノキ、ヒノキ科は、軽軟であるが、強度と耐水性は比較的高い。広葉樹のブナ属は、やや硬軟で強度が高いが、保存性は低い。クリは、硬軟で強度と耐朽性が高い。ムクノキ、サカキ、サクラ属、ミズキ属、エゴノキ属は、比較的硬軟で強度が高い。トチノキは軽軟で強度と保存性は低い。木製品全体でみると、92点中73点(79%)

が針葉樹で占められており、広葉樹は限られた器種でのみ認められる傾向がある。

器種別にみると、容器では曲物や結桶など、板状の部品で構成される器種では、加工性の高い針葉樹が利用されている。曲物ではヒノキが多く、スギとヒノキ科が混じる組成であるが、結桶ではスギがやや多く、ヒノキと複雑管束亜属が混じる組成となり、曲物と結桶とで針葉樹材の利用に違いが認められる。一方、漆器碗は、いずれもろくろ成形による挽物碗と考えられ、4点中3点が広葉樹、1点が針葉樹となる。広葉樹では、ブナ属、トチノキ、ミズキ属の3種類が認められた。このうち、ブナ属とトチノキは、漆器碗の本地として、全国的にも利用頻度の高い種類である（伊東・山田, 2012）。滋賀県内では、宮前遺跡、石田遺跡、烏丸崎遺跡で中世の漆器碗の樹種同定が実施されており、トチノキ、ケヤキ、カツラ、キハダ、オニグルミ、モクレン属が確認されている（伊東・山田, 2012）。ブナ属は、戦国～江戸時代初期とされる吉武城遺跡で確認された例があり、今回の結果から中世にも利用されていたことが推定される。広葉樹材が使用されている漆器碗3点の漆塗り状況を見ると、ブナ属・クマノミズキ類の漆器碗が外面黒色（朱模様）・内面赤色の漆塗り、トチノキの漆器碗が内外面とも赤色の漆塗りである。一方、針葉樹1点はコウヤマキに同定され、加工性の高い針葉樹材が漆器碗にも利用されていたことが推定される。コウヤマキの漆器碗は、高台付近のみが残り、全体の形状は不明であるが、内外面とも黒色であり、高台の一部に切り込みが入るなど、広葉樹に同定された漆器碗とは形状や漆塗りに違いが認められる。このような漆器碗の形状、樹種、漆塗りの関連性については今後の資料の蓄積をもって検討していきたい課題である。蓋? 1点は、白木で全面に同心円状の加工痕が残ることから、ろくろ成形による挽物と判断される。樹種はエゴノキ属であり、緻密な木材を利用したことが推定される。なお、現代のろくろ成形に関する民俗事例では、エゴノキ属は傘の柄に利用するとされる（橋本, 1979）。

食事は、箸? の1点である。分割棒状を呈し、ヒノキが利用される。箸のような木製品は、加工時に生じる小片からも加工可能であること、ヒノキが本遺跡で比較的多く利用されていること等を考慮すれば、他のヒノキの木製品と共に製作・利用された可能性もある。

服飾具は、全て下駄である。下駄は、台と歯を一本で作る連歯下駄と、台と歯を別材で作る差歯下駄とがある。連歯下駄は、いずれもマツ属複雑管束亜属であり、強度や保存性の高い木材を利用したことが推定される。差歯下駄は、2点とも歯である。ヒノキと種類不明の広葉樹に同定され、少なくとも2種類の木材が利用されていたことが推定される。

建築部材では、柱を主体として、他に基礎材がある。柱は25点中14点がモミ属であり、他にマツ属複雑管束亜属、ツガ属、ヒノキ、ヒノキ科、ムクノキ、サクラ属が混じる。全体として、針葉樹の利用が多く、広葉樹の利用は少ない。最も多いモミ属は、木製品にはほとんど認められておらず、木製品とは異なる木材利用がうかがえる。滋賀県では、主に県の南部において、いわゆる中間温帯林として、モミシキミ群集が標高300～900mの地域に分布している（小林1997）。モミ属が多用されている背景には、入手が容易な環境も関係していると思われる。基礎材は、4点ともマツ属複雑管束亜属の忠持丸木が利用されており、強度と保存性に優れた複雑管束亜属を選択的に利用したことが推定される。

施設材・器具材では井戸枠材7点がある。いずれも板状を呈し、大部分が板目であるが、柾目

板も含まれる。全てクリに同定され、強度・耐朽性に優れた木材を利用したことが推定される。

土木材では杭7点があり、モミ属を中心に複雑管束亜属、ムクノキ、サクラ属が認められる。強度や保存性の高い複雑管束亜属、強度の高いムクノキ、サクラ属が利用される一方で、強度と保存性の低いモミ属が多く利用されている状況から、周辺で入手可能な木材を材質に関係なく利用している可能性がある。

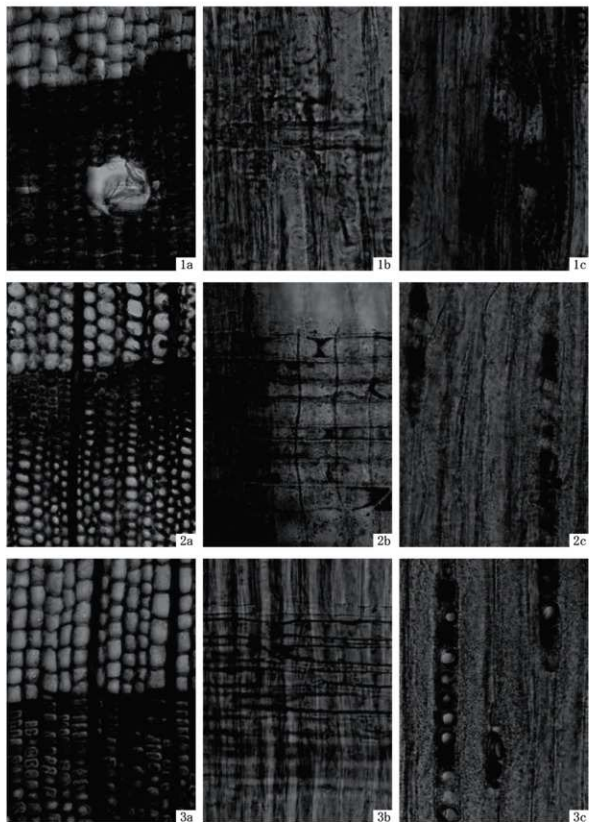
＜引用文献＞

- ・橋本鉄男 (1979) 『ろくろ』もと人間の文化史31 法政大学出版局 444p.
- ・林 昭三 (1991) 『日本産木材 顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所.
- ・伊東隆夫 (1995) 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ』木材研究・資料31 京都大学木質科学研究所 81-181.
- ・伊東隆夫 (1996) 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ』木材研究・資料32 京都大学木質科学研究所 66-176.
- ・伊東隆夫 (1997) 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ』木材研究・資料33 京都大学木質科学研究所 83-201.
- ・伊東隆夫 (1998) 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ』木材研究・資料34 京都大学木質科学研究所 30-166.
- ・伊東隆夫 (1999) 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ』木材研究・資料35 京都大学木質科学研究所 47-216.
- ・伊東隆夫・山田昌久編 (2012) 『木の考古学』出土木製品用材データベース 海青社 449p.
- ・小林圭介編 (1997) 『造賀の植生と植物』サンライズ印刷株式会社出版部 135p.
- ・Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. 編 (2006) 『針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修) 海青社 70p [Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- ・島地 謙・伊東隆夫 (1982) 『図説木材組織』地球社 176p.
- ・Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. 編 (1998) 『広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修) 海青社 122p. [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

表3 器種別種類構成表

種類\器種	器種				食器		彫刻具	建築部材	施設	土木	その他		合計				
	銅板	成板	銅板	成板	銅	漆?	漆	漆	漆	漆	板材	加工		不明			
針葉樹																	
複雑管束亜属			3				2	1	4	1	1	1	13				
モミ属								14		3		4	21				
ツグ属								3					3				
スギ		1	6	1							2	1	11				
コウヤマキ					1								1				
ヒノキ	3	3	4			1	1	2			1	3	18				
ヒノキ科	1							3				1	5				
広葉樹																	
ブナ属					1								1				
クワ										7	1	2	10				
ムクノキ								1					1				
サカキ												1	1				
サクラ属								1		1			2				
トチノキ				1									1				
ミズキ属				1									1				
エゴノキ属					1								1				
広葉樹							1						1				
合計	3	6	10	4	4	1	1	2	2	20	4	7	6	3	1	13	91

1)モミ属には近江種を含む。
 2)柱は、柱頭(漆塗)、柱材を一括した。
 3)その他の不明は、表1で器種が空白の資料である。



1. マツ属複雑管束亜属(189)

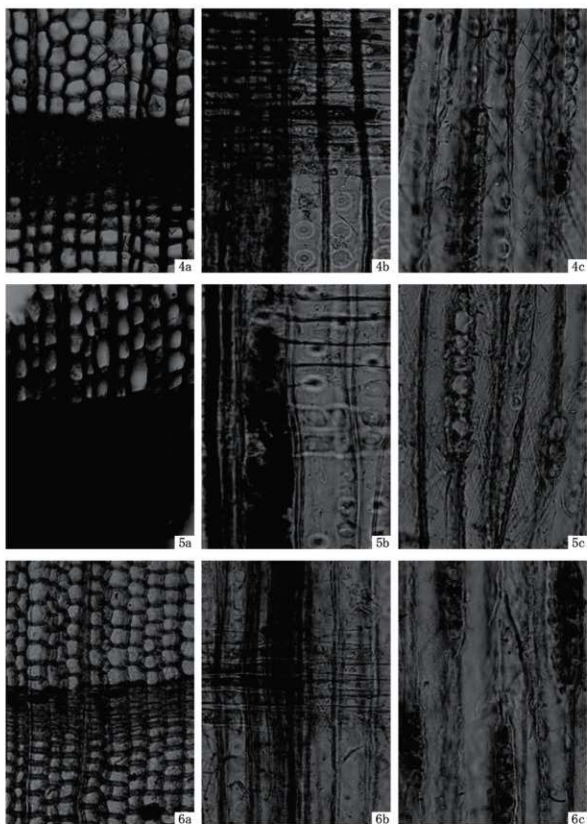
2. キミ属 (T5-S502 柱材)

3. ツガ属 (T5-S308 柱材)

a: 木口, b: 径目, c: 板目

100 μ m: a
100 μ m: b, c

第129図 同定木材 (1)



4. スギ(356)

5. コウヤマキ(184)

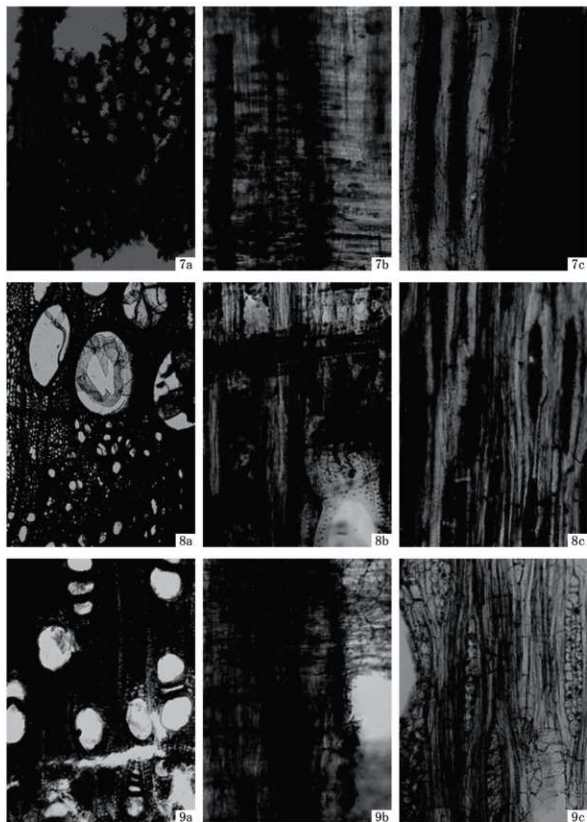
6. ヒノキ(602)

a: 木口, b: 年目, c: 板目

100 μm: a

100 μm: b, c

第130図 同定木材(2)



7. プナ属 (334)

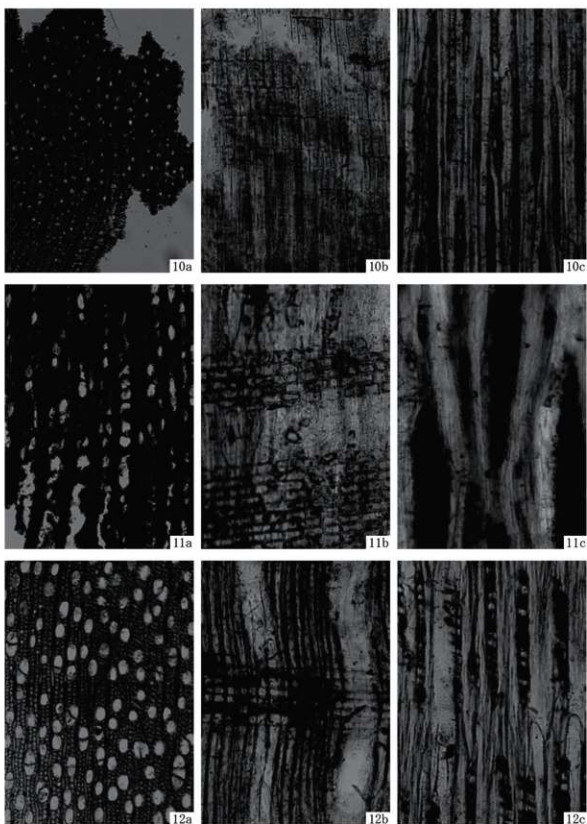
8. クリ (614)

9. ムクノキ (T3-S117柱材)

a: 木口, b: 柎目, c: 板目

100 μ m: a
100 μ m: b, c

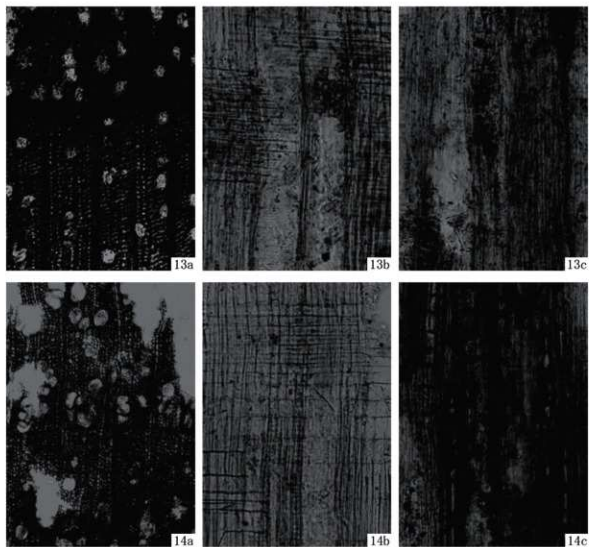
第131図 同定木材 (3)



10. サカキ (365)
 11. サクラ属 (T3-S434柱材)
 12. タチノキ (183)
 a: 木口, b: 紙目, c: 板目

100 μ m: a
 100 μ m: b, c

第132図 同定木材 (4)



13. ミズキ属(182)

14. エボノキ属(367)

a: 木口, b: 柀目, c: 板目

100 μm: a
100 μm: b, c

第133図 同定木材 (5)

第6章 まとめ

第1節 貴生川遺跡の変遷

1. 貴生川遺跡の時期区分 (第134～136図)

貴生川遺跡の遺構の変遷について整理しておきたい。当遺跡においてもっとも古い段階に位置付けられる時期は、弥生時代中期（Ⅰ期）である。この後、古墳時代中期（Ⅱ期）、平安時代末から鎌倉時代（Ⅲ期：11世紀末～13世紀中頃）、安土桃山時代～江戸時代初頭（Ⅳ期：16世紀後半～17世紀前半）と主な遺構が検出されている。この時期変遷に沿って、遺跡の状況を概観していきたい。

(1) 第Ⅰ期：弥生時代中期

【主な遺構】 T2 落ち込み1、土坑S350、ピットS1・137

T2の落ち込み1からは弥生時代中期の土器と12世紀後半代に比定できる土器が出土している。この遺構の形成過程を考えると、古墳時代中期のT2の竪穴建物S385・474・502、T3の竪穴建物S369が埋没した後形成され、12世紀後半代に埋没したことがわかっている。そのことから埋没段階で二次的に動いた遺物である可能性が高い。ただし、ローリングを受けているものの、堆積状況から水流等があったことが想定できないことから、周辺地域に集落等が存在していたと考えられる。ちなみに、甲賀市域においては、弥生時代末から古墳時代の初頭の遺物が鈴鹿峠遺跡や山女原遺跡で採集されているが、調査で出土した弥生時代の遺物としては初出となる。

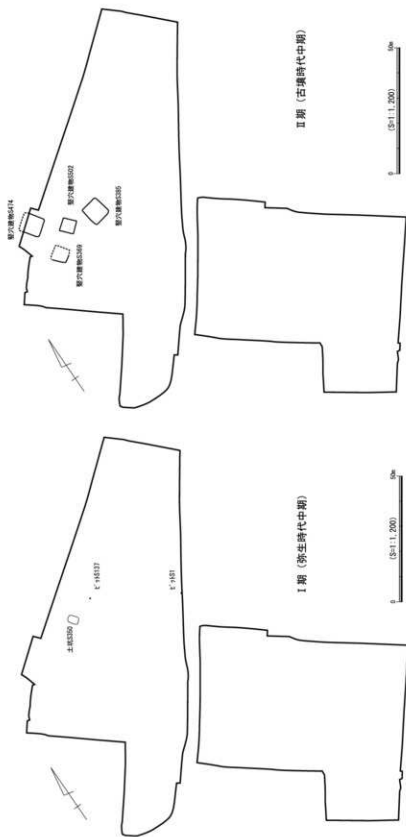
(2) 第Ⅱ期：古墳時代中期

【主な遺構】 T2 竪穴建物S385・474・502

T3 竪穴建物S369

竪穴建物は全部で4棟検出されており、すべて落ち込み1に切られていることが分かっている。また、調査対象地の西側の端に集中している。

T3-S369、S474は後世の遺構等に削平を受け全体像が不明であるが、すべての建物で作り付けのカマドは確認されていない。おそらくは炉もしくは野外炉を使っていたものと考えられる。時期は、出土している遺物から竪穴建物が古墳時代中期末頃（5世紀後半）と考えられる。この竪穴建物の時期は、同じ甲賀市域の野洲川流域の河岸段丘上に展開する植遺跡との比較が可能で、植遺跡で設定されている「植0期」に相当する時期である。植遺跡において、この「植0期」は大型倉庫群がつくられる時期で、竪穴建物は検出されていない。また、該当する時期の遺物が出土していないが、陶呂編年のTK208型式以前、TK73型式に並行する段階」と評価している（滋賀



第134図 貴生川遺跡遺構変遷図1

県教委・滋文保協2005・p12)。

この段階は、甲賀市域に展開する古墳が5世紀前葉に西籬子塚古墳を皮切りに、東籬子塚古墳、泉塚越古墳と築造されているのだが、ちょうどこの時期に相当する。

(3) Ⅲ期：平安時代～鎌倉時代(11世紀後半～13世紀中頃)

この段階が当遺跡の中で最も多くの遺構が検出されている。ただし、遺構の切りあい関係や方位、出土遺物等から4段階に分けることができる。

◇ⅰ段階(11世紀後半～12世紀前半)

【主な遺構】 T1 ビットS59

この時期の明確な遺構は、T1の北東側で検出されたビットS59のみである。まとまって土師器の皿(15～17)が出土している。底部に糸切痕が残るものである。在地の土器でおおむね11世紀後半から12世紀前半の時期に位置付けられる(甲賀市教委・滋文保協2008)。

◇ⅱ段階(12世紀後半)

【主な遺構】 T1 建物1・2 土坑S1・214 ビットS72

T2 落ち込み1

T3 土坑S342

T4・5 建物9-1^{※1} 柵4

T5 土坑S162

この時期の明確な遺構は、T1の北東部の建物を含む一群とT5の中央部の建物を含む一群が中心である。ともに建物と土坑(墓)の組み合わせを確認できる。建物等主軸方位はN42～43°E、N25～27°Eと地点ごとに大きく異なる。区画溝等は確認できない。ただし、墓の副葬土器組成には違いがみられ、T1-S214では白磁碗と土師器皿、T5-162は瓦器碗と土師器皿の組み合わせである。また、T3-S342も遺構の上面が削平され、遺存状態が悪いが、白磁の碗(380)が出土していることから墓の可能性を考慮しておきたい。そうすれば、土坑の南西側、ちょうど曲輪(T3-S2)によって削平を受けている地点に当該時期の建物が展開していてもよいのかもしれない。そして、T2の中央を東西に横切るように検出されたのがT2-落ち込み1である。土層観察から流水等は確認できないことから、東西にはゆる谷状の地形と理解できる。流水が想定できないことから、埋土に包含されている遺物(弥生中期の土器・瓦器等)のうち古い一群は2次のな堆積と評価し、落ち込みの最終埋没年代を12世紀後半の瓦器碗の時期とした。

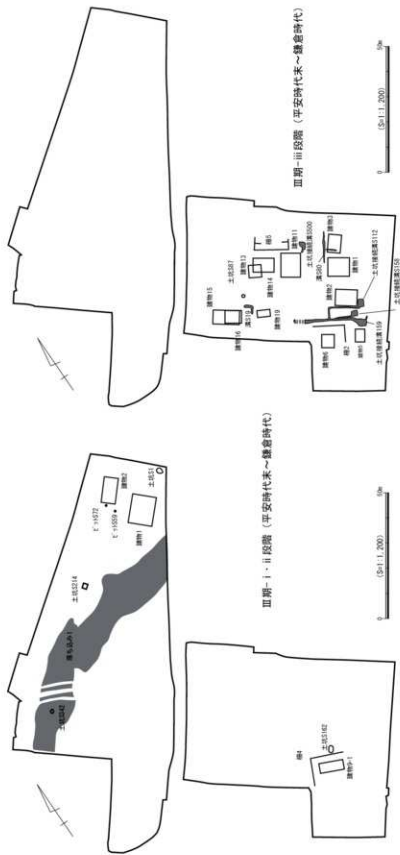
◇ⅲ段階(13世紀前半)

【主な遺構】 T4・5 建物1～3・8・11・13～16・19 柵2・5

T4 土坑S87 溝S19

T5 土坑接続溝S112・158・159・500 溝S80

この時期の明確な遺構は、中心がT4・5に移り代わっている。この段階以降、遺構の分布の



第135図 貴生川遺跡遺構変遷図2

中心はT4・5となる。掘立柱建物がおおむね2～3棟一組が基本単位のようなのである。T4・5の建物1・2は庇付の建物で、ともに北東側に付いている。また、欄5であるが、欄に付属する建物等が確認できていない。T5の溝S80や土坑接続溝S112・158・159のように建物に付属する溝が認められるようになる段階である。建物等の主軸方位はN35～38°EのまとまりとN30～32°Eの2群に分かれる。この段階内においても直接的な切りあい関係がある土坑接続溝S158・159は付け替えられているようである。また、建物・欄の平面的な切りあい関係が認められることから2回以上の建て替え等が想定できる。建物群の北側では鋤溝群が検出されていることから、耕作地が広がっていたと考えられる。

◇iv段階（13世紀前葉から中葉）

【主な遺構】 T4・5 建物7・9-2・10・12・17・18 欄1・6・7

T4 溝S1（T5-S365）・3（T5-S410） 井戸S2

T5 土坑接続溝S95 溝S81・98・473 土坑S247・248

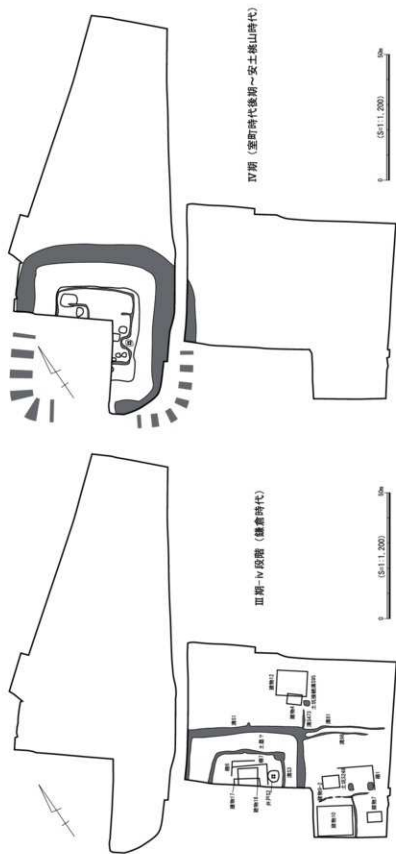
この時期は、対の区画溝のT4の溝S1（T5-S364）とT4の溝S3（T5-S410）の出現した時期である。遺構の分布状況や検出された平面プランからこの二つの溝が対となり、その間に土塁状の構造物が存在していた可能性が高い。つまり、溝・土塁囲いの屋敷地が出現するのである。これは第Ⅲ期の中でも最も大きな画期となり得る現象である。この屋敷地内には、T4の井戸S2を備える。しかし、溝・土塁囲いの屋敷地以外にも、2か所で建物を確認できる。建物10を中心としたグループ、建物12を中心としたグループである。建物10は北東、建物12は南東に庇を持つ大型掘立柱建物である。建物等の主軸方位はN29～35°Eで、溝・土塁囲いの屋敷地と同一方位を志向する。建物や溝等で直接的な切りあい関係や平面的な切りあい関係が認められることから、この段階内で建て替え等が2回以上なされていたと考えられる。その中には溝・土塁囲い屋敷地内で検出されている建物17では、柱穴内埋土から遺物と共に少なくない炭が検出されている。そのことから火災等があり立て直しを行った可能性が考えられる。また、前段階同様に、屋敷地の北側では鋤溝群が検出されていることから、耕作地が広がっていたと考えられる。

（4）第Ⅳ期（室町時代後期～江戸時代：16世紀後半～17世紀前半）

【主な遺構】 T3 堀S1 曲輪S2内の遺構

この時期はT3のはほぼ全域で検出された城館が出現する段階である。この城館の機能した時期は16世紀後半代である。それは出土している遺物からも明らかである。今回の調査で出土遺物としては普遍的に出土する日常雑器である信楽焼の播鉢の内容を確認することにより、曲輪内の遺構の変遷時期の目安としたい。各遺構から出土した実測・掲載したものを基準とする。条数は播目である。

堀S1		4条	8点	5条	12点	6条	2点	
曲輪S2	3条	1点	4条	3点	5条	12点	6条	7点 見込み部に播目
土坑S5		4条	1点	5条	9点			
溝S6		4条	2点	5条	5点			



第136図 貴生川遺跡遺構変遷図3

土坑S32		6条	1点			
土坑S72	4条	1点	5条	4点	6条	5点
土坑S73			5条	1点		
造成土			5条	4点	6条	1点 見込み部に播目
井戸S70			5条	1点	6条	1点

この傾向を信楽焼の編年(畑中2003)に照らし合わせると、おおむね二期の新段階の様相に合致してくる。つまり16世紀後半から17世紀前半に相当する。そして、その範囲の中で、堀S1・井戸S70の埋め戻し土、造成土中からは、瀬戸美濃焼の志野や御深井釉が施された水滴など17世紀初頭に位置付けられる遺物が出土していることから、17世紀前半には城館は機能を終え、深度のある遺構は人為的に埋め戻されたと考えられる。

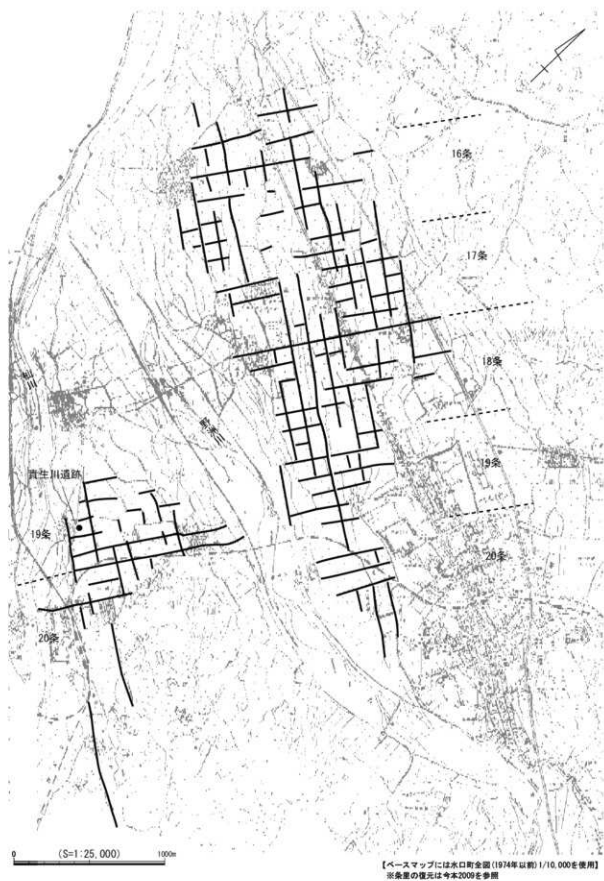
5. 時期区分と貴生川遺跡における集落に消長

貴生川遺跡においてはI期からIV期にいたる時期の遺構が検出されている。ただし、もう少し微細な視点で見えていくと、石鉢(1012・1048・1279)や叩石(376)、また、須恵器の短頸壺(100)、灰釉陶器(1289)、緑釉陶器(616)、信楽焼(701・826)などI～IV期に包含されない時期の遺物も散見される。出土状況が混入として考えられる遺物のほかに、T2の土坑S305のように当該時期(古墳時代後期)に該当する遺構やⅢ期iv段階に埋没したT4の溝S1(T5-S365)・S3(T5-S410)の最上層、つまり埋没後に窪地となっていた部分に堆積した層に包含されていた信楽焼のように、遺構の直接的な機能を示しているわけではない例もある。しかし、直接的ではないものの当然、周辺地域における当該時期の生活痕として理解できるはずである。つまり、I～IV期と遺跡の主要な遺構の時期区分以外の各時期の間にも何らかの活動があったと考えるべきである。それは遺構群として認識できないだけで、単独遺構として認識できる可能性を考慮する必要がある。その視点からすると、調査対象地内ではT4の溝・土塁囲いの屋敷地(13世紀中葉)→T3の城館(16世紀後半)に直接つながらないが、遺物の存在からこの間にも周辺地域で活動していたことは間違いない。

6. 条里と集落の消長

旧甲賀郡内で条里地割が明瞭に残るのは、野洲川流域が中心であり、杣川流域の一部確認で確認できるだけである(高橋2006・今本2009)。そして復元された条里地割の方位はN33°Eで、野洲・栗太郎と同一方位をとる(第137図)。そして、本遺跡周辺では幸いにしてわずかであるが痕跡を確認することができる。ただし、里の呼称が復元できる地点は限定されるものの、1条の起点が栗太・野洲の郡界に求めることができることから、当遺跡の里は不明であるが、19条に復元できる。

ここでは、集落の消長と条里地割の関係について考えていきたい。すでに述べたように、貴生川遺跡においてはI～IV期、そしてⅢ期はi～vi段階に分けられることを明らかにした。その時期の変遷と条里地割との関係についてみてみると、Ⅲ期以降は、掘立柱建物、柵、溝等の主軸方位などから地割との関連を検討するのに有用である。Ⅲ期-i段階は遺構が少ないため不明であ



第137図 貴生川遺跡周辺の条里復元

る。Ⅲ期-ⅱ段階では建物はN42~43° E、N25~27° Eの二つのグループが存在しているが、ともに条里地割に制約されているような状況にない。それがⅢ期-ⅲ段階になると建物・溝・溝等の方位がN35~38° EのまとまりとN30~32° Eのまとまりなる。出土した遺物や切りあい関係等の検討からN35~38° E→N30~32° Eへの変遷が想定できる。つまり、このⅢ期-ⅲ段階において条里地割を意識した方位に建物などの構造物を志向させるようになる。その後、Ⅲ期-ⅳ段階には建物等の方位がN29~35° Eで、明らかに条里地割を意識していることがわかる。このⅢ期-ⅳ段階は、特に溝・土塁囲いの屋敷地が出現した段階で、その区画溝が条里方向一致してくることは重要な変化と評価できる。そして、Ⅳ期にはⅢ期-ⅳ段階で出現した溝・土塁囲いの屋敷地と隣接して、同一方向で城館が築かれることになる。

甲賀郡における条里の施行時期については、条里の基準となる倉歴道がつくられた以降のあまり時期差のない段階とみる説があるが（高橋2006）、貴生川遺跡の集落の状況をみていくとⅢ-ⅲ~ⅳ（13世紀前半）になってはじめて条里地割の方向を志向する遺構が出現することが分かる。当然、条里地割の施行については、一斉に施行されたわけではなく、部分的・段階的に施行されたとの考えもあり、時期認定については非常に難しいところであるが、本遺跡の周辺地域において条里地割を意識するようになったのは13世紀前半代であることは間違いがないだろう。

7. 出土遺物からみた貴生川遺跡第期の様相

第Ⅲ期は、遺構の切りあい関係や主軸方位、そして遺物の様相から4段階を設定している。その中でⅰ段階は当該時期の遺構が非常に少ないことから細かな様相はわからないが、ⅱ段階以降は、当該時期に所属する遺構が非常に多くなる。そして、この第Ⅲ期の遺物の組成をみると瓦器の量が圧倒的である。そこで、設定した段階と出土している遺物、特に瓦器を中心として、変遷をみていくこととする。

【ⅰ段階】 この段階は遺構自体がほとんどなく、良好な資料を伴っているのはT1のビットS59のみである。出土している土器は底部に糸切り痕を残す土師器の皿もしくは杯である。在地の土器と考えられる。この段階は近江全域でみると大和型の瓦器の椀が確認できる。同様に鈴鹿峠を越えた伊賀においても確認されているが、貴生川遺跡においては出土していない。

【ⅱ段階】 この段階は、T1の土坑S214、落ち込み1、T5の土坑S162などでまとまった遺物が出土している。この時期の瓦器椀の特徴は以下のとおりである。丸みを帯びた深手の体部を持ち、体部の内外面には暗文を施す。外面はやや疎、内面は比較的密である。内面見込み部分は複数回転の輪状の暗文である。また、高台は高さのある断面形が三角形もしくは逆台形を呈する。これらの特徴から大和型瓦器の川越福年の第ⅱ段階B型式（川越1983）、近江編年のⅠ-期4~5（近江1991）に対応する。T1土坑S214からは白磁のⅡ-1類に相当する（横田・森田1978；山本2001）。

【ⅲ段階】 この段階になると遺構の数が爆発的に多くなる。比較的まとまった資料としてはT4土坑S87があげられる。この遺構は、ちょうど次段階（ⅳ段階）に出現する溝・土塁囲いの屋敷地の想定土塁を築造する以前に埋没している。瓦器はあまり遺存状態が良くないが、ⅱ段階と比較すると器高が低くなり扁平な印象を受けるプローションで、体部外面に暗文が認められない。

見込み部分には複数回転の輪状の暗文が施され、比較的高さを保った断面三角形の高台である。また、体部外面の成型時の指押さえ痕が明瞭に残るものが多い、しかし、他の遺構に目を向けると高台の退化傾向が看取することができ、薄い粘土を張り付けた簡素なものが多くみられる。その点からもこの段階は一定の幅が想定される。大和型瓦器おけるこの時期は、口縁部外面、体部上半部に粗い暗文が施されることが多い。その点からすると、大和型の直接的な影響ではなく、いわゆる伊賀型の影響が大きいと考えられる。伊賀型の瓦器は近江と同様に大和型の影響下で変遷している。しかし、13世紀に入ると大和型の形態変遷から外れていくことがわかっている。大和型よりも早い段階で体部外面の暗文が省略されるようになり、その後の変遷も口径が縮小して碗型近づく大和型に対して、器高の縮小が大きく皿型に近づく傾向がみてとれる。その点からもこの段階の瓦器は伊賀型の範疇で理解できるものである。伊賀型瓦器碗の山田編年に照らし合わせるとⅢ段階第1型式（山田1986）、福田編年の5期（福田2006）に相当する。また、他の土器に目を向けると白磁の碗（1197）、常滑焼の銚鉢（1199）、青磁皿（1215）、青磁の碗（1101）が出土している。1197は白磁の碗のⅣ-1類、1199は4型式から5型式（中野2001）、1215は青磁皿のⅠ-2類、1101は青磁の碗のⅠ-5類である。

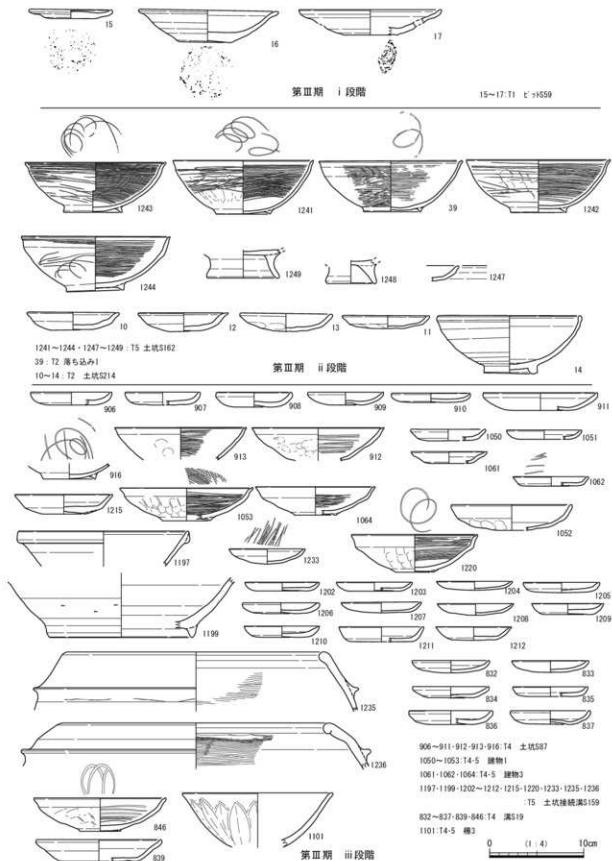
【Ⅳ段階】 この段階は、T4の溝S1（T5-S365）とT4の溝S3（T5-S410）の溝が対となる溝・土器埋いの屋敷地が出現する段階である。特にT4の溝S1の遺物の出土量は、調査地全体で最も多かった。遺物の主体は瓦器の碗と土師器の皿で、あとは土師器・瓦質の羽釜などの煮沸具が目立つ程度である。瓦器碗は前段階と大きく変わらないが、量が出土していることもあり、器形の退化傾向が顕著な高台の簡略化された個体が目立つようになる。つまり、前段階から存在した粘土を薄く張り付けて、ミズ腫れ状の盛り上げた高台を持つ個体中に、その内側の底部が下方にはみ出るようなものが増加しているということである。こうなると高台としての役割そのものを果たさなくなる。また、この段階には煮沸具において口縁部を外反させる土師器の羽釜を確認できる。菅原分類におけるB型（菅原1983）で、球形に近い胴部と「く」の字形に外反する口縁部を持ち、肩部に水平の鐙を巡らせる。瓦器との関連性から考えれば大和B型としたいところであるが、大和B型の特徴である口縁端部を内側に折り返す特徴がみられず、丸くおさめる個体が多い。口縁部形態のみを菅原分類に準拠すれば河内B型に近い。そのような視点で羽釜を見ていくと、瓦器の碗と同様に、羽釜においても直接的に大和の影響を受けた（搬入品を含む）と考えられるよりも間接的な影響でつくられたと理解するべきである。

第2節 貴生川遺跡の木製品利用の特色

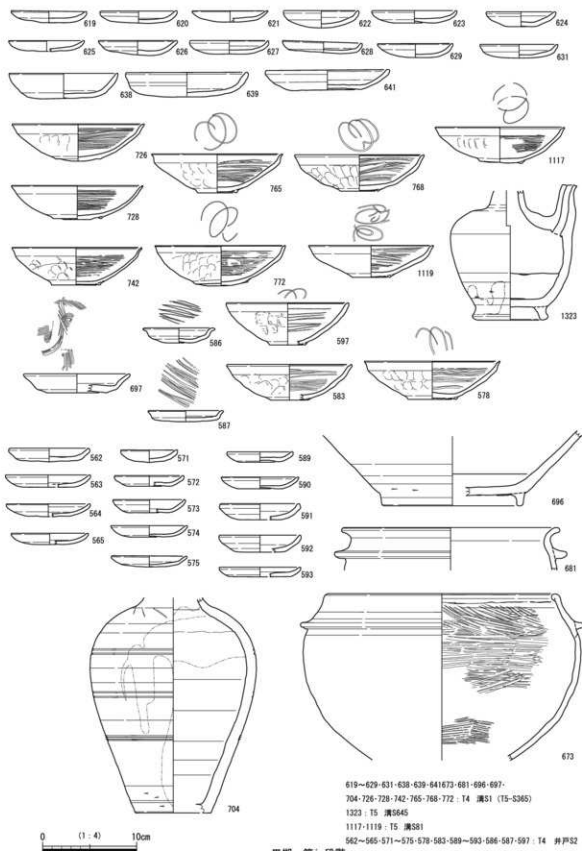
本調査では平安時代末から安土桃山時代にかけての集落・城館から出土した木製品および建物を構成していたと考えられる柱根等を対象に92点の樹種同定を行っている。

その内容時期については下記のとおりである。

◆Ⅲ期（平安時代末～鎌倉時代初め） 井戸S2 枿材、掘立柱建物柱根（建物1-1点、建物2-1点、建物4-1点、建物5-1点、建物7-1点、建物10-6点、建物11-1点、建物12-1点、そ



第138図 第Ⅲ期-i ~ iii 段階の主な出土遺物



Ⅲ期 第Ⅳ段階

第139図 第Ⅲ期Ⅳ段階の主な出土遺物

の他-14点)

◆IV期(室町時代後期～安土桃山時代) 井戸S70基礎材、曲物、漆器椀、結桶、下駄

1. III期の建築部材等について

III期は容器等の木製品がほとんど出土していない。唯一の例が土坑接続溝S159出土の漆器であるが、遺存状態が悪く、現地での取り上げ、同定に耐える資料でなかったため除外している。そのため検討の対象は建築部材、具体的には掘立柱建物の柱材と井戸の杵材が中心となる。すでに第5章の理化学的分析結果でも指摘されているように柱・杭材は31点中20点(約65%)がモミ属であり、そのほかにマツ属複雑管束亜属、ツガ属、ヒノキ、ヒノキ科、ムクノキが混じる状況である。モミについては、現存植生においては利用度の低かったモミ林が伐採され、スギ・ヒノキの植林に変えられてしまった可能性が高く、モミ林は一部の限定地域で確認できるのみである。しかし、潜在自然植生からするとブナクラス域とヤブツバキクラス域の移行帯に属する300～900m地域、中間温帯林に属するモミ・シキミ群集は、近隣の鈴鹿山脈の当該標高域が該当している(小林1991)。そのように考えると、モミ属が多用されている背景に入手が容易な環境も関係している考えるのが自然であろう(第5章)。それは、同一建物で使われている材の傾向にも反映されている可能性がある。たとえば、建物10のように柱穴で検出された柱材6点中モミ属が2点、ヒノキ科が3点、ヒノキが1点と多様で、統一した選択が認められない。この事例をみると、入手のし易さを優先した結果、樹種の不統一が生じたとも考えられるのである。モミ属は材の特徴として軟質なため加工がしやすい一方で、強度が低く、腐りやすい性質がある。この点からすると、一定程度の耐久性が求められる建物の部材、特に土中に柱を埋める掘立柱建物の柱材としてはスギやヒノキなどに比べると不向きであることは明らかである。その点からもやはり入手しやすい環境を想定するべきなのであろう。

井戸の杵材は、同定した材はすべてクリ材であった。これは耐久性に優れている点からも用材の選択としては理にかなっているだろう。県内の当該時期の事例をみると大津市関津遺跡ではヒノキ・ヒノキ科(県教委・滋文保協2007)、コウヤマキ(県教委・滋文保協2009)で、奈良時代後半の例として関津遺跡のクリ材(県教委・滋文保協2010)がある。当該時期の県内での蒸籠組の井戸の類例が少ないことから、材の選択性や遺跡の特徴を言及するには至らない。

2. IV期の出土木製品について

IV期の遺構はT3の堀・土塁に囲まれた城館に限定できる。この時期の主な木製品は建築部材(井戸S70の基礎材、土坑S188杵押さえ杭、S190杭、S192杭)、服装具(堀S1下駄185～188)、容器(堀S1漆器182～184、井戸S70結桶349～360・曲物底板361・蓋367、土坑S187漆器334、土坑S186結桶364～368)である。

この中で、井戸S70から出土した結桶は側板であるが、全部で12枚出土しており、その内の6点を同定している。すべて柁目取りのスギ材であった。このことから他の6枚を含めて同一個体と認識できる。おそらく井戸に使われた釣瓶であると考えられる。同じようにS186出土の結桶は据えられた状態で出土していることから同一個体であることは間違いない。それを前提にす

ると、まず底板であるが大型品であるため4枚の板材をダボで組み合わせている。その4枚の板材は1枚がスギ、残りがマツ属複雑管束亜属であった。側板はすべてヒノキであった。そのことから同一の結楕であるが各部材ごとで異なった材を使用していることが分かる。

漆器椀・皿が4点出土しており、ブナ属(外黒内赤)、トチノキ(内外赤)・ミズキ属(外黒内赤)、コウヤマキ(内外黒)であった。ブナ属とトチノキは、漆器椀の本地として、全国的にも利用頻度の高い種類である。滋賀県内ではどうであろうか。栗東市宮前遺跡、東近江市石田遺跡、草津市鳥丸崎遺跡で中世の漆器椀の樹種同定が実施されており、トチノキ、ケヤキ、カツラ、キハダ、オニグルミ、モクレン属が確認されている(第5章)。他の類例で、当遺跡の時期と重なる時期(室町時代後期から安土桃山時代)の事例を検索すると、彦根市の肥田城遺跡から3点、彦根市の佐和山城跡から17点が出土している。肥田城遺跡出土品はブナ属(外黒・内赤)、トチノキ(外黒内赤)、カエデ科カエデ属(内外黒)、佐和山城跡出土品では、ブナ属(外黒・内赤:1点 内外黒3点)、トチノキ(外黒・内赤:3点 内外黒3点)、ケヤキ(内外黒)4点、ブナ属(内外黒)1点、モクレン属(内外黒)1点、カバノキ属(外黒内赤)1点である。これに第5章でとりあげていた高島市の吉武城遺跡の4点、ブナ属(内外黒)、クマノミズキ類(外黒内赤)、トチノキ(内外赤)、コウヤマキ(内外黒)を加えると、全部で28点となる。この中で最も利用頻度の高い材はトチノキの10例である。2番目に多い6例のブナ属を大きく上回る。これは、本遺跡の状況が県内の他の遺跡の傾向と同じと理解できる。また、漆の使い分け(黒・朱)が樹種と連動しないことがわかる。

下駄では、本遺跡は本体が2点、歯が2点出土しているが、本体は2点ともにマツ属複雑管束亜属、歯は1点がヒノキと広葉樹である。同様の時期、室町時代後期から安土桃山時代に比定できる彦根市の佐和山城跡では本体が8点、歯が3点出土している。その内容は、本体がミズキ科ミズキ属、バラ科サクラ属、モクレン科モクレン属、マキ科マキ属イヌマキ、マツ科マツ属、ヒノキ科アスナロ属、カバノキ科カバノキ属、スギ、歯がカバノキ科カバノキ属、モクセイ科トリネコ属、ツツジ科ネジキ属ネジキである。県内の出土下駄(伊東・山田2012)を概観すると、アカガシ亜属1、アカメガシワ1、イヌエンジュ属1、クリ2、クワ属1、コナラ節1、スギ19、ヒノキ11、ヒノキ属2、マツ属1で、スギ・ヒノキが圧倒的に多い。これはすでに指摘されていることであるが(島地・伊東1989)、その时期的な状況を見ると、樹種のバリエーションが増えると傾向がうかがえ、中世以降を対象とするとバリエーションが増えるために特定の樹種が偏るような状況はみられない。

第3節 中世集落から城館へ

本遺跡におけるⅢ期からⅣ期への変遷は、溝・土塁囲いの屋敷地から、近接する地点で堀・土塁囲いの城館に変化していることに象徴される。ただし、問題点としては、調査対象地において直接的な変遷が追えないことである。実年代でいえば屋敷地と城館の間には、300年近い時間差があると考えられる。しかし、城館の成立年代については、調査で明らかになっている姿が城館の最終段階の姿であると考慮しなくてはならない。それは、城館の修築等が行われていれば、痕跡

として確認できない可能性があるということ意味している。このような可能性があるものの、やはり、溝・土塁囲いの屋敷地との間の時期差を完全にはうめることができず、連続性を想定することは難しい。そうしたときに、13世紀後半以降、城館成立期までの間については、もう少し地域を広げて見ておく必要があるのだろう。しかし、実態としては城館成立の背景に迫る材料が不足していると言わざるを得ない。そこで、甲賀地域の城郭群の成立の背景をみることによって、貴生川遺跡の城館の築城に迫ることができないであろうか。

1. 甲賀における城館の成立の背景

甲賀地域の城郭群の成立背景を考えるうえで欠くことができないのが、在地の土豪、甲賀衆の存在である。近江守護であった六角高頼の近江における大寺社や公家たちの所領（荘園など）の押領に端を発した、將軍足利義尚の六角征伐（1487年）のときに、六角方について活躍したのが「甲賀五十三家」、「甲賀二十一家」とよばれる甲賀衆であったとされる。これは、江戸時代前期の「甲賀士由緒書」や江戸時代後期の「江州甲賀廿壹家仲間覚」「甲賀貳拾壹家由来」に基づいているため同時代の一次資料で確認されたわけではないが、文献等との対比から一定程度肯定できる。そして、それを前提に語られるのが、甲賀地域に築かれた約180の城郭跡である。その城郭跡は「一辺半町の土塁で四角く囲み、その周囲に空堀を設けた「単郭方形四方土塁」と形容される小規模な城館」という共通の特徴を備えている。共通の背景をもった集団であることが想定でき、現在、それらの城郭跡は、甲賀衆-在地の有力者（甲賀五十三家・二十一家とよばれる家）の屋敷・城と理解されてきた。

このような文献史学からのアプローチによって明らかにされている甲賀衆は同名中（有力家の惣領家・庶子家等）、その連合体である甲賀郡中惣を組織していた。甲賀郡中惣とは合議制の地域の自治組織で、結果、甲賀郡においては、権力の集中が図られなかった。そのことから、甲賀の城の現在の姿は、同名中によってつくられた城を中心に、複数の同名中の要請によって築城・運営された城、さらには郡中惣の要請によって築城・運営されたものが折り重なった結果であると理解したのである（村田2010）。ただし、城郭築造以前の有力家の動向については、文献史学によるアプローチ以外では全く様相が分かっていなかった。そして、城郭についても一部の例を除いて、調査がされてないため実際の状況、時期的な変遷、内部の具体的な構造が明確ではなかった。その点において、今回検出された城館（以降城郭ではなく城館と記述）は、時期、部分的ではあるが構造について明らかにできた点は大きな成果といえよう。

検出された城館は、県内で悉皆的におこなわれた滋賀県教育委員会による中世城郭分布調査（滋賀県教委・滋賀総合研究所1984）では確認されていなかった。周辺にその痕跡が認められなかったことが原因であると考えられる。調査所見に基づくならば、城館の廃絶時に堀、井戸、曲輪を石、砂礫によってしっかりと人為的に埋め戻していたからであると考えられる。

2. 貴生川遺跡の城館の調査成果の概要

まずは、城館の調査結果を概観しておきたいと思う。城館の内（曲輪S2）では、建物が検出されていない。曲輪のおおむね1/3程度を調査することができ、曲輪自体は、廃絶時期に埋め

戻され遺存状態が良好だった。その中で、個々の遺構の状況を見ていくと、曲輪の南西側では、石組み遺構や井戸、大型の結桶を設置した土坑等が検出されており、曲輪内でも水回りに関連する施設が展開していたことが推定される。ただし、埋没状況の詳細を観察すると、埋め戻し以前に造成を行っていることが分かっている。それは、その造成土下から検出された結桶設置土坑(S186)や杭と横桎を組み合わせた構築している土坑(S188)の存在である。他方、曲輪の北東側でも、土坑S5が埋め立てられて、区画溝(S24・33)が掘られるなど、南西側の状況と連動している状況が確認できた。

複数回の改変が行われていた曲輪の状況に比して、堀S1の堆積状況は、掘り直しなど手入れの痕跡は認められない。土の堆積状況から推測される滞水時期以降、一気に埋め戻した印象を受ける。また、土塁の崩落土も滞水時期の層の上層で確認されており、城館が機能していた段階では、あまり堀の管理がなされていなかったようである。それは、南西側の堀が途切れる地点でも確認でき、滞水時期の層の上層で、水生植物が絨氈のように堆積した状態で検出されている。

土塁は、調査区南西側壁面の土層観察から基底部が残存していたことが確認できた。それは、落ち込み1が曲輪造成時の掘り込みに切られていることが根拠となる。曲輪内の排水施設として土塁際に溝S6が掘られている。それは、井戸S70の周辺で井戸を取り囲むように曲輪の内側に屈曲していることから、曲輪内(例えば井戸水)の排水機能を担っていたのだろう。また、堀S1の南西側で切れている部分の壁面の土層観察で、土塁が確認できていないため、単純に土塁が堀の縁取りを取り囲んでいただけでないことが分かる。あわせて曲輪側の掘り込み面が、堀の切れている部分と連動していないことは、堀が切れている部分がそのまま城館の入り口ではないことを示している。つまり、城館の入り口の構造が単純な平入の構造ではない可能性を指摘しておきたい。

3. 貴生川遺跡の城館の築城の契機と廃絶

城館の調査の結果をまとめれば、一辺約50m(半町)の堀および土塁に囲まれたいわゆる「方形単郭」の城館で、それぞれの規模は、堀の幅が約6m、深さが2.6~2.8m、その内側の土塁は基底部の幅が5~8mで、堀の掘削土を積み上げたとすれば堀底から5mを越える高さに復元できる。曲輪は、土層観察から一段(約40cm)掘り下げて造成されていることがわかった。曲輪の大きさは約25m×29mのやや長方形に復元できる。これは、堀を含めた全体の平面積の1/3程度にすぎない。その点を考えると、曲輪のサイズ(居住空間)に比して土塁、堀の規模が大きいいといえる。そしてこの城館の特徴は立地である。河岸段丘端の3方向に眺望のきく地点につくられている。前述のような、地域=有力家=城館群という概念で整理し、城が単体で機能するものではなく、複数の城館で城の機能を担っていたという城とは性格が異なる可能性がある。それは、立地が平地であることや周辺に他の城館が見いだせないためである。そのように考えると、城館の大きな役目は、袖川を管理することであろう。この貴生川遺跡が所在する地域は、甲賀の有力家の一つと考えられている「内貴」氏の勢力範囲であるが、内貴氏を中心とされている城郭群は、遺跡の東側にある盆天山麓につくられている城郭(内貴尾山城跡・内貴川田山城跡・内貴殿屋敷跡)である。それらの城郭群を内貴氏の本拠地とするのであれば、貴生川遺跡で

検出された城館は、単独の有力家が築いたとするよりも、複数の同名中の要請によって築城・運営された城、もしくは郡中惣の要請によってかもしれないが、柚川の河川管理（人の往来・物資の輸送等）の必要性からつくられた城館であると考えたい。

最後に貴生川遺跡の城館の成立と廃絶時期について触れておきたい。調査の所見からは、16世紀後半を中心とする時期に機能し、曲輪、井戸、堀の埋め戻しは17世紀の前半代に行われたことが分かっている。16世紀後半以前の築造の可能性が残るものの、調査からみえる城館の姿は16世紀後半で間違いがない。それは、その段階で築城もしくは改修がおこなわれたことを示している。そして、廃絶は埋め戻しを行うタイミングもしくはそれ以前と考えるのが自然である。

この間の甲賀郡の当時の動向をみると、1568年に織田信長が近江侵攻を開始する。これは当然、甲賀衆も無関係ではなく、隣国の伊賀衆と連携して信長に対抗するような動きがあったようである。しかし、最終的には1574年頃には織田信長が甲賀郡を含めた近江を平定することとなる。以降、甲賀衆は1581年の伊賀侵攻にも信長に従って出兵している。信長が1582年に本能寺で亡くなった以降は豊臣秀吉の配下となったようである。そして1585年の豊臣秀吉の紀州攻めの太田城攻防戦で不手際により、甲賀衆が改易される事件が起こる。これは、のちに「甲賀ゆれ」「甲賀破儀」と呼ばれる事件である。甲賀衆「廿人」ばかりが所領を失い、追放されたといわれている。これをきっかけにして甲賀郡を治める機能を果たしていた甲賀郡中惣が解体した。同年に豊臣秀吉の有力家臣であった中村一氏が甲賀地域の支配拠点および東国へのルートの抑えとして水口岡山城の築城を開始し、1590年に増田長盛、1595年に長東正家がそれぞれ入城している。1600年の関ヶ原の合戦では、長東が西軍に属したため、敗戦後、池田長吉によって接収されることとなる。近年の発掘調査の成果から、関ヶ原の合戦直後、破城されたわけではなく、一定期間維持されていたようである。そして、1634年に築城される水口城の石垣に石材が転用されたことが「水口藩士覚書」に記されている。これも発掘調査で確認されている石垣の埋没状態が、破城だけが原因ではなく、転用による石材採取も示していると評価されている（甲賀市教委2016）こととも合致する。

このような16世紀後半から17世紀前半の動向の中で、貴生川遺跡の城館は機能していたのであるが、築城・改修の契機は織田信長の近江侵攻に求めておきたい。城館の平面積の1/3を占める防御施設（堀・土塁）の整備がその証であろう。ただし、これは城館の防御を意識はしているが、それは柚川を管理する役割全うするための対応と考えておきたい。その後、「甲賀ゆれ」を契機として、水口岡山城の整備、そして破城、水口城の築城と甲賀地域の支配構造の変化を受け、機能を停止し、埋め戻し＝破城を行ったと考えられる。これは、他の甲賀郡内の城と異なり、特殊な役割を担った郡中惣共有の城館であったことが、痕跡が残らないような始末の仕方を行ったと理解しておきたい。

第4節 おわりに

最後に貴生川遺跡の調査成果について、ポイントを要約しておきたい。

- ①以前は甲賀市域で全く確認されていなかった弥生時代の集落の一端が確認されたこと。

- ②古墳時代中期の東籬子塚古墳・西籬子塚古墳、泉塚越古墳の首長系譜の古墳が築造された時期の集落が検出されたこと。
- ③城郭築城以前の集落の変遷が明らかにできる資料が見つかったこと。
溝・土塁囲いの屋敷地が13世紀に出現する。
- ④新たな「単郭方形」の城館が発見されたこと。
城館の遺存状態が良好で、土塁・堀の規模が視覚的に確認できる。
城館の築城・最終の改修の年代が16世紀後半代に限定できる。
城館の機能停止時期が17世紀前半代に求められる。

今回の調査で、従来、甲賀市域において空白時期の状況が分かったことが大きな成果と言える。そして、16世紀後半代に機能していた城館が良好な状態でみつきり、その役割は柚川の河川の管理で、郡中惣を中心とした共同運営であったと推察した。その役割、築城母体の性格から、機能停止後は、手をかけて破城とも表現できるような埋め戻しを行ったと考えられる。その結果、地表面にはその痕跡をほとんど残さず、伝承等も残らなかったため、近年まで城館として認識できなかった。そして、その前段階と考えられる集落が近接地で確認できたことは、甲賀の城郭群の成立を考えるうえで重要であろう。今まで、180をこえる城館が確認されている甲賀市域において、中世集落から城館への流れが追える資料は確認されていなかった。当然、多数の城館をつくる土木工事を遂行できる下地があったと考えられていたが、具体的な資料が見つかることにより、ひとつのモデルを提示することが可能となった。ただし、城館が16世紀後半代の築造もしくは改修時期とみても、溝・土塁囲いの屋敷地が機能停止する13世紀中頃の間には約300年前後のブランクが生じる。周辺地域の資料の増加を期待しながら、今後の課題としておきたい。

＜註＞

1. 報告部分では建物9として1棟の建物とし、複数棟の可能性を示すにとどめたが、ここでは報告の建物9の北東側1間分(9-1)、南西側2間分(9-2)として2棟と評価した。

＜参考文献＞

- 今本 晩 (2009) 『第3章 第4節 条里制の施行』『甲賀市史 第1巻 古代の甲賀』甲賀市
 近江俊秀 (1991) 『大和型瓦器桶の編年と実年代の再検討』『古代文化』VOL.43-10号 財団法人古代学協会
 岡本省吾著・北村四郎補校 (1998) 『原色日本樹木図鑑』(58刷) 保育社
 川越俊一 (1983) 『大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題』『文化財論叢』同朋舎
 甲賀市史編さん委員会編 (2007) 『甲賀市史 第1巻 古代の甲賀』甲賀市
 甲賀市史編さん委員会編 (2010) 『甲賀市史 第7巻 甲賀の城』甲賀市
 甲賀市史編さん委員会編 (2012) 『甲賀市史 第2巻 甲賀衆の中世』甲賀市
 甲賀市史編さん委員会編 (2013) 『甲賀市史 第5巻 信楽焼・考古・美術工芸』甲賀市
 甲賀市教育委員会 (2016) 『水口岡山城総合調査報告書』甲賀市文化財報告書第26集
 甲賀市教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 (2008) 『北脇遺跡調査報告書』甲賀市文化財報告書第9集

- 小林圭介（1991）「滋賀県の潜在自然植生図」『滋賀県自然誌』財団法人滋賀県自然保護財団
- 菅原正明（1983）「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』同朋舎
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀総合研究所（1984）『滋賀県中世城郭分布調査2（甲賀の城）』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2005）『植遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2007）『関津遺跡Ⅰ』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2009）『関津遺跡Ⅱ』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2010）『関津遺跡Ⅲ』
- 島地謙・伊東隆夫（1988）『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣出版
- 高橋美久二（2006）「近江の糸里—呼称法の復原と基準線—」『近江の考古と地理』滋賀県立大学人間文化学部考古学研究室
- 中野晴久（2001）「中世陶器 常滑・瀬美」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 伊東隆夫・山田昌久編（2012）『木の考古学』海青社
- 畑中英二（2003）『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版
- 福田典明（2006）「伊賀地域における瓦器に関する覚書」『中近世土器の基礎研究XX』日本中世土器研究会
- 村田修三（2010）「第1章第3節 甲賀の城」『甲賀市史第7巻 甲賀の城』甲賀市
- 山田猛（1986）「伊賀の瓦器に関する若干の考察」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』日本中世土器研究会
- 山本信夫（2001）「中世前期の貿易陶磁器」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 横田賢次郎・森田勉（1978）「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4

表4 出土土器観察表

観号	調査区	遺物No.	ブツID No.	層位	器種	器形	部位	残存率	法量 (cm)		胎土	焼成	色調		備考	実測No.				
									口径	高さ			外面	内面						
1	T 1	遺物No.1			土師器	高杯	胴部	1/2	9.8	1.3	5.7	精良	良	灰	5YR 7/3	灰白	2.5R 8/2	全体に磨滅が著しい	3	
2	T 1	S22			瓦器	甕	底	1/2	9.8	1.3	5.7	精良	良	灰	5YR 7/3	灰白	2.5R 8/2	局所(内面)	3	
3	T 2	S22			瓦器	高台	高台	3/4	14.0	5.0	0.0	中々	不良	灰	N 4/	灰	N 4/	全体に磨滅が著しいため、調整法が不明	131	
4	T 1	S23			土師器	甕	胴部-脛部	1/12	11.6			中々	良好	灰白-黄	10YR 6/2	灰白-黄	10YR 7/2		4	
5	T 1	S24			瓦器	甕	胴部-脛部	1/10	14.0	4.0		良	良	黄褐色	5YR 3/1	黄褐色	5YR 4/1	局所(内面)	2	
6	T 1	S1			瓦器	甕	胴部	3/6				中々	良	黄灰	N 3/	黄灰	N 3/	内外面ともに磨滅が著しいため、磨滅法が不明	128	
7	T 1	S1			瓦器	甕	胴部	4/5				中々	不良	黄灰	N 3/	黄灰	N 3/	全体に磨滅が著しいため、調整法が不明	132	
8	T 1	S1			瓦器	甕	胴部-脛部	1/12	16.3			中々	良	黄灰	N 3/	黄灰	N 3/	全体に磨滅が著しいため、調整法が不明	135	
9	T 1	S1			瓦器	甕	胴部-脛部	1/3	16	7.4		中々	不良	黄灰	N 3/	黄灰	N 3/	胎土が赤褐色に染み付いたため調整法不明	134	
10	T 1	S24			土師器	甕	底部	9/8	9.8	1.9		中々	良好	黄褐色	10YR 8/3	黄褐色	10YR 7/3	全体に磨滅が著しい	3	
11	T 1	S24			土師器	甕	底部	1/1	9.3	1.4		中々	良好	黄褐色	5YR 7/4	黄	5YR 7/6	全体に磨滅が著しい	7	
12	T 1	S24			土師器	甕	胴部	1/1	9.3	2.0		中々	良好	黄褐色	10YR 8/4	黄褐色	10YR 7/3	全体に磨滅が著しい	8	
13	T 1	S24			土師器	甕	底部	1/1	9.8	1.9	3.6	中々	良好	灰白-黄	10YR 7/3	灰白-黄	5YR 7/4	全体に磨滅が著しい	5	
14	T 1	S24			白磁	甕	底部	1/1	13.3	6.2	5.7	良	良好	灰白-黄	10YR 7/2	灰白-黄	10YR 7/3	ズバリし高台	11	
15	T 1	S29			土師器	甕	胴部	8/9	10	5.7		良	良好	灰白-黄	5YR 7/4	灰白-黄	5YR 7/4	胴部に赤褐色あり	10	
16	T 1	S29			土師器	甕	胴部	1/3	14.9	3.4	5.6	中々	良好	灰白-黄	10YR 7/4	灰白-黄	10YR 6/4	胴部に赤褐色あり	12	
17	T 1	S29			土師器	甕	胴部	1/2	15.2	3.7	5.6	中々	不良	黄	5YR 7/6	黄褐色	5YR 8/6		13	
18	T 1	S20			土師器	甕	胴部-脛部	1/10	15.0			中々	不良	黄	5YR 4/3	灰白-黄	10YR 7/2	内面にスリ付 一部磨滅(内外面ともに)胎土が赤褐色に染み付いたため調整法不明	1	
19	T 2	遺物No.1			灰釉	甕	高台	1/1	11.8	7.6		精良	紫黒	灰白	N 8/	灰白	N 8/	内面見込み面に胎土が赤褐色に染み付いたため調整法不明	127	
20	T 2	遺物No.1			土師器	甕	高台	8/10	9	1.7		中々	不良	灰白	10YR 8/1	灰白	10YR 8/2	全体に磨滅が著しいため、調整法が不明	128	
21	T 2	遺物No.1			瓦器	甕	高台	1/3	13.5			中々	不良	黄灰	N 3/	黄灰	N 3/	全体に磨滅が著しいため、調整法が不明	129	
22	T 2	赤丸山1	K-6区		粘土土師	甕	胴部	17/6	2.7			良	良	灰白-黄	10YR 7/2	灰白-黄	10YR 7/3	胴縁部のみ磨滅が著しい	1271	
23	T 2	赤丸山1	L-7区		粘土土師	甕	胴部	1/8				中々	不良	灰白-黄	10YR 7/3	灰白-黄	10YR 7/3		1284	
24	T 2	赤丸山1	K-6区		粘土土師	甕	胴部	13/8	4.1			良	良	灰白-黄	5YR 6/4	灰白-黄	5YR 7/4		129	
25	T 2	赤丸山1			粘土土師	甕	胴部	10/10	11.9			良	良	黄	5Y 7/2	黄	5Y 8/2		1296	
26	T 2	赤丸山1			粘土土師	甕	底部	1/2	12.1	5.4		良	良	灰白-黄	7.5YR 5/3	黄	5Y 8/4/1		1297	
27	T 2	赤丸山1	L-7区		粘土土師	甕	胴部	12/4	19.7			中々	良	黄褐色	10YR 8/3	黄灰	10Y 8/1	胴部、口縁 全体に磨滅	1282	
28	T 2	赤丸山1			粘土土師	甕	底部	1/1	11.1	3.4		良	良	灰白-黄	7.5YR 6/3	灰白-黄	10Y 5/3		1283	
29	T 2	赤丸山1	横溝中		粘土土師	甕	底部	1/4	25.6	5.5		中々	良	灰白-黄	7.5YR 5/3	灰白-黄	7.5YR 8/4	全体に磨滅	1289	
30	T 2	赤丸山1	L-8区		瓦器	甕	胴部	1/3	13.4	4.1		良	良	灰	7.5Y 6/1	灰	N 6/		1290	
31	T 2	赤丸山1			瓦器	甕	胴部	1/4	13.4	3.2		良	良	灰	7.5Y 6/1	灰白	N 7/		1288	
32	T 2	赤丸山1	L-8区		瓦器	甕	胴部	1/2	13.0	4.7		良	良	黄	2.5Y 7/2	灰白	2.5Y 7/1		1285	
33	T 2	赤丸山1			瓦器	甕	胴部	1/4	14.0	10.0		良	良	黄	7.5Y 6/1	黒	3Y 2/1	口縁部が内面に黄褐色、胎土が赤褐色に染み付いたため調整法不明	1286	
34	T 2	赤丸山1	M-6区		瓦器	甕	胴部	15/5	5.6			良	黄褐色	5P 1/1	黄褐色	5YR 3/1	口縁部が内面に黄褐色、胎土が赤褐色に染み付いたため調整法不明	1287		
35	T 2	赤丸山1			瓦器	甕	胴部	14/4	5.9			良	灰	灰白	N 8/	灰白	N 8/		1292	
36	T 2	赤丸山1			瓦器	甕	胴部	1/1	14.0	5.0	6.2	良	良	灰	N 6/	黄灰	N 3/		1296	
37	T 2	赤丸山1	L-8区		瓦器	甕	胴部	1/4	14.4	5.1	6.2	良	良好	灰白	灰	N 3/	灰	N 3/		1294
38	T 2	赤丸山1			瓦器	甕	胴部	1/2	16.5	5.5	6.2	良	良	黄褐色	5YR 4/1	黄褐色	5YR 4/1	磨滅のため調整不明	384	
39	T 2	赤丸山1	M-7区		瓦器	甕	胴部	1/6	15.2	5.4	6.1	良	良好	灰	N 4/	灰	N 4/	胎土が黄褐色 15.0-15.6cm	284	
40	T 2	赤丸山1			瓦器	甕	胴部	2/3	14.8	4.0	5.8	良	良	灰	N 6/	灰	N 3/	磨滅のため調整不明	1285	
41	T 2	赤丸山1	L-8区		瓦器	甕	胴部	1/2	16.9	5.9	6.2	良	黄灰	N 3/	灰	N 4/	磨滅のため調整不明	1293		
42	T 2	赤丸山1			瓦器	甕	胴部	1/10	16.8	5.4		良	良	灰	N 4/	灰	N 6/	全体に磨滅	1283	
43	T 2	赤丸山1	L-8区		瓦器	甕	底部	2/3	11.3	5.2		良	良	灰	2.5Y 6/1	灰	N 6/		1281	
44	T 2	赤丸山1	M-9区		白磁	甕	胴部	3/28	12.8			良	良好	灰白	5Y 7/1	灰白	5Y 7/1		1273	
45	T 2	赤丸山1	M-8区		白磁	甕	高台	3/3	12.1	8.0		良	良	灰白	5Y 8/1	灰白	5Y 7/2		1285	
46	T 2	赤丸山1	N-9区		磁器	徳利	底部	1/1	27.0	11.2		中々	良	黄	2.5Y 7/2	黄	7.5YR 7/6	右側一単位のみ	1274	
47	T 2	赤丸山1			土師器	甕	底部	1/4	27.0	11.2		良	良	灰白-黄	10YR 6/3	灰白-黄	10YR 6/3	外側にスリ	1271	
48	T 2	S285	4区		土師器	甕	胴部	1/1	11.6	5.5		良	良	灰白-黄	7.5YR 7/4	灰白-黄	7.5YR 7/4	全体に磨滅が著しい	257	
49	T 2	S285	1区		土師器	甕	胴部	1/1	12.2	5.5		中々	良好	明赤	5YR 5/6	明赤	5YR 5/6		267	
50	T 2	S285	1区		土師器	甕	胴部	1/1	12.0	5.4		中々	良	明赤	5YR 5/6	明赤	5YR 5/6		267	
51	T 2	S285	2区南側		土師器	甕	胴部	1/1	13.2	6.1		良	良好	灰	5YR 7/6	灰	5YR 7/6	全体に磨滅が著しい 調整法が不明	278	
52	T 2	S286	3区		土師器	甕	胴部	1/2	12.5	6.4		良	良	灰白-黄	10YR 7/3	灰白-黄	10YR 7/4	全体に磨滅が著しい	279	
53	T 2	S285	3区		土師器	甕	胴部	1/1	13.3	6.4		良	良	黄	5YR 6/6	明赤	5YR 3/8		270	
54	T 2	S285	4区		土師器	甕	胴部	1/6	16.4	3.8		精良	良	黄灰	5YR 4/1	黄	10YR 5/1		318	
55	T 2	S285	4区		土師器	甕	胴部	1/6	13.9	3.2		良	良	灰白-黄	10YR 7/4	黄	7.5YR 7/6		312	
56	T 2	S286			土師器	高杯	脛部	1/12	13.8	13.1		精良	良好	黄	10YR 4/1	灰白-黄	7.5YR 7/4		328	
57	T 2	S285	2区北側		土師器	高杯	脛部	1/1	16.7	17.2		中々	不良	灰白-黄	5YR 7/4	黄褐色	7.5YR 8/3	全体に磨滅が著しい	283	
58	T 2	S286	3区		土師器	高杯	脛部	1/2	16.1	13.8		良	良好	黄褐色	10YR 8/4	灰白-黄	10YR 7/3	全体に磨滅が著しい	283	
59	T 2	S285	2区		土師器	高杯	脛部	1/1	15.3	15.2		良	良好	灰	5YR 6/6	黄	7.5YR 6/8		282	
60	T 2	S285	2区北側		土師器	高杯	脛部	3/4	14.7	17.2		中々	不良	黄褐色	10YR 8/4	黄褐色	10YR 8/4		281	
61	T 2	S285	1区		土師器	高杯	脛部	1/1	16.9	16.9		中々	不良	灰白	10YR 8/2	黄褐色	10YR 8/2	全体に磨滅が著しいため、調整法が不明	310	
62	T 2	S285	2区北側		土師器	高杯	脛部	1/1	17.0			良	良	黄褐色	10YR 8/3	黄褐色	10YR 8/3	全体に磨滅が著しいため、調整法が不明	310	
63	T 2	S285	1区		土師器	高杯	脛部	1/2	22.0	17.6	16.0	精良	良好	灰	2.5Y 7/6	黄	7.5YR 6/4	外周全体に磨滅	314	
64	T 2	S285	3区		土師器	甕	胴部	1/3	12.6	13.4		中々	良	灰白	10YR 8/2	黄褐色	10YR 8/2	全体に磨滅が著しい 胎土が赤褐色に染み付いたため調整法不明	319	
65	T 2	S285	1区		土師器	甕	胴部	1/1	8.4	11.8		良	良好	灰白-黄	5YR 7/4	灰白-黄	10YR 7/4	胎土が赤褐色あり	315	
66	T 2	S285	1区		土師器	甕	胴部	1/10	12.7			良	良好	灰白-黄	10YR 8/3	灰白-黄	10YR 6/2	黄褐色あり	315	
67	T 2	S285	1区		土師器	甕	胴部	1/8	17.4	17.4		中々	不良	灰白	10YR 8/2	灰白	10YR 8/2	磨滅のため調整不明	313	

表5 出土土器観察表

報告 No.	調査 区	遺跡No.	ブツID	層位	器種	器形	部位	残存 率	流量 (cm)		加工	焼成	色調		備考	実測 No.		
									口径	高さ			外面	内面				
66	T2	S285	1区	土師部	壺	口縁部					真	良好	靑	7.03R7/6	靑	7.03R7/6	313	
69	T2	S285	2次堆積	土師部	壺	口縁部	2/3	16.4	22.4		真	真	靑	7.03R8/2	靑	7.03R8/2	体底外部面にススが付着	
70	T2	S285	3区	土師部	壺	胴部		14.7			真	良好	靑灰	5.0P3/1	靑灰	5.0P6/1	底で真鍮あり	
71	T2	S474		土師部	高杯	胴部		3.0			真	靑	靑	7.03R8/2	靑	7.03R8/2	壺底のため調整不明	
72	T2	S281		土師部	高杯	胴部		3.0			真	靑	靑	7.03R7/4	靑	7.03R7/4	壺底のため調整不明	
73	T2	S281		土師部	高杯	胴部	1/7				やや靑	靑	靑	7.03R7/2	靑	7.03R7/2	靑灰のため調整不明	
74	T2	S281		土師部	高杯	胴部	1/8		14.7		やや靑	靑	靑	7.03R7/3	靑	7.03R7/6	壺底のため調整不明	
75	T2	S474		土師部	高杯	胴部		6.4			靑	不真	靑	7.03R8/4	靑	7.03R8/4	壺底のため調整不明	
76	T2	S474		土師部	高杯	胴部		8.0			靑	不真	靑	7.03R7/6	靑	7.03R8/8	壺底のため調整不明	
77	T2	S474	1区	土師部	高杯	胴部		8.0			靑	靑	靑	7.03R8/8	靑	7.03R7/8	壺底のため調整不明	
78	T2	S474	2区	土師部	高杯	胴部		3.0			靑	靑	靑	7.03R8/2	靑	7.03R8/2	口縁部外面に割欠あり	
79	T2	S474	粘土土師	高杯	胴部	1/6		3.0			靑	靑	靑	7.03R8/2	靑	7.03R8/2	口縁部外面に割欠あり	
80	T2	S474		土師部	高杯	胴部		3.0			靑	靑	靑	N 4	靑	N 4	全体に靑灰が濃い	
81	T2	S474		土師部	高杯	胴部	1/6	2.0			靑	靑	靑	5.0Y7/6	靑	5.0Y7/4	全体に靑灰が濃い	
82	T2	S474		土師部	高杯	胴部		2.5			やや靑	不真	靑	靑	7.03R7/4	靑	7.03R7/4	194
86	T2	S282	4区	土師部	鉢	口縁部	8/10	12.2	5.4		真	真	靑	7.03R8/4	靑	7.03R7/4	全体約に半量以上の靑灰が確認できるやや靑	
87	T2	S282	3区	土師部	高杯	胴部	1/2	14.6	14.0		真	良好	靑	靑	7.03R7/4	靑	7.03R6/3	胴部がきれいに青黒している
88	T2	S282	2・4区	土師部	高杯	胴部	1/4	28.0	26.0		真	靑	靑	7.03R6/6	靑	7.03R4/4	208	
89	T2	S282	4区	土師部	高杯	口縁部	1/1	16.8	12.5	10.1	真	靑	靑	7.03R8/2	靑	7.03R8/2	全体に靑灰が濃い	
90	T2	S282	4区	土師部	高杯	胴部	1/1	25.9	7.7		やや靑	靑	靑	7.03R8/6	靑	7.03R8/2	全体に靑灰が濃い	
91	T2	S282	4区	土師部	高杯	胴部		7.2	2.2		真	靑	靑	7.03R7/3	靑	7.03R7/3	靑	
92	T2	S282	4区	土師部	高杯	胴部	1/1	26.0	11.2		真	良好	靑	7.03R8/6	靑	7.03R7/8	252	
93	T2	S282	4区	土師部	高杯	胴部	1/1	36.0	10.4		やや靑	不真	靑	靑	7.03R8/2	靑	7.03R8/2	全体に靑灰が濃い
94	T2	S282	4区	土師部	高杯	胴部	1/1	30.9	11.1		やや靑	靑	靑	7.03R6/4	靑	7.03R6/6	壺底のため調整不明	
95	T2	S282	4区	土師部	高杯	胴部	1/1	31.1	11.0		真	靑	靑	7.03R8/8	靑	7.03R7/4	靑	
96	T2	S282	2・4区	土師部	小壺	胴部	1/1	15.6	16.2		やや靑	靑	靑	7.03R8/2	靑	7.03R8/2	壺底に半量以上の靑灰が付着	
97	T2	S282	2区	土師部	小壺	胴部	1/1	15.9	16.2		やや靑	靑	靑	7.03R8/2	靑	7.03R8/2	252	
98	T2	S282	4区	土師部	壺	口縁部	1/1	16.8	14.3		真	靑	靑	7.03R8/2	靑	7.03R8/2	口縁部あり	
99	T2	S282	4区	土師部	壺	口縁部	1/3	13.4	22.3		真	良好	靑	7.03R8/4	靑	7.03R8/3	外壁に半量以上の靑灰が確認され、内面は靑に染み付いており、内面は靑に染み付いており	
100	T2	S285		灰土部	高杯	胴部	1/1	7.4	8.8		やや靑	不真	靑	7.03R7/4	靑	5.0Y7/6	非常に靑灰が濃い、靑で染み	
101	T2	S1		粘土土師	壺	胴部		6.0			靑	靑	靑	5.0Y5/6	靑	5.0Y5/6	全体に靑灰が濃い、靑で染み、調整が不明、口縁部4本の構成は、胴部6本の調整が不明	
102	T2	S27		粘土土師	壺	胴部	1/6	12.0			靑	不真	靑	7.03R8/3	靑	7.03R8/4	口縁部外側にハヤ状工具による割欠あり	
103	T2	S149		土師部	高杯	胴部	1/3	22.0			やや靑	靑	靑	7.03R6/6	靑	7.03R6/6	全体に靑灰が濃い、靑で染み、調整が不明	
104	T2	S137		粘土土師	壺	胴部		4.0			やや靑	靑	靑	7.03R8/4	靑	7.03R7/2	7本の調整、6本の調整が不明	
105	T2	S280		粘土土師	壺	胴部		3.6			真	真	靑	7.03R8/4	靑	7.03R7/2	調整、靑灰、調整、調整	
106	T2	S28		土師部	壺	胴部	1/3	4.3			やや靑	靑	靑	7.03R7/2	靑	7.03R8/3	11	
107	T2	S284		土師部	壺	胴部		3.7			真	靑	靑	7.03R6/3	靑	7.03R6/8	壺底のため調整不明	
108	T2	S149		土師部	壺	胴部	1/6	17.2	8.1		靑	不真	靑	7.03R8/3	靑	7.03R8/2	133	
109	T3	S1	土師部	高杯	胴部	1/1	7.6	1.9			真	靑	靑	2.0Y7/3	靑	2.0Y7/3	52	
110	T3	S1	土師部	高杯	胴部	1/2	7.2	2.9			真	靑	靑	7.03R7/3	靑	2.0Y7/3	94	
111	T3	S1	土師部	高杯	胴部	1/3	7.6	1.9			真	靑	靑	7.03R7/3	靑	7.03R7/3	97	
112	T3	S1	土師部	高杯	胴部	2/5	7.3	1.8			真	靑	靑	7.03R7/2	靑	7.03R7/3	95	
113	T3	S1	土師部	高杯	胴部	1/5	7.2	1.8			真	靑	靑	7.03R6/2	靑	7.03R7/3	98	
114	T3	S1	土師部	高杯	胴部	1/1	2/3	8			やや靑	不真	靑	7.03R7/3	靑	7.03R7/2	216	
115	T3	S1	土師部	高杯	胴部	1/1	3/4	7.0	1.5	3.5		真	靑	靑	7.03R7/3	靑	7.03R7/4	84
116	T3	S1	土師部	高杯	胴部	1/1	2/4	8.0	1.9		真	良好	靑	7.03R7/2	靑	7.03R7/3	やや靑が濃い	
117	T3	S1	土師部	高杯	胴部	1/1	9/10	7.7	2.2		真	靑	靑	7.03R7/2	靑	7.03R7/2	97	
118	T3	S1	土師部	高杯	胴部	1/1	1/2	9.9	2.3		真	良好	靑	7.03R7/2	靑	7.03R7/2	93	
119	T3	S1	土師部	高杯	胴部	1/1	2/3	9.8	2.3		真	良好	靑	7.03R7/3	靑	7.03R7/3	95	
120	T3	S1	土師部	高杯	胴部	1/1	3/4	8.4	2.0		やや靑	靑	靑	7.03R7/3	靑	2.0Y7/2	206	
121	T3	S1	土師部	高杯	胴部	1/1	1/4	9.4	2.0		靑	良好	靑	7.03R7/2	靑	7.03R7/2	外面に工具痕あり	
122	T3	S1	土師部	高杯	胴部	1/1	9.9	2.3			真	良好	靑	2.0Y7/3	靑	2.0Y7/3	86	
123	T3	S1	土師部	高杯	胴部	1/1	1/6	8	2.7		やや靑	不真	靑	7.03R8/3	靑	7.03R6/3	102	
124	T3	S1	土師部	高杯	胴部	1/1	1/5	11.7	2.4		真	靑	靑	2.0Y7/3	靑	2.0Y7/3	87	
125	T3	S1	土師部	高杯	胴部	1/1	4/5	7.6	1.9		真	靑	靑	2.0Y7/3	靑	2.0Y7/3	灯明部	
126	T3	S1	土師部	高杯	胴部	1/1	1/4	8.5	1.5		真	良好	靑	7.03R8/3	靑	7.03R7/4	口縁部にスガ付着	
127	T3	S1	土師部	高杯	胴部	1/1	1/10	3.4			真	真	靑	2.0Y8/8	靑	2.0Y8/7/4	5条痕あり	
128	T3	S1	土師部	高杯	胴部	1/1					真	靑	靑	N 5/	靑	N 6/	103	
129	T3	S1	土師部	高杯	胴部	1/1					真	靑	靑	7.03R8/4	靑	7.03R8/2	内面に使用痕あり	

表6 出土土器観察表

報告 調査 地	調査 区	遺物 No.	位置	器種	器形	部位	残存 率	法量 (cm)		胎土	焼成	色調		備考	実測 No.			
								口径	高さ			外面	内面					
130	T3	S1	X-1区	植物灰 土層	陶器	皿	底~口	17.1	98.0	良	良	灰赤	10R5/4	赤黒	10R5/4	10		
131	T3	S1	X-1区	植物灰 土層	信楽	皿	口~体	17.1	98.0	良	良	に灰赤	10R7/3	灰黒	2.0R6/1	42		
132	T3	S1	土層	植物灰 土層	信楽	深鉢	底	1/3	5.0	12.8	良	良	焼	5YR6/8	焼	7.0R7/6	5条節目 内面に使用 あり	
133	T3	S1	土層	植物灰 土層	信楽	深鉢	口~底	22.5	12	良	良	焼	5YR6/8	焼	7.0R6/8	5条節目 内面に使用 あり		
134	T3	S1	X-3区	最上層	信楽	深鉢	底部	0.2	0.2	良	良	焼	2.5YR6/6	に灰赤	3YR6/6	5条節目		
135	T3	S194		S194	信楽	深鉢	底部	1/6	10.0	12.0	良	良好	に灰赤	2.5YR6/4	灰白	7.0R8/1	5条節目 内面に使用に 使用あり	
136	T3	S1			植物灰 土層	信楽	深鉢	口~体	1/8	29	10.8	中々	灰赤	5YR6/4	灰白	10R7/1	5条節目 口縁文様 内 面に使用あり	
137	T3	S4	X-1区	最上層	志野	深鉢	口~体	0.2	0.2	良	良好	灰白	5Y7/3	灰白	5Y7/1	外周に貫入あり 胎土 灰白(10R7/2)		
138	T3	S1	X-2区	最上層	信楽	深鉢	底	1/2	22.2	3.8	精良	堅緻	灰赤	5Y5/2	灰赤	5Y5/2	胎土 灰白(10R7/1)	
139	T3	S1	X-2区	最上層	信楽	深鉢	底	1/4	11.1	2.9	精良	堅緻	灰白	5R6/	灰白	5R6/	胎土 灰白(5R8/)	
140	T3	S1	X-3区	最上層	志野	深鉢	口~底	2.0	2.0	良	良好	灰白	2.5R6/1	灰白	3.0R6/1	胎土 灰白(10R7/2)		
141	T3	S1	X-3区	最上層	信楽	深鉢	底部	0.8	0.8	良	良好	焼	2.5YR7/6	焼	2.5YR7/6	5条節目		
142	T3	S1	X-3区	最上層	信楽	深鉢	底	1/6	16.2	4.5	中々	良	に灰赤	5YR7/3	に灰赤	5YR7/3	内面に赤地に黒線 葉 文あり	
143	T3	S1	X-1区	灰赤 粘土中	瀬川 赤土	高台	3/1	11.2	4.5	精良	堅緻	暗赤	10R4/1	暗赤	10R4/1	胎土 灰赤(2.5Y8/2) 内面灰赤 外内外面 黒赤		
144	T3	S1	(石段) N-4 -5区		瀬川 赤土	高台	1/1	0.5	5.5	精良	堅緻	灰白	5Y8/2	灰赤	5Y8/3	高台部に黒線		
145	T3	S1	V-1区	上層	青磁	小瓶	口縁	1/4	6.2	2.6	精良	堅緻	灰赤	2.5R4/2	灰赤	2.5R4/2	灰緑色の釉薬を施 した。胎土は灰赤で軽質 質(酸化鉄含有あり)	
146	T3	S1	V-1区	上層	信楽	深鉢	底	1/1	7.3	7.3	精良	堅緻	灰白	5Y8/3	灰白	5Y8/1	腰縁2条の発汗 中央 部の赤い筋は不明	
147	T3	S1	X-1区	上層	陶器	人形 大甕	口縁	1/3	3.3	3.3	精良	良好	焼	5YR6/8	焼	5YR6/8	底縁は中央部で約2 mm程の穴がある。本口 が2つまっている。腰縁 はかなしく残っている。	
148	T3	S1	X-1区	上層	信楽	深鉢	口~体	0.7	0.7	精良	堅緻	灰白	5R6/	灰白	5R6/	36		
149	T3	S1	X-Y -3区		土師器	皿	口~体	1/4	11.0	11.0	良	良	2.5YR8/2	灰白	2.5YR8/2	36		
150	T3	S1	X-2区	上層	土師器	皿	口~体	1/4	11.2	11.2	良	良	に灰赤	10R7/2	に灰赤	10R7/2	33	
151	T3	S1	X-2区	上層	土師器	皿	口~体	1/2	16.8	16.8	良	良	に灰赤	10Y5/2	に灰赤	10Y5/2	34	
152	T3	S1	土層		土師器	皿	口~底	1/2	9	2.4	中々	良	灰赤	10YR8/2	に灰赤	10Y8/2	35	
153	T3	S4	N-4 -5区		土師器	鉢	底	1/8	12.8	12.8	良	良好	灰赤	5YR4/2	灰赤	10YR8/2	43	
154	T3	S1	X-1区	最上層	土師器	短冊	口縁	1/2	25.9	12.7	良	良好	10YR8/2	灰赤	10YR8/2	口縁部にスリ文		
155	T3	S1	土層		信楽	深鉢	底	1/8	18.7	9.4	良	良	焼	5YR6/6	焼	5YR7/6	35	
156	T3	S1	X-1区	最上層	信楽	深鉢	口縁	1/8	14.2	14.2	良	良好	に灰赤	2.5YR4/2	に灰赤	2.5YR4/3	36	
157	T3	S1	X-1区	最上層	信楽	深鉢	口縁	1/8	14.8	14.8	良	良	灰赤	10YR8/2	浅黄赤	2.5YR7/6	1条以上の節目	
158	T3	S1	N-4 -5区		信楽	深鉢	口~体	0.1	0.1	良	良	焼	5YR7/6	に灰赤	5YR7/4	腰縁1節目		
159	T3	S1	V-1区	上層	信楽	深鉢	口縁	1/4	11.0	11.0	良	堅緻	に灰赤	5YR6/3	に灰赤	5YR4/2	45	
160	T3	S1	P-9区	土層	信楽	深鉢	口~体	0.1	0.1	良	良好	焼	2.5YR6/6	焼	2.5YR6/6	5条~1年節目		
161	T3	S1	北溝	青灰色 粘土	信楽	深鉢	口~体	0.1	0.1	良	良好	焼	2.5YR6/6	焼	2.5YR6/6	4条~1年節目		
162	T3	S1	北溝	青灰色 粘土	信楽	深鉢	口縁	1/8	14.7	14.7	良	良	に灰赤	2.5YR6/4	に灰赤	2.5YR6/3	72	
163	T3	S1	X-1区	最上層	信楽	深鉢	口~体	0.1	0.1	良	良好	焼	5YR2/6	に灰赤	2.5YR7/4	4条~1年節目		
164	T3	S1	北溝	青灰色 粘土	信楽	深鉢	口~体	28.0	58.4	良	堅緻	青灰	2.5Y5/1	灰黄赤	10R9/2	5条~1年節目		
165	T3	S1	X-Y -3区		信楽	深鉢	口縁	0.2	0.2	良	良好	焼	5YR7/6	浅黄赤	7.0R8/4	45		
166	T3	S1	X-1区	最上層	信楽	深鉢	底部	0.1	0.1	良	堅緻	灰赤	2.5YR5/2	赤黒	2.5YR5/1	5条~1年節目		
167	T3	S1	X-2区	上層	信楽	深鉢	底部	0.2	0.2	中々	不	良	灰赤	2.5YR8/2	灰赤	2.5YR5/2	5条~1年節目	
168	T3	S1	X-1区	最上層	信楽	深鉢	底部	0.2	0.2	中々	不	良	に灰赤	2.5YR7/3	に灰赤	2.5YR7/3	5条以上の節目 内面 に使用あり	
169	T3	S1	N-4 -5区		信楽	深鉢	底部	0.1	0.1	良	良	に灰赤	2.5YR7/4	に灰赤	2.5YR7/3	5条~1年節目		
170	T3	S1	X-1区	最上層	信楽	深鉢	底部	0.1	0.1	中々	不	良	灰赤	2.5YR8/1	灰赤	2.5YR8/1	4条節目	
171	T3	S1	X-1区	最上層	信楽	深鉢	底部	0.1	0.1	良	良	に灰赤	10YR7/3	に灰赤	10YR7/3	5条~1年節目		
172	T3	S1	V-1区	上層	信楽	深鉢	底部	0.1	0.1	良	良好	浅黄赤	7.0R8/4	灰赤	10YR8/2	5条~1年節目		
173	T3	S1	X-3区	最上層	信楽	深鉢	底	0.3	0.3	良	良好	に灰赤	2.5YR7/3	に灰赤	2.5YR6/3	45		
174	T3	S4	V-1区	上層	信楽	深鉢	底	0.3	0.3	中々	良	焼	2.5YR6/6	焼	2.5YR7/6	5条~1年節目		
175	T3	S1	X-2区	最上層	信楽	深鉢	底	0.1	0.1	良	良	に灰赤	2.5YR7/4	焼	2.5YR6/6	5条~1年節目		
176	T3	S1	T-1区	最上層	信楽	深鉢	底	0.1	0.1	良	良	浅黄赤	10YR8/3	浅黄赤	10YR8/2	5条~1年節目		
177	T3	S1	X-2区	最上層	信楽	深鉢	底	0.1	0.1	良	良	赤灰 粘土	2.5YR4/1	灰赤	2.5YR5/2	5条~1年節目		
178	T3	S1	X-2区	最上層	信楽	深鉢	底	0.1	0.1	中々	堅緻	に灰赤	7.0YR5/4	焼	7.0YR6/6	4条~1年節目		
179	T3	S1	V-1区	最上層	信楽	深鉢	底	1/2	13.5	13.5	中々	不	良	暗赤	10YR6/1	灰赤	10YR8/2	5条~1年節目
180	T3	S1	X-1区	最上層	土師器	甕	頸部	0.1	0.1	中々	良	に灰赤	10Y8/2	灰赤	10Y8/2	全体に黒線が薄い		
181	T3	S1	X-1区	最上層	瓦器	甕	底	15.0	3.9	良	良	灰	N3/	灰	N3/1	外周部と口縁部 に黒線あり		
196	T3	S2			土師器	皿	口縁	8	13.5	良	良	浅黄赤	10YR8/3	浅黄赤	10YR8/2	122		

表7 出土土器観察表

報告 No.	調査 区	遺跡No.	ブツID	層位	器種	器形	部位	残存 率	位置 (cm)	加工	焼成	色図				備考	実測 No.	
												外面	内面	口縁	底			
109	T3 S2	R-7区	黄褐色 砂織	土師器	皿	11-1体	1/3	9	2	中々焼	不灰	浅黄	2.0YR8/7	浅黄	2.0YR8/7	内面に黒い土で塗られている	149	
108	T3 S2	S-3区	黄褐色土	瓦器	皿	口-1体	1/4	8.0	1.2	良	不灰	灰	10Y4/7	灰	2.0YR6/2	全体に黒味が濃い	124	
199	T3 S2	R-7区	黄褐色 砂織	土師器	皿	1.0L	1/5	2.2	2.3	良	不灰	浅黄	2.0Y7/3	灰白	2.0YR6/2	全面に灰焼	201	
200	T3 S2	T-4区	黄褐色土	土師器	皿	11-1体		3.0		良	良好	赤褐	3.0YR4/6	浅黄	2.0YR7/3		156	
201	T3 S2	R-7区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	2.0		良	不灰	灰	2.0Y5/3	2.0Y5/3	2.0Y5/3		146	
202	T3 S2	S-3区	黄褐色土	青銅	合子	11-1体	1/4	5	2	焼良	明焼	明焼	5.0Y7/1	灰白	5.0YR3/2	青味がかった土質の滑らかな	150	
203	T3 S2	T-4区	黄褐色土	土師器	皿	1.0L	1/2	1.0	3.0	良	良好	浅黄	2.0YR8/4	灰白	2.0YR8/2	内面に黒焼	132	
204	T3 S2	T-4区	黄褐色土	土師器	皿	11-1体	3/4	11.0	2.4	6.6	良	良	灰白	2.0Y7/1	灰白	2.0Y7/1	高弁内面が赤銅。見込みに黒い焼痕あり	265
205	T3 S2	T-3区	黄褐色土	土師器	皿	11-1体	1/3	12.0	2.8	6.6	焼良	明焼	灰白	2.0YR8/7	灰白	2.0YR7/1	見込みに黒い焼痕あり。底面はほぼ黒焼。口縁部が黒焼のため赤銅が剥き出し	261
206	T3 S2	R-7区	黄褐色 砂織	土師器	皿	口-1高弁	1/4	13.0	4.0	3.8	焼良	明焼	灰白	10YR8/2	2.0YR6/2	10YR7/3		119
207	T3 S2	F479区	黄褐色土	青銅	皿	11-1体		32.0		良	良好	明焼	2.0YR8/1	明焼	2.0YR7/1	内、外面にツギが施されている	202	
208	T3 S2	S-2区	黄褐色土	土師器	鉢	口-1高弁	1/4	0	0	良	良好	灰白	2.0YR8/1	灰白	2.0Y7/1		111	
209	T3 S2	Q-7区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	3.0		中々焼	良	2.0YR5/4	10YR7/2	浅黄	10YR8/4		136	
210	T3 S2	Q-7区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	3.0		良	良好	灰白	5.0Y5/4	2.0YR6/6	5.0YR/4		131	
211	T3 S2	R-2区	黄褐色土	土師器	皿	1.0L		5.1		中々焼	良	浅黄	2.0YR8/4	浅黄	2.0YR7/3		142	
212	T3 S2	R-2区	黄褐色土	土師器	皿	1.0L		5.1		良	明焼	黄	5.0Y5/4	黄	5.0YR7/4	6条一単位目	105	
213	T3 S2	R-4区	黄褐色土	土師器	皿	1.0L		13.0		良	良	明焼	2.0YR8/6	浅黄	2.0YR8/4	3条一単位目	144	
214	T3 S2	T-3区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	14.4	5.3	5.0	焼良	明焼	灰	5.0Y4/1	灰白	5.0		152
215	T3 S2	R-7区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	30	3.0	5.0	良	良	浅黄	2.0YR8/4	浅黄	10YR8/3	外面に土	148
217	T3 S2	Q-7区	黄褐色土	土師器	皿	1.0L		3.0		良	良好	灰	5.0Y6/4	黄	2.0YR6/6	4条一単位目	108	
218	T3 S2	S-3区	黄褐色土	土師器	皿	1.0L		14.0		良	良	2.0YR5/3	2.0YR5/3	2.0YR5/3	6条一単位目	115		
219	T3 S2	F479区	黄褐色土	土師器	皿	1.0L		14.0		中々焼	良	2.0YR6/4	2.0YR6/4	2.0YR6/4	6条一単位目	120		
220	T3 S2	Q-7区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	17.2	3.6	5.0	良	良	明焼	2.0YR5/4	2.0YR6/6	4条一単位目	138	
221	T3 S2	Q-7区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	17.6	3.6	5.0	良	良	2.0YR6/6	黄	2.0YR7/4	6条一単位目	135	
222	T3 S2	S-2区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	14.1		中々焼	良	明焼	10YR4/2	明焼	10YR4/2	6条一単位目	126	
223	T3 S2	R-2区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	5.2		中々焼	良	黄	2.0YR6/6	黄	2.0YR6/6	内面使用による赤銅	141	
224	T3 S2	T-3区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	6.3		良	良好	2.0YR5/4	2.0YR5/4	2.0YR4/2	6条一単位目	114		
225	T3 S2	Q-7区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	6.3		良	良	2.0YR6/6	黄	2.0YR6/6	3条一単位目	254		
226	T3 S2	R-7区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	9.7		良	良好	明焼	2.0YR5/4	明焼	2.0YR5/4		125	
227	T3 S2	S-3区 土師器	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	11.2	5.0	中々焼	良	黄	5.0Y6/4	浅黄	10YR8/4	4条一単位目	128	
228	T3 S2	黄褐色土 砂織	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	1.8	2.3	5.0	良	良	2.0YR6/6	2.0YR6/6	2.0YR6/4	6条一単位目	110	
229	T3 S2	S-2区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	14.3		中々焼	良	2.0YR6/8	2.0YR6/8	2.0YR5/6	5条一単位目 内面に使用による赤銅	150		
230	T3 S2	T-2区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	12.4		中々焼	良	2.0Y7/6	浅黄	2.0YR8/2	2.0YR8/2	6条一単位目	103	
231	T3 S2	黄褐色土 砂織	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	12.4		良	良	5.0Y6/6	黄	2.0YR6/6	3条一単位目 赤銅あり	155		
232	T3 S2	R-7区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	1.8	5.0	13.0	良	良	2.0YR6/4	黄	2.0YR7/6	3条一単位目 赤銅あり	148	
233	T3 S2	R-7区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	1.8	5.0	14.0	良	良	2.0YR5/4	2.0YR5/4	2.0YR6/4	3条一単位目 赤銅あり	145	
234	T3 S2	黄褐色土 砂織	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	1.4	1.5	14.0	中々焼	不灰	浅黄	2.0YR8/2	浅黄	2.0YR8/2	内面に使用による赤銅	112
235	T3 S2	黄褐色土 砂織	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	16.2		良	良	赤	10YR5/6	赤	10YR6/6	内面に使用による赤銅	134	
236	T3 S2	Q-7区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	14.0	14.0	中々焼	良	浅黄	2.0YR8/4	浅黄	2.0YR8/4	内面に使用による赤銅	130	
237	T3 S2	R-2区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	3.7		良	良	2.0YR7/4	2.0YR7/4	2.0YR8/4	5条一単位目	142		
238	T3 S2	S-3区 土師器	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	12.2		中々焼	良	2.0YR6/6	明焼	2.0YR5/6	5条一単位目	123		
239	T3 S6	Q-2区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	14.0		中々焼	不灰	浅黄	2.0YR8/4	灰白	2.0YR8/2	3条一単位目	165	
240	T3 S6	R-7区	黄褐色土	土師器	皿	1.0L		6.1		中々焼	不灰	2.0YR7/6	赤	2.0YR7/3		163		
241	T3 S6	T-3区	黄褐色土	土師器	皿	1.0L		14.0		中々焼	良	2.0YR5/4	2.0YR5/3	2.0YR5/3	5条一単位目	162		
242	T3 S6	V-1区	土師器	土師器	鉢	鉢	1.0L	4.5		良	良	2.0YR4/2	明焼	2.0YR4/2	10条一単位目	198		
243	T3 S6	R-3区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	3.0		中々焼	不灰	明焼	10YR7/2	明焼	10YR7/2	赤銅あり	195	
244	T3 S6	T-3区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	3.0		中々焼	不灰	灰	5.0Y4/2	灰	2.0YR4/2	赤銅あり	192	
245	T3 S6	T-3区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	26.4	6.3	5.0	良	良	黄	5.0Y5/7	黄	5.0Y5/7	4条一単位目	196
246	T3 S6	V-3区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	1.4		10.1	良	良	2.0YR5/3	2.0YR5/3	2.0YR4/2	3条一単位目	193	
247	T3 S6	V-1区	土師器	土師器	鉢	鉢	1.0L	5.2	3.0	中々焼	良	2.0YR7/4	黄	5.0Y7/6	黄	5.0Y7/6	内面に使用による赤銅	191
248	T3 S6	T-3区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	1.6	5.0	17.0	中々焼	良	2.0YR5/4	2.0YR5/3	2.0YR5/3	3条一単位目 赤銅あり	189	
249	T3 S6	S-3区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	1.4	8.2	5.0	中々焼	良	2.0YR6/6	浅黄	10YR8/4		203	
250	T3 S6	T-3区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	1.3	17.6	8.2	中々焼	良	2.0YR5/4	2.0YR5/4	2.0YR4/2		202	
251	T3 S6	T-3区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	8.4	15.0	5.0	中々焼	不灰	浅黄	2.0YR6/6	2.0YR6/6	2.0YR6/6	5条一単位目	204
254	T3 S3	S279区 F479区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	20.8	7.1	11.0	中々焼	良	2.0YR6/6	黄	2.0Y7/6	内面に中々焼灰	168	
255	T4 S3	T3区	瓦器	皿	口-1体	1/3	9.4	1.7	7.0	良	良好	灰	5.0	灰	5.0		169	
256	T3 S3	R-3区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	3.6		中々焼	不灰	2.0YR4/3	2.0YR4/3	2.0YR4/2	3条以上の単位目	158		
257	T3 S3	R-3区	黄褐色土	土師器	鉢	鉢	1.0L	4.0	17.8	4.0	中々焼	不灰	2.0YR8/4	2.0YR8/4	2.0YR8/4	内面に中々焼灰	159	
259	T3 S3	T3区	土師器	皿	11-1体	2/5	9.6	2.0		中々焼	不灰	灰	2.0Y5/2	2.0Y5/2	2.0Y5/2		167	
260	T3 S3	T3区	土師器	皿	11-1体			6.0		中々焼	不灰	灰	10YR7/2	灰白	10YR8/2		171	
261	T3 S3	T3区	土師器	皿	11-1体			6.0		中々焼	不灰	浅黄	2.0YR8/5	浅黄	2.0YR8/4	5条一単位目	166	
262	T3 S3	T3区	土師器	皿	11-1体			14.0		良	良好	2.0YR4/3	2.0YR4/3	2.0YR3/3	5条一単位目	166		
263	T3 S3	T3区	土師器	皿	11-1体			14.0		良	良好	2.0YR3/3	2.0YR3/3	2.0YR3/3	5条一単位目	163		
266	T3 S3	T3区	土師器	皿	11-1体			11.0		中々焼	良	2.0YR6/6	黄	2.0YR6/6	5条一単位目 内面に使用による赤銅	171		
267	T3 S3	T3区	土師器	皿	11-1体			22.0	6.0	5.0	良	良好	2.0YR6/6	黄	2.0YR6/6	5条一単位目	172	
269	T3 S3	T3区	土師器	皿	11-1体			21.2		良	良	2.0YR5/3	2.0YR5/3	2.0YR6/6	5条一単位目	173		
269	T3 S3	T3区	土師器	皿	11-1体			10.2		中々焼	良	明焼	2.0YR5/6	黄	2.0YR6/6	3条一単位目 内面に使用による赤銅	184	

表8 出土土器観察表

報告 調査 区	調査 遺跡名	ブツID No.	層位	器種	器形	部位	残存 率	土量 (cm)		胎土	焼成	色調		備考	実測 No.				
								口径	器高			底径	外面			内面			
220	T3	S5	弥生	須弥	口縁	口縁	1/2	22	7.7	真	真	赤黒	103R/3	灰赤	103R/2	5番一単位器目	123		
221	T3	S5	弥生	須弥	底部			14.5		やや粗	不真	明赤黒	2.03R/5.6	に灰へ焼	2.03R/5.4	5番一単位器目	124		
222	T3	S5	弥生	須弥	底部			16.0		やや粗	不真	灰赤	7.03R/8.3	浅黄赤	7.03R/8.4	内面黄褐色に着色	179		
223	T3	S5	弥生	須弥	口縁			12.0		真	真	灰白	2.02R/8.7	灰白	2.02R/8.7	灰赤	内面にフヤ	172	
224	T3	S5	土器部	須弥	口縁			13.5		やや粗	不真	浅黄赤	103R/8.3	赤黒	103R/8.3	外周にスス付着	170		
225	T3	S5	土器部	須弥	口縁			14.6		やや粗	不真	黄赤	7.03R/7.8	灰赤	7.03R/6.8	外周にスス付着	178		
226	T3	S5	土器部	須弥	口縁			14.9		やや粗	不真	赤黒	5.03R/4.8	赤黒	2.03R/4.8	5番一単位器目	183		
228	T3	S52	土器部	須弥	口縁	口縁	5.0	2.0		やや粗	不真	赤	2.03R/7.4	に灰へ焼	2.03R/7.4		184		
229	T3	S52	弥生	須弥	底一底	1/4		17.2	13.4	やや粗	真	明赤黒	2.03R/5.6	浅黄赤	7.03R/8.4	5番一単位器目	内面 黄褐色あり	203	
280	T3	S20	弥生	須弥	底	底部		17.4		やや粗	真	灰赤	2.03R/4.2	灰赤	2.03R/4.2	内面ススに染み	226		
281	T3	S43	弥生	須弥	口縁			29.0	14.7	真	真	に灰へ焼	2.03R/4.3	灰赤	2.03R/4.1	2番以上の器目	225		
282	T3	S22	土器部	須弥	口縁			9.4	2.1	やや粗	真	灰白	103R/8.1	灰白	103R/8.2		202		
283	T3	S434	土器部	須弥	口縁			9.6	2.8	真	真	灰白	3.03R/1.1	灰	3.03R/1.1		213		
284	T3	S523	弥生	須弥	底部		1/6	17.2		焼良	良好	黄赤	103R/4.2	に灰へ焼	103R/3.6		223		
285	T3	S52	弥生	須弥	口縁		1/2	24.4	5.8	13.0	真	真	に灰へ焼	2.03R/4.3	に灰へ焼	103R/3.4	内面に黄赤	224	
286	T3	S52	弥生	須弥	底部			17.0		やや粗	真	明赤黒	2.03R/5.6	赤黒	2.03R/5.1	5番一単位器目	229		
287	T3	S52	弥生	須弥	口縁	口縁		16.0		やや粗	真	灰赤	103R/4.2	赤黒	103R/3.2	5番一単位器目	221		
288	T3	S52	弥生	須弥	口縁			26.4	13.8	真	真	に灰へ焼	2.03R/3.3	に灰へ焼	2.03R/6.3	5番一単位器目	228		
289	T3	S52	弥生	須弥	口縁			29.6	15.0	やや粗	真	に灰へ焼	2.03R/5.2	に灰へ焼	2.03R/5.3	5番一単位器目	225		
290	T3	S52	弥生	須弥	口縁	口縁		30.0	11.7	やや粗	真	明赤黒	2.03R/5.6	明赤黒	2.03R/5.6	5番一単位器目	224		
291	T3	S52	弥生	須弥	底部			19.0		真	真	赤	2.03R/6.8	赤	2.03R/6.6	5番一単位器目	231		
292	T3	S52	弥生	須弥	底部			18.2		真	真	赤	103R/5.4	赤黒	103R/5.4	5番一単位器目	233		
293	T3	S52	弥生	須弥	底部			13.7	12.4	やや粗	真	赤	2.03R/6.6	赤	2.03R/6.8	5番一単位器目	234		
294	T3	S52	弥生	須弥	底一底	1/2		11.2	16.4	真	真	明赤黒	2.03R/5.6	赤	10R/3.6	6番器目 黄褐色に 内面に黄褐色あり	228		
295	T3	S52	弥生	須弥	底一底			16.4	17.6	やや粗	不真	赤	5.03R/7.8	赤	5.03R/6.8	5番器目 黄褐色あり 内面に黄褐色あり	231		
296	T3	S52	土器部	須弥	口縁			24.8	12.3	やや粗	真	赤	5.03R/7.6	に灰へ焼	7.03R/3.9		242		
297	T3	S52	瀬江美濃	須弥	口縁			14.0		焼良	良好	灰赤	2.03R/4.2	黒赤	7.03R/3.2	全体に黄赤	263		
298	T3	S52	瀬江美濃	水滸	口縁			3.5	6.0	5.5	真	良好	灰赤	7.03R/2.2	灰赤	7.03R/5.2	器目不明、器種 不明	262	
299	T3	S52	弥生	須弥	口縁		1/8	38.0	18.2	やや粗	真	赤	5.03R/3.2	灰赤	2.03R/3.2		383		
300	T3	S53	瀬江美濃	須弥	底部			12.7	5.5	真	良好	灰白	2.03R/7.1	ホワイト	3.03R/2.2	内面足元の輪が黒褐色に染み付いてい	264		
301	T3	S23	弥生	須弥	底部			15.6	17.0	粗	不真	灰白	2.03R/7.2	灰赤	2.03R/8.1		310		
302	T3	S513	弥生	須弥	底部			14.0		やや粗	真	に灰へ焼	7.03R/4.4	浅黄赤	7.03R/3.3	5番一単位器目	246		
303	T3	S548	弥生	須弥	口縁	口縁		38.0	15.0	16.4	真	真	赤	10R/3.6	赤	2.03R/6.8	5番一単位器目	内面 黄褐色あり	240
304	T3	S548	土器部	須弥	口縁			8.4	11.0	真	真	灰赤	103R/8.4	灰赤	103R/8.3		272		
305	T3	S585	瀬江美濃	九皿	口縁	8/10	9.6	2.3	5.2	焼良	良好	灰赤	5.03R/2.2	浅黄赤	3.03R/2.3	灰赤に輪フヤありあり 内面に黄褐色あり	274		
306	T3	S585	土器部	須弥	口縁	口縁	1/4	9.0	12.0	焼良	良好	灰白	103R/8.2	黒赤	2.03R/2.3		253		
307	T3	S585	土器部	須弥	口縁	口縁	1/8	9.6	11.0	真	真	に灰へ焼	103R/7.3	に灰へ焼	103R/7.3		255		
308	T3	S80	土器部	須弥	口縁	1/2	11.0	2.7		やや粗	真	黄赤	5.03R/4.1	黄赤	2.03R/3.1		251		
309	T3	S69	弥生	須弥	口縁			13.8		やや粗	真	赤	103R/4.4	黄赤	103R/4.2	5番一単位器目	271		
310	T3	S69	弥生	須弥	口縁			13.2		やや粗	真	赤	7.03R/6.8	赤	7.03R/6.8	5番一単位器目	269		
311	T3	S69	弥生	須弥	口縁	口縁		17.1		やや粗	真	赤	103R/4.3	赤黒	103R/4.3	5番一単位器目	273		
312	T3	S69	弥生	須弥	口縁			26.4	13.8	真	真	灰赤	103R/4.2	赤黒	103R/3.1	5番一単位器目	275		
313	T3	S69	弥生	須弥	口縁			25.6	14.8	真	真	に灰へ焼	2.03R/5.3	に灰へ焼	7.03R/5.3	5番一単位器目	273		
314	T3	S69	弥生	須弥	底部		1/6	14.0	14.4	真	真	明赤黒	2.03R/5.6	に灰へ焼	2.03R/5.3	5番一単位器目	228		
315	T3	S69	弥生	須弥	口縁			17.6	13.1	真	良好	灰白	5.03R/2.1	灰白	3.03R/1.1		303		
316	T3	S69	弥生	須弥	底部			13.7	12.8	やや粗	不真	赤黒	10R/6.6	赤黒	10R/6.8	5番一単位器目	内面 黄褐色あり	211	
319	T3	S67	土器部	須弥	口縁			10.0	12.4	やや粗	不真	赤	7.03R/7.6	浅黄赤	7.03R/8.4		233		
320	T3	S67	土器部	須弥	口縁			9.2	1.8	やや粗	真	灰赤	103R/3.3	浅黄赤	103R/3.4		244		
321	T3	S67	弥生	須弥	口縁			11.0	5.5	9.6	真	真	灰赤	2.03R/4.2	灰赤	2.03R/4.2	内面黄褐色に染み	228	
322	T3	S67	弥生	須弥	底部			15.6		やや粗	真	明赤黒	2.03R/5.6	に灰へ焼	7.03R/8.4	5番一単位器目	231		
323	T3	S67	弥生	須弥	口縁			20.4	13.0	やや粗	不真	浅黄赤	2.03R/8.6	浅黄赤	7.03R/8.4	5番一単位器目	233		
324	T3	S67	瀬江美濃	須弥	口縁		1/4	12.4	3.4	真	真	灰白	103R/8.2	灰白	103R/8.2		223		
326	T3	S21	土器部	須弥	口縁	1/2	10.8	2.2		やや粗	不真	浅黄赤	103R/8.3	浅黄赤	103R/8.1	全体に黄褐色あり	264		
327	T3	S21	土器部	須弥	口縁			8.6	2.1	焼良	良好	灰赤	103R/8.3	灰赤	103R/8.3	口縁黄褐色にスス付着	266		
328	T3	S2380	土器部	須弥	口縁			11.8		焼良	良好	赤	7.03R/6.6	に灰へ焼	7.03R/6.6		254		
335	T3	S2382	弥生	須弥	底部		1/6	24.0	17.0	真	真	に灰へ焼	2.03R/5.3	に灰へ焼	2.03R/6.6	5番一単位器目	252		
336	T3	S2382	弥生	須弥	口縁			19.2	18.2	やや粗	真	赤	2.03R/7.8	赤	5.03R/7.4		254		
338	T3	S20	弥生	須弥	口縁			16.2		真	真	に灰へ焼	5.03R/3.3	5.03R/3.3	2番以上の器目	226			
339	T3	S20	弥生	須弥	底部		2/3	11.1		焼良	良好	灰赤	5.03R/7.3	灰赤	2.03R/7.3		254		
340	T3	S20	弥生	須弥	底部			14.5		やや粗	真	赤	2.03R/6.8	赤	2.03R/6.8	5番一単位器目	227		
341	T3	S20	弥生	須弥	底部		1/4	14.3	14.0	真	真	に灰へ焼	2.03R/3.4	に灰へ焼	2.03R/3.4	5番一単位器目	227		
342	T3	S20	土器部	須弥	口縁			7.6	1.6		真	赤	5.03R/7.3	灰赤	2.03R/7.2	口縁黄褐色にスス付着	251		
343	T3	S20	弥生	須弥	口縁			25.4	17.4		真	赤	10R/3.6	赤	10R/3.8	5番一単位器目	250		
344	T3	S20	弥生	須弥	口縁		1/2	2.6	26.2	21.2	焼良	良好	に灰へ焼	2.03R/3.4	に灰へ焼	2.03R/3.4	5番一単位器目	249	
345	T3	S20	弥生	須弥	底部			17.0		14.0	真	真	に灰へ焼	2.03R/5.3	赤	2.03R/6.6	5番一単位器目	223	
346	T3	S20	弥生	須弥	口縁			30.4	16.0		真	灰赤	2.03R/8.4	灰白	2.03R/8.2	口縁黄褐色にスス付着	253		
347	T3	S20	弥生	須弥	口縁			42.0	15.2	粗	不真	浅黄赤	2.03R/4.2	浅黄赤	2.03R/8.4	内面に黄褐色あり	253		
348	T3	S20	瀬江美濃	水滸	口縁			8.2	4.4	やや粗	真	灰白	10R/8.1	灰白	10R/8.1	全体に黄褐色あり	262		
327	T3	S232	弥生	須弥	口縁			11.1		焼良	良好	に灰へ焼	103R/7.4	に灰へ焼	103R/7.4	全体に黄褐色あり	223		
323	T3	土器上	土器部	高杯	口縁		4/5	16.0		真	真	に灰へ焼	103R/7.3	に灰へ焼	103R/8.6	全体に黄褐色あり	25		
374	T3	土器上	土器部	高杯	口縁			14.9		真	真	赤	5.03R/7.6	赤	7.03R/7.6		28		
375	T3	土器上	土器部	高杯	口縁			13.9		真	真	灰赤	7.03R/8.4	灰赤	7.03R/8.4	やや黄褐色あり	29		
380	T3	S242	白磁	須弥	口縁	1/4	16.4	7.0	6.0	焼良	良好	灰赤	2.03R/7.2	灰赤	2.03R/7.2		254		
381	T3	S289	土器部	高杯	口縁	1/2	25.2	17.2		真	真	灰白	2.03R/7.4	灰赤	2.03R/7.4		1394		
382	T3	S289	土器部	高杯	口縁	1/2	15.4	12.2	10.7	焼良	良好	灰赤	103R/7.2	灰白	103R/8.2		1393		
383	T3	S289	土器部	高杯	口縁			13.6	4.0	真	真	に灰へ焼	2.03R/7.3	に灰へ焼	7.03R/7.4	全体に黄褐色あり	1294		
384	T3	S289	土器部	高杯	口縁		1/2	11.4	15.0	やや粗	良好	赤	2.03R/8.3	赤	2.03R/7.3		1293		

表9 出土土器観察表

報告 No.	調査 区	遺跡No.	ブツID No.	層位	器種	器形	部位	残存 率	口 径	高さ	土質	焼成	色調		備考	実測 No.		
													外表面	内面				
305	T.3	S309			土師器	高杯	口縁部		10.0	18.0	灰	灰	にんべん	3YR5/4	明赤	3YR5/6	1289	
306	T.3	S309			土師器	底皿	底面		10.0	7.0	灰	灰	にんべん	10YR7/2	にんべん	10YR7/2	部分的に粘土質あり	1292
307	T.3	S309			土師器	「平上」 片			3.0	2.5	灰	灰	にんべん	10YR7/3	にんべん	10YR6/4		1298
308	T.3	S309			土師器	釜	L1層- 底面	1/2	16.0	23.4	中々灰	灰	浅黄	10YR8/2	にんべん	10YR7/2		319
309	T.3	S309			土師器	釜	L1層- 底面	3/4	16.0	27.4	中々灰	灰	にんべん	10YR7/3	浅黄	2.0Y7/2	底部外周下部にスグが 付着	319
300	T.3	S309			土師器	甕												1290
301	T.3	S309			土師器	瓶	底-底	1/2	20.0	17.3	灰	灰	にんべん	10YR7/3	にんべん	10YR7/3	底面が6孔以上	1293
302	T.3	S309			土師器	瓶	底-底		25.0	24.0	中々灰	灰	浅黄	10YR8/2	にんべん	10YR7/2	底面は高杯の胴や転写し ている。底面は中々土 質(※厚肉0.5-2.0cm)	1295
303	T.3	S309			土師器	瓶	底		16.0		灰	灰	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2		1297
304	T.3	S309			土師器	瓶	底		16.0		中々灰	灰	浅黄	10YR8/2	にんべん	10Y7/2	全体に焼減が著しい	1298
305	T.4	東横池田中3区			土師器	高杯	口縁部	1/3	7.0	5.0	灰	灰	黄	7.5YR7/2	黄	7.5YR7/2	口内面に高杯 の跡	385
306	T.4	東横池田中3区			土師器	高杯	口縁部		10.0	10.0	灰	灰	浅黄	2.5YR8/4	浅黄	3.5YR8/3	内面下部に使用痕あり	382
307	T.4	東横池田中3区			土師器	丸部	底面	1/8	13.0	4.0	灰	灰	灰	N4	灰	N4		383
308	T.4	東横池田中3区			土師器	高杯	口縁部	1/6	8.3	13.0	灰	灰	黄	7.5Y5/2	灰	5Y6/1		384
309	T.4	東横池田中3区			土師器	丸部	底面				灰	灰	黄	7.5Y7/6	浅黄	10YR8/3		385
400	T.4	表塚			土師器	高杯	口縁部		10.0		中々灰	灰	浅黄	7.5YR7/2	灰白	10YR8/2		14
401	T.4	表塚			土師器	高杯	口縁部		10.0		中々灰	灰	浅黄	7.5YR7/2	灰白	10YR8/2		16
402	T.4	表塚			土師器	高杯	口縁部	1/3	4.0	4.0	灰	灰	灰白	10YR8/2	にんべん	7.5Y7/2		896
403	T.4	表塚			土師器	高杯	口縁部	1/3	4.0	4.0	灰	灰	浅黄	7.5YR7/2	にんべん	7.5YR8/4		898
404	T.4	表塚			土師器	高杯	口縁部	1/3	4.0	4.0	灰	灰	灰	7.5Y7/2	にんべん	7.5Y7/2		899
405	T.4	表塚			土師器	高杯	口縁部	1/4	8.4	1.3	灰	灰	灰	5YR6/4	灰	7.5Y6/6		897
406	T.4	表塚			土師器	高杯	口縁部		7.8	1.4	灰	灰	灰	10YR8/2	灰	10YR8/2		401
407	T.4	表塚			土師器	高杯	口縁部		10.0	2.0	灰	灰	浅黄	7.5YR8/3	灰白	7.5Y8/2		901
408	T.4	表塚			土師器	高杯	口縁部	1/5	15.0	4.0	4.4	灰	灰	7.5Y4/1	灰	7.5Y4/1		900
409	T.4	表塚			土師器	高杯	口縁部		10.0	3.3	灰	灰	灰	N5	灰	N5		889
409	T.4	表塚			土師器	高杯	口縁部		10.0	3.0	灰	灰	灰	N5/1	灰	N5/1		888
410	T.4	表塚			土師器	高杯	口縁部		10.0	1.3	灰	灰	灰	N4	灰	N4		892
411	T.4	表塚			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	7.5Y7/6	灰	7.5Y7/6		895
412	T.4	表塚			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	7.5YR7/2	灰	7.5YR7/2		899
413	T.4	表塚			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	10YR8/2	灰白	10YR7/2		903
414	T.4	表塚			土師器	高杯	口縁部		11.0	3.2	灰	灰	灰	N4	灰	N4		894
415	T.4	表塚			土師器	高杯	口縁部		11.0	5.4	灰	灰	灰	N5	灰	N5		893
417	T.3	S428			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	7.5YR7/2	灰白	7.5Y8/2		1149
418	T.3	S428			土師器	高杯	口縁部	1/3	14.0	3.4	4.8	灰	灰	10YR7/2	灰	10YR7/2		1150
419	T.4	S478			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	N4	灰	N4		458
420	T.4	S410			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	N5	灰	N6		868
421	T.4	S410			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	にんべん	2.5Y6/4	にんべん	3YR6/4	2葉一葉付目	864
422	T.4	S410			土師器	高杯	口縁部	1/7	10.0	10.0	灰	灰	灰	5Y5/1	灰	5Y5/1		863
423	T.4	S410			土師器	高杯	口縁部	1/2	20.0	10.0	中々灰	灰	灰	10YR8/2	灰	7.5YR8/4		861
424	T.4	S258			土師器	高杯	口縁部	1/3	14.0	11.0	4.8	灰	灰	10YR7/2	灰	N5		1172
425	T.4	S438			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	N4	灰	N4		872
426	T.4	S438			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	N4	灰	N4		873
427	T.4	S461			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	7.5YR7/2	灰	7.5YR7/2		875
429	T.4	S99			土師器	高杯	口縁部	1/8	12.0	2.0	灰	灰	黄	5YR6/1	黄	5YR6/1		781
430	T.4	S98			土師器	高杯	口縁部	1/2	10.0	1.0	灰	灰	灰	3YR6/6	灰	3YR6/6		823
431	T.4	S130			土師器	高杯	口縁部	1/3	10.0	5.2	灰	灰	灰	N4	灰	N5		825
432	T.4	S133			土師器	高杯	口縁部	1/8	10.0	2.0	中々灰	灰	灰	2.5YR7/2	灰	2.5YR7/1		853
433	T.4	S133			土師器	高杯	口縁部	1/4	10.0	2.0	灰	灰	灰	N5	灰	N5		854
434	T.4	S133			土師器	高杯	口縁部	1/4	11.0	4.0	灰	灰	灰	N5	灰	N5	高杯の一組のうち最も古い	852
435	T.4	S174			土師器	高杯	口縁部		10.0		中々灰	灰	黄	5YR5/1	黄	5YR5/1		858
436	T.4	S121			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	N5	灰	N7		859
437	T.4	S121			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	N4	灰	N5		865
438	T.4	S134			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	2.5Y7/1	灰	2.5Y7/1		864
439	T.4	S161			土師器	高杯	口縁部		11.0		灰	灰	灰	10Y7/2	浅黄	10YR8/2		858
440	T.4	S172			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	N6	灰	N6		839
441	T.4	S172			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	10YR7/2	灰	10YR7/2		851
442	T.4	S173			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	N5	灰	N5		854
443	T.4	S69			土師器	高杯	口縁部	1/6	8.4	11.0	灰	灰	にんべん	7.5YR7/2	浅黄	7.5YR8/3		621
444	T.4	S69			土師器	高杯	口縁部	1/4	7.9	11.1	灰	灰	にんべん	10YR8/2	にんべん	7.5YR6/2		614
445	T.4	S69			土師器	高杯	口縁部	1/12	13.0		灰	灰	灰	N4	灰	N5		620
446	T.4	S69			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	N5	灰	N5		622
447	T.4	S69			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	N4	灰	N5		623
448	T.4	S69			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	N5	灰	N5		621
449	T.4	S69			土師器	高杯	口縁部	1/4	10.0	5.0	灰	灰	灰	3YR7/1	灰	3YR7/1		611
450	T.4	S69			土師器	高杯	口縁部	1/4	10.0	3.0	灰	灰	灰	3YR7/1	灰	3YR7/1		612
451	T.4	S69			土師器	高杯	口縁部	1/4	11.1	4.4	灰	灰	灰	7.5YR7/2	灰	7.5YR7/2	全体に焼減あり	613
452	T.4	S69			土師器	高杯	口縁部	1/6	10.0	5.0	灰	灰	黄	3YR4/1	黄	3YR4/1		614
453	T.4	S69			土師器	高杯	口縁部	1/6	8.2	1.2	灰	灰	灰	N4	灰	N5		615
454	T.4	S52			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	5YR6/1	黄	5YR6/1		616
455	T.4	S52			土師器	高杯	口縁部	1/8	12.4	1.9	灰	灰	灰	7.5YR6/2	明黄	7.5YR7/2		613
456	T.4	S52			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	10YR8/2	明黄	10YR8/2		614
457	T.4	S52			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	N3	灰	N5		613
458	T.4	S52			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	N4	灰	N4		613
459	T.4	S54			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	N6	灰	N6		614
460	T.4	S54			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	N6	灰	N5		613
461	T.4	S52			土師器	高杯	口縁部	1/2	10.0	4.4	灰	灰	灰	N8	灰	N5	全体に焼減あり	615
462	T.4	S54			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	10YR8/2	灰	10YR8/2		614
463	T.4	S54			土師器	高杯	口縁部	1/5	8.0	1.1	灰	灰	灰	10YR8/2	灰	10YR8/2		615
464	T.4	S54			土師器	高杯	口縁部		10.0		中々灰	灰	浅黄	7.5YR7/4	黄	7.5YR7/6		621
465	T.4	S54			土師器	高杯	口縁部	1/1	11.0	4.0	灰	灰	灰	N4	灰	N4		617
466	T.4	S54			土師器	高杯	口縁部		10.0	4.2	不灰	灰	灰	N6	灰	N6	高杯のうち最も古い	623
467	T.4	S54			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	N5	灰	N5	内面に調理器具痕あり	624
468	T.4	S54			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	N6	灰	N6		614
469	T.4	S54			土師器	高杯	口縁部	1/8	10.0	3.0	灰	灰	灰	N5	灰	N5		614
470	T.4	S54			土師器	高杯	口縁部	1/3	10.0	3.0	灰	灰	灰	N4	灰	N4		617
471	T.4	S54			土師器	高杯	口縁部		10.0		灰	灰	灰	N4	灰	N4		618
472	T.4	S54			土師器	高杯	口縁部		10.0		中々灰	灰	灰	N6	灰	N6		618

表10 出土土器観察表

報告調査 地区	遺跡名	ブツID No.	層位	器種	器形	前位	残存 率	度量 (cm)			胎土	焼成	色調		備考	実測 No.
								口徑	高さ	底径			外面	内面		
412	4.524		瓦部	皿	110	13.8	2.5			瓦	瓦	灰白	N5.7	灰白	N5.7	669
414	4.524		瓦部	皿	110	1.2	3.0	4.0	3.0	瓦	瓦	灰白	N5.7	灰白	N5.7	682
426	4.524		瓦部	皿	110			13.0	4.4	瓦	瓦	青灰	3.5P5.7	青灰	3.5P5.7	684
436	4.528	特痕	土師器	鉢	110	1.2	8.1	11.1		瓦	瓦	灰黄緑	3.5P8.4	灰白+黄	3.5P8.7/4	685
477	4.528	特痕	土師器	鉢	110	1.2	8.2	1.3		瓦	良好	灰白	10.5P8.2	灰白	10.5P8.2	704
478	4.528	特痕	瓦部	皿	110					瓦	瓦	灰白	N5.7	灰白	N5.7	689
479	4.528	飯方	皿	110	110		2.1			瓦	瓦	灰白	N5.7	灰白	N5.7	690
480	4.528	特痕	瓦部	皿	110	1.12	14.0	12.1		瓦	瓦	灰白	N5.7	灰白	N5.7	719
481	4.528	特痕	瓦部	皿	110		13.8	12.2		瓦	良好	灰白	N5.7	灰白	N5.7	720
482	4.528	飯方	瓦部	皿	110	1.28	14.5	12.0		瓦	瓦	灰白	N5.7	灰白	N5.7	727
483	4.528	特痕	瓦部	皿	110			13.0		瓦	瓦	灰白	N5.7	灰白	N5.7	727
484	4.528	特痕	瓦部	皿	110	1.29	16.9	4.8		瓦	良好	暗灰	N2.7	灰白	3.5P7.1	690
485	4.528	特痕	瓦部	皿	110	1.4	11.0	6.0		瓦	瓦	灰白	N4.7	灰白	N4.7	690
486	4.528	特痕	瓦部	皿	110		11.1			瓦	良好	灰白	N5.7	灰白	N5.7	728
492	4.528	特痕	瓦部	皿	110		12.9			瓦	瓦	灰白	10.5P7.1	灰白	10.5P7.1	691
498	4.580	飯方	土師器	鉢	110	1.6	7.6	7.2		瓦	良好	灰白	10.5P8.2	灰白	10.5P8.2	711
499	4.580	飯方	土師器	鉢	110	1.4	8.0	11.0		瓦	明黄緑	10.5P8.2	灰白	3.5P6.6	699	
499	4.580	特痕	土師器	鉢	110		8.0	1.3		瓦	瓦	暗灰	10.5P8.1	灰白	10.5P7.1	5.5付着
491	4.580	特痕	土師器	鉢	110	1.4	11.4	8.9	8.9	瓦	瓦	灰白	10.5P8.2	灰黄緑	10.5P8.2	857
492	4.580	特痕	土師器	鉢	110	1.2	12.0	12.0		瓦	良好	灰白	10.5P8.2	灰白	10.5P8.2	722
493	4.580	飯方	土師器	鉢	110		11.8			瓦	良好	灰白	10.5P8.2	灰白	10.5P8.2	723
494	4.580	特痕	土師器	鉢	110		11.2			瓦	瓦	灰白	10.5P8.2	灰白	10.5P8.2	730
495	4.580	特痕	土師器	鉢	110		11.5			瓦	明黄緑	2.5P7.2	明黄緑	2.5P7.2	725	
496	4.580	特痕	土師器	鉢	110		12.1			瓦	瓦	灰白	10.5P8.2	灰白	10.5P8.2	726
497	4.580	飯方	瓦部	皿	110		13.0			瓦	良好	灰白	N6.7	灰白	N6.7	694
498	4.580	飯方	土師器	鉢	110		3.2			瓦	瓦	灰白	N5.7	灰白	N5.7	699
499	4.580	飯方	土師器	鉢	110		12.0			瓦	瓦	灰白	N5.7	灰白	N5.7	699
500	4.580	特痕	土師器	鉢	110	1.2	12.0			瓦	良好	灰白	3.5P7.1	灰白	3.5P7.1	699
501	4.580	飯方	土師器	鉢	110		13.0			中+軽	瓦	暗黄緑	3.5P6.7	暗黄緑	3.5P6.7	700
502	4.580	飯方	土師器	鉢	110		12.7			瓦	瓦	灰白	10.5P8.1	灰白	10.5P8.1	699
503	4.580	特痕	瓦部	皿	110		10.7			中+軽	不具	灰黄緑	2.5P8.2	灰黄緑	2.5P8.2	711
504	4.580	特痕	瓦部	皿	110	1.7	14.5	4.3		瓦	瓦	灰白	N5.7	灰白	N5.7	見込み品?注意あり
505	4.580	特痕	瓦部	皿	110		11.1			瓦	良好	3.5P7.1	灰白	3.5P7.1	703	
506	4.580	特痕	瓦部	皿	110	1.1	1.8	7.6	1.3	瓦	良好	灰白	N4.7	灰白	N4.7	703
507	4.580	土師器	鉢	110		11.8	11.8			瓦	瓦	黄灰	2.5P6.1	黄灰	2.5P6.1	695
508	4.580	特痕	瓦部	皿	110		12.6			瓦	瓦	灰白	N5.7	灰白	N5.7	703
509	4.580	特痕	瓦部	皿	110	1	12.4			瓦	瓦	灰白	N5.7	灰白	N5.7	704
510	4.580	飯方	瓦部	皿	110		11.6			瓦	瓦	灰白	N4.7	灰白	N4.7	704
511	4.580	飯方	瓦部	皿	110	1.5	10.8			瓦	良好	3.5P7.1	灰白	3.5P7.1	高付の品あり	
512	4.580	特痕	瓦部	皿	110		11.4			中+軽	不具	灰白	N5.7	灰白	N5.7	703
513	4.580	特痕	土師器	鉢	110		7.8	1.0		瓦	瓦	灰白	2.5P8.2	灰白	2.5P8.2	724
514	4.580	特痕	土師器	鉢	110		6.9	1.1		瓦	良好	灰黄緑	10.5P6.2	灰白+黄	10.5P7.2	725
515	4.580	飯方	土師器	鉢	110		12.6			瓦	瓦	灰白	N5.7	灰白	N5.7	709
516	4.580	飯方	瓦部	皿	110		12.0			瓦	良好	3.5P5.1	暗黄緑	3.5P5.1	704	
517	4.580	特痕	瓦部	皿	110		12.0			中+軽	不具	暗黄緑	10.5P7.1	暗黄緑	10.5P7.1	694
518	4.580	土師器	鉢	110		11.2				中+軽	不具	暗黄緑	10.5P7.2	灰白+黄	10.5P7.2	704
519	4.580	特痕	土師器	鉢	110	1.4	12.0	1.9		瓦	良好	灰白	10.5P8.2	灰白	7.5P7.6	699
520	4.580	特痕	瓦部	皿	110		11.3			瓦	瓦	灰白	N4.7	青灰	3.5P5.1	393
521	4.580	特痕	瓦部	皿	110		11.9			瓦	瓦	灰白	N5.7	灰白	N5.7	691
522	4.580	特痕	瓦部	皿	110		12.7			瓦	瓦	青灰	3.5P5.1	青灰	3.5P5.1	693
523	4.580	特痕	瓦部	皿	110		11.2			瓦	瓦	灰白	N4.7	灰白	N4.7	693
524	4.580	特痕	瓦部	皿	110	1.7	14.0	2.5		瓦	瓦	灰白	N5.7	灰白	N6.7	729
525	4.580	特痕	瓦部	皿	110		11.8	11.8		瓦	瓦	灰白	N5.7	灰白	N5.7	704
526	4.580	特痕	瓦部	皿	110		11.0	13.0		瓦	瓦	灰白	N7.7	灰白	N7.7	725
527	4.580	飯方	土師器	鉢	110	1.4	8.0	1.7		瓦	灰白	10.5P8.2	灰黄緑	10.5P7.2	722	
528	4.580	土師器	鉢	110	1.4	8.0	1.6			瓦	灰白	10.5P7.4	灰白+黄	7.5P7.4	722	
529	4.580	特痕	瓦部	皿	110	1.9	14.7	28.9		瓦	瓦	灰白	N6.7	灰白	N5.7	699
530	4.580	特痕	特痕	特痕	110		11.4			瓦	良好	灰黄緑	10.5P8.2	灰白	10.5P8.2	4条+部分破損
531	4.580	特痕	土師器	鉢	110		7.8	1.1		瓦	瓦	灰白	10.5P8.2	灰白	10.5P8.1	540
532	4.580	特痕	土師器	鉢	110		11.0			瓦	瓦	灰白	10.5P8.1	灰白	10.5P8.1	304
533	4.580	特痕	土師器	鉢	110		11.0			瓦	良好	2.5P8.2	灰白	2.5P8.2	304	
534	4.580	特痕	瓦部	皿	110	1.12	9.2	1.5		瓦	良好	灰白	N4.7	灰白	N4.7	589
535	4.580	特痕	瓦部	皿	110		11.7			瓦	良好	3.5P7.1	灰白	2.5P8.1	字付:黄緑	530
536	4.580	特痕	瓦部	皿	110		11.3			瓦	瓦	灰白	N5.7	灰白	N5.7	347
537	4.580	特痕	瓦部	皿	110	1.2	10.7	5.0		中+軽	不具	暗黄緑	3.5P4.1	暗黄緑	3.5P4.1	347
538	4.580	特痕	瓦部	皿	110		11.3	11.3		瓦	瓦	灰白	N5.7	灰白	N5.7	347
539	4.580	特痕	瓦部	皿	110		10.8			瓦	瓦	灰白	N7.7	灰白	N7.7	693
540	4.580	特痕	瓦部	皿	110	1.4	11.7			瓦	瓦	灰白	N4.7	灰白	N4.7	693
541	4.580	特痕	瓦部	皿	110		12.8			瓦	瓦	灰白	N5.7	灰白	N5.7	693
542	4.580	土師器	鉢	110		11.0				瓦	瓦	灰白	3.5P7.6	黄	3.5P7.6	694
543	4.580	特痕	瓦部	皿	110		11.0			瓦	瓦	灰白	N6.7	灰白	N6.7	694
544	4.580	特痕	瓦部	皿	110		12.0			瓦	良好	灰白	N5.7	灰白	N5.7	696
545	4.580	飯方	土師器	鉢	110		11.7			瓦	灰白	10.5P7.2	灰白	10.5P7.1	699	
546	4.580	特痕	瓦部	皿	110	1.4	11.7	5.0		中+軽	不具	灰白	N7.7	灰白	N8.7	585
547	4.580	飯方	土師器	鉢	110	1.8	11.2	11.9		瓦	瓦	灰白	7.5P8.1	灰白	7.5P7.1	802
548	4.580	特痕	瓦部	皿	110		11.9			瓦	瓦	灰白	N5.7	灰白	N4.7	802
549	4.580	特痕	瓦部	皿	110		11.8			瓦	瓦	灰白	N4.7	灰白	N4.7	802
550	4.580	特痕	土師器	鉢	110	1.20	14.4	12.3		瓦	瓦	灰白	N5.7	灰白	N4.7	694
551	4.580	特痕	土師器	鉢	110	1.8	8.8	7.0		瓦	灰黄緑	10.5P8.2	灰白	10.5P8.2	592	
552	4.580	飯方	瓦部	皿	110		12.1			瓦	良好	暗灰	N2.7	暗灰	N2.7	396
553	4.580	特痕	瓦部	皿	110		11.8			中+軽	不具	暗黄緑	3.5P4.1	暗黄緑	3.5P5.1	596
554	4.580	特痕	土師器	鉢	110		11.1			瓦	良好	2.5P7.6	灰黄緑	10.5P8.1	691	
555	4.580	特痕	瓦部	皿	110		11.0	4.8		瓦	良好	灰白	N4.7	灰白	N4.7	694
556	4.580	特痕	土師器	鉢	110		11.0			瓦	灰黄緑	10.5P8.4	灰黄緑	10.5P8.4	694	
557	4.580	特痕	土師器	鉢	110		11.6	1.2		瓦	瓦	2.5P8.2	灰黄緑	7.5P8.2	693	
558	4.580	特痕	瓦部	皿	110		11.8			瓦	瓦	黄灰	2.5P7.1	灰白	N4.7	802
559	4.580	特痕	試験 調理土	瓦部	皿	110	1.6	15.0	4.0	瓦	良好	灰白	N4.7	灰白	N4.7	441
560	4.580	特痕	特痕	特痕	110	1.4	11.0	12.0		瓦	良好	灰白	N5.7	灰白	N5.7	441
561	4.580	特痕	特痕	特痕	110	1.1	11.2	3.2		瓦	瓦	灰白	N5.7	灰白	N5.7	442
562	4.580	特痕	特痕	特痕	110	1.3	11.4	7.4		瓦	良好	灰黄緑	10.5P6.2	灰白+黄	10.5P7.2	434
563	4.580	特痕	特痕	特痕	110	1.3	10.0	11.0	5.0	瓦	瓦	灰白	10.5P8.1	灰白	10.5P8.1	434
564	4.580	特痕	特痕	特痕	110	1.2	8.0	1.4		中+軽	不具	灰白	10.5P7.1	灰白	10.5P8.1	437

表12 出土土器観察表

報告書 番号	調査 年度	遺跡 名	グリッド No	層位	器種	形状	部位	残存 率	寸法 (cm)			胎土	焼成	色調		備考	実測 No			
									口径	高さ	底径			外面	内面					
664	T 4	S1	Q 1	土師器	須弥	口縁	口縁	1/6	20.4	39.2		良	良好	灰白	N 5/2	灰	N 6/2	内面にスス及び鉄質、黒炭	434	
665	T 4	S1	Q 1	土師器	須弥	口縁	口縁	22.0	39.6			中々	不具	灰白	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	内面にスス、炭化植物片	303	
667	T 4	S1	Q 2	土師器	須弥	口縁	口縁	1/2	22.0	13.5		良	良好	灰白	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1		409	
669	T 4	S1	Q 1 R	土師器	須弥	口縁	口縁	1/2	25.0	6.0		良	良好	灰白	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	内面にスス、炭化植物片	413	
669	T 4	S1	Q 2 R	土師器	須弥	口縁	口縁	1/2	26.2	10.0		良	良好	明褐色	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	内面にスス及び竹	308	
670	T 4	S1	Q 2 R	土師器	須弥	口縁	口縁	1/4	26.2	12.4		良	良好	明褐色	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	内面にスス及び竹	308	
671	T 4	S065	Q 7 R	土師器	須弥	口縁	口縁	1/6	15.8	10.5		良	良好	明褐色	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	口縁にスス及び竹	305	
672	T 4	S1	Q 6 R	土師器	須弥	口縁	口縁	1/3	21.0	4.7		中々	不具	浅褐色	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	口縁にスス及び竹	405	
673	T 4	S1	Q 7 R	土師器	須弥	口縁	口縁		21			中々	不具	浅褐色	N 5/2	灰	N 5/2 2/1	内面にスス及び竹	307	
674	T 4	S065	Q 4 R	土師器	須弥	口縁	口縁	1/4	26.0	4.3		良	良好	浅褐色	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	口縁にスス及び竹	404	
674	T 4	S1	Q 6 R	土師器	須弥	口縁	口縁	1/9	22.0	14.1		中々	不具	明褐色	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	内面にスス、炭化植物片	304	
676	T 4	S065	Q 1 R	土師器	須弥	口縁	口縁		27.4	3.1		良	良好	明褐色	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	口縁にスス及び竹	305	
677	T 4	S1	Q 1 R	土師器	須弥	口縁	口縁	1/6	31.2	30.1		良	良好	明褐色	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	外側にスス及び竹の半部 にスス、炭化植物片	303	
678	T 4	S065	Q 7 R	土師器	須弥	口縁	口縁	1/3	14.3	10.8		中々	不具	浅褐色	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	外側にスス及び竹	1262	
679	T 4	S1	Q 1 R	土師器	須弥	口縁	口縁					中々	不具	明褐色	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	外側にスス及び竹	308	
680	T 4	S1	Q 1 R	土師器	須弥	口縁	口縁					良	良好	浅褐色	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	スス及び竹、炭化植物片	414	
681	T 4	S1	Q 1 R	土師器	須弥	口縁	口縁	1/8	23.2	4.3		中々	不具	浅褐色	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	内面にスス及び竹	308	
682	T 4	S065	Q 2 R	土師器	須弥	口縁	口縁		17.0	12.0		良	良好	明褐色	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	口縁にスス及び竹	304	
682	T 4	S065	Q 2 R	土師器	須弥	口縁	口縁		17.0	12.0		良	良好	明褐色	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	炭化植物片	304	
684	T 4	S1	Q 1 R	土師器	須弥	口縁	口縁	1/12	31			良	良好	灰白	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	内面にスス、炭化植物片	387	
685	T 4	S065	Q 8 R	須弥中	瓦器	土師器	口縁	口縁	1/2	22.7		中々	不具	明褐色	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1		511	
686	T 4	S1	Q 7 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/3	14.0	6.0		良	良好	灰白	N 5/2	明褐色	N 5/2 2/1	器底外面にスス、炭化植物片	403
687	T 4	S1	Q 6 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/16	12.2		良	良好	灰白	N 4/2	灰	N 4/2	全体に炭化植物、外面にスス及び竹	412	
687	T 4	S1	Q 6 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/16	12.2		良	良好	オリーブ	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1		404	
689	T 4	S1	Q 4 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁		12.2		良	良好	明褐色	N 5/2	灰	N 5/2	内面、器下に炭化植物片	403	
689	T 4	S1	Q 2 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁		12.5		良	良好	灰白	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	器底に炭化植物片	303	
691	T 4	S065	R 8 R	須弥	須弥	口縁	口縁		35.1			良	良好	灰白	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1		1043	
692	T 4	S065	R 8 R	須弥	須弥	口縁	口縁	1/8	20.0	22.6		良	良好	灰白	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1		1132	
693	T 4	S065	R 8 R	須弥	須弥	口縁	口縁	1/6	31.4	10.1		中々	不具	灰白	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1		1042	
694	T 4	S065	R 8 R	須弥	須弥	口縁	口縁		32.3			良	良好	灰白	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1		1133	
694	T 4	S065	R 8 R	須弥	須弥	口縁	口縁		32.3			中々	不具	灰白	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1		1133	
695	T 4	S1	Q 2 R	須弥	須弥	口縁	口縁	1/2	11.0	2.0	6.9	良	良好	明褐色	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	口縁にスス及び竹	402	
698	T 4	S065	T 8 R	須弥	須弥	口縁	口縁	1/2	12.0	4.3	樽丸	良	良好	灰白	N 5/2 2/1	明褐色	N 5/2 2/1	口縁にスス及び竹	1104	
699	T 4	S065	T 8 R	須弥	須弥	口縁	口縁		12.4			良	良好	灰白	N 5/2 2/1	明褐色	N 5/2 2/1	口縁にスス及び竹	1109	
701	T 4	S065	R 8 R	須弥	須弥	口縁	口縁	1/8	28.0	29.5		中々	不具	明褐色	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	口縁にスス及び竹	1162	
702	T 4	S065	R 8 R	須弥	須弥	口縁	口縁	1/8	28.0	14.7		良	良好	明褐色	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	口縁にスス及び竹	1162	
704	T 4	S1	Q 6 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/2	22.8	8.0		良	良好	灰白	N 5/2 2/1	明褐色	N 5/2 2/1	口縁にスス及び竹	425
705	T 4	S1	Q 6 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/8	13.0	3.4		良	良好	灰白	N 4/2	灰	N 5/2	内面にスス及び竹	328
706	T 4	S1	Q 4 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/2	14.2	4.1	4.7	精良	良好	灰	N 6/2	灰	N 6/2		338
707	T 4	S065	Q 8 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/2	13.8	3.4	4.5	中々	不具	明褐色	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1		405
708	T 4	S1	Q 4 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/4	14.4	3.3		良	良好	灰白	N 4/2	灰	N 4/2		383
709	T 4	S065	Q 8 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/2	13.2	3.7		良	良好	灰白	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	全体に炭化植物片	406
710	T 4	S065	Q 7 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/2	13.2	3.8		良	良好	灰	N 5/2	灰	N 5/2	高台が磨滅している	414
711	T 4	S1	Q 7 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/2	13.4	3.6		良	良好	灰	N 8/2	灰	N 6/2	底面磨滅にスス及び竹 残片が遺る	354
712	T 4	S1	Q 7 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/3	15.0	3.8		中々	不具	明褐色	N 5/2	灰	N 5/2	底面磨滅にスス及び竹 残片が遺る	362
713	T 4	S065	Q 7 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/3	14.0	3.9		良	良好	明褐色	N 5/2	灰	N 5/2	高台が磨滅している	407
714	T 4	S1	Q 1 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/2	13.9	14.1		良	良好	灰	N 4/2	灰	N 5/2 2/1	全体に炭化植物片	362
715	T 4	S1	Q 7 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/2	12.8	3.9		良	良好	灰	N 5/2	灰	N 5/2		352
716	T 4	S1	Q 7 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/4	14.8	4.2		良	良好	明褐色	N 5/2	灰	N 5/2		304
717	T 4	S065	R 8 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/6	13.6	3.7		良	良好	灰	N 6/2	灰	N 6/2		1155
718	T 4	S065	Q 8 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/8	13.9	3.7	3.8	中々	不具	灰	N 6/2	灰	N 6/2	全体に炭化植物片	410
719	T 4	S1	Q 6 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/4	12.0	3.7	2.5	良	良好	明褐色	N 4/2	灰	N 4/2	器底に器底が磨滅している	328
720	T 4	S1	Q 7 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	3/4	13.2	4.9	4.4	良	良好	明褐色	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	高台が磨滅している	403
721	T 4	S065	Q 8 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/2	13.3	3.6	5.2	良	良好	灰	N 4/2	灰	N 4/2		385
722	T 4	S1	Q 7 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/2	12.6	3.0	5.0	良	良好	灰	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1		352
723	T 4	S1	Q 6 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/2	13.4	3.7	4.8	良	良好	灰	N 6/2	灰	N 5/2 2/1		337
724	T 4	S065	Q 8 R	須弥中	瓦器	土師器	口縁	口縁	1/3	13.7	4.0	4.0	中々	不具	灰	N 5/2	灰	N 5/2	全体に炭化植物片	407
725	T 4	S1	Q 7 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/2	14.0	3.2	4.8	良	良好	灰	N 4/2	灰	N 4/2	全体に炭化植物片	381
726	T 4	S1	Q 6 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/4	14.0	3.9	4.7	精良	良好	灰	N 4/2	灰	N 4/2	足先を中心に磨滅している	329
727	T 4	S065	Q 8 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/2	13.9	3.7	4.4	良	良好	灰	N 6/2	灰	N 5/2		406
728	T 4	S065	Q 8 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/2	13.8	3.6	4.7	良	良好	灰	N 6/2	灰	N 5/2		403
729	T 4	S065	Q 8 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/2	13.8	3.9	4.0	良	良好	灰	N 4/2	灰	N 4/2		404
730	T 4	S1	Q 7 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/3	14.0	3.5	5.1	良	良好	明褐色	N 5/2	灰	N 5/2	全体に中々炭化植物片	404
731	T 4	S065	Q 7 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/6	14.0	3.2	4.0	良	良好	灰	N 8/2	灰	N 8/2	炭化植物片	343
732	T 4	S065	Q 8 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	2/3	14.0	3.7	4.8	良	良好	明褐色	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1		404
733	T 4	S1	Q 2 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	4/9	14.0	3.9		良	良好	明褐色	N 5/2	灰	N 5/2	器底のふち裏面が 欠けている	323
734	T 4	S1	Q 7 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/1	14.0	3.7	4.2	良	不具	灰	N 4/2	灰	N 4/2	全体に炭化植物片	330
735	T 4	S1	Q 7 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/2	13.8	4.2	4.8	良	良好	黄褐色	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	炭化植物片	330
736	T 4	S1	Q 7 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/2	13.8	3.5	4.5	良	良好	灰	N 5/2	灰	N 4/2	内面に炭化植物片	344
737	T 4	S065	Q 7 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/4	14.2	4.5	4.5	良	良好	灰	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	全体に炭化植物片	403
738	T 4	S065	Q 7 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	3/4	13.9	4.3	3.9	中々	不具	明褐色	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	全体に炭化植物片	402
739	T 4	S065	Q 7 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/2	13.9	4.3	5.0	良	良好	灰	N 4/2	灰	N 4/2	炭化植物片	402
740	T 4	S065	Q 7 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/2	14.6	4.2	4.0	良	良好	灰	N 5/2 2/1	灰	N 5/2 2/1	全体に炭化植物片	402
741	T 4	S1	Q 3 R	瓦器	土師器	須弥	口縁	口縁	1/1	13.9	3.9	4.6	良	良好	明褐色					

表13 出土土器観察表

報告 No.	調査 No.	遺跡No.	ブツID	層位	器種	器形	部位	現存 状況	寸法 (cm)	加工 状況	色澤				備考	実測 No.		
											外面	内面	口縁	底面				
743	T.5.S865	Q4R区	丸部	丸	口	口	1/4	15.1	4.2	4.2	中々焼	黒	黒	黒	黒	割線あり	463	
744	T.5.S865	Q2R区	丸部	丸	口	口	1/2	15.1	3.9	3.9	丸	黒	黒	黒	丸		464	
745	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	1/1	15.0	4.2	3.4	中々焼	黒	白	2.5R8/1	黒	2.5R/1	全体に割線多い	323
746	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	1/4	15.0	4.5	4.5	丸	黒	黒	N5/1	黒	N5/1		363
747	T.5.S865	T4R区	丸部	丸	口	口	1/2	15.0	3.6	4.0	丸	黒	黒	2.5R8/2	黒	10R8/2		1124
748	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	3/5	13.9	4.4	4.6	丸	黒	暗灰	N3/1	黒	N3/1	内面に口縁が直すに割線あり	204
749	T.5.S865	T4R区	丸部	丸	口	口	1/4	15.0	3.7	3.6	丸	黒	黒	N4/1	黒	N4/1		1123
750	T.5.S865	Q2R区	丸部	丸	口	口	1/2	15.0	3.9	3.9	丸	黒	黒	N7/1	黒	N7/1		465
751	T.5.S865	Q2R区	丸部	丸	口	口	1/3	15.2	3.4	3.3	中々焼	黒	暗黄	3.5R3/1	黒	3.5R3/1		466
752	T.5.S865	Q2R区	丸部	丸	口	口	2/3	15.2	4.3	4.6	丸	黒	黒	N3/1	黒	N4/1		493
753	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	1/2	15.0	4.1	4.6	丸	黒	暗灰	N3/1	黒	N4/1		341
754	T.5.S865	T4R区	丸部	丸	口	口	1/2	15.0	3.6	4.0	丸	黒	暗灰	N3/1	黒	N4/1		1121
755	T.5.S865	Q2R区	丸部	丸	口	口	1/4	15.0	3.9	4.0	丸	黒	黒	N4/1	黒	N4/1		473
756	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	1/2	15.0	3.5	3.4	丸	黒	黒	N6/1	黒	N4/1		339
757	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	1/2	15.0	4.5	4.4	丸	黒	黒	N5/1	黒	N4/1	中々割線あり	204
758	T.4.S1	Q4R区	丸部	丸	口	口	1/3	15.0	4.0	4.8	丸	黒	黒	N4/1	黒	N4/1		335
759	T.5.S865	Q2R区	丸部	丸	口	口	4/5	15.0	3.7	4.2	丸	黒	白	N8/1	黒	N8/1		468
760	T.5.S865	Q2R区	丸部	丸	口	口	1/4	15.0	3.7	4.2	丸	黒	白	N8/1	黒	N8/1		471
761	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	1/1	15.0	4.0	4.0	丸	黒	白	N8/1	黒	N8/1		411
762	T.5.S865	Q2R区	丸部	丸	口	口	1/4	15.0	3.9	4.0	丸	黒	黒	N7/1	黒	N4/1		472
763	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	1/1	15.1	3.7	4.4	中々焼	黒	明灰	7.5R7/2	黒	N3/1		349
764	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	1/2	15.0	3.8	3.8	丸	黒	黒	N3/1	黒	N3/1		378
765	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	1/2	15.0	3.1	3.2	丸	黒	暗黄	3.5R3/1	黒	3.5R3/1		348
766	T.5.S865	Q2R区	丸部	丸	口	口	1/4	15.0	3.6	3.7	4.4	丸	黒	N4/1	黒	N4/1	口より割線	496
767	T.5.S865	T4R区	丸部	丸	口	口	1/3	15.2	3.2	4.4	丸	黒	白	N7/1	黒	N7/1		1120
768	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	1/3	15.6	3.8	4.0	焼	黒	灰	5.5R/1	黒	N8/1		332
769	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	1/4	15.0	4.0	3.0	中々焼	黒	暗黄	3.5R4/1	黒	3.5R4/1		362
770	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	3/2	15.0	4.2	4.2	中々焼	黒	暗黄	3.5R4/1	黒	3.5R4/1	全体に割線あり	363
771	T.5.S865	Q2R区	丸部	丸	口	口	1/4	15.0	3.7	3.8	不焼	白	白	10 V 8/1	黒	N3/1		904
772	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	1/1	15.0	3.3	3.6	丸	黒	白	N7/1	黒	N3/1	中々割線あり	414
773	T.4.S1	Q2R区	丸部	丸	口	口	1/1	15.4	4.0	3.6	丸	黒	黒	N4/1	黒	N4/1		427
774	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	2/3	15.4	3.5	4.2	丸	黒	暗黄	3.5R4/1	黒	3.5R4/1		338
775	T.5.S865	Q2R区	丸部	丸	口	口	1/3	15.2	3.7	3.7	丸	黒	白	3.5R/1	黒	3.5R/1		491
776	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	1/2	14.4	3.8	4.6	丸	黒	黒	3.5R3/1	黒	3.5R3/1		352
777	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	1/4	15.2	4.1	3.4	丸	黒	黒	3.5R2/1	黒	3.5R2/1		353
778	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	1/4	15.0	4.0	3.4	中々焼	黒	暗黄	3.5R4/1	黒	3.5R4/1		364
779	T.5.S865	Q2R区	丸部	丸	口	口	1/1	15.1	4.1	3.4	丸	黒	黒	N5/1	黒	N5/1	表面割道に2次的女士の付着	471
780	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	1/2	15.2	4.0	4.5	丸	黒	黒	3.5R4/1	黒	3.5R4/1	丈夫な作り	354
781	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	1/3	15.4	3.5	3.3	焼	黒	黒	N3/1	黒	N3/1	全体に割線あり	324
782	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	1/4	15.4	4.8		丸	黒	黒	N3/1	黒	N3/1	丈夫、割道あり	355
783	T.4.S1	Q2R区	丸部	丸	口	口	1/1	15.2	4.3	4.4	丸	黒	黒	N3/1	黒	N3/1		413
784	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	1/3	15.4	3.3	3.3	丸	黒	暗灰	N4/1	黒	3.5R/1		341
785	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	2/3	15.2	3.4	3.8	丸	黒	黒	N4/1	黒	N4/1	つやあり	342
786	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	1/4	15.1	4.0		丸	黒	黒	N3/1	黒	N3/1		364
787	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	1/4	15.4	3.8		丸	黒	黒	N4/1	黒	N3/1	表面割道に鉄分付着	363
788	T.4.S1	Q1R区	丸部	丸	口	口	1/2	15.2	3.9	4.0	丸	黒	黒	N4/1	黒	N4/1		341
792	T.4.S3	5R区	土埴器	土	口	口	1/4	7.5	0.9		丸	黒	白	10R8/2	黒	3.5R4/2		528
793	T.5.S840	5R区	土埴器	土	口	口	1/1	7.2	1.3		丸	黒	白	10R8/2	黒	3.5R4/2		540
794	T.4.S3	5R区	土埴器	土	口	口	1/3	8.1	1.3		丸	黒	白	10R8/2	黒	3.5R4/2		529
795	T.5.S840	5R区	土埴器	土	口	口	1/4	7.8	1.3		丸	黒	白	10R8/2	黒	10R8/2		528
796	T.4.S3	5R区	土埴器	土	口	口	1/6	8.1	1.0		丸	黒	白	10R8/2	黒	10R8/2	割線あり	524
797	T.4.S3	5R区	土埴器	土	口	口	1/6	8.2	1.3		丸	黒	白	10R8/2	黒	10R8/2		523
798	T.4.S3	5R区	土埴器	土	口	口	1/2	8.3	1.6		丸	黒	暗黄	10R8/2	黒	3.5R4/2		513
799	T.4.S3	5R区	土埴器	土	口	口	1/5	8.5	1.6		丸	黒	白	10R8/2	黒	10R8/2		528
800	T.4.S3	5R区	土埴器	土	口	口	1/3	8.5	1.8		丸	黒	暗黄	10R8/2	黒	10R8/2		523
801	T.4.S3	5R区	土埴器	土	口	口	1/3	8.0	1.9		丸	黒	白	10R8/2	黒	3.5R4/2	全体に割線が多い	525
802	T.5.S840	5R区	土埴器	土	口	口	1/4	8.2	1.7		丸	黒	白	10R8/2	黒	10R8/2		1128
803	T.4.S3	5R区	土埴器	土	口	口	1/4	8.2	2.0		丸	黒	明灰	7.5R7/2	明灰	7.5R7/2		514
804	T.5.S840	土埴器	土	口	口	口	1/10	11.0			丸	黒	黒	2.5R8/4	黒	2.5R8/4		539
805	T.5.S840	土埴器	土	口	口	口	1/4	7.8	1.5		丸	黒	明灰	7.5R7/1	黒	10R8/2		1129
806	T.5.S840	5R区	土埴器	土	口	口	1/10				丸	黒	N8/1	黒	N8/1	割線のため調整不明	1129	
807	T.4.S3	5R区	土埴器	土	口	口	1/3	10.0	2.0		丸	黒	N4/1	黒	N4/1		513	
808	T.4.S3	5R区	土埴器	土	口	口	1/10	12.8	3.4		中々焼	不灰	青	3.5R6/1	黒	3.5R6/1		523
809	T.5.S840	5R区	土埴器	土	口	口	1/4	10.0	2.0		丸	黒	黒	N3/1	黒	N3/1		541
810	T.4.S3	5R区	土埴器	土	口	口	1/5	10.0	3.0		丸	黒	黒	N3/1	黒	N3/1		542
811	T.4.S3	5R区	土埴器	土	口	口	1/4	10.4	3.4		丸	黒	黒	N4/1	黒	N4/1		543
812	T.4.S3	5R区	土埴器	土	口	口	1/10	10.2	1.1		丸	黒	黒	N3/1	黒	N3/1		527
813	T.5.S840	5R区	土埴器	土	口	口	1/6	10.0	3.0		丸	黒	黒	N3/1	黒	N3/1		1128
814	T.4.S3	5R区	土埴器	土	口	口	1/3	10.0	3.5	3.4	丸	黒	黒	N3/1	黒	N3/1		529
815	T.4.S3	5R区	土埴器	土	口	口	1/6	10.4	3.0		丸	黒	黒	N4/1	黒	N4/1		344
816	T.4.S3	5R区	土埴器	土	口	口	1/4	10.8	4.1	4.6	丸	黒	黒	3.5R7/1	黒	N4/1		525
817	T.4.S3	5R区	土埴器	土	口	口	1/6	10.4	3.3	3.3	丸	黒	白	N6/1	黒	N6/1		528
818	T.4.S3	5R区	土埴器	土	口	口	1/3	10.0	3.9	4.2	丸	黒	黒	N3/1	黒	N3/1		871
819	T.4.S3	5R区	土埴器	土	口	口	1/4	10.4	3.6	4.0	丸	黒	黒	N4/1	黒	N4/1		523
820	T.4.S3	5R区	土埴器	土	口	口	1/10	10.4	4.1	4.2	中々焼	不灰	黒	N3/1	黒	N3/1		524
821	T.5.S840	5R区	土埴器	土	口	口	1/10				中々焼	不灰	黒	3.5R7/2	黒	3.5R7/1		1128
822	T.5.S840	5R区	土埴器	土	口	口	1/10				中々焼	不灰	黒	N7/1	黒	N6/1		1130
823	T.5.S840	5R区	土埴器	土	口	口	1/10				丸	暗黄	10R8/2	黒	10R8/2		1131	
824	T.5.S840	5R区	土埴器	土	口	口	1/2				中々焼	不灰	黒	7.5R7/1	黒	7.5R7/1	表面の割線が多い	1132
825	T.4.S3	5R区	土埴器	土	口	口	1/10				丸	黒	2.5R8/1	黒	2.5R7/1	全体に割線が多い	523	
826	T.2.S840	1号墓	棺室	障	障	障	1/6	27.0	10.1		丸	黒	白	10R8/4	白	10R8/4	1号一室墓	125
827	T.3.S840	土埴器	障	障	障	障	1/5	13.8	13.8		丸	黒	白	10R8/2	黒	10R8/2	表裏使用	307
828	T.4.S3	5R区	土埴器	土	口	口	1/5	10.3	14.3		丸	黒	暗黄	3.5R7/1	黒	3.5R7/1	割線あり	527

表14 出土土器観察表

報告書 番号	調査 年度	遺跡 名	グランド No	層位	器種	形状	部位	保存 状態	数量 (個)	出土 状況	焼成	色調	備考	実測 No				
									口徑	高さ	底径	外面		内面				
829	T. 519	S21区		瓦部	甕	胴	胴	1.12	8.0	1.5	良	灰	2.5YR 7/1	灰白	1.5YR 6/1	331		
830	T. 519	S21区		土器部	甕	胴	胴	1.75	8.0	1.5	良	明褐色	2.5YR 7/2	1.5-6.5Y 7/2	2.5YR 7/2	332		
831	T. 519	S21区		土器部	甕	胴	胴	1.75	7.2	1.2	良	灰	浅黄褐色	7.5YR 8/3	1.5-6.5Y 7/2	2.5YR 7/2	333	
832	T. 519	S21区		土器部	甕	胴	胴	1.75	8.2	1.3	良	不貞	浅黄褐色	10YR 8/4	浅黄褐色	10YR 8/3	335	
833	T. 519	S21区		土器部	甕	胴	胴	1.72	8.0	1.3	良	灰好	灰白	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	336	
834	T. 519	S21区		土器部	甕	胴	胴	1.76	8.0	1.4	良	灰好	灰白	10YR 8/2	灰白	10YR 8/2	337	
835	T. 519	S21区		土器部	甕	胴	胴	1.75	8.0	1.0(1.1)	良	灰好	灰白	10YR 8/2	灰白	10YR 8/2	338	
836	T. 519	S21区		土器部	甕	胴	胴	1.74	8.6	1.5	良	灰	明褐色	7.5YR 7/2	1.5-6.5Y 7/2	2.5YR 7/2	337	
837	T. 519	S21区		土器部	甕	胴	胴	1.71	8.2	1.5	良	灰	灰白	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	340	
838	T. 519	S21区		土器部	甕	胴	胴	1.74	8.2	1.4	良	灰	浅黄褐色	10YR 8/3	灰白	10YR 8/2	341	
839	T. 519	S21区		土器部	甕	胴	胴	1.72	13.2	3.3	良	灰好	灰白	10YR 8/2	灰白	10YR 8/2	342	
840	T. 519	S21区		瓦部	甕	胴	胴	1.72	13.2	3.2(1)	良	灰好	灰	N 6/	灰	N 6/	343	
841	T. 519	S21区		瓦部	甕	胴	胴	1.77	14.0	2.9	良	灰	灰	N 5/	灰	N 5/	351	
842	T. 519	S21区		瓦部	甕	胴	胴	1.78	13.2	3.4	良	灰	灰	N 5/	灰	N 5/	352	
843	T. 519	S21区		瓦部	甕	胴	胴	1.78	13.0	2.9	良	灰	灰白	N 6/	灰白	N 6/	353	
844	T. 519	S21区		瓦部	甕	胴	胴	1.76	13.2	3.2	良	灰	灰	N 5/	灰	N 5/	354	
845	T. 519	S21区		瓦部	甕	胴	胴	1.70	14.0	4.0	良	灰	灰	N 5/	灰	N 5/	355	
846	T. 519	S21区		瓦部	胴	口	口	1.2	14.0	3.5	4.5	良	灰好	灰	N 5/	灰	N 5/	特約の器ナメタが明確に焼成
847	T. 519	S21区		瓦部	甕	胴	胴	1.71	10.9	4.7	中々	不貞	灰	N 6/	灰	N 6/	360	
848	T. 519	S21区		瓦部	甕	胴	胴	1.75	11.0	5.0	良	灰好	灰	N 5/	灰	N 5/	363	
849	T. 520			瓦部	甕	胴	胴	1.70	12.0	2.0	良	灰	青灰	5YR 5/1	青灰	5YR 5/1	365	
850	T. 520			瓦部	甕	胴	胴	1.70	11.0	2.0	良	灰	灰	N 5/	灰	N 5/	369	
851	T. 520			土器部	甕	胴	胴	1.70	11.0	2.0	良	灰	1.5-6.5Y 7/4	黄	5YR 7/4	黄	5YR 7/4	369
852	T. 520			土器部	甕	胴	胴	1.72	12.0	2.0	良	灰好	灰	N 5/	灰	N 5/	370	
853	T. 520	S22	灰白磁部	瓦部	甕	胴	胴	1.70	14.0	3.4	良	灰好	灰	7.5Y 4/1	暗灰	7.5Y 4/1	721	
854	T. 520	S23	Q1	瓦部	甕	胴	胴	1.78	13.0	3.0	良	灰好	灰白	5Y 7/1	灰	7.5Y 4/1	722	
856	T. 520	S23	Q1	瓦部	甕	胴	胴	1.74	13.8	4.3	4.6	良	灰	10Y 6/1	灰	10Y 6/1	723	
857	T. 520	S23	Q2	灰白磁部	瓦部	甕	胴	1.72	14.0	3.2	4.0	良	灰	N 4/	灰	N 4/	725	
858	T. 520	S23	Q2	灰白磁部	瓦部	甕	胴	1.78	14.0	3.7	良	灰好	灰	5Y 6/2	黄	5Y 6/2	726	
859	T. 520	S23	Q2	灰白磁部	土器部	皿	口	1.5	24.0	0.4	中々	不貞	1.5-6.5Y 7/3	1.5-6.5Y 7/3	1.5-6.5Y 7/3	727		
860	T. 520	S23	Q2	灰白磁部	土器部	皿	口	1.5	24.0	0.4	中々	不貞	1.5-6.5Y 7/4	黄褐色	10YR 7/8	728		
861	T. 520	S23	Q2	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	灰	浅黄	5YR 8/2	灰白	10YR 8/2	729	
862	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	灰	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	730		
863	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	731	
864	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	732	
865	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	733	
866	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	734	
867	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	735	
868	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	736	
869	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	737	
870	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	738	
871	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	739	
872	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	740	
873	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	741	
874	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	742	
875	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	743	
876	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	744	
877	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	745	
878	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	746	
879	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	747	
880	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	748	
881	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	749	
882	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	750	
883	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	751	
884	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	752	
885	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	753	
886	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	754	
887	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	755	
888	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	756	
889	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	757	
890	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	758	
891	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	759	
892	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	760	
893	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	761	
894	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	762	
895	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	763	
896	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	764	
897	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	765	
898	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	766	
899	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	767	
900	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	768	
901	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	769	
902	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	770	
903	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	771	
904	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	772	
905	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	773	
906	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	774	
907	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	775	
908	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	776	
909	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部	鉢	底	1.12	22.0	6.3	良	中々	不貞	10YR 8/2	浅黄褐色	10YR 8/2	777	
910	T. 520	S23	Q1	灰白磁部	土器部													

表15 出土土器観察表

報告 No.	調査 No.	遺跡No.	ブツID No.	層位	器種	器形	部位	現存 状況	寸法 (cm)		加工	焼成	色面		備考	実高 No.		
									口徑	器高			外面	内面				
3001	7-4	S1014	瓦部	陶	土師	口縁	2.9	0.9	良	良	灰	灰	N4	灰	262			
3002	7-4	S1014	土師部	陶	土師	1/4	4.8	1.0	良	良	灰	灰	3YR7/2	灰白	262			
3003	7-4	S1014	土師部	陶	土師	1/2	8.0	1.4	良	良好	灰黄緑	灰黄緑	10YR8/3	灰黄緑	263			
3004	7-4	S1014	瓦部	陶	底面	底面	11.1		良	良	灰	灰	N3	灰	263			
3024	7-4	S1014	瓦部	陶	土師	底面	22.3		良	良好	灰黄	灰黄	2.5Y6/1	灰黄	272			
3027	7-4	S82	土師部	陶	土師	底面	8.1	1.7	中々	不	灰黄	灰黄	7.5YR8/4	灰黄	775			
3028	7-4	S82	土師部	陶	土師	1/2	8.6	1.4	中々	不	灰黄	灰白	10YR8/7	灰白	775			
3025	7-4	S82	土師部	陶	土師	1/4	8.4	1.3	良	良好	灰白	灰白	7.5YR8/2	灰白	733			
3026	7-4	S82	土師部	陶	土師	底面	12.0	2.4	良	良	灰白	灰白	10YR8/2	白	733			
3027	7-4	S82	土師部	陶	土師	1/4	22	2.4	良	良	灰白	灰白	10YR8/7	灰白	733			
3028	7-4	S82	瓦部	陶	土師	1/4	13.8	3.1	良	良	灰白	灰白	N7	灰白	733			
3029	7-4	S82	瓦部	陶	土師	底面	22	4	良	良	灰	灰	N4	灰	728			
3030	7-4	S82	瓦部	陶	土師	1/2	14.5	3.1	良	良好	灰	灰	N4	灰	728			
3031	7-4	S82	瓦部	陶	土師	1/2	14.4	3.2	良	良	灰	灰	N6	灰	727			
3032	7-4	S82	瓦部	陶	土師	底面	22	4	良	良	灰	灰	N6	灰	728			
3033	7-4	S82	瓦部	陶	土師	底面	11	4	中々	不	灰	青灰	3PB5/1	青灰	728			
3034	7-4	S1010	瓦部	陶	土師	1/2	14.3	2.6	良	良好	灰	灰	N4	灰	764			
3035	7-4	S1010	土師部	陶	土師	底面	11	7	良	良	灰白	灰白	10YR8/2	灰白	763			
3036	7-4	S1010	瓦部	陶	土師	1/4	7.8	1.6	良	良	灰白	灰白	10YR8/2	灰白	763			
3027	7-4	S1011	信楽	信楽	信楽	底面	15	7	良	良	明緑	明緑	3YR7/2	明緑	262			
3038	7-4	S1011	瓦部	陶	底面	13	4	8	良	良	灰黄緑	灰黄緑	10YR8/7	灰白	272			
3039	7-4	S1028	青磁	陶	底面	11	2	8	良	良	灰黄	灰黄	3Y6/2	灰黄	839			
3040	7-4	S1028	瓦部	陶	底面	22	4	8	良	良	灰	灰	N6	灰	839			
3412	7-4	S1480	土師部	出雲	出雲	底面	18	7	中々	不	灰	灰	3Y 2/1	灰黄緑	10YR8/3	873		
3413	7-4	S1480	土師部	出雲	出雲	底面	18	7	良	良好	灰白	灰白	10YR8/2	灰白	873			
3423	7-4	S19	瓦部	陶	土師	1/4	13.8	3.3	良	良	灰	灰	N4	灰	544			
3444	7-4	S131	瓦部	陶	土師	底面	11	7	良	良	灰	灰	10YR8/7	灰	544			
3443	7-4	S1318	瓦部	陶	土師	底面	11	3	中々	不	灰黄緑	灰黄緑	10YR8/3	灰黄緑	262			
3446	7-4	S21	瓦部	陶	底面	1/5	11.0	3.0	良	良	灰	灰	N6	灰	504			
3447	7-4	S28	土師部	陶	口縁	1/7	7.3	1.7	良	良	灰黄	灰黄	7.5YR8/3	白	10YR8/4	644		
3448	7-4	S31	瓦部	陶	口縁	1/5	7.8	1.7	良	良好	灰	灰	N3	灰	N3	623		
3449	7-4	S35	瓦部	陶	土師	底面	8.0	1.7	良	良	灰白	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	623		
3003	7-4	S37	瓦部	陶	土師	1/8	14.8	2.2	良	良	灰	灰	N4	灰	603			
3011	7-4	S37	瓦部	陶	土師	底面	12	10	良	良好	灰	灰	N4	灰	603			
3024	7-4	S37	瓦部	陶	土師	底面	22	4	良	不	灰白	灰白	7.5Y8/1	灰白	603			
3025	7-4	S38	瓦部	陶	土師	1/2	9.4	1.3	良	良	灰	灰	3.5Y 1/1	灰	663			
3024	7-4	S38	瓦部	陶	土師	1/2	14.8	2.2	良	良	灰	灰	N4	灰	663			
3064	7-4	S40	瓦部	陶	土師	底面	22	11	中々	不	灰	灰	N4	灰	563			
3064	7-4	S40	瓦部	陶	土師	底面	14.0	2.3	中々	不	灰	灰	N3	灰	663			
3072	7-4	S40	瓦部	陶	土師	底面	22	11	中々	不	灰	灰	N3	灰	663			
3068	7-4	S40	瓦部	陶	土師	底面	1/5	11.0	4.8	良	良好	灰	灰	N4	灰	664		
3069	7-4	S40	瓦部	陶	土師	底面	22	11	良	良	灰	灰	N3	灰	663			
3091	7-4	S43	瓦部	陶	土師	底面	11	6	良	良	灰	灰	N3	灰	N3	663		
3091	7-4	S48	瓦部	陶	土師	底面	11	6	良	良好	灰	灰	N3	灰	N3	663		
3092	7-4	S49	土師部	陶	土師	1/4	7.7	1.4	良	良好	灰黄緑	灰黄緑	10YR8/3	明	7.5YR7/6	全体に磨滅が著しい	599	
3064	7-4	S56	土師部	陶	土師	底面	11	12	良	良	灰黄	灰黄	2.5Y8/3	灰白	2.5Y8/2	623		
3064	7-4	S56	土師部	陶	土師	底面	11	12	良	良好	灰黄緑	灰黄緑	10YR8/3	灰白	10YR8/2	503		
3064	7-4	S59	瓦部	陶	土師	底面	11	12	良	良好	灰	灰	3Y 1/1	灰	3Y 1/1	603		
3066	7-4	S64	瓦部	陶	土師	1/4	7.7	1.7	良	良	灰白	灰白	7.5YR8/1	明	7.5YR7/6	全体に磨滅が著しい	606	
3067	7-4	S64	瓦部	陶	土師	底面	11	13	良	晴黄	晴黄	3PB5/1	晴黄	3PB5/1	603			
3068	7-4	S64	瓦部	陶	土師	底面	22	10	良	良好	灰	灰	N3	灰	N3	603		
3064	7-4	S66	青磁	陶	土師	底面	11	12	良	良好	灰黄	灰黄	3Y6/2	灰黄	3Y6/2	見込みは磨滅あり	608	
3070	7-4	S68	瓦部	陶	土師	底面	22	7	良	良好	灰白	灰白	7.5Y8/1	灰白	7.5Y8/1	取巻平足	613	
3071	7-4	S68	瓦部	陶	土師	底面	22	10	良	良好	灰	灰	N4	灰	N4	613		
3072	7-4	S68	瓦部	陶	土師	底面	15	9	良	良	灰	灰	N3	灰	N6	612		
3073	7-4	S70	瓦部	陶	土師	底面	22	3	中々	不	灰	灰	N3	灰	N6	628		
3074	7-4	S71	瓦部	陶	土師	底面	1/6	8.1	1.2	良	良	灰	灰	10YR8/7	灰白	10YR8/2	628	
3075	7-4	S71	瓦部	陶	土師	底面	1/8	7.0	1.1	良	良好	灰黄	灰黄	10YR8/3	灰白	7.5YR7/6	628	
3068	7-3	S71	土師部	陶	土師	底面	11	4	2.5	中々	不	良	灰黄緑	10YR8/2	灰黄緑	10YR8/2	磨滅している	238
3073	7-3	S71	瓦部	陶	土師	底面	1/8	8	1.0	中々	不	良	灰白	3Y8/1	灰白	7.5Y8/1	627	
3074	7-4	S72	土師部	陶	土師	1/7	4.4	1.2	良	良	灰	灰	10YR8/7	灰白	10YR8/2	627		
3079	7-4	S73	瓦部	陶	底面	1/2	11.3	4.4	良	良好	灰	灰	N4	灰	N4	643		
3081	7-4	S73	瓦部	陶	土師	1/2	12	11	良	良	灰	灰	N4	灰	N3	643		
3081	7-4	S73	瓦部	陶	土師	底面	11	11	良	良好	灰	灰	N3	灰	N3	644		
3082	7-4	S73	瓦部	陶	土師	底面	1/8	2	8	良	良	灰	灰	N4	灰	N4	644	
3083	7-4	S72	土師部	陶	土師	1/6	8.4	1.2	良	良	白	白	10YR8/7	白	10YR8/2	638		
3084	7-4	S73	瓦部	陶	土師	1/8	13.6	2.6	良	良好	灰	灰	N3	灰	N3	638		
3085	7-4	S73	瓦部	陶	土師	1/9	14.2	3.0	良	良	灰	灰	N4	灰	N4	638		
3086	7-4	S73	瓦部	陶	土師	1/20	15.0	3.7	良	良	灰	灰	N4	灰	N4	641		
3087	7-4	S73	瓦部	陶	土師	底面	1/6	12	3.0	良	良	灰	灰	N4	灰	N4	642	
3088	7-4	S73	瓦部	陶	土師	底面	1/4	11.3	3.6	良	良	灰	灰	N6	灰	N3	643	
3091	7-4	S81	土師部	陶	土師	1/8	8.0	1.2	良	良	灰	灰	2.5Y8/2	灰白	2.5Y8/2	714		
3091	7-4	S81	土師部	陶	土師	1/8	13.9	2.7	良	良	灰	灰	10YR8/7	灰白	2.5Y8/2	714		
3091	7-4	S81	土師部	陶	土師	底面	1/2	8.0	1.3	中々	不	良	灰黄緑	10YR8/4	灰黄緑	10YR8/4	全体に磨滅が著しい	717
3092	7-4	S81	瓦部	陶	土師	1/2	14.5	3.3	良	良好	灰	灰	N4	灰	N4	714		
3091	7-4	S84	瓦部	陶	土師	底面	11	12	中々	不	良	青灰	3PB5/1	青灰	3PB4/1	728		
3091	7-4	S80	瓦部	陶	土師	1/4	12	11	良	良	灰	灰	10YR8/3	灰	7.5Y8/1	728		
3092	7-4	S92	信楽	信楽	信楽	底面	11	12	良	良	灰	灰	3Y6/4	灰	3Y6/4	734		
3096	7-4	S106	瓦部	陶	土師	底面	11	12	良	良	灰	灰	N4	灰	N4	781		
3097	7-4	S106	瓦部	陶	土師	底面	1/2	9	4.4	良	良	灰	灰	N4	灰	N4	784	
3098	7-4	S106	瓦部	陶	土師	底面	1/9	13.9	2.7	良	良	灰	灰	N6	灰	N6	784	
3099	7-4	S106	瓦部	陶	土師	底面	1/2	11.3	4.6	良	良	灰	灰	N3	灰	N3	783	
3100	7-4	S106	瓦部	陶	土師	底面	1/8	11	5	良好	良好	灰	灰	N4	灰	N4	783	
3001	7-4	S106	瓦部	陶	口縁	口縁	8.4	1.2	良	良	灰	灰	N6	灰	N6	782		
3002	7-4	S106	土師部	陶	土師	1/2	8.0	1.4	良	良	灰	灰	10YR8/2	白	10YR8/2	828		
3003	7-4	S106	土師部	陶	土師	底面	11	8	1.3	良	良	灰黄	灰黄	10YR8/3	灰黄	7.5YR8/3	828	
3004	7-4	S106	土師部	陶	土師	底面	1/4	8.0	1.5	良	良	灰	灰	10YR8/3	灰黄	7.5YR8/3	828	
3005	7-4	S106	土師部	陶	土師	底面	1/4	8.0	1.5	良	良	灰	灰	10YR8/3	灰黄	7.5YR8/3	828	
3006	7-4	S106	土師部	陶	土師	底面	1/4	8.0	1.5	良	良	灰	灰	10YR8/3	灰黄	7.5YR8/3	828	
3007	7-4	S106	土師部	陶	土師	底面	1/4	8.0	1.5	良	良	灰	灰	10YR8/3	灰黄	7.5YR8/3	828	
3008	7-4	S106	土師部	陶	土師	底面	1/4	8.0	1.5	良	良	灰	灰	10YR8/3	灰黄	7.5YR8/3	828	
3009	7-4	S106	土師部	陶	土師	底面	1/4	8.0	1.5	良	良	灰	灰	10YR8/3	灰黄	7.5YR8/3	828	

表16 出土土器観察表

報告 調査 地	遺跡No.	ブツID No.	層位	器種	器形	部位	残存 率	重量 (g)		胎土	焼成	色調		備考	実測 値			
								口径	高さ			外面	内面					
3010 T 4 S335				瓦部	甕	底部	1/4	(1.2)	11.0	良	良好	灰	N4	灰	N4	866		
3011 T 4 S335				瓦部	甕	胴部	1/2	(1.3)	5.0	中々	粗	褐色灰	3YR6/1	褐色灰	3YR6/1	852		
3013 T 4 S341				瓦部	甕	胴部	1/3	(1.8)	3.0	良	良	灰	N5	灰	N5	850		
3014 T 4 S342				瓦部	甕	胴部	1/3	(1.9)	4.0	良	良	灰	N5	灰	N5	857		
3016 T 4 S366				土器部	甕	胴部	1/6	7.8	1.3	良	良	褐色灰	3YR8/3	褐色灰	3YR8/3	852		
3016 T 4 S372				瓦部	甕	胴部	1/3	(2.2)	2.7	良	良	灰	N5	灰	N5	852		
3017 T 4 S382				土器部	甕	胴部	1/3	(1.9)	7.9	1.2	良	灰	灰白	5YR8/2	褐色灰	3YR8/3	850	
3018 T 4 S390				瓦部	甕	胴部	1/2	1.8	14.0	3.9	良	良	灰	N5	灰	N5	852	
3019 T 4 S395				瓦部	甕	胴部	1/3	(2.4)	5.4	良	良	褐色灰	3YR5/1	褐色灰	3YR5/1	852		
3020 T 4 S395				瓦部	甕	胴部	1/3	(2.9)	3.0	良	良	灰	灰白	2YR7/2	褐色灰	3YR8/3	850	
3021 T 4 S206				土器部	甕	胴部	1/1	8.0	1.0	良	良	褐色灰	3YR8/4	褐色灰	3YR8/3	843		
3022 T 4 S206				瓦部	甕	底部	3/4	(0.8)	5.0	良	良	灰	N5	灰	N4	844		
3023 T 4 S204				瓦部	甕	胴部	1/2	14.8	12.2	良	良	灰	N4	灰	N4	853		
3024 T 4 S209				瓦部	甕	胴部	1/2	13.6	12.1	良	良	灰	5Y7/1	灰	3Y4/1	全体に褐色が濃い	844	
3025 T 4 S202				土器部	甕	胴部	1/4	8.8	1.2	良	良	褐色灰	3YR7/4	褐色灰	2YR7/4	862		
3026 T 4 S234				土器部	甕	底部	1/3	(0.9)	4.6	良	良	灰	N4	灰	N4	864		
3027 T 4 S412				土器部	甕	胴部	1/1	3.0	3.4	良	小良	褐色灰	3YR8/4	褐色灰	3YR8/3	857		
3028 T 4 S414				瓦部	甕	胴部	1/3	(1.4)	2.0	良	良	灰	N4	灰	N4	1112		
3029 T 4 S406				瓦部	甕	胴部	1/3	(1.9)	1.9	中々	粗	灰	N5	灰	N5	859		
3030 T 4 S48				土器部	甕	胴部	1/3	(1.8)	7.8	1.0	良	良	褐色灰	3YR8/3	褐色灰	3YR8/3	904	
3031 T 4 S48				瓦部	甕	胴部	1/3	(2.4)	2.4	良	良	灰	灰白	3YR8/1	褐色灰	3YR8/3	904	
3032 T 4 S29				瓦部	甕	胴部	1/3	(2.8)	3.0	中々	粗	小良	灰	N5	灰	N5	948	
3033 T 3 坪水溝 掘中	T7区			土器部	甕	胴部	1/3	8.0	1.8	良	良	褐色灰	2YR8/3	褐色灰	2YR8/3	1244		
3034 T 3 坪水溝 掘中	T7区			土器部	甕	胴部	1/4	3.0	1.5	良	良	灰白	3YR8/2	灰白	3YR8/2	1245		
3035 T 3 坪水溝 掘中	T7区			土器部	甕	胴部	1/2	12.0	2.3	良	良	灰白	3YR8/2	灰白	3YR8/2	1245		
3036 T 3 坪水溝 掘中	T7区			土器部	甕	胴部	1/6	8.0	2.3	良	良	灰白	3YR8/2	灰白	3YR8/2	1246		
3037 T 3 東横街中				瓦部	甕	胴部	1/2	14.0	3.6	3.1	良	良	灰白	N8	灰白	N8	1249	
3038 T 3 東横街中				瓦部	甕	胴部	1/3	13.0	13.4	良	良	灰	N4	灰	N4	1249		
3039 T 3 横中	Q4区			青白磁	小	片	1/8	4.2	(1.4)	精良	鮮緑	3YR8/1	灰白	3Y7/1	外縁と器底部分一部釉なし の土器あり	1242		
3040 T 3 横中				灰土	甕	胴部	1/3	(1.8)	3.0	良	良	褐色灰	3YR8/3	褐色灰	3YR8/2	ビニールハウス跡	1242	
3041 T 3 横中	S11区			信楽	甕	胴部	1/3	(1.8)	(1.0)	良	良好	灰	2YR8/2	褐色灰	3YR7/2	1243		
3042 T 3 東横街中	掘中			信楽	甕	胴部	3/4	28.2	16.0	良	良	褐色灰	3YR8/2	褐色灰	3YR8/2	1244		
3043 T 3 坪水溝 掘中	T7区			瓦部	甕	胴部	1/3	(1.4)	4.2	4.6	良	灰	灰白	N7	灰	N3	1254	
3044 T 3 坪水溝 掘中	T7区			瓦部	甕	底部	1/4	(1.4)	5.3	3.0	良	良	灰	N5	灰	N3	1254	
3045 T 3 坪水溝 掘中	T7区			瓦部	甕	底部	1/4	(1.4)	4.0	4.0	良	良	灰	灰白	N7	灰	N4	1253
3046 T 3 坪水溝 掘中	T7区			瓦部	甕	底部	1/2	(1.8)	4.8	4.8	良	良	灰	N5	灰	N4	1253	
3047 T 3 坪水溝 掘中	T7区			瓦部	甕	底部	3/4	(1.2)	2.7	1.4	良好	灰	N4	灰	N4	1253		
3049 T 3 S80	横中			土器部	甕	胴部	1/3	(1.6)	中々	粗	小良	灰	3YR8/2	褐色灰	3YR7/2	940		
3050 T 3 S80	横中			土器部	甕	胴部	1/3	8.0	3.0	中々	粗	小良	褐色灰	2YR7/6	褐色灰	2YR7/6	940	
3051 T 3 S80	横中			土器部	甕	胴部	1/3	7.9	1.0	中々	粗	小良	褐色灰	3YR8/4	褐色灰	2YR7/6	940	
3052 T 3 S80	横中			土器部	甕	胴部	1/3	13.0	2.7	中々	粗	小良	褐色灰	3YR7/2	褐色灰	3YR8/3	944	
3053 T 3 S80	横中			瓦部	甕	胴部	1/2	14.0	3.5	5.0	良	良	灰	N4	灰	N4	946	
3054 T 3 S80	横中			瓦部	甕	胴部	1/3	1.6	14.0	2.6	良	良	褐色灰	N5/1	褐色灰	N5/1	全体に褐色が濃い	942
3055 T 3 S84	横中			土器部	甕	胴部	1/3	1.8	14.2	4.4	良	良	灰	3YR8/2	褐色灰	3YR8/2	942	
3056 T 3 S85	横中			土器部	甕	胴部	1/3	1.12	11.1	4.1	良	良	灰	3YR8/2	褐色灰	3YR8/2	942	
3057 T 3 S85	横中			瓦部	甕	胴部	1/3	(1.9)	中々	粗	小良	褐色灰	3YR4/1	褐色灰	3YR4/1	952		
3058 T 3 S85	横中			瓦部	甕	胴部	1/3	(2.3)	3.0	良	良	褐色灰	2YR7/3	褐色灰	2YR7/3	952		
3059 T 3 S211	横中			瓦部	甕	胴部	1/3	(2.8)	3.0	良	良	灰	N4	灰	N4	949		
3060 T 3 S212	横中			瓦部	甕	胴部	1/3	(1.6)	3.0	良	良	灰	N5	灰	N5	949		
3061 T 3 S29	横中			土器部	甕	胴部	1/3	8.0	1.2	良	良	褐色灰	2YR7/4	褐色灰	3YR8/4	949		
3062 T 3 S29	横中			瓦部	甕	胴部	1/3	1.6	8.0	0.9	良	良	灰	N4	灰	N5	949	
3063 T 3 S109	土瓦屋			瓦部	甕	胴部	1/3	1.8	13.0	3.9	良	良好	灰	3YR8/1	灰白	2YR8/1	全体に褐色が濃い	1004
3064 T 3 S109	土瓦屋			瓦部	甕	胴部	1/3	1.8	12.7	2.5	4.4	良	灰	3YR7/1	灰	N7	1004	
3065 T 3 S176	横中			瓦部	甕	胴部	1/4	(1.3)	4.2	良	良	灰	N4	灰	N5	1002		
3066 T 3 S176	横中			土器部	甕	底部	1/2	8.0	1.4	良	良	明褐色灰	3YR7/2	灰白	3YR8/2	1028		
3067 T 3 S176	横中			土器部	甕	胴部	1/3	1.9	12.0	3.8	良	良	灰土	3YR4/2	褐色灰	3Y7/3	1028	
3068 T 3 S255	横中			瓦部	甕	胴部	1/3	1.8	14.2	3.0	良	良	灰	3YR8/1	灰白	3YR8/1	1089	
3069 T 3 S302	横中			土器部	甕	胴部	1/3	(1.8)	1.2	良	良	灰	3YR8/2	褐色灰	3YR7/2	1103		
3070 T 3 S29	横中			瓦部	甕	胴部	1/1	(1.1)	3.0	中々	粗	小良	灰	N4	灰	N4	1111	
3071 T 3 S29	横中			瓦部	甕	胴部	1/4	12.0	(1.0)	良	良	灰	灰白	N8	灰	N4	1112	
3072 T 3 S29	横中			瓦部	甕	胴部	1/4	1.6	14.8	2.4	良	良	褐色灰	3YR7/2	褐色灰	3YR7/2	褐色が濃い(調査調査不明)	1112
3073 T 3 S611	横中			土器部	甕	胴部	1/3	3.0	1.2	良	良	灰	3YR8/1	灰白	3YR8/1	1275		
3074 T 3 S611	横中			土器部	甕	胴部	1/3	8.0	1.2	良	良	褐色灰	3YR8/1	褐色灰	3YR8/3	1275		
3075 T 3 S263	横中			瓦部	甕	底部	1/3	(1.3)	3.0	良	良	灰	N4	灰	N4	1094		
3076 T 3 S263	横中			瓦部	甕	胴部	1/3	8.0	1.4	良	良	灰	N4	灰	N4	1094		
3077 T 3 S263	横中			瓦部	甕	胴部	1/3	(1.4)	3.0	良	良	灰	3YR2/2	灰	2YR6/8	1274		
3078 T 3 S266	横中			瓦部	甕	胴部	1/3	(1.3)	(1.8)	良	良	灰	N4	灰	N4	1092		
3079 T 3 S266	横中			瓦部	甕	胴部	1/3	(1.3)	(1.9)	中々	粗	良	N4	灰	N4	1092		
3080 T 3 S27	横中			青磁	甕	胴部	1/3	(2.8)	3.0	良	良	灰	灰白	2YR7/2	灰白	2YR7/2	1123	
3081 T 3 S418	横中			瓦部	甕	胴部	1/3	(1.8)	(2.7)	中々	粗	小良	褐色灰	3YR7/1	褐色灰	3YR7/1	1123	
3082 T 3 S49	横中			瓦部	甕	胴部	1/2	13.2	15.7	良	良好	褐色灰	3YR7/1	褐色灰	3YR7/1	高台跡(土器跡)	1271	
3083 T 3 S268	横中			瓦部	甕	胴部	1/3	(1.7)	3.0	良	良	灰	N4	灰	N7	1179		
3084 T 3 S262	横中			瓦部	甕	胴部	1/3	1.8	13.6	3.3	良	良	褐色灰	2YR7/1	褐色灰	2YR7/1	1184	
3085 T 3 S268	横中			瓦部	甕	胴部	1/3	1.8	17.0	1.5	良	良	褐色灰	3YR8/3	褐色灰	3YR8/3	1282	
3086 T 3 S616	横中			土器部	甕	胴部	1/3	1.12	12.0	1.7	中々	粗	褐色灰	3YR8/3	褐色灰	3YR8/3	1284	
3087 T 3 S616	横中			土器部	甕	底部	1/3	(1.3)	3.5	良	良	褐色灰	3YR7/4	褐色灰	2YR7/6	1284		
3088 T 3 S260	横中			土器部	豆鉢	胴部	1/3	(1.9)	(2.2)	良	良	褐色灰	3YR8/2	褐色灰	3YR5/2	1285		
3089 T 3 S267	横中			土器部	豆鉢	胴部	1/3	(1.9)	(2.2)	良	良	褐色灰	3YR7/2	褐色灰	3YR7/2	1285		
3090 T 3 S261	横中			土器部	豆鉢	胴部	1/3	1.2	13.0	3.5	良	良	褐色灰	3YR8/2	褐色灰	3YR8/2	一般調査区	1285
3091 T 3 S284	横中			土器部	甕	胴部	1/3	1.4	8.0	1.1	中々	粗	褐色灰	3YR8/2	褐色灰	3YR8/2	1252	
3092 T 3 S282	横中			土器部	甕	胴部	1/3	(1.3)	12.0	1.1	良	良	灰	N4	灰	N4	1252	
3093 T 3 S282	横中			土器部	豆鉢	胴部	1/3	(1.3)	11.9	良	良	褐色灰	3YR7/3	褐色灰	3YR7/3	1252		
3094 T 3 S282	横中			瓦部	甕	胴部	1/3	1.12	11.9	良	良	褐色灰	3Y7/1	褐色灰	3Y7/1	1252		
3095 T 3 S283	横中			瓦部	甕	胴部	1/3	(2.7)	3.0	良	良	褐色灰	N3	褐色灰	N3	1280		
3096 T 3 S292	横中			葉形	器蓋	高台	1/4	14.0	13.0	良	良	灰	灰白	3YR7/1	灰白	2YR8/1	1062	
3097 T 3 S292	横中			瓦部	甕	胴部	1/3	(2.1)	3.0	良	良好	灰	3Y7/1	灰白	3Y7/1	1062		
3098 T 3 S260	横中			土器部	甕	胴部	1/3	1.2	8.2	1.4	良	良	灰	3YR8/2	灰白	3YR8/2	1143	

表18 出土土器観察表

報告書 番号	調査 年度	遺跡 名	グランド No	層位	器種	器形	形状	保存 率	寸法 (cm)			胎土	焼成	色調		備考	実測 No
									口徑	高さ	底径			外面	内面		
1192	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	12.0	22.3		瓦	瓦	灰白	S3199/1	灰白	10000/70		1013
1193	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	11.0	14.0	2.9	瓦	瓦	灰白	S3199/1	灰白	10000/70		1013
1197	T.5	S3199	S3199	白磁	甕	口縁	1.30	18.0	3.7	薄良	硬焼	灰白	S3199/2	灰白	10000/80		1013
1198	T.5	S3199	S3199	灰部	甕	口縁	1.3	12.7	13.4	瓦	瓦	灰白	10000/2	灰黄緑	10000/80	粘土に磨滅がましい	1013
1199	T.5	S3199	S3199	滑石	内磨	高台	1.2	16.1	15.0	中々硬	瓦	灰	S3199/1	灰白	10000/80		1014
1200	T.5	S3199	S3199	滑石	内磨	高台	1.2	16.1	15.0	中々硬	瓦	灰	S3199/1	灰白	10000/80		1014
1201	T.5	S3199	S3199	青磁	甕	口縁	1.3	10.0	3.0	瓦	瓦	灰白	S3199/1	灰白	10000/80		1014
1202	T.5	S3199	S3199	土師器	甕	口縁	1.3	7.8	0.9	瓦	瓦	灰白	S3199/2	灰白	10000/80		1014
1203	T.5	S3199	S3199	土師器	甕	口縁	1.2	8.0	1.0	瓦	瓦	灰白	S3199/2	灰黄緑	10000/80		1014
1204	T.5	S3199	S3199	土師器	甕	口縁	1.2	4.0	0.9	瓦	瓦	灰黄緑	S3199/2	灰黄緑	10000/80		1014
1205	T.5	S3199	S3199	土師器	甕	口縁	1.2	8.0	1.1	瓦	瓦	灰黄緑	S3199/2	灰黄緑	10000/80	全体に磨滅がましい	1014
1206	T.5	S3199	S3199	土師器	甕	口縁	1.3	8.0	1.1	瓦	瓦	灰黄緑	S3199/2	灰黄緑	10000/80		1014
1207	T.5	S3199	S3199	土師器	甕	口縁	1.2	8.5	1.1	瓦	瓦	灰白	S3199/1	灰白	10000/80		1014
1208	T.5	S3199	S3199	土師器	甕	口縁	1.2	8.0	1.2	瓦	瓦	灰白	10000/2	灰黄緑	10000/80		1014
1209	T.5	S3199	S3199	土師器	甕	口縁	1.3	12.2	1.2	瓦	瓦	灰白	S3199/2	灰黄緑	10000/80		1014
1210	T.5	S3199	S3199	土師器	甕	口縁	1.4	8.0	1.2	瓦	陶胎	S3199/1	にいへ焼	10000/80		1014	
1211	T.5	S3199	S3199	土師器	甕	口縁	1.3	8.0	1.6	瓦	灰黄緑	S3199/2	灰黄緑	10000/80		1014	
1212	T.5	S3199	S3199	土師器	甕	口縁	1.2	8.0	1.4	瓦	灰黄緑	S3199/2	にいへ焼	10000/80	全体に磨滅がましい	1014	
1213	T.5	S3199	S3199	土師器	甕	口縁	1.2	8.0	1.1	瓦	灰黄緑	S3199/2	灰黄緑	10000/80	全体に磨滅がましい	1014	
1214	T.5	S3199	S3199	土師器	甕	口縁	1.3	9.0	2.0	瓦	瓦	灰白	10000/2	灰白	10000/80	全体に磨滅がましい	1014
1215	T.5	S3199	S3199	青磁	甕	口縁	1.2	10.2	2.1	4.2	瓦	オリーブ	S3199/1	オリーブ	10000/80		1014
1216	T.5	S3199	S3199	土師器	甕	口縁	1.6	12.0	2.2	瓦	瓦	灰白	S3199/2	にいへ焼	10000/80	磨滅がましい	1014
1217	T.5	S3199	S3199	土師器	甕	口縁	1.6	11.0	1.4	瓦	瓦	にいへ焼	10000/2	灰黄緑	10000/80	全体に磨滅がましい	1014
1218	T.5	S3199	S3199	土師器	甕	口縁	1.2	8.0	1.0	瓦	瓦	灰黄緑	S3199/2	灰黄緑	10000/80		1014
1219	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	8.0	13.0	4.0	5.2	瓦	灰	S3199/1	灰	10000/80		1014
1220	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	1.4	11.0	3.0	瓦	瓦	灰	S3199/1	灰	10000/80		1014
1221	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	1.4	13.2	4.0	4.1	瓦	灰白	S7	灰白	10000/80		1014
1222	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	1.6	13.6	3.4	瓦	瓦	灰白	S8	灰	10000/80		1014
1223	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	1.3	13.5	3.4	5.2	瓦	灰白	S8	灰	10000/80	全体に磨滅がましい	1014
1224	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	1.3	14.0	2.8	瓦	瓦	灰白	S7	灰	10000/80	全体に磨滅がましい	1014
1225	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	1.3	13.0	3.4	3.2	瓦	灰白	S3199/2	灰白	10000/80		1014
1226	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	1.3	13.0	3.8	3.7	瓦	灰白	S3199/1	灰白	10000/80		1014
1227	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	1.3	12.0	2.6	瓦	瓦	灰白	S3199/1	灰白	10000/80		1014
1228	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	1.2	11.0	3.1	3.6	瓦	灰	S3199/1	灰	10000/80		1014
1229	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	1.4	11.0	5.0	瓦	瓦	S3199/2	灰白	10000/80	黒変色	1014	
1230	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	1.3	10.7	4.8	瓦	瓦	灰白	S8	灰	10000/80		1014
1231	T.5	S3199	S3199	土師器	出雲	口縁	1.3	11.0	1.6	瓦	瓦	灰白	S3199/2	明灰	10000/80	全体に磨滅がましい	1014
1232	T.5	S3199	S3199	土師器	出雲	口縁	1.3	11.0	1.6	瓦	瓦	灰白	S3199/2	明灰	10000/80	全体に磨滅がましい	1014
1233	T.5	S3199	S3199	土師器	出雲	口縁	1.3	11.0	1.6	瓦	瓦	にいへ焼	S3199/2	にいへ焼	10000/80		1014
1234	T.5	S3199	S3199	土師器	出雲	口縁	1.3	11.0	1.6	瓦	瓦	にいへ焼	10000/2	灰白	10000/80		1014
1235	T.5	S3199	S3199	土師器	出雲	口縁	26.8	24.9	瓦	瓦	にいへ焼	10000/2	灰黄緑	10000/80	1層壁一内に入らず	1014	
1237	T.5	S3199	S3199	土師器	出雲	口縁	1.3	11.0	1.6	瓦	瓦	にいへ焼	S3199/2	にいへ焼	10000/80		1014
1238	T.5	S3199	S3199	土師器	出雲	口縁	1.3	11.0	1.6	瓦	瓦	灰黄緑	S3199/2	にいへ焼	10000/80		1014
1239	T.5	S3199	S3199	土師器	出雲	口縁	1.2	8.0	1.5	瓦	瓦	灰黄緑	S3199/2	にいへ焼	10000/80		1014
1240	T.5	S3199	S3199	土師器	出雲	口縁	1.2	8.0	1.8	瓦	瓦	灰黄緑	S3199/2	灰黄緑	10000/80		1014
1241	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	1.3	11.0	3.0	瓦	瓦	灰白	S7	灰白	10000/80	内外面に磨滅がましい	1014
1242	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	1.4	11.8	3.7	3.8	瓦	灰白	S3199/1	灰白	10000/80		1014
1243	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	1.4	13.2	4.6	3.8	瓦	灰白	S3199/1	灰白	10000/80		1014
1244	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	1.1	11.8	5.2	6.2	瓦	灰	S4	灰	10000/80		1014
1245	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	1.1	13.8	3.8	6.1	瓦	灰白	S8	灰	10000/80	内外面に磨滅がましい	1014
1247	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	1.4	11.0	2.9	瓦	瓦	S3199/2	灰白	10000/80	全体に磨滅がましい	1014	
1248	T.5	S3199	S3199	土師器	出雲	口縁	1.3	11.0	1.6	瓦	瓦	灰黄緑	S3199/2	灰黄緑	10000/80	全体に磨滅がましい	1014
1249	T.5	S3199	S3199	土師器	出雲	口縁	1.2	5.0	0.9	瓦	瓦	S3199/2	灰白	10000/80		1014	
1249	T.5	S3199	S3199	土師器	出雲	口縁	1.1	12.8	2.5	瓦	瓦	S3199/2	灰黄緑	10000/80	内外面に磨滅がましい	1014	
1251	T.5	S3199	S3199	土師器	出雲	口縁	1.2	8.0	1.4	瓦	瓦	灰白	S3199/2	灰白	10000/80		1014
1252	T.5	S3199	S3199	土師器	出雲	口縁	1.2	7.8	1.6	瓦	瓦	灰白	S3199/2	灰白	10000/80		1014
1253	T.5	S3199	S3199	土師器	出雲	口縁	1.3	8.0	1.5	瓦	瓦	灰白	S3199/2	灰白	10000/80		1014
1254	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	1.3	11.0	3.4	瓦	瓦	灰白	S3199/2	灰黄緑	10000/80		1014
1255	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	1.3	11.0	3.4	瓦	瓦	灰白	S3199/2	灰黄緑	10000/80		1014
1256	T.5	S3199	S3199	土師器	出雲	口縁	1.4	8.2	1.3	瓦	瓦	灰白	S3199/2	灰白	10000/80	全体に磨滅がましい	1014
1257	T.5	S3199	S3199	土師器	出雲	口縁	1.1	9.2	1.8	瓦	瓦	陶胎	S3199/1	陶胎	10000/80	内外面に磨滅がましい	1014
1258	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	1.4	8.2	1.3	瓦	瓦	灰	S6	灰	10000/80		1014
1259	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	1.1	12.4	2.7	5.0	瓦	灰	S5	灰	10000/80		1014
1260	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	1.3	11.0	3.4	中々硬	瓦	灰白	S3199/1	灰白	10000/80		1014
1261	T.5	S3199	S3199	瓦部	甕	口縁	1.4	11.0	4.2	瓦	瓦	灰白	S3199/1	黄灰	10000/80		1014
1262	T.5	S247		マイゴ	口皿		測定	4.4			オリーブ	S3199/1	櫻	10000/80		1014	
1263	T.5	S248		青磁	甕	底底	1.8	13.0		瓦	瓦	灰白	S3199/1	灰	10000/80	けずり出し高台	1014
1264	T.5	S248		滑石	内磨	高台	1.1	11.0		瓦	瓦	S3199/1	灰白	10000/80		1014	
1265	T.5	S248		土師器	甕	口縁	8.0	1.1		瓦	瓦	にいへ焼	10000/2	にいへ焼	10000/80		1014
1266	T.5	S248		土師器	甕	口縁	11.6	2.5		瓦	瓦	灰黄緑	S3199/2	にいへ焼	10000/80	全体に磨滅がましい	1014
1267	T.5	S248		土師器	甕	口縁	1.3	11.0	1.2	瓦	瓦	灰	S3	灰	10000/80		1014
1268	T.5	S248		瓦部	甕	口縁	12.4	1.1		瓦	瓦	S3199/1	灰白	10000/80		1014	
1269	T.5	S248		瓦部	甕	口縁	11.0	1.1		瓦	瓦	S5	灰	10000/80		1014	
1270	T.5	S248		瓦部	甕	口縁	11.0	1.1		瓦	瓦	S5	灰	10000/80		1014	
1271	T.5	S248		瓦部	甕	口縁	11.0	1.1		中々硬	瓦	S5	灰	10000/80		1014	
1272	T.5	S248		瓦部	甕	口縁	1.3	13.6	1.0	中々硬	瓦	灰白	S3199/2	灰白	10000/80		1014
1273	T.5	S248		瓦部	甕	口縁	1.3	13.6	1.0	中々硬	瓦	灰白	S3199/2	灰白	10000/80		1014
1274	T.5	S460		土師器	出雲	口縁	1.3	11.0	1.2	瓦	瓦	にいへ焼	10000/2	にいへ焼	10000/80	全体に磨滅がましい	1142
1275	T.5	S433	榎方	土師器	出雲	口縁	1.3	11.0	1.2	瓦	瓦	灰白	10000/2	にいへ焼	10000/80		1139
1276	T.5	S433	榎方	土師器	出雲	口縁	1.3	11.0	1.2	瓦	瓦	灰白	10000/2	にいへ焼	10000/80		1139
1277	T.5	S433	榎方	土師器	出雲	口縁	1.3	11.0	1.2	瓦	瓦	灰白	10000/2	にいへ焼	10000/80		1139
1278	T.5	S433	榎方	土師器	出雲	口縁	1.3	11.0	1.2	瓦	瓦	明灰	S3199/2				

表19 出土土器観察表

報告 No.	調査 No.	遺跡No.	グリッド No.	層位	器種	器形	部位	残存 率	寸法 (cm)	重量 (g)	加工	焼成	色面		備考	実測 No.		
													外面	内面				
1290	T. S201				瓦部	柄	口縁	2.0	0.0	瓦	瓦	瓦	N.7	瓦	10YR 6/2	1168		
1291	T. S204				瓦部	柄	口縁	1.2	7.0	瓦	瓦	瓦	N.4	瓦	10YR 6/2	1165		
1292	T. S201				土器部	皿	口縁	0.0		中や軽	瓦	瓦	2.5YR 5/2	にぶい	10YR 6/2	1169		
1294	T. S201				瓦部	柄	口縁	1.4	14.9	4.4	瓦	瓦	瓦	N.8	瓦	10YR 6/2	1164	
1295	T. S201				土器部	皿	口縁	1.2	2.2	1.0	瓦	瓦	瓦	2.5YR 8/2	瓦	10YR 6/2	全体に磨減が著しい	
1296	T. S201				土器部	皿	口縁	1.2	8.0	2.3	瓦	瓦	瓦	にぶい	10YR 7/2	瓦	10YR 6/2	全体に磨減が著しい
1297	T. S201				瓦部	柄	口縁	1.7	8.0	1.6	瓦	瓦	瓦	N.5	瓦	10YR 6/2	1167	
1298	T. S202				瓦部	柄	口縁	1.1	8.4	1.6	瓦	瓦	瓦	2.5YR 8/1	瓦	10YR 6/2	1169	
1299	T. S201				瓦部	柄	底面	1.2	1.0	6.0	中や軽	不瓦	瓦	2.5Y 7/2	瓦	10YR 6/2	1174	
1300	T. S201				瓦部	柄	口縁	1.6	14.0	9.0	瓦	瓦	瓦	2.5YR 7/1	瓦	10YR 6/2	全体に磨減が著しい	
1301	T. S202				瓦部	柄	口縁	1.0	2.0		瓦	瓦	N.4	瓦	10YR 6/2	1171		
1302	T. S202				瓦部	柄	底面	1.8	0.0	3.0	瓦	瓦	瓦	2.5YR 8/3	瓦	10YR 6/2	1173	
1303	T. S202				瓦部	柄	口縁	1.6	14.0	12.1	瓦	瓦	瓦	N.6	瓦	10YR 6/2	1177	
1304	T. S206				土器部	皿	口縁	0.0			瓦	瓦	瓦	2.5YR 5/2	瓦	10YR 6/2	1178	
1305	T. S202				瓦部	柄	口縁	0.0	4.0		瓦	瓦	瓦	2.5Y 8/2	瓦	10YR 6/2	1172	
1306	T. S205				土器部	皿	口縁	1/10	11.0		瓦	瓦	にぶい	2.5YR 7/4	にぶい	10YR 6/2	1175	
1307	T. S244				土器部	皿	口縁	2/3	8.8	1.7	瓦	瓦	瓦	10YR 7/2	瓦	10YR 6/2	全体に磨減が著しい	
1308	T. S245				土器部	皿	口縁	3.0	33.9		瓦	瓦	瓦	2.5Y 8/2	にぶい	10YR 6/2	1174	
1310	T. S282				土器部	皿	口縁	3.0			瓦	瓦	明灰	10YR 6/4	明灰	10YR 6/2	941	
1311	T. S282				土器部	皿	口縁	4.1			瓦	瓦	にぶい	10YR 7/3	にぶい	10YR 6/2	942	
1312	T. S202				須古壇	瓦部	柄	口縁	1/10	22.7		瓦	瓦	2.5YR 7/1	瓦	10YR 6/2	1069	
1313	T. S250				瓦部	柄	口縁	1.8	14.4	3.0	瓦	瓦	瓦	N.7	瓦	10YR 6/2	1089	
1314	T. S250				須古壇	瓦部	口縁	0.0	12.2		中や軽	瓦	瓦	にぶい	2.5YR 7/3	瓦	10YR 6/2	内面に磨減あり(唇部)
1315	T. S245				土器部	皿	口縁	8.2	1.4		瓦	瓦	にぶい	2.5YR 7/3	瓦	10YR 6/2	1224	
1316	T. S245				土器部	皿	口縁	9.8	1.4		瓦	瓦	にぶい	10YR 7/3	瓦	10YR 6/2	1223	
1317	T. S245				土器部	皿	口縁	11.8	2.0		瓦	瓦	瓦	10YR 8/1	瓦	10YR 6/2	1214	
1318	T. S245				土器部	皿	口縁	1.4	11.0	3.4	軽	明灰	2.5Y 7/1	2.5Y 7/1	瓦	10YR 6/2	唇に磨減あり	
1319	T. S245				土器部	皿	口縁	1.6	14.0	3.0	中や軽	瓦	瓦	N.8	不明		唇に磨減あり	
1320	T. S245				土器部	皿	口縁	4.7	13.2		瓦	瓦	瓦	2.5Y 6/1	瓦	N.6	唇に磨減あり	
1321	T. S245				土器部	皿	口縁	4.7			瓦	瓦	瓦	2.5YR 5/2	瓦	10YR 6/2	唇の下縁、内面に一部に 磨減が著しい	
1322	T. S245				土器部	皿	口縁	4.3			瓦	瓦	瓦	10YR 6/2	瓦	10YR 6/2	唇の下縁	
1323	T. S245				土器部	皿	口縁	8.2			瓦	瓦	瓦	2.5Y 7/2	瓦	2.5Y 7/2	1211	
1324	T. S245				土器部	皿	口縁	1.4	8.0	1.1	瓦	瓦	瓦	10YR 8/2	瓦	10YR 6/2	磨減している	
1325	T. S245				瓦部	柄	口縁	1.4	33.9		瓦	瓦	瓦	N.7	瓦	N.4	全体に磨減が著しい	
1326	T. S246				土器部	皿	口縁	0.0	5.6		瓦	瓦	瓦	N.7	瓦	3.5Y 7/1	1225	
1327	T. S246				土器部	皿	口縁	0.0	3.0		中や軽	瓦	瓦	10YR 6/2	にぶい	10YR 7/2	1226	
1328	T. S246				土器部	皿	口縁	0.0	4.0		中や軽	瓦	瓦	にぶい	10YR 6/2	明灰	10YR 6/2	1223
1329	T. S246				瓦部	柄	口縁	0.0	13.7		瓦	瓦	瓦	N.4	瓦	N.4	磨減して蓋部不明	
1331	T. S202				土器部	皿	口縁	1.4			瓦	瓦	にぶい	10YR 7/1	にぶい	10YR 7/2	1166	
1332	T. S202				山形	小鍋	底面	1/2	1.0	4.5	瓦	瓦	瓦	10YR 8/1	瓦	10YR 6/2	底面にもみがら痕あり	
1333	T. S202				瓦部	柄	口縁	1.8	13.0	2.0	瓦	瓦	瓦	2.5Y 7/1	瓦	2.5Y 7/1	1191	
1334	T. S202				青銅	柄	口縁	0.0	22.0		瓦	瓦	オリーブ	2.5Y 6/1	オリーブ	2.5Y 6/1	1209	
1335	T. S209				瓦部	柄	口縁	1.6	8.1		中や軽	瓦	瓦	2.5Y 7/1	瓦	2.5Y 7/1	全体に磨減が著しい	
1336	T. S202				瓦部	柄	口縁	1.0	22.0		瓦	瓦	瓦	2.5Y 8/4	瓦	2.5Y 8/4	1228	
1337	T. S202				瓦部	柄	口縁	1.0	11.8		瓦	瓦	瓦	N.3	瓦	N.4	1181	
1338	T. S202				瓦部	柄	口縁	1.4	8.0	1.1	瓦	瓦	瓦	10YR 8/4	にぶい	10YR 7/2	全体に磨減が著しい	
1339	T. S209				瓦部	柄	口縁	0.0	22.0		瓦	瓦	瓦	N.6	瓦	N.4	1183	
1340	T. S201				土器部	皿	口縁	1/3	8.0	1.5	瓦	瓦	にぶい	10YR 7/3	瓦	10YR 6/2	1186	
1341	T. S201				瓦部	柄	底面	1.4	11.0		瓦	瓦	オリーブ	3.5Y 3/1	オリーブ	3.5Y 3/1	1182	
1342	T. S201				瓦部	柄	口縁	1/10	11.0		瓦	瓦	瓦	N.4	瓦	N.4	1184	
1343	T. S205				瓦部	柄	口縁	1.2	13.2	4.2	瓦	瓦	瓦	2.5Y 8/1	瓦	N.8	1187	
1344	T. S201				瓦部	柄	口縁	1.0	12.0		瓦	瓦	瓦	N.3	瓦	N.7	1188	
1345	T. S202				土器部	皿	口縁	1.4	5.1		瓦	瓦	にぶい	10YR 6/2	にぶい	10YR 6/2	1190	
1346	T. S202				土器部	皿	口縁	2.4	1.0		中や軽	不瓦	瓦	10YR 6/2	にぶい	10YR 7/2	1192	
1347	T. S204				土器部	皿	口縁	1.4	8.0	1.3	瓦	瓦	にぶい	10YR 7/3	にぶい	10YR 7/4	1193	
1348	T. S204				瓦部	柄	口縁	1.1	11.3	3.8	瓦	瓦	瓦	N.7	瓦	2.5Y 8/1	1195	
1349	T. S202				瓦部	柄	口縁	1/12	14.0	22.1	瓦	瓦	オリーブ	2.5Y 3/1	瓦	1.5Y 8/4+1	1190	
1350	T. S202				瓦部	柄	口縁	1.0	12.0		瓦	瓦	瓦	N.4	瓦	N.4	磨減して蓋部不明	
1351	T. S204				瓦部	柄	口縁	1.1	11.1	4.1	瓦	瓦	瓦	2.5Y 8/1	瓦	N.7	1198	
1352	T. S204				土器部	皿	口縁	1/2	7.8	1.7	瓦	瓦	瓦	2.5YR 7/4	漆布	2.5YR 7/4	1201	
1353	T. S209				土器部	皿	口縁	0.0	22.0		瓦	瓦	にぶい	2.5YR 6/3	にぶい	2.5YR 6/3	唇の下縁、表面に少し 磨減が著しい	
1354	T. S209				土器部	皿	口縁	2.0	2.1		瓦	瓦	瓦	10YR 8/2	瓦	10YR 6/2	全体に磨減が著しい	
1355	T. S202				瓦部	柄	口縁	1.5	11.0	4.0	瓦	瓦	瓦	N.8	瓦	N.4	全体に磨減が著しい	
1356	T. S243				土器部	皿	口縁	1.0	15.8		瓦	瓦	にぶい	10YR 7/2	瓦	10YR 6/2	1211	
1357	T. S243				東洋系青銅	柄	口縁	1/10	14.0		瓦	瓦	明灰	N.8	瓦	N.8	内面に炭化物質	
1358	T. S210				瓦部	柄	底面	1/10	2.0	4.6	瓦	瓦	瓦	N.7	瓦	N.8	1208	
1359	T. S211				土器部	皿	口縁	1.4	8.0	1.2	瓦	瓦	にぶい	10YR 7/3	にぶい	10YR 7/3	口縁にわずかに 磨減が著しい	
1360	T. S202				土器部	皿	口縁	1.8	7.6	1.0	瓦	瓦	瓦	10YR 8/2	瓦	10YR 6/2	全体に磨減が著しい	
1361	T. S272				瓦部	柄	口縁	1.0	11.2		軽	明灰	明灰	7.5Y 7/1	オリーブ	2.5Y 7/1	内面に炭化物質一層痕あり	
1362	T. S206				瓦部	柄	口縁	0.0	12.0		瓦	瓦	瓦	N.4	瓦	N.4	1204	

表20 出土石器観察表

報告No.	出土地区	出土遺構	ゾーン/FNo.	出土層位	器種	器形	法量 (cm)				石材	備考	実測No.
							最大長	最大幅	最大厚	重量 (g)			
103	T-3	S-1	土器室棟	植物室上層	砥石	横	13.9	16.0	6.6	1924.8	頁岩		6
250	T-3	S-6	T-3区		砥	横	4.9	2.8	0.7	55.80			23
291	T-3	S-6			砥石	横	5.7	4.6	2.8	302.0			1
317	T-3	S69		砂埋層	石臼	27.6	10.7	9.4	3800	花崗岩	上白		20
318	T-3	S69		砂埋層	石臼	32.7	17.2	6.0	4400	花崗岩	上白		19
325	T-3	S62			叩石	8.7	5.3	3.4	400.1				31
357	T-3	S20			石輪盤	31.0	30.2	19.2	2800	花崗岩			21
376	T-3	土原上	P-7区	黒褐色土	叩石	12.0	8.4	7.8	1142.7	花崗岩			4
377	T-3	土原上	O-9区	黒褐色土	砥石	7.1	2.5	3.0	64.54	砂岩			5
416	T-4			灰倉壁	砥石	9.1	5.1	2.0		砂岩	磨り面が一箇		806
789	T-5	S365	Q-8区		砥石?	22.2	12.9	4.7	2258.3				18
790	T-5	S365	T-8区	敷1層	砥石	10.0	7.0	1.6	200.6				7
791	T-5	S365	T-8区		砥石	6.2	5.6	3.7	382.3				8
812	T-4	S81	Q-9区		石輪	2.0	1.8	0.3	0.74	サヌカイト			16
1048	T-5	重機敷箇中			石輪	2.4	2.05	0.35	1.33	サヌカイト			13
1194	T-5	S159 溝部	S11区		砥石	7.0	4.2	1.4					1022
1195	T-5	S159 溝部	S-11区		砥石	8.8	7.8	1.4	128.88				13
1260	T-5	S162			砥石	14.2	7.8	3.1	548.2	砂岩			13
1279	T-5	S433		掘方	石輪	2.2	1.8	0.3	0.78	サヌカイト			17
1292	T-5	S278		柱貫	砥石	9.8	4.1	1.3	39.2				12
1309	T-5	S331			石輪	5.8	10.0	2.2	274.3	滑石			14
1320	T-5	S660			砥石	7.8	4.0	4.0	140.32				11
1359	T-5	S224			砥	6.7	3.9	0.9	32.03				9

表21 出土鉄器観察表

報告No.	出土地区	出土遺構	ゾーン/FNo.	出土層位	器種	器形	法量 (cm)				備考	実測No.	
							最大長	最大幅	最大厚	重量 (g)			
83	T-2	S274			鉄器	鏃	3.6	2.9					1
84	T-2	S474			鉄器	鉄鏃 (鏃)		1.4					2
85	T-2	S474			鉄器	刀子	4.1	3.0					3
194	T-3	S-1	U-1区	上層	鉄器	釘	9.4	1.6					1
195	T-3	S-1	Q-9区	土器室溝上中	鍍金		2.4	2.4					12
216	T-3	S-2			鍍金品		5.0	1.7		2.6			13
254	T-3	S24		黒褐色土	鉄器	鍍金					穴付通貫		9
276	T-3	S-5			鉄器	刀子	4.8	1.4					5
378	T-3	S273			鉄器	釘	3.9	1.6					7
379	T-3	S273			鉄器	釘	11.8	2.4					6
428	T-4	S439			鍍金洋		3.8	4					874
713	T-5	S385	第8区		鍍金洋	腕刺	3.9	5.2	2.2				1143
896	T-4	S108	北-2区		鍍金						穴付通貫		11
1189	T-5	S112 溝部	S10区		鍍金洋	腕刺				39.7			969
1196	T-5	S159 溝部	S-10区		鍍金洋		3.4	3.8	19.0				8
1273	T-5	S238			鍍金洋		5.5	6.3					1053

表22 出土木器観察表

報告No.	出土地区	出土遺構	グリッドNo.	出土層位	器種	部材	例種	法量 (cm)			備考	実測No.
								最大長	最大幅	最大厚		
182	T3	S1	土橋東側		漆器機		ミズキ属	口径15.0	器高9.0	底径6.6	輪×2 斜格子文×1=1単位 が3組	30
183	T3	S1	T-1区	青灰色粘土	漆器機		トキノキ		器高 16.60		内外ともに漆塗 見込み高 台に穿孔 2次加工	31
184	T3	S1	X-1区	植物質層上層	漆器用		コウヤマキ		器高 2.2		三足の器 内外面ともに漆塗で 仕上げ	34
185	T3	S1	X-2区		漆器下駄		マツ属総管束中央属	10.4	10.2	3.8		3
186	T3	S1	X-1区	土橋東側	植物質上層	漆器下駄	マツ属総管束中央属	13.1	5.5	5.3		1
187	T3	S1	X-2区		漆器下駄(曲)		ヒノキ	7.1	9.7	1.4		5
188	T3	S1	X-2区		漆器用		ヒノキ	9.5	8.3	1.3		6-2
189	T3	S1	土橋東側	最下層	加工材		マツ属総管束中央属	9.8	3.6	2.8		12
190	T3	S1	X-2区		加工材		ヒノキ	32.7	5.5	1.1		4
191	T3	S1	T-1区		加工材		スギ	14.2	6.1	1.1	釘あり	33
192	T3	S1	土橋東側		加工材		マツ属総管束中央属	18.0	2.2	1.8		3
329	T3	S186			紡錘	底板	スギ+マツ属管束中央属	88.6	88.8	3.0	4枚連結	42
330	T3	S186			紡錘	側板	ヒノキ	(23.3)	9.8	1.6		8
331	T3	S186			紡錘	側板	ヒノキ	(26.4)	5.1	1.7		10
332	T3	S186			紡錘	側板	ヒノキ	(22.2)	9.7	1.4		7
333	T3	S186			紡錘	側板	ヒノキ	(28.7)	7.8	1.7		9
334	T3	S187			漆器機		ブナ属		器高 9.0		外面、内面、底面共竹炭染しい	32
349	T3	S20	井戸		紡錘	側板	スギ	13.1	5.0	0.5		15
350	T3	S20	井戸		紡錘	側板	スギ	12.1	5.1	0.6		16
351	T3	S20	井戸		紡錘	側板	スギ	11.6	4.7	0.6		19
352	T3	S20	井戸		紡錘	側板	スギ	12.3	3.8	0.5		38
353	T3	S20	井戸		紡錘	側板	スギ	12.2	5.2	0.6		11
354	T3	S20	井戸		紡錘	側板	-	12.4	(2.3)	0.6		23
355	T3	S20	井戸		紡錘	側板	-	11.9	2.0	0.5		25
356	T3	S20	井戸		紡錘	側板	スギ	12.0	4.4	0.6		18
357	T3	S20	井戸		紡錘	側板	-	13.2	4.7	0.6		22
358	T3	S20	井戸		紡錘	側板	-	12.5	0.5	0.6		21
359	T3	S20	井戸		紡錘	側板	-	11.8	5.0	0.5		23
360	T3	S20	井戸	最下層	紡錘	側板	-	12.0	4.8	0.6		26
361	T3	S20	井戸		動物	底板	ヒノキ科	17.1	8.6	1.0		13
362	T3	S20	井戸		動物	底板	ヒノキ	15.6	3.1	1.2	水輪と同径高さ	11
363	T3	S20	井戸	最下層	加工材		ヒノキ	15.5	2.8	1.3		27
364	T3	S20	井戸		加工材		スギ	14.0	3.0	1.0		14
365	T3	S20	井戸	最下層	加工材		ササキ	17.2	0.7	0.8		29
366	T3	S20	井戸	最下層	蓋		ヒノキ	25.4	0.9	0.8		28
367	T3	S20	井戸	最下層	蓋		スギ+ヒノキ	口径 4.9	器高 3.0			33
368	T3	S20	井戸	最下層	高麗村		マツ属総管束中央属	112.7	径14.4			41
369	T3	S20	井戸	最下層	高麗村		マツ属総管束中央属	106.7	径14.5			48
370	T3	S20	井戸	最下層	高麗村		マツ属総管束中央属	105.0	径10.0			45
371	T3	S20	井戸	最下層	高麗村		マツ属総管束中央属	111.4	径12.7			43
603	T4	S2	井戸	最下層	動物	底板	スギ	27	10.4	0.9		41
602	T4	S2	井戸	最下層	動物	底板	ヒノキ	18.3	8.0	0.8		38
603	T4	S2	井戸	最下層	動物	底板	ヒノキ	19.8	(11.4)	0.7	直径 9.8cm 2枚連結	48
604	T4	S2	井戸	2-4層	動物	底板	ヒノキ	18.7	(9.4)	0.8	直径 9.6cm	36
605	T4	S2	井戸	最下層	動物	底板	スギ	18.9	18.4	1.0	直径 18.5cm	35
606	T4	S2	井戸	最下層	動物		ヒノキ		径18			43
607	T4	S2	井戸	最下層	動物		ヒノキ		高さ 6.8			37-2
608	T4	S2	井戸	最下層	動物		ヒノキ		高さ 8.6			37-1
609	T4	S2	井戸 機板 (東2)		井戸機		タリ	122.0	37.9	3.7		49
610	T4	S2	井戸 機板 (南2)		井戸機		タリ	120.0	30.5	2.5		52
611	T4	S2	井戸 機板 (北2)		井戸機		タリ	106.0	40.0	3.0		53
612	T4	S2	井戸 機板 (東3)		井戸機		タリ	105.9	36.2	4.0		51
613	T4	S2	井戸 機板 (西3)		井戸機		タリ	117.5	42.7	3.7		50
614	T4	S2	井戸 機板 (南3)		井戸機		タリ	102.7	40.0	4.2		54
615	T4	S2	井戸 機板 (北3)		井戸機		タリ	106.0	38.9	3.6		48
-	T3	S188	No. 5		板		ヒノキ属管束種	(30.6)	4.0	3.0		6-1